

9 大坂城跡出土の植物遺体

山口誠治

1 はじめに

大坂城跡から検出された豊臣前期から江戸時代以降にわたる時期の植物遺体について報告する。

なお、概要報告時に同定した植物遺体と今回同定した遺体も含めて報告している。

同定した植物遺体は、以下の通りである。

[被子植物]

1. イネ科 Gramineae イネ（炭化米） *Oryza sativa*
2. カヤツリグサ科 Cyperaceae
3. バラ科 Rosaceae スモモ *Prunus salicina*
4. バラ科 Rosaceae ウメ *Prunus mume*
5. バラ科 Rosaceae モモ *Prunus persica*
6. ミカン科 Rutaceae サンショウ *Zanthoxylum piperitum*
7. ミカン科 Rutaceae カラスザンショウ *Zanthoxylum ailanthoides*
8. センダン科 Meliaceae センダン *Melia azedarach*
9. トウダイグサ科 Euphorbiaceae アカメガシワ *Mallotus japonicus*
10. ブドウ科 Vitidaceae ウドカズラ *Ampelopsis cantoniensis*

[双子葉植物]

1. ウリ科 Cucurbitaceae マクワウリの仲間 *Cucumis melo*
2. ウリ科 Cucurbitaceae ヒョウタンの仲間 *Lagenaria leucantha*

同定結果については、一覧表で報告する。

2 同定結果

表60 植物遺体同定結果一覧表

	調査区	トレンチ	登録番号	出土状況	時期	同定結果
18	3A	12	2129	溝90下層	豊臣前期	マクワウリの仲間種子1個
22	3A	12・13	2284	溝90中央	豊臣前期	モモ核半分2個
33	3B	8	266	井戸アゼ	豊臣後期	マクワウリの仲間種子3個
83	5A	6	1409	3層上面	江戸以降	モモ核1個
84	5A	6	1407	3層包含層	江戸以降	モモ核半分1個
92	5A	5	861	土坑155	豊臣前期	カヤツリグサ科種子4個
93	5A	6	2330	土坑184暗褐色（上層）	江戸以降	マクワウリの仲間種子1個 センダン種子1個
94	5A	6	1316	土坑184中層	江戸以降	ヒョウタンの仲間種子1個

	調査区	トレンチ	登録番号	出土状況	時期	同定結果
95	5A	6	1554	土坑184中層（黒色土）	江戸以降	ヒョウタンの仲間種子5個
96	5A	6	1541	土坑184中層（黒色土）	江戸以降	ヒョウタンの仲間種子1個
97	5A	6	2220	土坑199	江戸以降	モモ核半分1個
98	5A	6	1311	土坑207	江戸以降	ヒョウタンの仲間1個
99	5A	6	1428	土坑207	江戸以降	ヒョウタンの仲間1個
100	5A	6	1345	土坑210	江戸以降	モモ核3個
101	5A	6	1633	土坑210上層	江戸以降	マクワウリの仲間1個
102	5A	6	1552	土坑210中層（黒色土）	江戸以降	ヒョウタンの仲間5個 マクワウリの仲間4個
104	5A	6	1632	土坑210中層（黒色土）	江戸以降	ウメ核2個 モモ核半分3個 ヒョウタンの仲間2個 センダン1個 スモモ3個
106	5A	6	1593	土坑210中層（黒色土）	江戸以降	カラスザンショウ3個 アカメガシワ1個 ウドカズラ2個
107	5A	6	1489	土坑210中層（黒色土）	江戸以降	ヒョウタンの仲間1個
108	5A	6	1636	土坑210土器溜まり4中層（黒色土）	江戸以降	モモ核2個 半分2個
110	5A	6	1049	土坑210内土器溜まり4中層	江戸以降	モモ核半分1個 マクワウリの仲間3個 サンショウ1個
111	5A	6	1533	土坑216	江戸以降	ヒョウタンの仲間19個 マクワウリの仲間13個
119	5A	8	2544	土坑373	江戸以降	モモ核1個 センダン2個
120	5A	8	2530	土坑373	江戸以降	ヒョウタンの仲間1個
121	5A	8	2754	土坑373	江戸以降	ヒョウタンの仲間1個
122	5A	8	2565	土坑373	江戸以降	モモ核2個 ウメ核1個
126	5B	4	204	7b層上面	豊臣後期	モモ核破片1個
127	5B	5	517	8層	豊臣前期	モモ核半分1個
148	5B-1	7	523	石敷き下層	豊臣前期	モモ核半分1個
155	5B-1	9	527	土坑81	豊臣前期	モモ核1個
157	5B-2	20	1723	6層	豊臣後期	モモ核1個
160	5B-2	19	978	土坑143	江戸以降	カヤツリグサ科種子3個
164	5C	3	254	土坑54	江戸以降	マクワウリの仲間2個
165	5C	3	258	土坑54	江戸以降	ヒョウタンの仲間2個 サンショウ1個
166	6A	2	376	2a層	江戸以降	炭化米1個
167	6A	1	2051	井戸1	江戸以降	ヒョウタンの仲間2個

	調査区	トレンチ	登録番号	出土状況	時期	同定結果
168	6A	4	1430	井戸4	豊臣後期	炭化米23個
169	6A	4	1357	井戸4	豊臣後期	炭化米 多数

3 まとめ

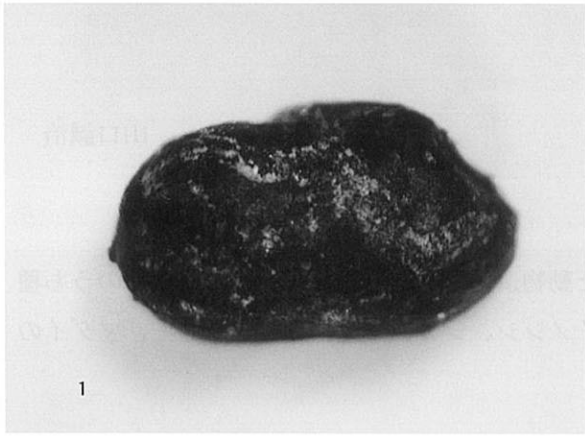
出土した植物遺体で食用になる植物は、モモ、スモモ、ウメ、サンショウ、草本のイネ、マクワウリの仲間、ヒョウタンの仲間であり、以上の植物が出土植物の大半を占めることから判断して、食料残渣と考えている。

特にイネは炭化状態で井戸からおむすび状で出土している。まさに、食料残渣であることを証明している。

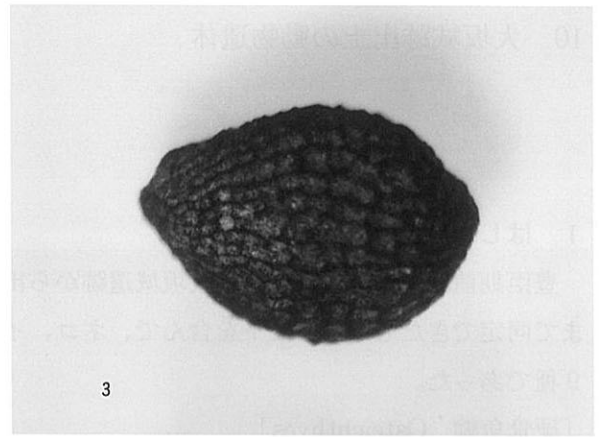
今回同定した植物で、暖温帯以南に分布するセンダンが含まれている。このセンダンの産出によって、当時の気候として温暖な時期であったことも想像できる。

(参考文献)

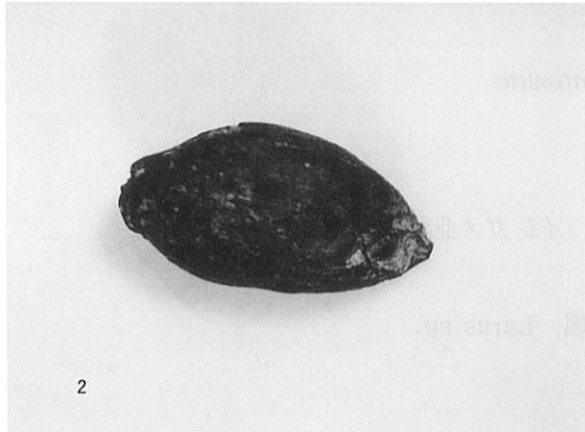
- 大井次三郎、北川政夫、1983. 新日本植物誌 顕花編. 至文堂, 東京.
- 大坂城跡の発掘調査1. 1991. 85-86 (財)大阪文化財センター
- 大坂城跡の発掘調査3. 1993. 85-86 (財)大阪文化財センター
- 大坂城跡の発掘調査4. 1994. 76 (財)大阪文化財センター



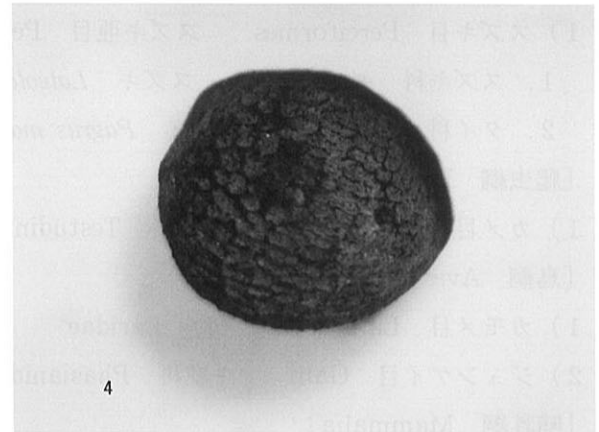
1



3



2

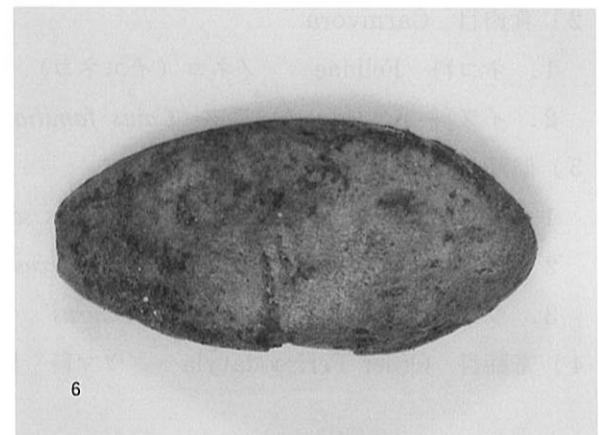


4

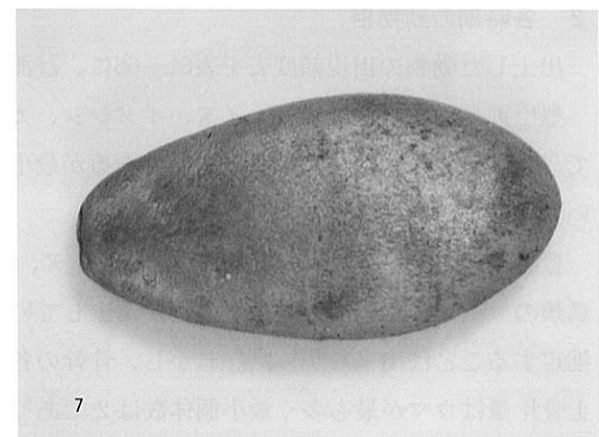
1. イネ炭化米 (13×) 2. イネ (8×) 3. カラスザンショウ (12×) 4. サンショウ (11×)



5



6



7

5. センダン (7×) 6, 7. マクワウリの仲間 (7×)

10 大坂城跡出土の動物遺体

山口誠治

1 はじめに

豊臣期前期から近世にいたる大坂城遺跡から出土した動物遺体は4綱8目が同定できた。このうち種まで同定できたものは、ヒトを含んで、ネコ、イヌ、イノシシ、シカ、ウシ、ウマ、スズキ、マダイの9種であった。

[硬骨魚綱 Osteichthyes]

1) スズキ目 Perciformes スズキ亜目 Percoidei

1. スズキ科 serranidae スズキ *Lateolabrax japonicus*
2. タイ科 Sparidae マダイ *Pagrus major*

[爬虫綱 Reptilia]

1) カメ目 Testudinata カメ科 Testudinidae イシガメ亜科 Emydinae sp.

[鳥綱 Aves]

- 1) カモメ目 Lari カモメ科 Laridae カモメ属 *Larus* sp.
- 2) ジュンケイ目 Galli キジ科 Phasianidae sp.

[哺乳綱 Mammalia]

- 1) 霊長目 Primates ヒト科 Hominidae ヒト *Homo sapiens*
- 2) 食肉目 Carnivora
 1. ネコ科 Felidae ノネコ (イエネコ) *Felis catus*
 2. イヌ科 Canidae イヌ *Canis familiaris*
- 3) 偶蹄目 Artiodactyla
 1. イノシシ科 Suidae イノシシ *Sus scrofa*
 2. シカ科 Cervidae ニホンジカ *Cervus nippon*
 3. ウシ科 Bovidae ウシ *Bos taurus*
- 4) 奇蹄目 Order Perissodactyla ウマ科 Equidae ウマ *Equus caballus*

2 各時期の動物相

出土した動物の出現頻度表を表61~66に、計測値を表67~72に示す。

豊臣前期の層からはネコ、イヌ、イノシシ、カメと硬骨魚類の頭部の骨片が出土している。この時期で最も多く出土した骨片はイノシシであるが最小個体数は1であり、最小個体数ではシカが2と最も多い。

豊臣後期の層からは人骨を含む、ネコ、イヌ、イノシシ、シカのほかに、ウシ、ウマの大型の家畜と、鳥類のカモメ、魚類のスズキと椎骨が出土している。人骨は、腓骨の骨幹のみであり、性、年齢ともに推定することは出来なかった。しかし、骨幹の各縁と稜の発達は良く、成人と推定される。この層の出土骨片量はウマが最も多く最小個体数は2であり、シカも骨片数は少ないが最小個体数は2であった。ウマの上腕骨の最大長より林田他(1957)の推定式を用い体高を推定した(表73)。この骨からの推定値は

131.85cmであり、林田他(1957)の用いた蒙古馬のオスの132.0cmに近かった。この層より出土したイヌの上腕骨片は骨端が癒合していないため遠位部が失われているが、骨片の大きさより、中型犬もしくは大型犬の可能性はある。魚類ではスズキの主鰓蓋骨が出土しているが、体長50cmの標本よりやや大きかった。

江戸以降の層からはネコ、イヌ、イノシシ、シカ、ウシ、ウマのほかに、大型と小型の鳥類2種とマダイの上顎骨、硬骨魚類の椎骨が出土し、ウマの出土量が最も多い。この層から出土したイノシシの上腕骨片は、骨幹が太くブタ的な要素がみられた。ウマは第3中手骨、大腿骨、距骨が出土し、このうち、大腿骨は出土状況、大きさや骨の特徴などから同一個体と考えられる。出土した骨より推定した体高は、第3中手骨で145.64cm、大腿骨で150.49cm、距骨で138.16cmであった(表73)。林田他(1957)が用いた御崎馬のオスが136cm、アラブのオスが148.5cmであり、第3中手骨から推定したウマはアラブのオスよりやや小さく、大腿骨より推定したウマはアラブのオスより大きかった。距骨から推定したウマは御崎馬よりやや大きい、距骨の推定誤差を考えると御崎馬の範囲内であると思われる。この層のウマの出現頻度表では最小個体数は2となるが、推定した体高からは同一個体とは考えにくく、最小個体数は3と推定される。この層は江戸時代から近世にまでおよぶため、体高145.0cm以上の大型のものは現生西洋種のウマの可能性もある。この層からは小型のイヌの頭蓋骨が出土しているが、頭蓋底と後頭部の破損が大きく頭骨全体の計測はできなかった。肉眼的に古来の小型犬と比較すると、顔面部が短く、脳頭蓋が高く、矢状稜が発達しているなどの形態的特徴があり、日本犬とは多少形態が異なると思われる。鳥類のうち大型のものはニワトリの特徴を持った脛骨であるが、現世標本のふ蹠長10cmのシャモのオスより大きく、非常に大型のニワトリであったと推定される。この層からは現世の家畜的要素を持つ動物が多く出土している。

出土層不明のウマは、その出土状況から同一個体と考えられている。このウマの体高を林田他(1957)の式を用いて各骨から推定すると、第3中足骨が137.93cmと最も低く、前腕骨(尺骨と橈骨)が147.33cmと最も高い値で、その差は約10cmあった(表73)。これらの推定値は、前腕骨(尺骨と橈骨)や脛骨が約147cmの体高を示し、それはアラブのオスの体高に近く、中手骨、距骨、踵骨、中足骨、基節骨など末梢の骨からの推定値は140cm前後であり、御崎馬よりやや大きかった。この結果は、複数個体のウマがこの標本番号2803に存在したか、あるいは同一個体ではあるが林田他(1957)が用いたウマの標本の中半血種が資料数の3/4を占めていて在来種と西洋種が混血していることより、体型が異なっていたかを示していたと考えられる。

3 まとめ

1. 豊臣後期の層より人骨が出土しているが、腓骨の骨幹のみ出土しているため、性や年齢の推定は出来なかったが、各縁や稜の発達が良い、成人である。
2. 出土する動物は、時期が近世に近づくに従って家畜的要素の多いものが増える。特に、江戸時代以降の層より出土したイノシシはブタ的な要素があり、ブタの飼育時期を推定する資料の一つとなる。また、この時期に大型のニワトリも出土している。
3. 各時期を通して出土しているものは、ネコ、イヌ、イノシシ、シカである。
4. イヌの出土骨は大きさや形態の変異が大きく、多くの種類が棲息していたと思われる。
5. 豊臣後期以降の層より出土するウマは、トカラウマなどの在来種よりは大きく、後期のものでも蒙

古馬程度である。江戸時代以降では、近世までのウマはアラブ種に近いものもあり、現世の西洋種である可能性もある。

謝辞

本遺跡から出土した鳥類の骨の同定にご助言をいただいた、京都大学大学院理学研究科の松岡廣繁氏に深謝の意を表します。

参考文献

林田重幸、山内忠平 1957 馬における骨長より体高の推定法. 鹿児島大学農学部学術報告. 6 : 146-156

表61 ネコの出現頻度表

出土部位	左右	時代		
		前期	後期	江戸以降
前頭骨	右		1	
肩甲骨	左		1	
大腿骨	右	1		
脛骨	左			1
	右	1		1

表62 イヌの出現頻度表

出土部位	左右	時代		
		前期	後期	江戸以降
頭蓋骨	—			1
上顎第1大臼歯	右	1		
上顎第2大臼歯	右?	1		
上腕骨	右		1	

表63 イノシシの出現頻度表

出土部位	左右	時代		
		前期	後期	江戸以降
上顎骨	左	1		
下顎骨	右	1		
上腕骨	右			1
	左	1		
尺骨	右	1		
橈骨	右	1		
第3中手骨	右	1		
踵骨	左	1	1	
第4中足骨	左	1		

表64 シカの出現頻度表

出土部位	左右	時代		
		前期	後期	江戸以降
下顎骨	右		1	
上腕骨	右			1
	左			1
尺骨	左		1	
橈骨	右		1	
中手骨	左		2*	
大腿骨	右	1		
脛骨	右		1	
	左	2*		
踵骨	左		1	

*は最小個体数

表65 ウシの出現頻度表

出土部位	左右	時 代	
		後期	江戸以降
下顎骨	左	1	
尺骨			1
寛骨	右	1	
	左	1	
大腿骨	右		1
脛骨	右		1
中足骨	右		1

表66 ウマの出現頻度表

出土部位	左右	時 代		
		後期	江戸以降	不明
前頭骨と頬骨	右			1
上顎第3小白歯	左		1	
上顎第4小白歯	左	1	1	
上顎第1大白歯	左		1	
上顎第2大白歯	左		1	
上顎第3大白歯	左		1	
下顎骨	右	1		1
	左	1		1
下顎第2切歯	左	1		
下顎第3切歯	右	1		
下顎犬歯	左	2		
	右	1		
下顎第2小白歯	右	2		1
	左	1		1
下顎第3小白歯	右	2		1
	左	1		1
下顎第4小白歯	右	2		1
	左	1		1
下顎第1大白歯	右	2		
下顎第2大白歯	左	1		
下顎第3大白歯	左	1		
仙骨	—			1
肩甲骨	左	2	1	
上腕骨	右	1		
尺骨&橈骨	左			1
第3中手骨	左		1	1
第4中手骨				1
(手の)基節骨	右			1
寛骨	右		2	
	左		1	
大腿骨	右		1	
	左	2		
脛骨	右			1
踵骨	左			1
距骨	右			1
	左		1	
(足の舟)状骨	左			1
第3中足骨	右			1
	左			1
(足の)基節骨	右			1
基節骨	左			1
	不明		1	

表67 ネコの計測値

時代	前期		後期
	2660	833	2661
標本番号	右	右	左
肩甲骨	全長		65.64
	前縁長		61.2
	後縁長		56.33
	外側部最大長		12.37
	関節窩長		8.34
大腿骨	最大長	103.62	
	近位横径	19.44	
	遠位前後径	16.15	
	遠位横径	18.03	
脛骨	最大長	102.6	

表68 イヌの計測値

時代	前期		以降	
	1052	1975	1975	
標本番号	右	左	右	
頭蓋骨	顔長(N-P)		81.44	
	吻長(Oo)	—	71.25	
	吻長(P-If)	54.94		55.19
	最小前頭幅		35.03	
	两眼窩間最小距離		46.96	
	Ent-Ent		31.78	
	前上顎骨側面長			47.91
	上顎幅(M1前縁)		61.48	
	上顎幅(C前縁)		28.54	
	歯槽最大長	85.28		85.09
	頬臼歯列長(Pm1から)	57.12		56.85
	頬臼歯列長(Pm2から)	49.99		50.76
	小白歯列長(Pm1から)	42.9		42.8
	小白歯列長(Pm2から)	35.47		36.45
	大白歯列長	16.77		18.17
	後頭三角高		48.22	
	後頭顆間最大幅		35.1	
	大後頭孔高		18.62	
	大後頭孔幅		18.91	
	犬歯歯槽最大長	12.25		11.7
犬歯歯槽最大幅	7.58	—		
上顎犬歯	全長	17.29		15.93
	歯冠長	17.05		16.42
上顎Pm4	近遠心径	9		9.07
	頬舌径	39.89		39.66
上顎M2	近遠心径	22.79		
	頬舌径	10.27		

表69 イノシシの計測値

時代	前期			以降
	241	249	1000	1000
標本番号	右	左	右	右
上顎M3	近遠心径		20.74	
	頬舌径		30.13	
下顎骨	小白歯長	51.96		
	Pm2~C間	16.46		
肩甲骨	外側部最大長			
	関節窩長			
	関節窩幅			
	頸部最小幅			
上腕骨	最大長			
	全長			
	近位前後径			
	近位前横径			
	中央前後径			29.68
	中央横径			23.64
	遠位前後径		39.19	43.57
遠位横径		40.86	—	
橈骨	最大長		146.37	

表70 シカの計測値

時代 標本番号	前期 249	後期					以降	
		252		275	414	138	1234	1000
	右	左	右	右	左	左	左	右
下顎M3	近遠心径 頬舌径				22.5 9.83			
上腕骨	中央前後径 中央横径 遠位前後径 遠位横径						22.47 17.54 32.82 35.7	20.68 18.03
橈骨	最大長 自然長 近位前後径 近位前横径 中央前後径 中央横径 遠位前後径 遠位横径		196.62 190.62 20.65 36.45 12.78 22.65 23.34 31.53					
第2・3中手骨	全長 近位前後径 近位横径 遠位前後径 遠位横径		181.44 18.41 24.14 17.2 24.52		170.98 17.14 23.54 17.62 25.65			
大腿骨	中央前後径 中央横径 遠位前後径 遠位横径	20.79 20.66 66.23 45.07						
脛骨	最大長 外側最大長 近位前後径 近位前横径 中央前後径 中央横径 中央周 遠位前後径 遠位横径	265.74 45.91 47.7 25.15 22.81 23 32.14						
踵骨	最大長						87.52	

表71 ウシの計測値

時代 標本番号	後期	
	2040	1700
	左	左
下顎骨	下顎枝長 goc.～Pm2前縁まで 頬白歯長 小白歯長 大白歯長 顆高 下顎枝中間高 下顎枝高 下顎体高 (M3後縁) 下顎体高 (M3前縁) 下顎体高 (Pm2前縁) 下顎体厚	109.02 242.49 134.43 49.05 85.05 136.68 127.81 180.94 64.96 48.71 36.12 21.38
下顎M3	前後径 頬舌径	38.36 14.19
寛骨	寛骨白長 閉鎖孔長 腸骨最小高 腸骨最小幅 腸骨最小周	63.17 36.2 21.5 99

表72 ウマの計測値

	後期										不明																			
	287		1496		1942		1700		1845			1479		1475		2020		2075		1217		1656		2440		2397		3206		2803
時代	左		右		左		右		左		右		左		右		左		右		不明		左		右		左		右	
標本番号																														
上腕骨	遠位横径		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	滑車幅		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
尺骨	最大長		462.00		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	肘頭長		94.37		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	滑車切痕上部深		65.09		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	最小肘頭深		46.73		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
橈骨	鉤状突起幅		45.64		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	最大長		366.00		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	外側部最大長		358.00		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	近位前後径		49.57		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	近位前横径		82.26		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	中央前後径		28.45		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
第3中手骨	中央横径		38.35		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	遠位前後径		42.76		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	遠位横径		71.55		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	最大長		234.37		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
第4中手骨	近位前後径		32.07		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	近位横径		49.34		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	遠位前後径		37.74		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	遠位横径		48.55		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
手の第3基節骨	最大長		102.72		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	最大長		244.10		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	近位前後径		35.61		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	近位横径		49.75		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	近位関節面幅		28.78		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	中央最小幅		66.86		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
寛骨	遠位前後径		33.12		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	遠位横径		46.72		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	寛骨臼長		67.51		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	閉鎖孔長		76.19		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
大腿骨	閉鎖孔長		39.25		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	腸骨最小高		27.27		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	腸骨最小幅		108.00		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	腸骨最小間		67.51		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
大腿骨	最大長		439.00		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	骨頭部最大長		397.00		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	近位前後径		88.34		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	近位横径		126.43		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
大腿骨	中央前後径		52.88		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	
	中央横径		50.20		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—		—	

表73 ウマの体高の推定値

標本番号				最大長(cm)	Iの推定値	IIの推定値	IIIの推定値	平均値
後期	1700	上腕骨	右	28.5	130.73	131.43	133.40	131.85
以降	2440	第3中手骨	左	24.4	145.24	144.87	146.83	145.64
以降	2397	距骨	左	6.3	135.61		140.71	138.16
以降	3206	大腿骨	左	43.9	149.26	149.63	150.49	149.79
以降	3206	大腿骨	右	44.3	150.62	150.99	151.97	151.19
不明	2803	尺骨	左	46.2	150.15	150.50	141.33	147.33
不明	2803	橈骨	左	36.6	145.30	145.57	149.19	146.69
不明	2803	第3中手骨	左	23.4	139.45	139.68	142.35	140.49
不明	2803	手の第3基節骨	右	8.8	139.04	139.36	144.07	140.83
不明	2803	脛骨	左	38.3	145.16	145.51	152.42	147.70
不明	2803	脛骨	右	38.0	144.02	144.33	151.31	146.55
不明	2803	踵骨	右	11.6	137.71	138.21	140.79	138.90
不明	2803	距骨	右	6.4	136.53		141.44	138.99
不明	2803	第3中足骨	左	28.0	139.48	139.99	138.73	139.40
不明	2803	第3中足骨	右	27.7	137.99	138.51	137.29	137.93
不明	2803	足の第3基節骨	左	8.8	142.87	142.81	143.79	143.16
不明	2803	足の第3基節骨	右	8.7	141.81	141.82	142.97	142.20

I, II, IIIは林田他(1957)の推定式

表74 動物遺体同定結果一覧

調査区	トレンチ	登録番号	出土状況	時代	種名	左右	部位名	残存状況	計算結果	備考
		0								
5B	1	18	土坑7	江戸以降						
3B	10	35	池1埋土	後期	硬骨魚	—	椎骨			椎体の中央で切断
5B-1	3	51	7a層	後期						
3B	8	55	池1中層	後期	スズキ	不明	主鰓蓋骨			体長50cmの標本よりやや大きい
6A	2	91	1・2層	江戸以降	ウシ	右	脛骨	遠位部のみ		外果破損、骨幹の切断面あり
5B-1	3	102	7a層	後期	イヌ(大型)?	右	上腕骨	骨幹中央から遠位部		遠位端はずれているので幼体?
5B-1	3	119	土坑31	後期	イノシシ	左	踵骨	体のみ	別表	
5B-1	3	138	溝14	後期	シカ	左	踵骨			
5B-1	6	207	8a層上面	後期						
3B	11	220	9c層	前期	不明					
3A	3	232	土坑106	江戸以降	不明	不明	長骨片	骨幹のみ		
5B	5	241	井戸3	前期	イノシシ	右	下顎骨	犬歯から第3大臼歯の半分	別表	歯は犬歯から第3大臼歯まで釘植。第1小臼歯は欠如
5B	5	241	井戸3	前期	イノシシ	左	踵骨		別表	
5B	3	249	井戸3	前期	イノシシ	左	上顎骨	第2・3大臼歯の歯槽部と第2・3大臼歯	別表	第2・3大臼歯は釘植
5B	3	249	井戸3	前期	イノシシ	左	上腕骨	骨幹中央部より遠位	別表	
5B	3	249	井戸3	前期	イノシシ	右	腕骨		別表	
5B	3	249	井戸3	前期	イノシシ	右	尺骨	肘頭破損	別表	
5B	3	249	井戸3	前期	イノシシ	右	第3中手骨			
5B	3	249	井戸3	前期	イノシシ	右	第4中足骨			
5B	3	249	井戸3	前期	イノシシ?	左	脛骨	骨幹中央部より遠位 遠位端破損	別表	
5B	3	249	井戸3	前期	シカ	右	大腿骨	骨頭破損	別表	
5B	3	249	井戸3	前期	シカ	右	脛骨	骨幹中央部より遠位 遠位端破損	別表	
5B	3	249	井戸3	前期	シカ	右	脛骨	骨幹中央部より遠位 遠位端破損	別表	
5B	3	249	井戸3	前期	シカ	右	腕骨		別表	二ホンジカより大きい
5C	3	252	谷1の3層(黒色土)	後期	シカ	右	腕骨		別表	二ホンジカより大きい
5C	3	252	谷1の3層(黒色土)	後期	シカ	左	中手骨			
5C	3	252	谷1の3層(黒色土)	後期	シカ	左	大腿骨	骨幹のみ		
5C	3	252	谷1の3層(黒色土)	後期	ネコ	右	前頭骨	眼窩部		
5C	3	252	谷1の3層(黒色土)	後期	ネコ	不明	頭蓋骨の破片			
5C	3	254	土坑54	江戸以降	硬骨魚	—	椎骨			
5C	3	275	谷1の3層(黒色土)	後期	シカ	右	下顎骨	第2・3大臼歯部と歯	別表	第2・3大臼歯は釘植、第3大臼歯は放出が完了した直後のよう、第2・第3大臼歯共に摩擦は始まっていない
5C	3	287	谷1の3層(灰色砂と水色シルトブロック層)	後期	ウマ	左	下顎骨	第2小臼歯～第3大臼歯	別表	左の臼歯は釘植
5C	3	287	谷1の3層(灰色砂と水色シルトブロック層)	後期	ウマ	右	下顎骨	第2小臼歯～第1大臼歯と第3大臼歯	別表	右の臼歯は釘植
5C	3	287	谷1の3層(灰色砂と水色シルトブロック層)	後期	ウマ	左	下顎第2切歯			
5C	3	287	谷1の3層(灰色砂と水色シルトブロック層)	後期	ウマ	左	下顎第3切歯			
5C	3	287	谷1の3層(灰色砂と水色シルトブロック層)	後期	ウマ	右	下顎大歯			
5C	4	293	4・5層	江戸以降	不明(ブタ?)	右	上腕骨	骨幹のみ		解体痕あり
5B	6	320	pit30	前期	木?					
5B	5	336	井戸3	前期	イノシシ	不明	中手骨or中足骨			
2D	8	414	7層	後期	シカ	左	中手骨		別表	
2D	8	414	7層	後期	シカ	左	尺骨	近位から骨幹中央部まで		
6A	2	416	pit138	後期	シカ					

調査区	トレンチ	登録番号	出土状況	時代	種名	左右	部位名	残存状況	計算結果	備考
6A	2	500	1・2層	江戸以降	ネコ	右	脛骨	骨幹のみ	骨幹のみの全長102.30mm	同骨端遊離して無し、若い
4A	7	601	3層	江戸以降	不明	右	長骨片			新しい?
4A	16	673	土坑263(ゴミ穴)東辺筋堀	江戸以降	ニワトリ(大型)?	右	脛骨	骨幹中央より遠位		
5A	1	689	土坑31	江戸以降	木	—	頭蓋骨			
1A	8	819	土坑219	後期	カモメ?					
5A	4	822	1層	江戸以降	不明(大型哺乳類)					
5A	4	825	土坑136	江戸以降						
3B	11	833	9b層	前期	ネコ	右	脛骨	内側顆のみ欠損	最大長102.60mm	
5A	4	844	土坑147	江戸以降						
4A	2	894	2・3層	江戸以降	ウシ	左	尺骨	関節切痕から遠位	別表	関節切痕下部で切断 標本87よりやや大きい
5B-2	15	1000	土坑163	江戸以降	イノシシ(ブタ?)	右	上腕骨	近位部破損		
5B-2	15	1000	土坑163	江戸以降	サカナ(小型)	右	不明			
5B-2	15	1000	土坑163	江戸以降	シカ	右	上腕骨	近位部と遠位の内・外側上顆破損	別表	
5B-2	15	1000	土坑163	江戸以降	トリ(小型)	右	上腕骨	遠位端		
5B-2	18	1021	土坑119	江戸以降	ウシ	右	中足骨	骨幹から遠位の前面のみ	別表	近位と後面は切られている
3A	7	1052	9b層	前期	イヌ	右	上顎第1大臼歯	歯冠の破片のみ	別表	同一個体
3A	7	1052	9b層	前期	イヌ	右?	上顎第2大臼歯			同一個体
3A	7	1059	9b層	前期	不明					
3A	7	1063	9b層	前期	イヌ	左	大腿骨	近位から骨幹中央部		近位端はすれ、中型犬程度の大きさ
3A	7	1063	9b層	前期	サカナ	不明	鱈蓋骨			
3A	6	1157	8・9層	前期	硬骨魚	右	主鱈蓋骨?			
5B-2	18	1206	土坑117(レンガ基礎)	江戸以降	ウシ	右	大腿骨	遠位端		
5B-2	20	1216	土坑222	後期	不明	不明	大腿骨	遠位端の一部		
5B-2	20	1217	5・6層(道の下)	江戸以降	ウマ	左	上顎第3小臼歯から第3大臼歯		別表	遊離歯、同一個体と思われる
5B-2	20	1218	5層	江戸以降	不明		長骨片			
6A	5	1234	土坑165(下層)	江戸以降	シカ	左	上腕骨	近位部破損	別表	
3A	6	1267		前期	イノシシ	右	肩甲骨		別表	
3A	6	1267	深掘部	前期	不明	不明	肩甲骨	肩甲骨の一部		
6A	3	1272	5・6層	江戸以降	不明					
3A	6	1391	9c層	前期	硬骨魚	不明	間鱈蓋骨			
5B-2	20	1475	6層	後期	ウマ	右	下顎骨	下顎第2・第3小臼歯とその歯槽	別表	第2・3小臼歯は釘植
5B-2	20	1475	6層	後期	ウマ	右	下顎第4小臼歯	遊離歯	別表	同一個体
5B-2	20	1479	6層	後期	ウマ	左	肩甲骨	外側部から中央	別表	
5B-2	20	1481	6層	後期	不明	右	肋骨1			
5B-2	20	1481	6層	後期	不明	不明	肋骨2			
5B-2	20	1485	6層	後期						
5B-2	19	1487	9・10層	前期	木?					
5B-2	20	1496	6層	後期	ウマ	左	大腿骨	大転子破損	別表	幼体?
5B-2	20	1633	井戸19	後期	骨が入っていた					
5A	7	1656	1~3層	江戸以降	ウマ	不明	基節骨		別表	
5B		1662	5層	江戸以降	ウマ	左	肩甲骨	外側部と体の約半分	別表	
5B-2	20	1700	6層	後期	ウシ	左	下顎骨	切歯部破損	別表	
5B-2	20	1700	6層	後期	ウシ	右	寛骨			
5B-2	20	1700	6層	後期	ウマ	右	上腕骨		別表	
5B-2	20	1700	6層	後期	ウマorウシ	—	胸椎1			
5B-2	20	1700	6層	後期	不明	右	肋骨片1			
5B-2	20	1700	6層	後期	不明	不明	肋骨片2			

表74 動物遺体同定結果一覧

調査区	トレンチ	登録番号	出土状況	時代	種	名	左右	部位名	残存状況	計算結果	備考
5B-2	20	1700	6層	後期	不明						
6A	1	1783	土坑7	江戸以降	不明						
5B-2	20	1845	6層	後期	ウマ		左	大腿骨	近位部破損	別表	
5A	11	1875	土坑404下層(炭)	後期	不明						
5B-2	20	1896	5・6層(道の下)	江戸以降	不明						
1A	1919			ヒト			左	長骨片 尺骨	肘頭から鈎状突起		
1A	8	1919	6層上	後期							
6A	5	1931	土坑165下層	江戸以降	ネコ		左	大腿骨	小転子下部より骨幹中央	別表	
5B-2	20	1942	6層	後期	ウマ		左	肩甲骨			
5B-2	20	1942	6層	後期	ウマorウシ			頭蓋骨片2			
5B-2	20	1942	6層	後期	ウマorウシ			頭蓋骨			
6A	5	1975	土坑165	江戸以降	イヌ			頭蓋骨	体の遠位端 頭蓋底破損、右大歯、第2小臼歯～第2大臼歯、左大歯～第1大臼歯	別表	歯はすべて釘植
5B-2	20	1984	5層(下層)	江戸以降	不明			椎骨	棘突起		
5B-2	20	2001	8・9層	前期	不明			肋骨片			
5B-2	20	2020	6層	後期	ウマ		右	下顎第1大臼歯		別表	遊離歯
5B-2	20	2020	6層	後期	ウマorウシ			頸椎1			
5B-2	20	2020	6層	後期	ウマorウシ			頸椎1			
5B-2	20	2020	6層	後期	不明						
5B-2	20	2040	6層	後期	ウシ		左	寛骨		別表	
5B-2	20	2040	6層	後期	不明			恥骨			
5B-2	20	2040	6層	後期	不明						
5B-2	20	2075	5層	江戸以降	ウマ		右	寛骨	寛骨臼一部破損	別表	
1A	9	2092	6層	後期	ウマ						
5B-2	20	2147	5・6層	江戸以降	不明						
5A	8	2181	南壁除去	不明	不明			長骨片			
6A	2294				ウマorウシ		不明	肋骨	骨幹のみ	別表	
5A	8	2397	土坑373	江戸以降	ウマ		左	距骨			
5A	8	2401	2層下部	江戸以降	鯨骨魚			椎骨2			
5A	9	2440	1～3層	江戸以降	ウマ		左	第3中手骨		別表	
1A	16	2660	8層	前期	ウマ		右	大腿骨		別表	
1A	16	2661		後期	ネコ		左	肩甲骨		別表	
1A	16	2730	溝80	前期	ウマ		左	肋骨板、胸骨板			漆塗り?
3A	9	2732	土坑197	後期	ヒト		右	胫骨			
3A	11	2801	土坑206	後期	ウマ		不明	中手骨or中足骨	骨幹のみ		
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ		右	第2小臼歯から第4小臼歯		別表	下顎骨に釘植
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ		左	上腕骨		別表	
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ		左	尺骨と橈骨		別表	
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ		左	第3中手骨		別表	
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ		左	第4中手骨		別表	
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ		右	手の基節骨		別表	
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ		右	腕骨		別表	
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ		左	脛骨		別表	
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ		右	踵骨		別表	
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ		右	距骨		別表	
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ		左	足の舟状骨		別表	
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ		右	足の舟状骨		別表	
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ		左	第3中足骨		別表	
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ		右	第3中足骨		別表	
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ		左	足の基節骨		別表	

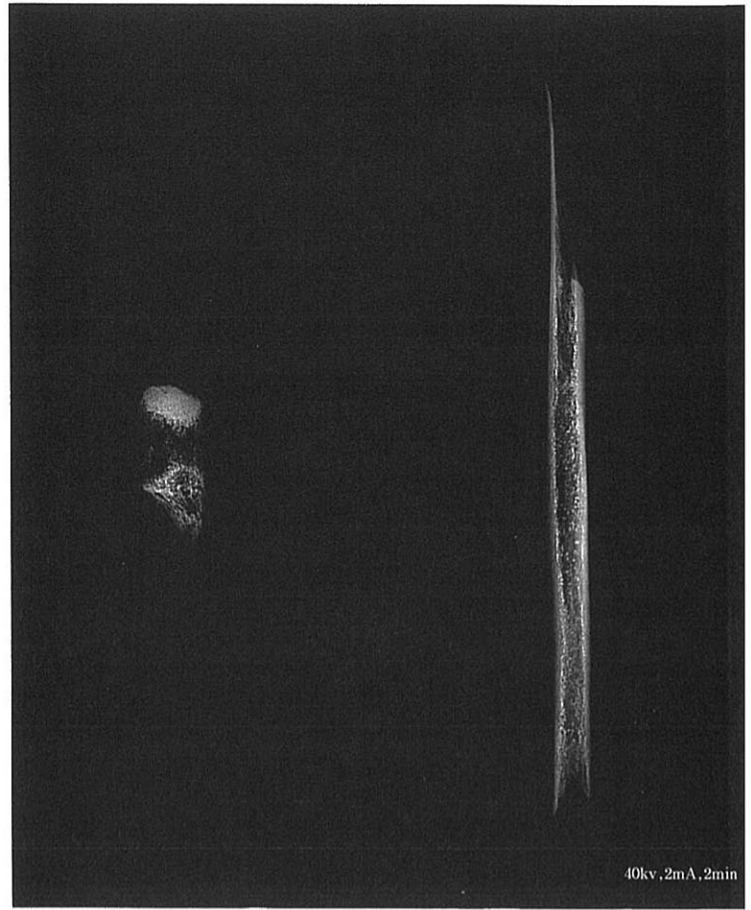
調査区	トレンチ	登録番号	出土状況	時代	種名	左右	部位名	残存状況	計算結果	備考
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ	右	足の基節骨		別表	
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ	一	仙骨		別表	
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ	右	頭蓋骨	前頭骨眼眶部と頬骨		
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ	左	下顎骨	下顎枝は左右とも破損		同一個体
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマ	右	下顎骨	下顎枝は左右とも破損		
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマorウシ	一	胸椎 2			
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマorウシ	一	腰椎 2			
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマorウシ	左	肋骨 2本			うち1本は中位のもの
5A	8?	2803	北西トレンチ?		ウマorウシ	左	上顎第4小臼歯			
3A	9	3096	溝48	後期	ウマ	左	寛骨		別表	
5A	6	3206	土坑373	江戸以降	ウマ	左	寛骨		別表	
5A	6	3206	土坑373	江戸以降	ウマ	右	寛骨		別表	
5A	6	3206	土坑373	江戸以降	ウマ	左	大腿骨		別表	
5A	6	3206	土坑373	江戸以降	ウマ	右	大腿骨		別表	
5A		3206	土坑373	江戸以降	ウマorウシ	左&右	肋骨 多数			
5A		3206	土坑373	江戸以降	ウマorウシ	一	胸椎 2			
5A	8	3238	4・5層	江戸以降	マダイ	右	上顎骨			
3A	9	3354	6a層	後期	ウマ	左	下顎第3切歯			
3A	9	3354	6a層	後期	ウマ	右	下顎第3切歯			



1



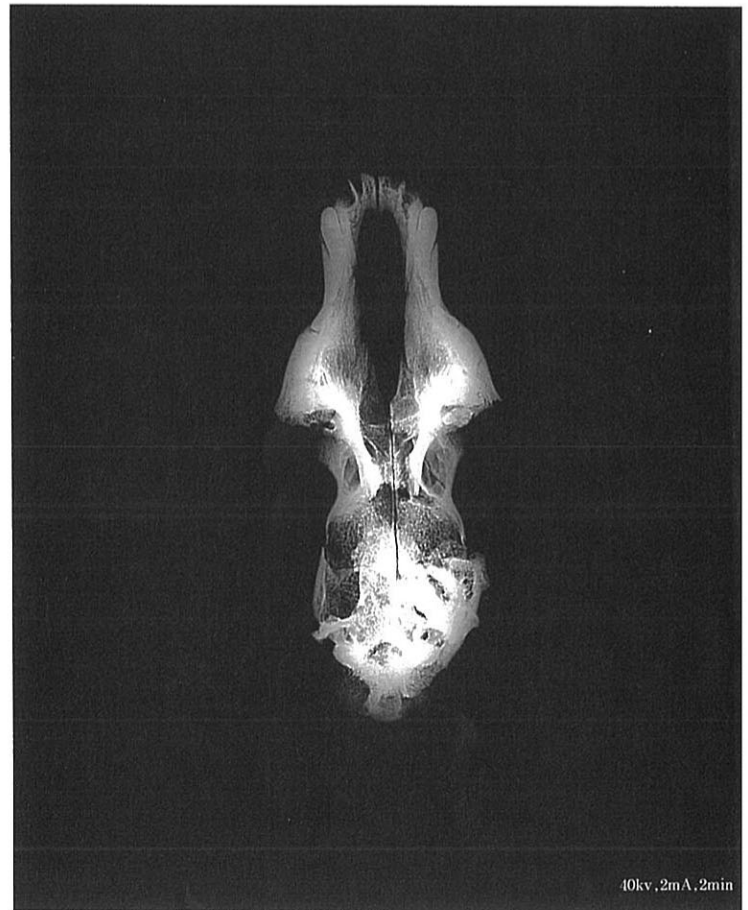
2



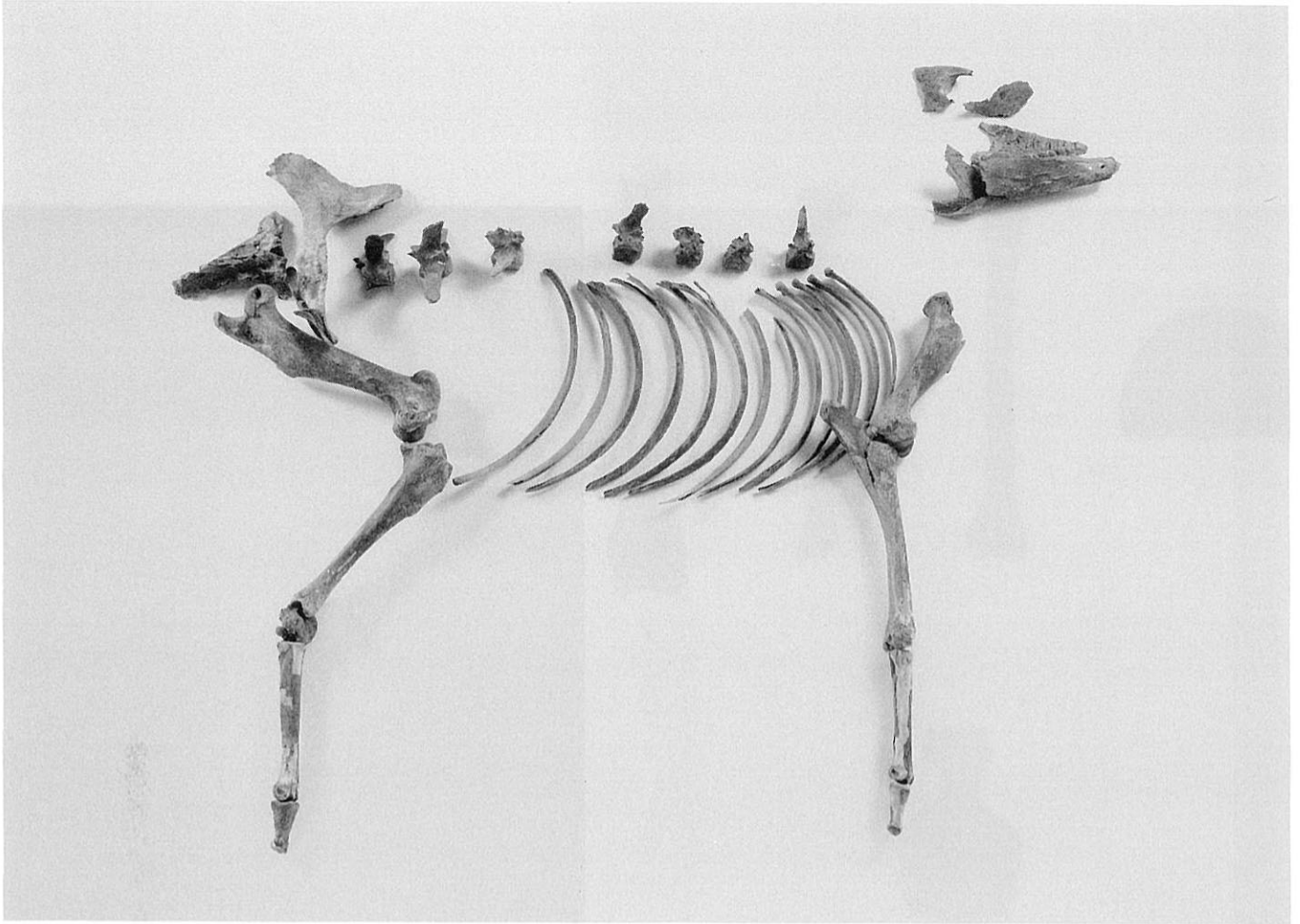
1. ヒト 左尺骨 (前面 肘頭から鈎状突起)
2. ヒト 右腓骨 (前面 骨幹部)



3

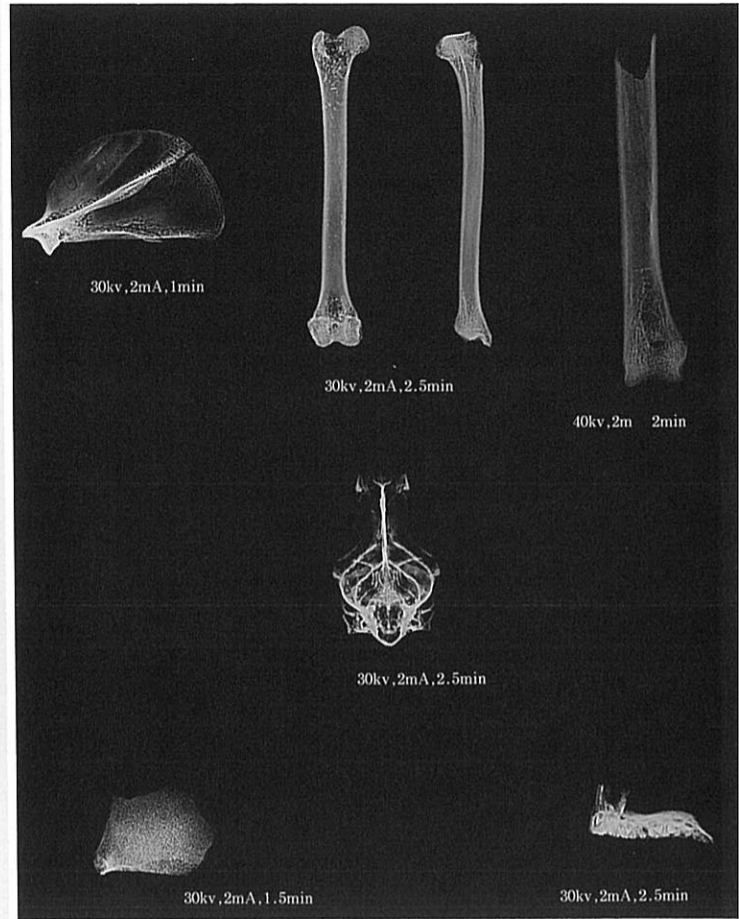
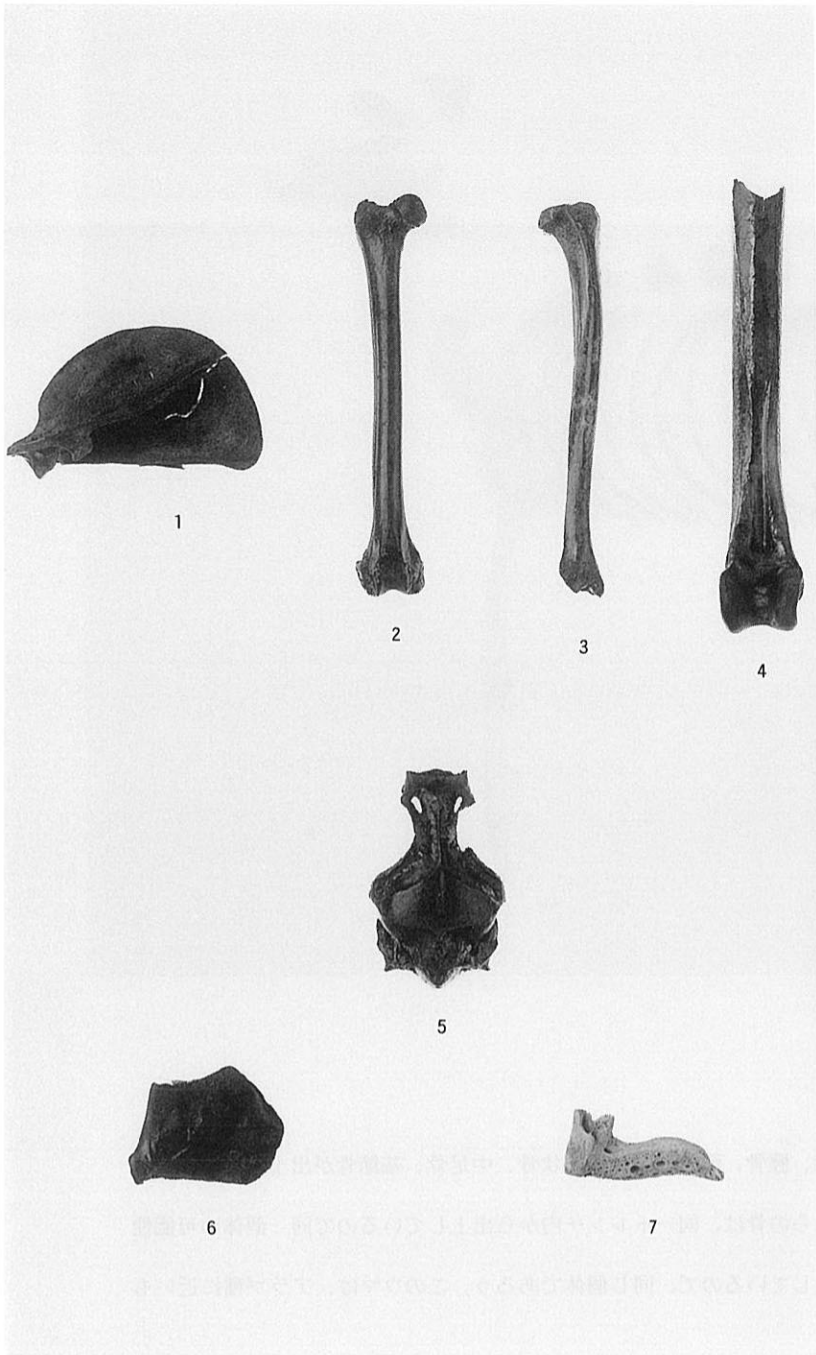


3. イヌ 頭蓋骨 (上面)



ウマの全身骨格（不完全）

頭蓋骨の一部、下顎骨、仙骨、上腕骨、前腕骨、中手骨、脛骨、踵骨、距骨、舟状骨、中足骨、基節骨が出土している。これらを組み合わせて、ウマの全身骨格を形作っている。これらの骨は、同一トレンチ内から出土しているので同一個体の可能性が高い。特に、寛骨、大腿骨と肋骨は同一の土壌から出土しているため、同じ個体であろう。このウマは、アラブ種に近いものである。



1. イエネコ 左肩甲骨(背面) 2. イエネコ 左大腿骨(前面) 3. イエネコ 左脛骨(前面)
 4. キジ科 右脛骨(後面) 5. カモメ属 頭蓋骨(上面) 6. スズキ 主鰓蓋 7. マダイ 右上顎骨

第4章 考 察

I 古代の鉄器生産遺構

新海正博

1. はじめに

21世紀を迎えた今、我々人類はおおなる繁栄に恵まれ多種多様なものを手にすることが可能になってきた。その陰には先人達の「ものをつくる」すなわち生産に対する弛まぬ様々な努力があったことを考えぬ訳にはいかない。平成2年度から開始された大坂城三の丸跡の調査では弥生時代から現代までの膨大な遺構・遺物が検出され、多くの新しい知見を得ることになった。その中においても、各時代の営みの中にはやはり数多くの生産に関わる遺構・遺物が確認されており、具体的な歴史像の復元に際して重要な示唆を与えてくれるものとなっている。

小稿では大坂城三の丸跡の調査で確認された生産関連の資料の中で、とりわけ人類とのかかわりが大きい鉄に注目し、その重要性・貴重性などの面において特に影響が大きかったと目される古代（6世紀後半から7世紀初頭）の鉄器生産（鍛冶関連）遺構を取上げ簡単な検討を加えてみたい。

2. 鍛冶関連遺構と遺物について

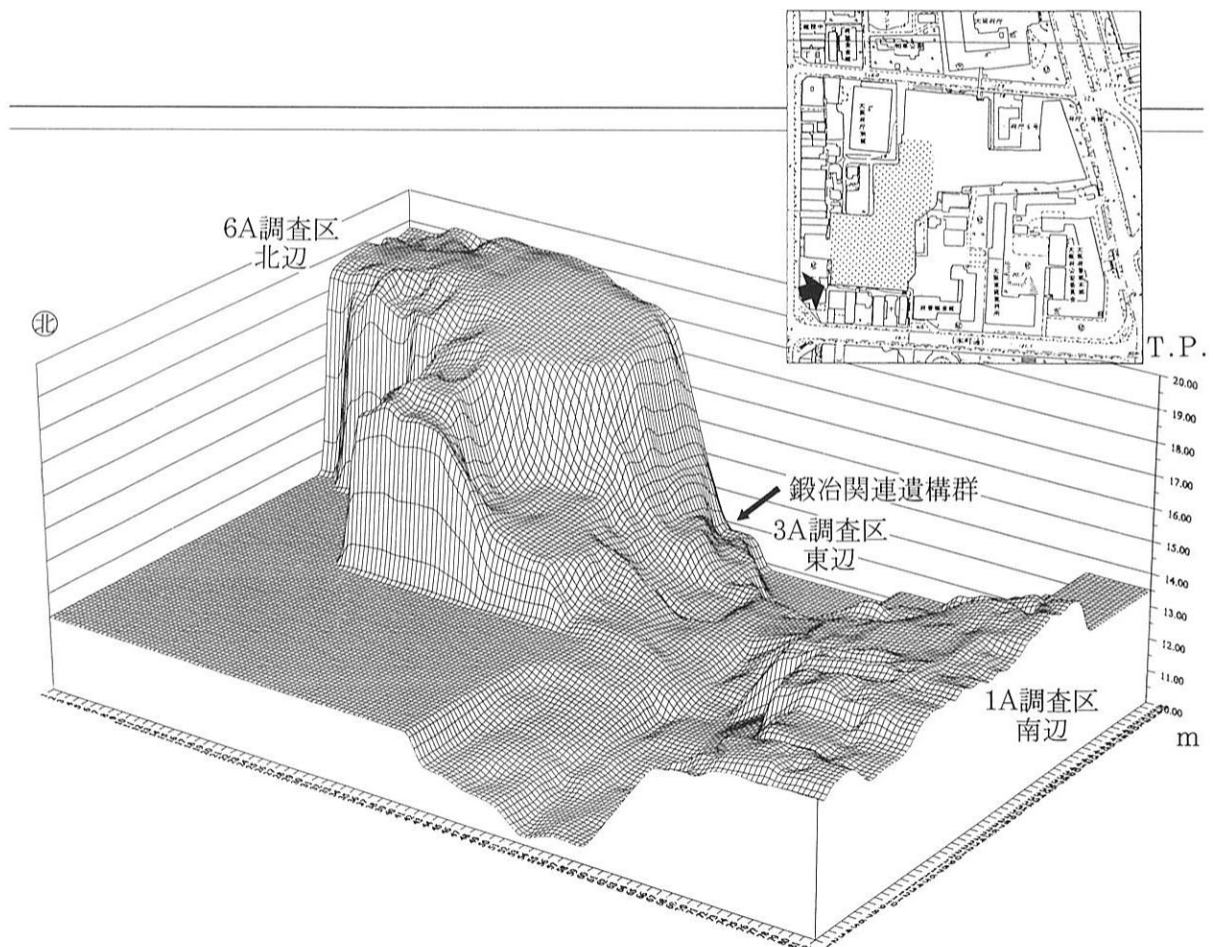


図4-I-1 6世紀後半～7世紀初頭の地形景観

古代における大坂城三の丸跡の地形は台地とそこに深く刻まれた複数の開析谷から構成されている。

こうした地形環境とこの場所が永年にわたって歴史的に重要な位置を占めて来た結果、台地部は削平され、谷部は埋め立てられるなどの土地改変が繰り返されており、該期の鍛冶関連遺構は調査深度が10m以上におよんだ開析谷部において検出されることになった(図4-I-1)。

三の丸跡で古代の鍛冶関連遺構が確認されたのは平成4年度調査の3A調査区及びその東側に位置する平成7年度調査の5B調査区の開析谷斜面である。それ以外の調査においては台地部分の調査が主体であり、先にも述べたように後世の土地改変が著しかったため鍛冶関連遺構の確認は出来なかった。しかし、幾つか検出された開析谷から鍛冶作業に伴う羽口や鉄滓、砥石などが出土しており、周辺での鍛冶遺構の存在を示唆するものとして注目されていた。

(1) 鍛冶関連遺構

鍛冶関連遺構と認識する条件として、鍛冶炉と推定される焼けた痕跡をもつ土坑(焼土坑)の存在やその周辺から鍛冶関連遺物(羽口・鉄滓・鍛造剥片など)の出土がみられることを上げられる。その条件を充たしたものとして、台地を東西に開析する谷の斜面部分から2次の調査において多量の鍛冶関連遺物や土器とともに焼土坑が集中して検出された部分がある(図4-I-2)。この遺構群は隣接した調査区から検出されており、出土遺物の構成やその時期、そして遺構の配置状況から一連のものと考えられる。遺構群の詳細な内容は本報告第3章-I 考古学的調査に譲るが以下に簡単に触れておきたい。

鍛冶関連遺構群は東西に貫流する開析谷北側斜面の傾斜変換点付近に位置し、標高は11.4m~12.4mを測る。この部分は南に開く小さく浅い谷状の地形を示し、13基の焼土坑群がその谷状地形に沿って馬蹄形を描くように並んで築かれている。遺構群の南西部分にあたる3A調査区では4基の焼土坑と2基の土坑が、遺構群の大半を占める5B調査区からは焼土坑9基と井戸状遺構、ピットなどが検出された。また、両調査区で確認された焼土坑周辺からは土器溜まりが検出されており、多量の土師器や須恵器を主体とし、鉄滓、羽口、鉄製品、草食獣の焼骨などが出土している。検出面に土壤化がみられなかった点から作業面は削平を受けている可能性が高く、鍛造剥片の集中地点や原位置を保った金床石など明確な作業痕跡を検出するには至らなかった。

焼土坑の平面形は円形・長方形・隅丸方形を呈し、特に規則性は認められない。規模の点においても規格性はみられず、直径約0.3mの3A-炉5を最小なものとし、最大は5B-炉7の1.2×0.9mを測る。いずれの焼土坑の底面にも微細な炭粉が確認される。また、3A-炉6では底面の被熱痕跡が認められないが他の焼土坑は底面・側壁ともに焼け締まり、5B-炉7・11の埋土や底面からは多量の焼土塊が検出されている。

焼土坑は基本的に基盤層を掘り窪めただけの単純な構造である。但し、5B-炉3は炉6を切って構築しているため底面に粘土を貼る構造をもっている。

(2) 鍛冶関連遺物

次に出土した鍛冶関連遺物について触れておきたい。鍛冶遺構の調査において普遍的に確認される代表的な鍛冶関連遺物には羽口・鉄滓・砥石があり、他に土壤の水洗選別によって得られる微小遺物の鍛造剥片や粒状滓がある。調査地点全体で羽口が約60点、鉄滓が約32kg、砥石が14点の出土をみた。

鍛冶関連遺構周辺からは羽口が5点、鉄滓が約22kg、砥石が5点出土している。鍛造剥片や粒状滓に関しては先にも述べたが作業面が削平されている可能性が高く、焼土坑周辺土壤の水洗選別を行った結果ほとんど確認されなかった。しかし、各焼土坑の埋土や溝状地形に溜った炭集中部の炭層の水洗選別

の結果ではそれらの存在が確認されている。また、金属学的分析に供した3A遺構群周辺出土の鉄滓からも鍛造剥片が認められた。遺構群周辺から出土した鉄滓は包含されていた土壌環境のためか表層に酸化土砂が厚く付着しており考古学的な観察を行えないものが多かった。こうした資料中には鉄塊系遺物を含んでいる可能性がある。なお、遺構群の前面に横たわり1A・3A・5B調査区を貫流する谷からも羽

表4-I-1 鍛冶関連遺構表

遺構名	長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	備考
3A-伊5	30	30	10	円形(洋梨形)	碗状	底面に炭粉。南側が一部突出。
3A-伊6	90	90	30	円形	逆台形	底面に炭粉。南側が一部突出。
3A-伊7	(93)	(93)		円形か		伊6に切れ1/4が残存。底面に炭粉
3A-伊8	(70)	(70)	15	円形か	碗状	1/2が残存。内部及び周囲から焼けた獣骨。底面に炭粉。
3A-土坑359	120+α	138	10	隅丸方形	浅い皿状	焼けなし。袋状鉄斧1点、多量の土器が出土。
3A-土坑360	80	40	9	長楕円形	浅い皿状	焼けなし。多量の土器と焼けた獣骨が出土。
5B-伊3	70	60	13	隅丸方形	碗状	底面に炭粉。
5B-伊4	70	35+α	20	円形	碗状	底面に炭粉。伊9の上部に築かれる。
5B-伊5	60+α	30+α	10	隅丸方形か	碗状	底面に炭粉。約1/2が残存。
5B-伊6	85	(65)	12	隅丸方形	碗状	底面に炭粉。伊3に一部切られる。
5B-伊7	121	95+α	25	方形	逆台形	内部に多量の焼土塊。
5B-伊8	70+α	60+α	15	隅丸方形	碗状	底面に炭粉なし。
5B-伊9	90	55+α	24	円形	逆台形	底面に炭粉なし。
5B-伊10	(60)	50	12	隅丸方形	碗状	底面に炭粉。
5B-伊11	80+α	70	20	方形か	逆台形	内部に多量の焼土塊。滑石製白玉1点。

単位はcm。()は復元値を示す。

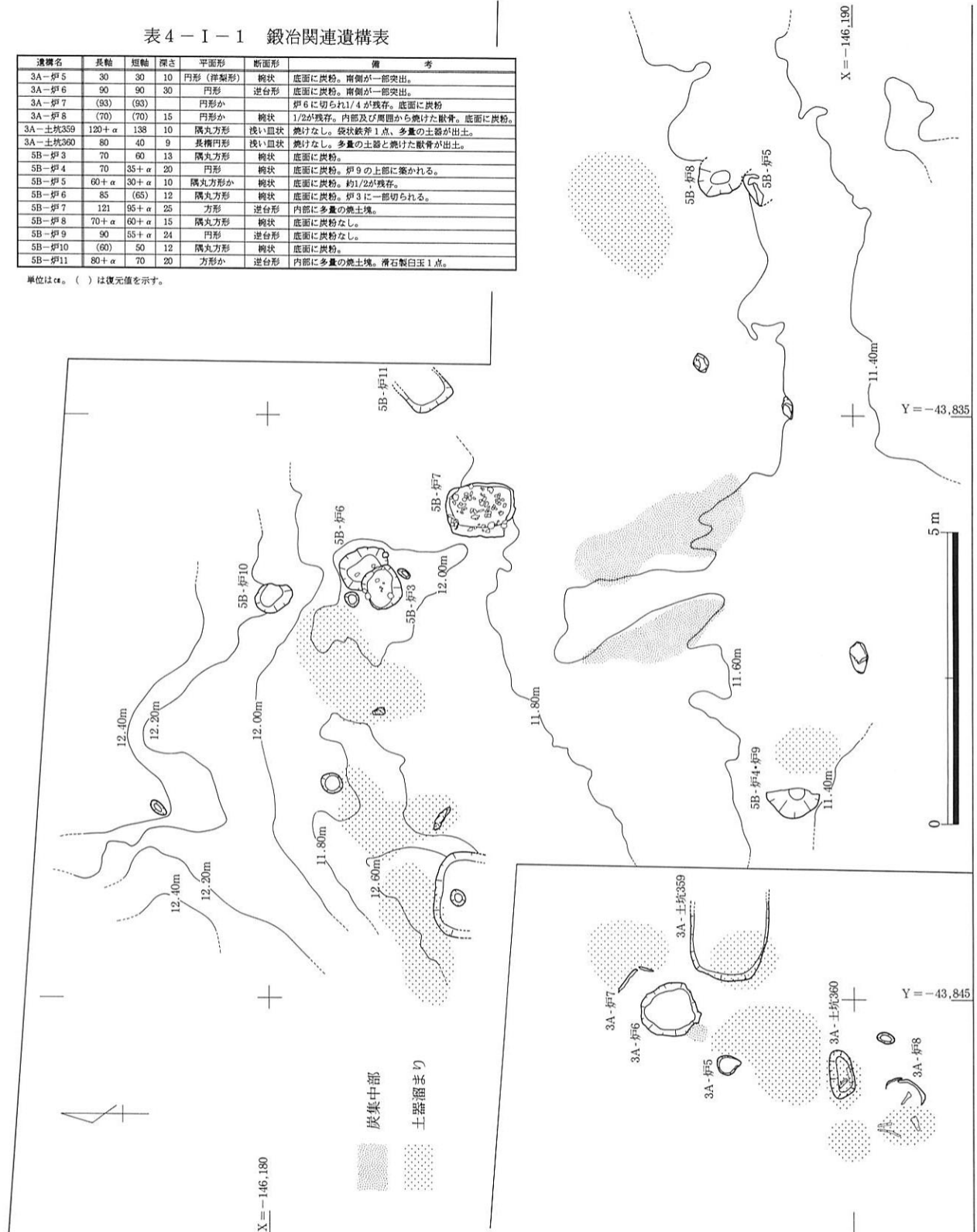


図4-I-2 鍛冶関連遺構群平面図

口や鉄滓が出土する。これらは廃棄物として遺構群から投棄されたものと考えられる。

鍛冶関連遺物は遺構群周辺のみならず調査地の他の場所からも出土している。その大半の資料は鉄滓であるが（図4-I-3）、羽口片や砥石も少量ながら確認出来る。遺構群以外の出土地として注目されるのは2B調査区の谷1と5B調査区及び6A調査区の掘立柱建物群周辺である。2B調査区の谷1からは鉄滓が約1.5kg、羽口が8点、砥石が5点出土し、5B・6A調査区の掘立柱建物群周辺では鉄滓が約4.5kg、羽口が9点みられる。また、掘立柱建物群直下の谷斜面からも鉄滓が出土しており、上方から廃棄したものと捉えられる。

出土した羽口は大半が破片となっており、原形を窺える資料は少ない。形態的な特徴でみれば外形及び通風孔が先端から基部に向けて真直ぐにのびるもの、先端から基部に向け「ハ」の字状に開くもの、先端から基部に向けて真直ぐにのびて通風孔のみが基部側で漏斗状に開くものの3種類がある。先端部付近の外径は5～6cm前後、通風孔径は2cm前後を測り規格化された大きさとなっている。胎土は砂粒やスサ状の植物遺体を含むが比較的精良なものを使用している。平成7年度に胎土分析を行ったが分析結果はばらつきが大きく、選択的に胎土を用いているとは考えられない。調整上の特徴として外面の長軸方向に幅1cm前後の強いナデを施すものが多く、結果として断面形が円形よりも多角形状に近くなるものが顕著である。また、先端部を打ち欠いた資料や先端部のみの資料が大半を占める。これは通風孔

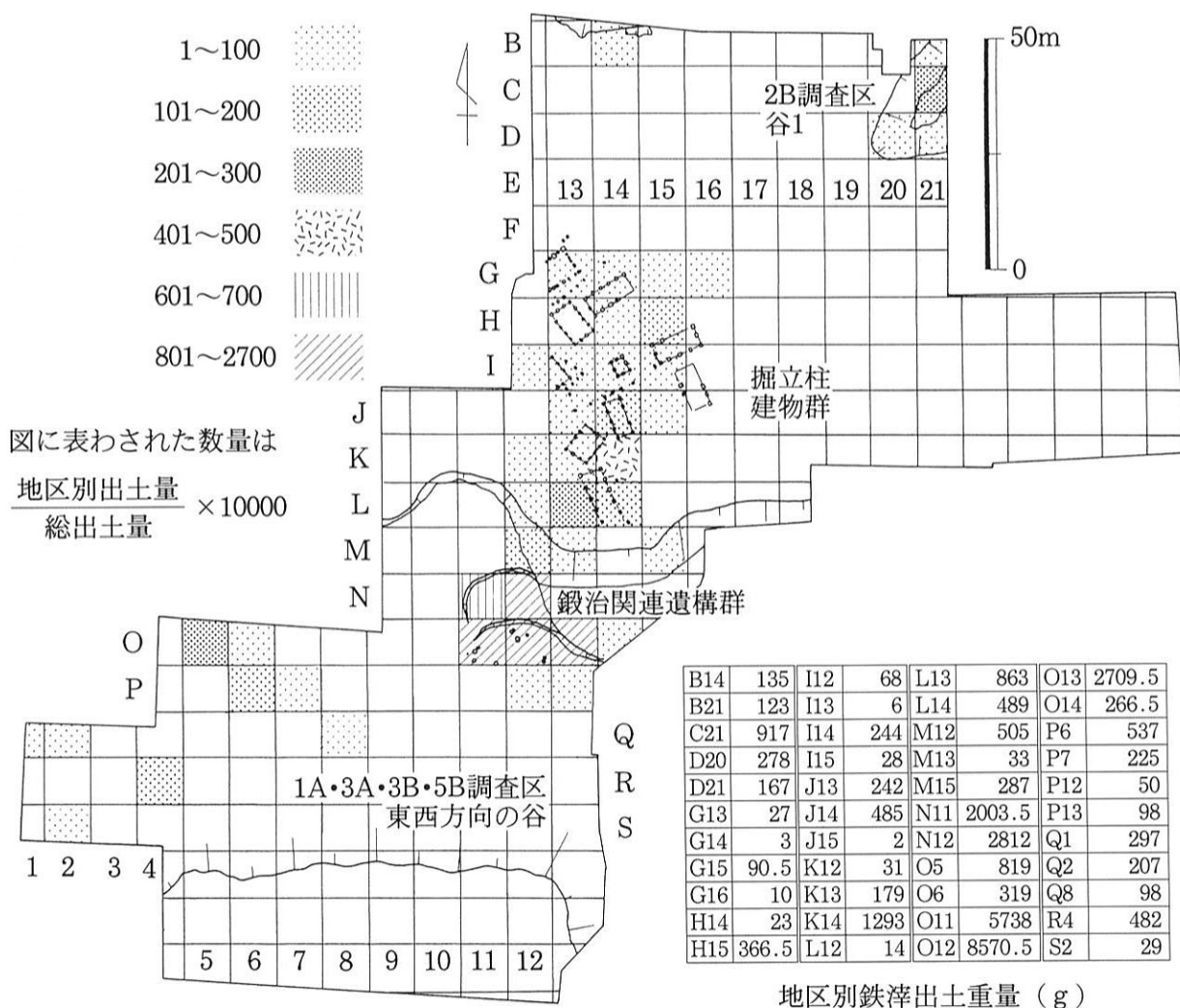


図4-I-3 出土鉄滓重量分布図

が溶解によって閉塞されると羽口としての機能を失するため、その部分を打ち欠いて再度機能回復を目指した結果と思われる。出土する完形の羽口が短いのはそれが繰り返され、使用に耐えられない長さとなったため廃棄されたのであろう。羽口の炉内への挿入角度は、先端に残されたガラス質滓や還元色帯の状況から5～25度程度と推定でき、概して10～15度を示すものが多い。

先にも述べたが鉄滓は表層に酸化土砂が厚く付着するものが多く、肉眼観察を行えるものが少ない。出土鉄滓には碗形滓と不定形滓がみられ、後者の方が多い。原形を窺える碗形滓の観察から、平面形は円から楕円形を呈し、長軸・短軸ともに6～15cm、厚さ1.6～4cmを測る。総体的に径が10cm、厚さが3cm前後のものが主体をなしている。一部には裏面に炉底を付着させるもの、炉底の傷の痕跡（炉に生成した鉄滓を除去する際に生じた棒状工具による傷か）を留めるもの、滓中に板状の素材鉄を落としたものなどがある（図4-I-5）。

砥石は他の鍛冶関連遺物に比して非常に少ない。種類は荒砥から仕上げ砥まで揃っているようである。石材は砂岩が多く、他に凝灰質頁岩、流紋岩、輝石安山岩がみられる。

3. 鍛冶関連遺構と遺物の検討

前節では検出された遺構及び遺物について概観してきた。ここではそれに基づき若干の検討を加えてみたい。

まず、鍛冶関連遺構群の操業時期について考えておきたい。遺構群は13基の焼土坑から構成されるが、幾つかの遺構で切り合い関係が認められる。このことから複数の操業期間が推定出来る。しかも、切り合う遺構その全てが2基の焼土坑のセット関係（例えば3A-炉6・7や5B-炉3・6等）に限定されることから、二時期の操業があったとみなすことができよう。切り合いを持たない遺構の遺存状況や配置等も考慮すればI期（旧操業期）が3A-炉7・8、5B-炉6・7・8・9、II期（新操業期）が3A-炉5・6、5B-炉3・4・5・10・11の各遺構群に分けられる。また、遺構の配置状況や切り合いの在り方からみればその操業期間は極めて近接した時期であったと考えられ、II期の5B-炉3からTK43～TK209型式の須恵器が確認されていることより下限を6世紀後半から7世紀初頭に比定することが出来る。この時期は焼土坑周辺で検出された土器群の時期とも齟齬をきたすものではない⁽¹⁾。

各期の遺構はそれぞれI期が6基、II期が7基の焼土坑から構成されていたと考えられるが、果たして全ての焼土坑が同じ性格（機能）を持っていたのであろうか。

遺構の性格差を考える手掛りとなり得るものとして鍛造剥片や粒状滓の存在が注目される。両者は鍛冶作業において鉄を鍛打する際に生成されるものであり、鍛冶作業が行われた作業面には普遍的にみられる。残念ながら本鍛冶遺構群周辺では作業面が削平されており、焼土坑と鍛造剥片等の集中地点との関係は明らかに出来なかった。しかし、鉄の鍛打は鍛冶炉のすぐ側で行われるものであるため、飛び散った鍛造剥片や粒状滓が鍛冶炉内に入り込むことがある。そこで、各焼土坑埋土の水洗選別を行った結果、3A-炉5、5B-炉3～6・8～10で鍛造剥片や粒状滓の存在が確認された。すなわち、これらの焼土坑が鍛冶炉である可能性が高いものといえる。

次に焼土坑の形態と碗形滓の形状についてみておきたい。一般的に碗形滓の形状や大きさが鍛冶炉底面の形態や規模を反映するといわれている。出土した碗形滓は平面が円形もしくは楕円形（径が10cm前後）・断面形が碗状もしくは浅い皿状（厚さが3cm前後）を呈する。このような碗形滓は底面規模が大きく、断面形が逆台形で平底の焼土坑では生成され難い。つまり、3A-炉6・7・8、5B-炉7・9・

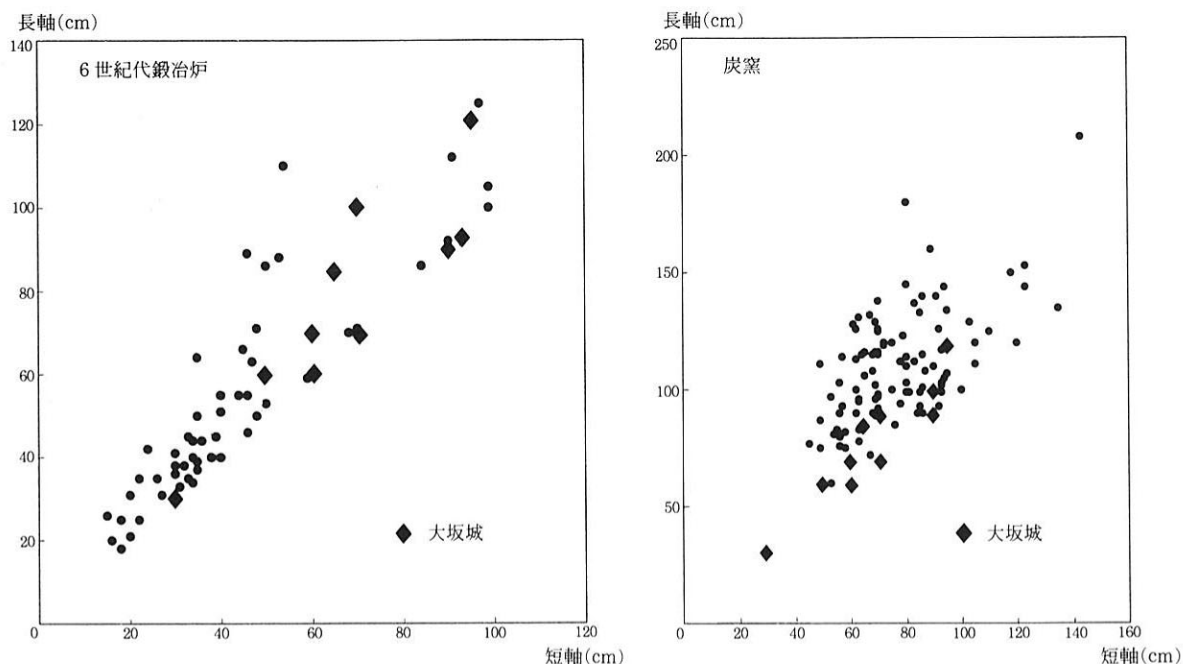


図4-I-4 鍛冶炉・炭窯平面規模分布図

11が鍛冶炉である蓋然性は低いものといえよう。但し、5B-炉9の周囲には他の鍛冶炉が存在しないにもかかわらず埋土から鍛造剥片や粒状滓が確認された点を重視して鍛冶炉と位置付けておきたい。

以上のことから鍛冶炉としての条件を充たす焼土坑は3A-炉5、5B-炉3～6、8～10といえる。では、他の焼土坑に関しては如何なる性格が想定できるのであろうか。鉄及び鉄器生産関連遺跡の調査では製鉄炉や鍛冶炉以外の焼土坑として、木炭焼成土坑と称される伏せ焼き式炭窯の検出例が多い。その平面形態は方形・隅丸方形・円形・楕円形とバリエーションに富み、断面形は逆台形・方形を呈して平底となっている。規模の点では長軸が0.8～1.2m、短軸が0.7～1.0mを測るものが主体となる傾向がみられる。⁽²⁾本遺跡の鍛冶炉以外の焼土坑(3A-炉6・7・8、5B-炉7・11)と比較すると形態及び規模の点で酷似した状況が見出せる(図4-I-4)。あくまで、規模や形態のみからの推察であり確実性は低いが、鍛冶炉操業における木炭の重要性を考慮するならば鍛冶炉以外の焼土坑は木炭焼成土坑であったと指摘することはあながち的はずれな見解ではなからう。⁽³⁾

検出された鍛冶関連遺構は以上のことから、鍛冶炉とそれに供する木炭を焼く焼成土坑から構成されていたものと考えられ、I期は鍛冶炉が3基・木炭焼成土坑が3基、II期は鍛冶炉が5基・木炭焼成土坑が2基であったと推定できる。

鍛冶関連遺構群の性格推定を行ったが、実際にどのような作業が行われていたのであろうか。炉の規模や構造、椀形滓の肉眼観察などの考古学的な検討だけでは未だ作業工程を明確にすることはできない。そこで金属学的分析結果を援用し、鍛冶関連遺構群での作業を推定したい。結果から述べるとこの遺構群では鍛錬鍛冶作業(鉄器生産)を行っていたことが椀形滓の分析から確認されている。遺構群周辺から刀子状・棒状・釘状鉄製品が数多く出土することや椀形滓中(図4-I-5-359)に薄い板状の鉄素材が確認されたことはこの結果を強く示唆するものといえる。一方で椀形滓の肉眼観察から上面に凹みをもつもの(図4-I-5-364)は精錬鍛冶滓である可能性が高いとの指摘もあり、⁽⁴⁾精錬から鍛錬にいたる一連の操業が想定出来るのかも知れない。また、分析結果によれば精錬滓が2B調査区谷1から出土している。先の指摘による椀形滓が2B調査区谷1周辺から持ち込まれたものとするならば地区によ



図4-I-5 鉄滓実測図

表4-I-2 鉄滓観察表

遺物番号	図番号	写真図版番号	大澤分析番号	出土遺構・層位	長軸	短軸	厚さ	重量	磁着度	メタル度	遺存度	平面形	断面形	備考
358	図4-I-5	362	OKS-9	3A-土器溜まり1	74	72	36	235	2	H (○)	1/4	扇形	碗状	上面には小さな気孔が多くみられ、底面は炉床が全面付着。非常に緻密で重量感がある。
359	図4-I-5	362	OKS-8	3A-10層	90	87	38	507	4	H (○)	完形	楕円	碗状	小さな気孔が多くみられる。底面には棒状の突起あり。炉底の傷を示すものか。途中に幅6×厚1mmの素材と思われ板状の鉄あり。緻密で重量感あり。
361	図4-I-5	363	OKS-18	5B-2-pit156	124	114	40	305	2	なし	完形	卵形	碗状	上面中央に割がれたような痕跡があり、不定形に穴があく。僅かに底面には炉床の付着あり。木炭痕あり。粗く脆い滓。
362	図4-I-5	363	OKS-6	2B-谷1	102	83	23	183	2	H (○)	完形	卵形	碗状	上面中央が緩やかに凹む。白色砂粒の付着あり。気孔が少なく滑らか。底面には僅かに炉底の付着がみられる。緻密な滓。
363	図4-I-5	363	OKS-7	3A-9c層	75	55	17	97	3	なし	1/2	半円	浅い皿状	上面には黒色ガラス質滓が部分的に付着。上面、底面ともに小さな気孔多い。緻密で重量感がある。
364	図4-I-5	363	OKS-10	3A-10層	140	113	31	729	4	H (○)	ほぼ完形	楕円	碗状	上面中央は楕円形に大きく凹む。滓は緻密で重量感がある。
365	図4-I-5	363	OKS-11	3B-10層(谷)	95	80	43	206	3	H (○)	完形	隅丸方形か	碗状	上面中央は緩やかに凹み、多量の白色砂粒が付着。底面には炉床付着。
366	図4-I-5	364	OKS-12	3B-10層(谷)	102	79	30	259		H (○)	完形	長楕円	浅い皿状	上面、底面ともに炉床かと思われる還元色を呈する土砂付着。緻密な滓。
367	図4-I-5	364	OKS-13	3B-10層(谷)	100	80	30	479		H (○)	完形	楕円	碗状	上面中央に割がれたような痕跡があり、不定形に穴があく。底面は大半が酸化土砂に覆われ、僅かに炉床の付着あり。小さな気孔が多い。重量感あり。
			OKS-14	5B-1-土器群26	77	62	32	216		H (○)	3/4	隅丸方形か	碗状	ほぼ全面酸化土砂に覆われ、それに伴い須恵器片が付着。緻密で重量感あり。
			OKS-15	5B-1-土器群26	102	70	42	372		M (◎)	3/4	長楕円	碗状	ほぼ全面酸化土砂に覆われる。滓の下部には気孔が集中し、上部には少ない。緻密で重量感あり。
			OKS-16	5B-1-土器群26	61	57	39	203	4	H (○)	2/3	隅丸方形	碗状	ほぼ全面に酸化土砂付着。滓は滑らかで気孔がほとんどみられない。緻密で重量感あり。
			OKS-17	5B-1-土器群22	107	85	18	163	3	なし	完形	円	浅い皿状	酸化土砂の付着あり。上面には黒色ガラス質滓がみられる。緻密で重量感あり。
			OKS-19	5B-2-土坑233	90	87	42	396	5	なし	完形	円	碗状	ほぼ全面酸化土砂に覆われ、それに伴い土師器碗が二次的に付着。上面に浅い凹みあり。緻密で重量感あり。
			OKS-20	6A-pit255	76	61	34	162		なし	完形	楕円	碗状	ほぼ全面酸化土砂に覆われる。上面に凹みあり。緻密で重量感あり。

長軸・短軸・厚さの単位はmm、重量の単位はg

る作業工程の分離を想定することも可能である。いずれにせよ不確定要素が大きいため、現段階では刀子や釘状鉄製品などの工具生産を主体とした鍛錬鍛冶作業を行っていたと考えておきたい。

鍛冶関連遺構は1箇所しか検出できなかったが、鍛冶関連遺物の集中的な出土が他の部分でもみられた。2B調査区谷1では6世紀後半～7世紀初頭の多量の土器とともに羽口や椀形滓が出土している。鍛冶関連遺構群と同時期を示す資料である。この谷1からは鍛冶関連遺構が検出されていないため、出土した遺物の供給源は必然的に谷上方に広がる約1万㎡の台地部分に求められる。また、この台地部分の南端では掘立柱建物群が検出されており、その柱穴や周辺に僅かに残った包含層から鉄滓や羽口が多量に確認されている。掘立柱建物群が造営される前にこの付近で鍛冶作業が行われていたことを推定出来る。なお、掘立柱建物の柱穴からは6世紀中葉～7世紀初頭の土器片が出土しており、鍛冶関連遺物の時期を示唆している。弥生時代以降の鍛冶関連遺構は集落縁辺部で確認されることが多く⁽⁵⁾、こうした立地を考えるならば集落縁辺にあたる台地南端や北東の谷1周辺での鍛冶作業を想定することは妥当なものと言える。条件的にも湿気の多い谷部での操業よりも台地部での操業が適しており、遺構が失われた現在ではその評価は困難であるが、鉄器生産活動においては後者が主体的な位置を占めていたと考えられる。

直接的な鍛冶関連遺構の検出は地形環境的な問題もあって限られた成果であったが、得られた資料から推察すれば谷部から台地部まで広範囲でのかなりの規模をもった鍛冶作業が想定でき、しかも6世紀後半から7世紀初頭といった限定された時間の中での操業であったことが窺える。ここで問題となるのは操業期間の限定性とその操業主体であろう。今回発見された鍛冶関連遺構及び遺物はその時間的・空間的重要性と操業規模を鑑みると、単に1集落内で村方鍛冶的な役割を果たしただけの存在とは考えられない。操業された時期は前期難波宮造営直前にあたり、上町台地北端には大郡・小郡・屯倉・館などの公的施設があったと推定されている。これまでの調査ではそれらを示唆する遺構や直接的な関係性を示す遺物の出土は認められないが、積極的な評価が許されるならば先の公的施設との関係を全く無視するわけにはいかないであろう。そして、この鍛冶工人集団を司った主体として専門的鍛冶集落である天理市布留遺跡や柏原市大泉遺跡、交野市森遺跡の操業に深く関わっているとされる物部氏がクローズアップされる⁽⁶⁾。物部氏は鉄器生産に係わった有力氏族として認識されており、本遺跡周辺との関係性で見れば上町台地北端部に「難波宅」をかまえていたことが文献から窺える⁽⁷⁾。しかし、物部氏は6世紀後半には没落するため本遺跡の操業時期とは若干のズレを生じることとなる。すなわち、6世紀後半までは物部氏によって掌握されていた鍛冶工人集団が物部氏の没落後、蘇我氏らによる初期律令国家体制の中に組み込まれていき操業を行っていたとみなされており⁽⁸⁾、本遺跡を営んだ工人集団もその中にあったと考えておきたい。そしてこの鍛冶工人集団は難波宮が造営された7世紀中頃には場所を替えて新たな鍛冶工房を築き⁽⁹⁾、その技術を大いに活用することになっていったと推定される。

4. おわりに

これまで、鉄は、社会の発展・変革期のその時々において大きな役割を果たして来た。折しも今回発見された鍛冶関連遺構群は6世紀後半から7世紀初頭の限定された時期の所産であり、初期律令国家体制へと移行する大きな社会的変革の真只中に操業されたものであった。また、5世紀代には大型倉庫群が建ち並び、その後公的な諸施設や難波宮が造営され、中枢機能を持っていた上町台地北端で検出されたことも重要な点である。このように上町台地のもつ歴史的背景や空間的特質、社会的動向を考えた時、

この鍛冶工場の存在意義は非常に大きい。特に難波宮下層遺跡群を評価する上で新たな視点を提示する重要な意味をもった資料と言える。しかしながら、筆者の力不足もあり小稿では鉄器生産遺構のみの検討に終始し、その背後にあった様々な事象にまで踏み込んだ考察が出来なかった。また、鍛冶技術は半島からもたらされた新来の技術であり、その導入にあたっては渡来系工人の存在が大きく関わっていることは言をまたない。今回ほとんど触れることはなかったが、5世紀代の出土遺物の中には韓式系土器など朝鮮半島とつながりの深い遺物が相当量確認されている。これらの検討も残された大きな課題といえる。今後そのような点もふまえ、改めて検討していきたい。

飛鳥池遺跡もそうであるように生産関連の遺跡は集落中心部から離れた谷部などで検出されている⁽¹⁰⁾。今後の周辺部での調査においては上町台地を開析する谷部の調査が大いに注目され、新たな資料の増加が期待される。

最後になりましたが、小稿をまとめるにあたって穴澤義功、安間拓巳、大澤正己、大道和人、北野重、小林和美、野島 永、真鍋成史、村上恭通、山内紀嗣の各氏には多くのご教示を賜りました。記して感謝申し上げます。

註

- (1) 後藤信義・新海正博 1995「1.3A調査区出土古墳時代資料の検討」『大坂城跡の発掘調査』5 (財)大阪府文化財調査研究センター
- (2) 検討に使用した資料は製鉄遺跡や鍛冶遺跡で検出され、木炭焼成土坑や炭窯と認識されている焼土坑を対象とした。検討した資料は6世紀前半から9世紀後半の所産であり、時期による規模の変化は認められない。分析に使用した代表的な報告書を掲げておく。
製鉄遺跡；寺島文隆ほか 1995『原町火力発電所関連遺跡調査報告V』福島県文化財調査報告書第310号 (財)福島県文化センター
寺島文隆ほか 1995『原町火力発電所関連遺跡調査報告VI』福島県文化財調査報告書第315号 (財)福島県文化センター
鍛冶遺跡；島崎 東編 1993『窪木薬師遺跡 前川河川改修工事に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86 岡山県教育委員会
- (3) 近世たたらにおける民俗伝承によれば「鍛冶屋炭のことを小炭という。それはいうなれば消炭で、竈などは築かず、露天で燃すだけだった。必要に応じて径三寸くらいの木を伐り、小炭床と呼ばれる平坦な所に積み重ね、火をつけ、柄振でよく掻きまぜ、火勢が強くなると上から小枝をかぶせ、灰になってしまわぬようによく注意して燃しながら(以下略)」といわれている。これから考えれば鍛冶関連遺構群で検出されたような焼土坑でも十分対応できたものと思われる。石塚尊俊編 1968『菅谷鑑』 島根県文化財愛護協会
- (4) 交野市教育委員会 真鍋成史氏の御教示による。精錬鍛冶に際して、銑鉄系の鉄塊が滓上面に生成された場合このような椀形滓が多くみられるとのことである。
- (5) 村上恭通 1994「弥生時代における鍛冶遺構の研究」『考古学研究』第41巻第3号 考古学研究会
- (6) 花田勝広 1989「倭政権と鍛冶工房—畿内の鍛冶專業集落を中心に—」『考古学研究』第36巻第3号 考古学研究会 真鍋成史 1994「肩野物部と鉄・鉄器生産—社寺縁起を中心に—」『同志社大学考古学シリーズVI 考古学と信仰』 同志社大学
真鍋成史 1997「河内国・守部氏に関する基礎的考察—古墳時代鍛冶遺跡の実態解明に向けて—」『河内古文化研究論集』 柏原市古文化研究会
- (7) 『日本書紀』の崇峻前紀(用明二年)物部守屋の「難波宅」
- (8) 花田勝広 1989「倭政権と鍛冶工房—畿内の鍛冶專業集落を中心に—」『考古学研究』第36巻第3号 考古学研究会
花田勝広 1992「古墳時代の鉄・鉄器生産工房—大阪を中心とした古代鍛冶—」『柏原市歴史資料館館報』第3号 柏原市歴史資料館

- (9) 辻 美紀 2000「古代なにわ工房見つかる!?!—飛鳥時代の鍛冶遺構の調査から—」『葦火』86号(財)大阪市文化財協会
- (10) 岩本圭輔ほか編 2000『飛鳥池遺跡』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館

参考文献 (なお、参考にした多くの発掘調査報告書に関しては割愛させて頂いた。)

- 安間拓巳 1995「古代の鍛冶炉—その形態および鍛冶工程との関連について—」『考古学研究』第42巻第2号 考古学研究会
- 香川 一 1996「焼土坑に関する再検証」『論集しのぶ考古—目黒吉明先生頌寿記念—』論集しのぶ考古刊行会
- 金田善敬 1996「古墳時代後期における鍛冶集団の動向—大和地方を中心に—」『考古学研究』第43巻第2号 考古学研究会
- 北野 重 1989「韓鍛の卓祖はどこに移住していたか」『韓式系土器研究』II 韓式系土器研究会
- 黒田慶一 1988「熊凝考—難波郡と難波宮下層遺跡群—」『高井悌三郎先生喜寿記念論集 歴史学と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念事業会
- 潮見 浩 1986「鉄・鉄器の生産」『岩波講座 日本考古学』3 生産と流通 岩波書店
- 積山 洋 1994「上町台地の北と南—難波地域における古墳時代の集落変遷—」『大阪市文化財論集』(財)大阪市文化財協会
- 野島 永 1997「弥生・古墳時代の鉄器生産の一様相」『たたら研究』第38号 たたら研究会
- 花田勝広 1996「倭政権と鉄器生産—兵庫県を中心に—」『(財)のじぎく文化財保護研究財団 研究紀要—村川行弘先生古稀記念特輯—』創刊号 (財)のじぎく文化財保護研究財団
- 花田勝広 1996「吉備政権と鍛冶工房—古墳時代を中心に—」『考古学研究』第43巻第1号 考古学研究会
- 古瀬清秀 1991「鉄と鉄器生産」『古墳時代の研究』5 雄山閣
- 松井和幸 2001『日本古代の鉄文化』雄山閣
- 村上恭通 1993「古墳時代の鉄器生産」『考古学ジャーナル』No.366 ニューサイエンス社
- 村上恭通 1998『倭人と鉄の考古学』青木書店
- 吉野滋夫 1996「所謂木炭焼成遺構について」『論集しのぶ考古—目黒吉明先生頌寿記念—』論集しのぶ考古刊行会

II 3 A・5 B調査区出土の子持ち勾玉について

新海正博

平成4年度に調査をおこなった3 A調査区から2点、平成7年度に調査を行った5 B調査区から1点の子持ち勾玉が出土している。この子持ち勾玉は調査区中央部を東西に貫流する谷の埋土を掘削中に須恵器や土師器とともに出土したものである。包含層の掘削作業中であつたために出土状況などは確認できなかつた。

Iは残存長7.9cm、残存幅(最大)4.1cm、厚さ(最大)2.2cmである。頭部を欠損するが本体はやや均整を欠くC字形をなすと思われる。下端部はやや丸みを持ち四角くおさめている。石材は滑石で、多少風化が進んでいる。断面形は扁平な長方形に近い。本体には幅1~2mm程度の細い溝状の工具痕が残る。

子には欠損しているものが多いが、小勾玉状のものと方形の突起状になったものとがみられる。腹面の子は突起状になっており、長さ2.2cm・幅1.4cm・厚さ1.3cmを測る。本体との接点にはわずかな段がみられる。背面には2個の子がかろうじて確認できる。これらはそれぞれ小勾玉状になる可能性があり、最低2個以上の小勾玉状をなす子があつたと考えられる。A側面には3個の突起状の子が確認でき、B側面には1個の小勾玉状をなす子と2個の突起状の子がある。B側面のありかたからみればA側面の上部の子は小勾玉状をなす子の一部かもしれない。

頭部貫通孔の残りは良くないが径は0.5cmと思われる。片面からの穿孔である。

IIは残存長7.3cm、幅(最大)2.1cm、厚さ1.7cmを測る。両端部を欠損しており、全体の形状は不明である。石材は滑石であり、多少風化が進んでいる。断面形は扁平な長方形である。本体は丁寧に研磨されており工具痕は残っていない。

子は方形の突起状のものばかりである。腹面の子は突起状になっており、長さ2cm、幅1.5cm、厚さ1.3cmである。本体との接点には段を持たない。背面には本体に刻みを入れ方形の突起状の子を4個作りだしている。A・B側面には4個の方形の突起状の子がある。それぞれ独立して作りだされている。

頭部貫通孔は径0.5cmを測り、両側から穿孔されている。

IIIは残存長8.3cm・幅5.3cm・厚さ1.8cmを測る。頭部貫通孔より上部が欠損するが本体は縦長のC字形をなす。下端部は先すぼまりに作られている。石材は滑石で、多少風化が進んでいる。本体には細かな擦痕が多くみられる。

子はA側面のものが幅1cm程度のノミ状工具で全て削り取られている。B側面のものは長さ4.5cm・幅0.7

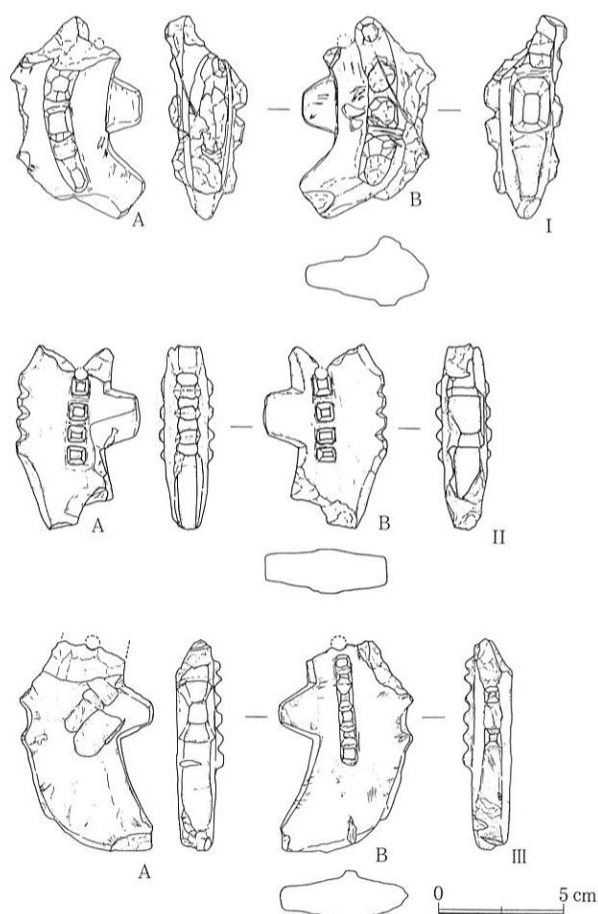


図4-II-1 3 A・5 B地区出土子持ち勾玉

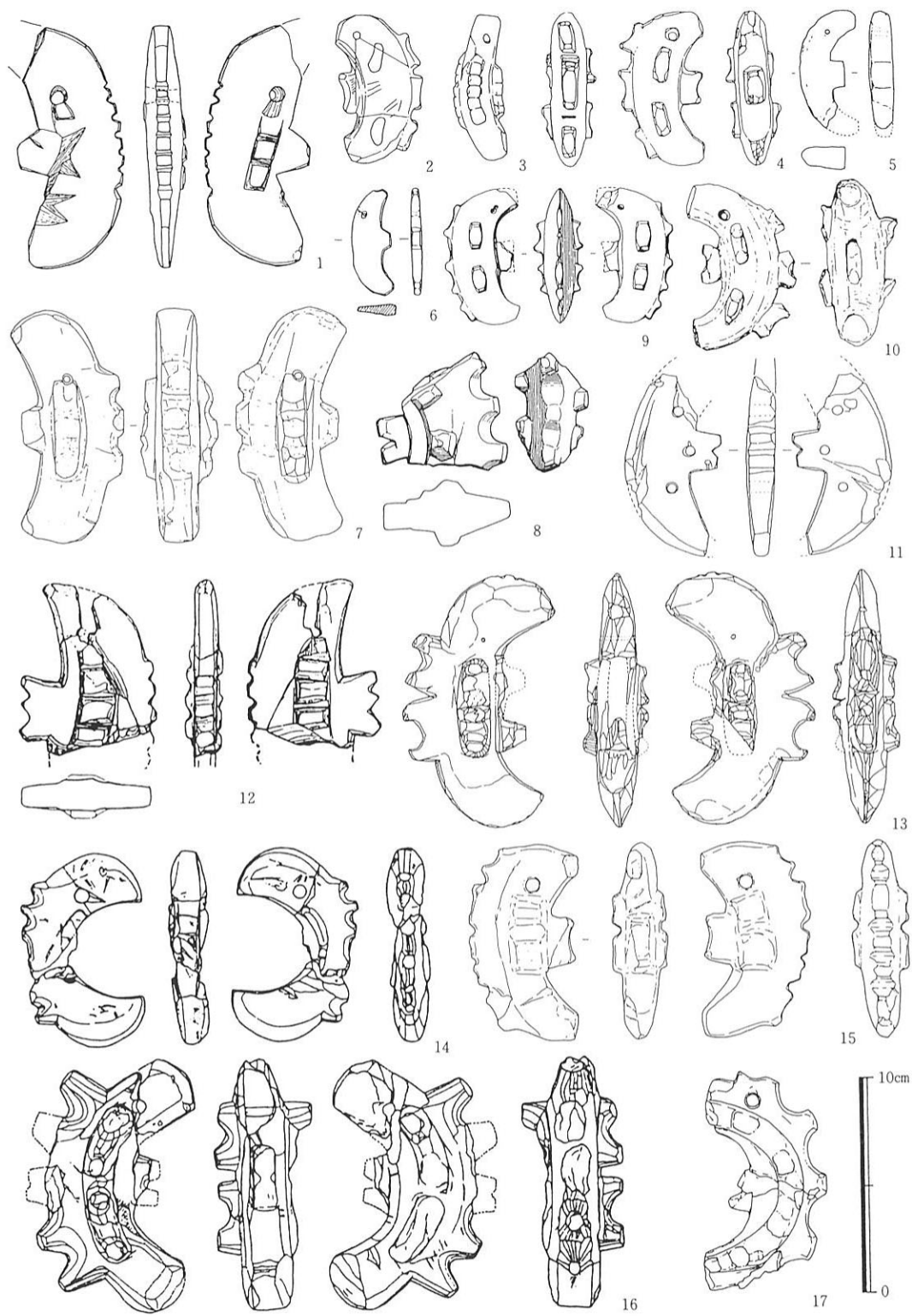


図4-II-2 大阪府出土子持ち勾玉(1)

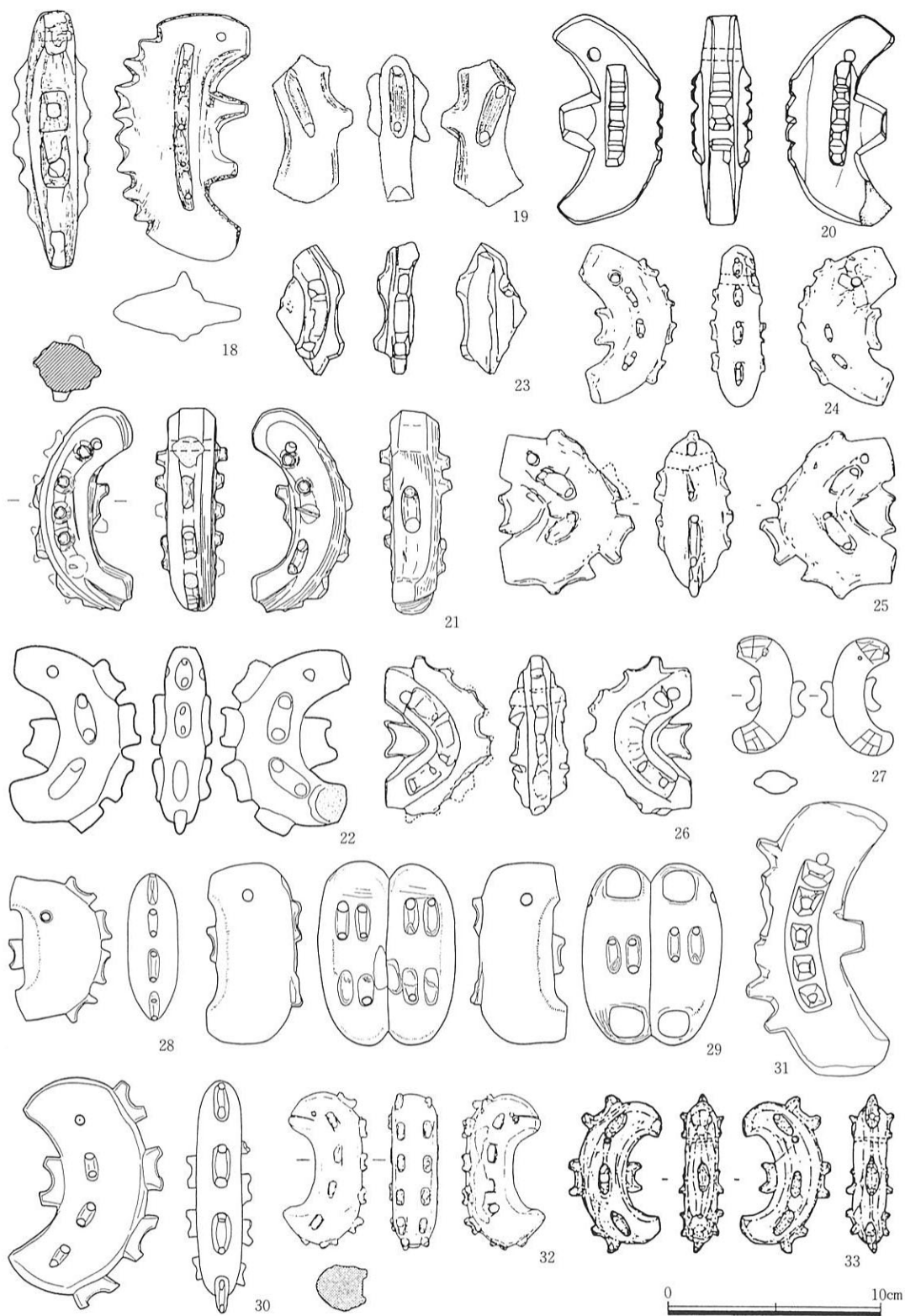


図4 - II - 3 大阪府出土子持ち勾玉(2)

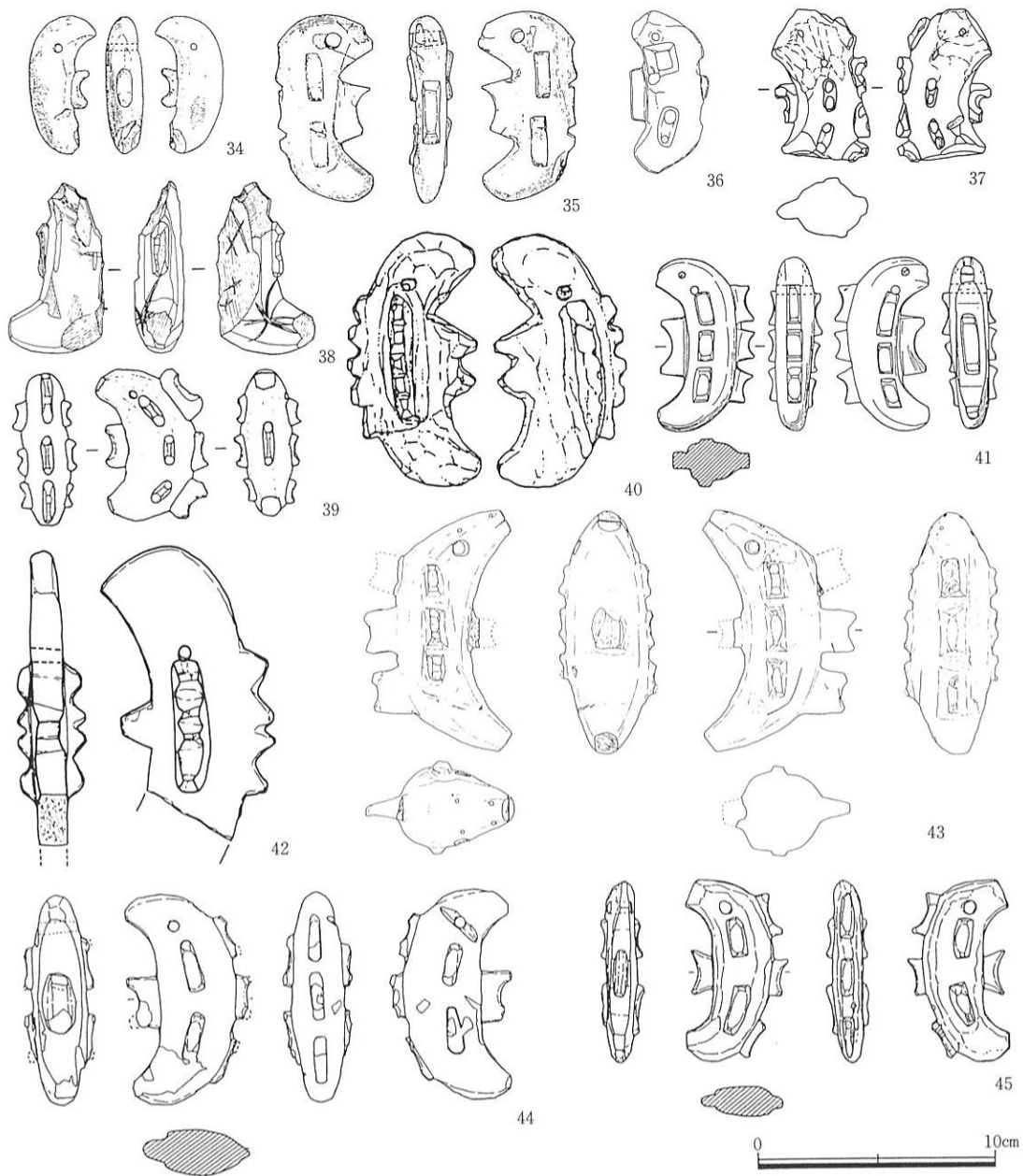


図4-II-4 大阪府出土子持ち勾玉(3)

cmを測る細長い台を削り残し、その台を6分割して子を作り出している。腹面の子は突起状になっており、長さ2.1cm・幅1.5cm・厚さ1.4cmを測る。背面には背の低い山状の子が2つ削りだされている。

頭部貫通孔はB面側からの片側穿孔であり、径0.6cmを測る。

子持ち勾玉の所属時期は大平茂氏の型式編年(大平1989)に依拠して考えてみたい。大平氏は勾玉本体(親勾玉)の変化を重視し、本体断面の比率と本体の反りの比率で分類している。3A調査区出土の2例はIが断面の比率0.63・反りの比率0.56、IIが断面の比率0.56・反りの比率0.41?となる。この数値から導き出される時期はIが6世紀前葉(大平III型式)に、IIが6世紀中葉(大平IV-2型式)に比定できる。5調査区出土のIIIは断面の比率0.67・反りの比率0.48である。この数値から得られる時期は6世紀前葉(大平III型式)である。この結果は谷出土の土器の年代観と矛盾せず、妥当ではなかろうか。大阪府からは32遺跡47点以上(1994年6月現在)の出土が知られ、堺市と東大阪市を中心とした地域に

分布の中心がある。資料の多くが包含層出土であり所属時期や出土状況を明確にできないうらみがある。全国的に資料を集成した大平氏によれば時期決定を行なえる資料は39例存在し、そのうち10例（25%）が水と関係する溝や井戸などからの出土となっている。この10例の時期は5世紀後半から7世紀までであり、祭祀の時期的な傾向は窺えず普遍的な在り方である。この事実は子持ち勾玉を使用する祭祀形態の一つの姿を示すものと捉えられる。大阪府の出土例（両調査区出土例以外に）にも5例の水に関する遺構出土のものがみられる。こうした祭祀形態の存在から類推すると両調査区出土の3例も水に関する祭祀に伴っていた可能性が認められる。

3点の子持ち勾玉は2 B 調査区で検出された谷1での祭祀関連土器群とともに上町台地上での古墳時代集落の祭祀形態を考える上で重要な資料である。ひいては古墳時代集落（集団）の性格を考える上でも無視することができないものと言える。

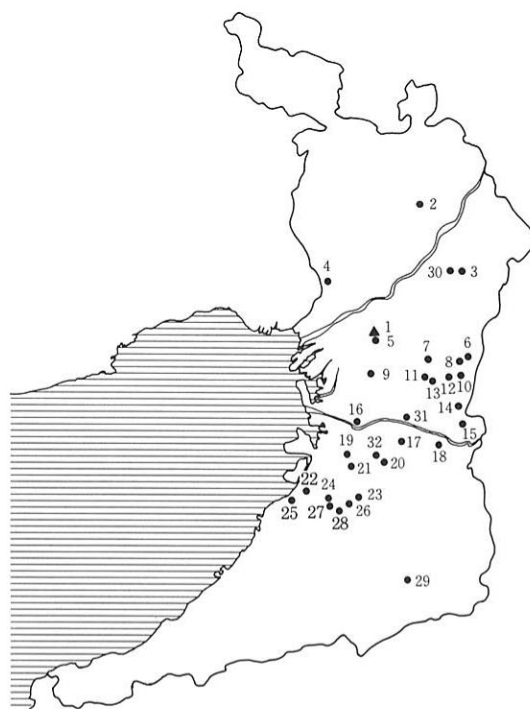


図4-II-5 子持ち勾玉出土遺跡

参考文献

- 1) 茨木市教育委員会 『茨木市郡遺跡発掘調査概報—上穂積・畑田地区—』 1978
- 2) 瀬川芳則 編者 『寝屋川市文化財図録Ⅰ』 寝屋川市教育委員会 1984
- 3) 豊中市教育委員会 『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要 1984年度』 1985
- 4) 中尾芳治 「難波宮造営前の遺跡調査報告」『難波宮址の研究』5-2 1965
- 5) 大阪市文化財協会 『難波宮址の研究』第7 1981
- 6) 大阪市文化財協会 『難波宮址の研究』第9 1992
- 7) 東大阪市教育委員会 『東大阪市文化財調査報告書第1冊 山畑古墳群1』 1973
- 8) 東大阪市文化財協会 「瓜生堂遺跡の調査」『財東大阪市文化財協会概報集1988年度』 1989
- 9) 東大阪市文化財協会 「瓜生堂遺跡の調査—ガソリンスタンド建設に伴う調査—」『財東大阪市文化財協会概報集1988年度』 1989
- 10) 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 「東谷邸建替工事に伴う桑津遺跡発掘調査（KW92-14）略報」『平成4年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 11) 大阪文化財センター 『友井東（その1）近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』 1984
- 12) 大阪府教育委員会 『池島遺跡発掘調査概要』Ⅰ 1986
大阪文化財センター 『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅻ-90-1・90-4 調査区（1990～1992年度）の調査概要』 1995
- 13) 大阪文化財センター 『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅳ-90-1 調査区1990年度の調査略報—』 1991
- 14) 大阪文化財センター 『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅷ-90-1 調査区1991年度の調査略報—』 1992
大阪文化財センター 『池島・福万寺遺跡発掘調査概要Ⅻ-90-1・90-4 調査区（1990～1992年度）の調査概要』 1995
- 15) 金谷克巳 「河内八尾発見の子持ち勾玉」『若木考古』62 1962
- 16) 佐野大和 「子持ち勾玉」『神道考古学講座』 1981

- 17) 瓜生堂遺跡調査会 『恩智遺跡』 1980 他
- 18) 北野重 『大県遺跡—堅下小学校屋内運動場に伴う—1985年度』 柏原市教育委員会 1988
- 19) 積山洋 「大阪市山之内遺跡出土の子持勾玉をめぐって」 『古代文化』 37巻 1985
- 20) 末永雅雄、森浩一 『河内黒姫山古墳の研究』 大阪府教育委員会 1953 他
- 21) 阪田育功 「第15調査区」 『土師の里遺跡発掘調査概報Ⅱ』 大阪府教育委員会 1980
- 22) 古代学研究会 『堺市百舌鳥赤畑町カトノボ山古墳の研究』 1953
- 23) 森浩一 「子持ち勾玉の研究」 『古代学研究』 第1号 古代学研究会 1949
- 24) 大阪府教育委員会・大阪文化財センター 『松原市観音寺遺跡第2次発掘調査概要—近畿自動車道と歌山線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』 1986
大阪府文化財調査研究センター 『大阪府松原市所在 観音寺遺跡—近畿自動車道松原那智勝浦線建設に伴う発掘調査報告書—』 1998
- 25) 堺市教育委員会 『堺市文化財調査概要報告』 27 1992
- 26) 奥田豊 他 『土師遺跡50年度発掘調査概報』 堺市教育委員会 1976
- 27) 三宅正浩 「第Ⅱ地区の調査」 『大園遺跡発掘調査概要Ⅳ』 大阪府教育委員会 1981
- 28) 京都大学文学部 『京都大学京都大学文学部博物館考古資料目録第2部日本歴史時代』 1968
- 29) 大阪文化財センター 『西浦橋遺跡現地説明会資料(Ⅱ)』 1983
- 30) 大阪府教育委員会 『大阪府文化財調査概要1968 七ノ坪遺跡発掘調査概報』 1969
- 31) 中村浩 他 『陶邑・深田』 大阪府教育委員会 1973
- 32) 服部文章 「山田北遺跡の調査」 『第21回大阪府下埋蔵文化財研究会資料』 1990
- 33) 中村浩 編者 『陶邑Ⅱ』 大阪府教育委員会 1978
- 34) 河内長野市教育委員会 『河内長野市文化財調査報告書第24集 河内長野市埋蔵文化財調査報告9』 1993
- 35) 寝屋川市教育委員会 『長保寺遺跡現地説明会資料』 1992
- 36) 京嶋覚 「長原遺跡出土の皮袋形瓶・子持勾玉・土馬」 『葦火』 3号 1986
- 37) 三木弘 「大阪府の概要」 『第2回 東日本埋蔵文化財研究会 古墳時代の祭祀 祭祀関係の遺跡と遺物』 第3分冊 西日本編 近畿・山陽・山陰・九州・発表要旨・文献目録・四国地方 東日本埋蔵文化財研究会 1993
- 38) 大平茂 「子持ち勾玉年代考」 『古文化談叢』 第21集 九州古文化研究会 1989
- 39) 佐々木幹雄 「子持ち勾玉私考」 『古代探叢Ⅱ』 早稲田大学出版部 1985
- 40) 国立歴史民族博物館編 「祭祀関係遺物出土地地名表」 『共同研究「古代の祭祀と信仰」附篇』 『国立歴史民族博物館研究報告第7集』 1985

表4-Ⅱ-1 大阪府下出土子持ち勾玉一覧

地図	遺跡名	遺物	所在地	出土状況	全長	幅	厚さ	子の数量	時期	備考	文献
1	大坂城跡	I	大阪市	自然流路	7.9	4.1	2.7	背3個、側面4個			
		II			7.3	4.9	1.7	背4個、側面4個			
		III			9.1	5.3	1.7	背3個、側面6個			
2	郡遺跡	1	茨木市	包含層	11.5	5.2	2.2	背6個、側面3個?	6c初頭~中葉		1
3	太秦古墳群	2	寝屋川市		7	2.6	1.2	背3個、側面2個		*	2
		3			7	1.7	1.2	背7個、側面5個		*	2
4	島田遺跡	4	豊中市	落ち込み	7.3	4	2.4	背3個、側面2個×2	6c?		3
5	難波宮跡	5	大阪市	住居址	6	2	1.4	背0個、側面0個	6c末葉~7c前葉		4
		6		包含層	5.1	1.9	0.6	背0個、側面0個			5
		7		包含層	11.2	5	3.8	背3個、側面3個×2			6
		8		東大阪市	古墳	5.6	3.4	3.1	背3個以上、側面2個以上	6c末葉~7c初頭	
7	瓜生堂遺跡	9	東大阪市	包含層	6.5	3.1	2.3	背3個、側面2×2個	(奈良~平安)		8
8	えの木塚古墳	10	東大阪市	古墳	7.9	4.3	3.6	背3個、側面2個	5c前半		9
9	桑津遺跡	11	大阪市	包含層	8.6	4.6	1.4	背0個、側面0個			10
10	大賀世古墳	12	東大阪市		12	6.3	1.8	背3個以上、側面4個以上			9
11	友井東遺跡	13	東大阪市	自然河川	12.1	5.8	2.9	背2個、側面2個×2	6c後葉		11
12	池島福万寺遺跡	14	八尾市		9.2	2.7	1.9	背6個以上、側面?	6c前半		12
		15		井戸	9.2	4.8	2.5	背5個、側面2個	6c初頭		13
		16			11.8	4.8	3.6	背3個、側面4個	6c前半		12
		17		包含層	10.4	4.5	3.9	背4個以上、側面4個以上		*	14
13	萱振遺跡	18	八尾市	包含層	12.3	4.7	3.2	背8個、側面5個			15、16
14	恩智遺跡	19	八尾市	包含層	7.2	3.2	2.8	背1個以上、側面1個以上			17、23
15	大泉遺跡	20	柏原市	包含層	10	4.8	2.8	背4個、側面5個	7c		18
16	山之内遺跡	21	大阪市		9.6	4.9	3.1	背5個、側面5個	5c後半~6c前半		19
17	黒姫山古墳	22	美原町		8.2	2.7	2.1	背4個、側面2個			20
18	土師の里遺跡	23	藤井寺市	包含層	6	3.3	2	背2個以上、側面2個以上	5c後半~末		21
		24		包含層	7.7	3.3	2.7	背4個、側面3個			21
		25		包含層	7	6.3	3.7	背4個、側面2個			21
		26		包含層	6.6	5	2.7	背5個、側面3個?			21
19	カトンボ山古墳	27	堺市	主体部	5.5	2.1	1	背1個、側面0個	5c中葉		22、23
		28		主体部	6.8	3.7	2.4	背4個、側面0個			22、23
		29		主体部	8.7	3.7	3.2	背2個×2×2、側面0個			22、23
		30		主体部	10.5	4.2	2.5	背4個、側面3個&4個			22、23
20	観音寺遺跡	31	松原市	土坑44	13.5	4.6	?	背7個以上?、側面5個×2		*	24
21	土師遺跡	32	堺市	土坑	7	2.3	2.3	背7個×2、側面4×2	6c		25
		33		住居址	6.7	3.3	2.1	背3個、側面3個	5c後半		26
22	大園遺跡	34	高石市	包含層	6.1	2.7	1.6	背0個、側面0個	5c末~6c中葉		27
		35			8.4	4	2	背3個、側面2個			27
23	檜葉神社跡	36	堺市		6.8	3.7	1.8	背3個、側面2個		*	28
24	西浦橋遺跡	37			6.6	3.9	2.5	背4個以上、側面3個以上			29
25	七ノ坪遺跡	38	泉大津市	包含層	7.2	2.7	2.1	子の数不明			30
26	深田橋遺跡	39	堺市	溝	6.6	4.4	2.4	背3個、側面3個×2	5c後半		31
27	山田北遺跡	40	堺市	土坑?	11.2	6	?	背5個、側面4個	6c初頭		32
28	野々井遺跡	41	堺市	9号墳周溝	7.4	4	2.4	背3個、側面3個×2	5c中葉		33
29	小塩遺跡	42	河内長野市	包含層	12.5	6.5	1.2	背4個、側面4個	6c		34
30	長保寺遺跡	43	寝屋川市	包含層	10.2	3.8	3.8	背3個、側面6個	5c~6c?		35
31	長原遺跡	44	大阪市	井戸近く	9	5.2	3	背3個、側面2個×2	6c前葉~中葉		36
		45		溝	7.8	4.2	1.8	背3個、側面2個			36
32	丹比柴籬宮遺跡		松原市								37

*: 写真よりトレース

III 遺跡立地からみた古代の上町台地—台地北半部を中心として—

小林和美

1. はじめに

大阪湾に沿って南北にのびる上町台地は、低湿な大阪平野を背後に控え、古代より難波宮など政治・文化の拠点として発展してきた。また畿内において海路の起点かつ終点であるため、玄関口として外交・経済面上の要地でもあった。このように上町台地のもつ史的重要性は、その地理的特質に起因すると思われる。

今回、1990～1996年にかけて実施された大阪府庁舎周辺整備計画に伴う発掘調査の正報告書作成において、昭和36年測図の大阪市地形図(1:3000)を入手し、1 m間隔の等高線図を作成することができた。その図によれば、わずか東西幅2 kmにも満たない台地に大小様々な開析谷が入り込む起伏に富んだ様相がうかがえ、必ずしも安定した土地が広がっていたとは理解しがたい。

以下、起伏に富んだ限られた空間において、どのような場で人々の暮らしが展開し、どのような場が歴史の舞台として選択されたのか発掘調査件数も多く、古代の難波地域にあたる台地北半部を中心に検討をおこなう。

2. 上町台地の地形

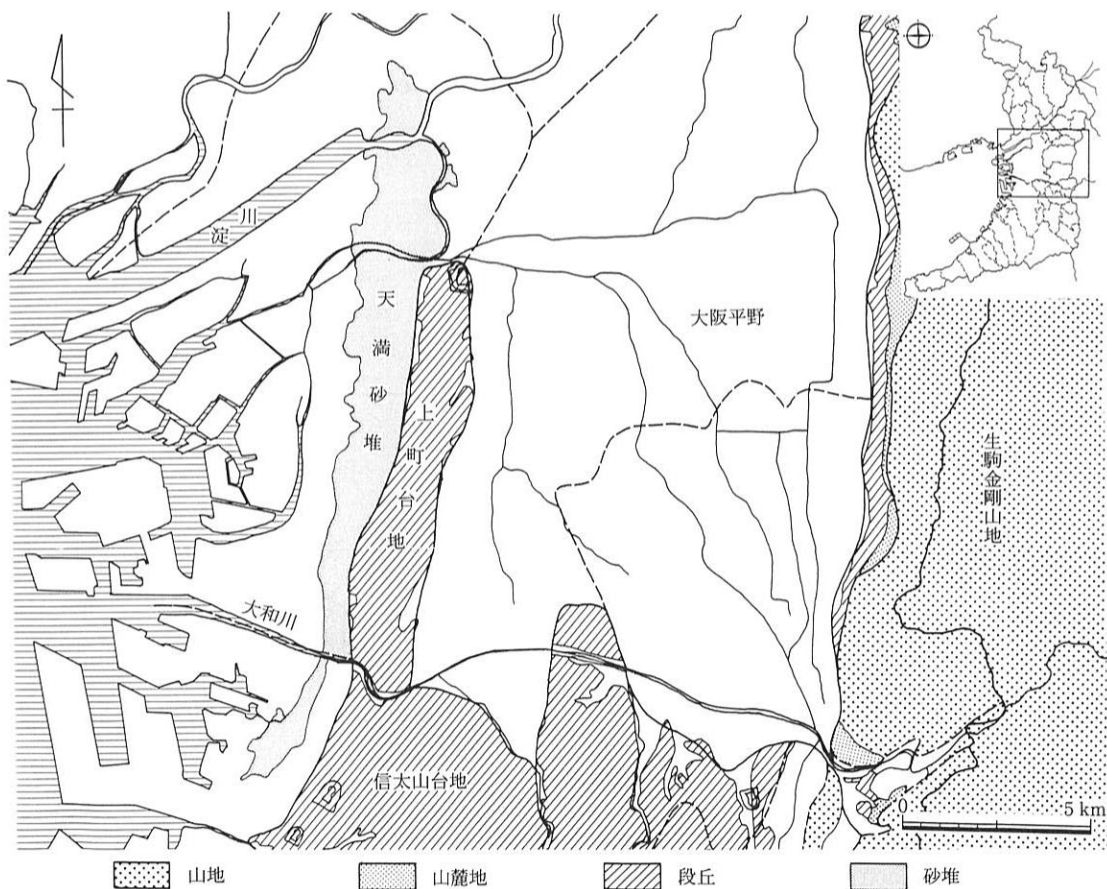


図4-III-1 上町台地とその周辺

上町台地は南北長約20km、東西幅2kmと南北に細長い段丘であり、東には淀川と旧大和川が形成した大阪平野が広がり、西には沿岸流が形成した天満砂堆が上町台地に沿って北へのびる。標高は10~25mをはかり、北端に近い法円坂付近が標高約25mと最も高く、しだいに南へと下がる。また法円坂付近を起点とする分水界は、地盤の隆起運動にともなって南にいくにしたがい西へ寄り、台地全体としては東に傾く傾動地塊となっている。そのため台地の西縁では、比高10m程の急斜面となっており、愛染坂や口縄坂などの急坂が続く。一方、東側は北半部では緩斜面に細工谷など大規模な開析谷が発達しているが、南半部では非常に緩やかな傾斜でもって平野部へ移行する。

昭和36年等高線図では、すでに市街地化していたが、高度経済成長の大規模開発が行われる以前の上町台地を詳細に捉えることができる。従来、オリジナルに近い地形を概観するために明治22年作成の仮製図が利用されることが多かったが、仮製図では台地北半部が市街地化により等高線が記載されていないため、この図により台地北半部の様相を把握することが可能である。だが改めて言うまでもなく、上町台地は古代より難波宮造営や豊臣秀吉の大坂城下町の建設などによって、その都度地形が改変されており、古代の上町台地と必ずしも等しいとは言えない。実際、台地北西部付近にみられる方位ののった直線状の等高線は雛壇状に造成された城下町の痕跡や近世以降の瓦土取り跡の可能性が高く、人工改変の著しさがうかがえる。しかし、昭和36年等高線図も上町台地の特質を把握するうえで一定の有効性をもつものと考えられる。その一拠として、上町台地北端の発掘調査において検出された地山の傾斜方向とレベルをみてみたい。まず地山の傾斜方向をみると、現在の傾斜方向とはほぼ一致していることがわかる。また地山までの深さの分布をみれば、地山から3m以上堆積しているのは谷の縁辺など傾斜変換線上に集中していることがうかがえる。おそらく狭い台地上で少しでも平坦面を確保するため谷の縁辺から埋めていった可能性が高い。すなわち、かつての景観としては谷の規模はさらに大きいものと推定



図4-III-2 地山の傾斜と深度

され、この点を考慮すれば昭和36年等高線図の利用も無意味なことではなからう。

3. 遺跡の変遷

(1) 縄文・弥生時代

上町台地において人々の生活が始まるのは、現在のところ縄文時代に入ってからである。早期から前期の土器が、勝山遺跡²⁾(図4-III-3～5の地点、以下同じ)・宰相山遺跡³⁾・森の宮遺跡^{4・5)}で確認され、晩期には難波宮跡でも土器が出土している⁶⁾。

縄文時代から弥生時代にかけて、宰相山遺跡では長原式土器と弥生前期の木葉文をもつ土器が共伴し、森の宮遺跡でも前期の土器が確認されていることから、台地東縁部では縄文時代から継続して集落が営まれ、弥生時代に入っても立地に大きな変化はない。一方、現在の船場地域にあたる台地西側の低地部では、中期以降単発的ながら遺物が確認され、集落が点在していた可能性が高くなっている(松尾1993)。しかし、台地上では中期から後期の遺物がわずかながら阿倍野筋遺跡⁷⁾や大坂城三の丸跡下層⁸⁾で確認されているにすぎず、顕著な集落の存在は認めがたい状況である。

(2) 古墳時代

古墳時代に入っても弥生時

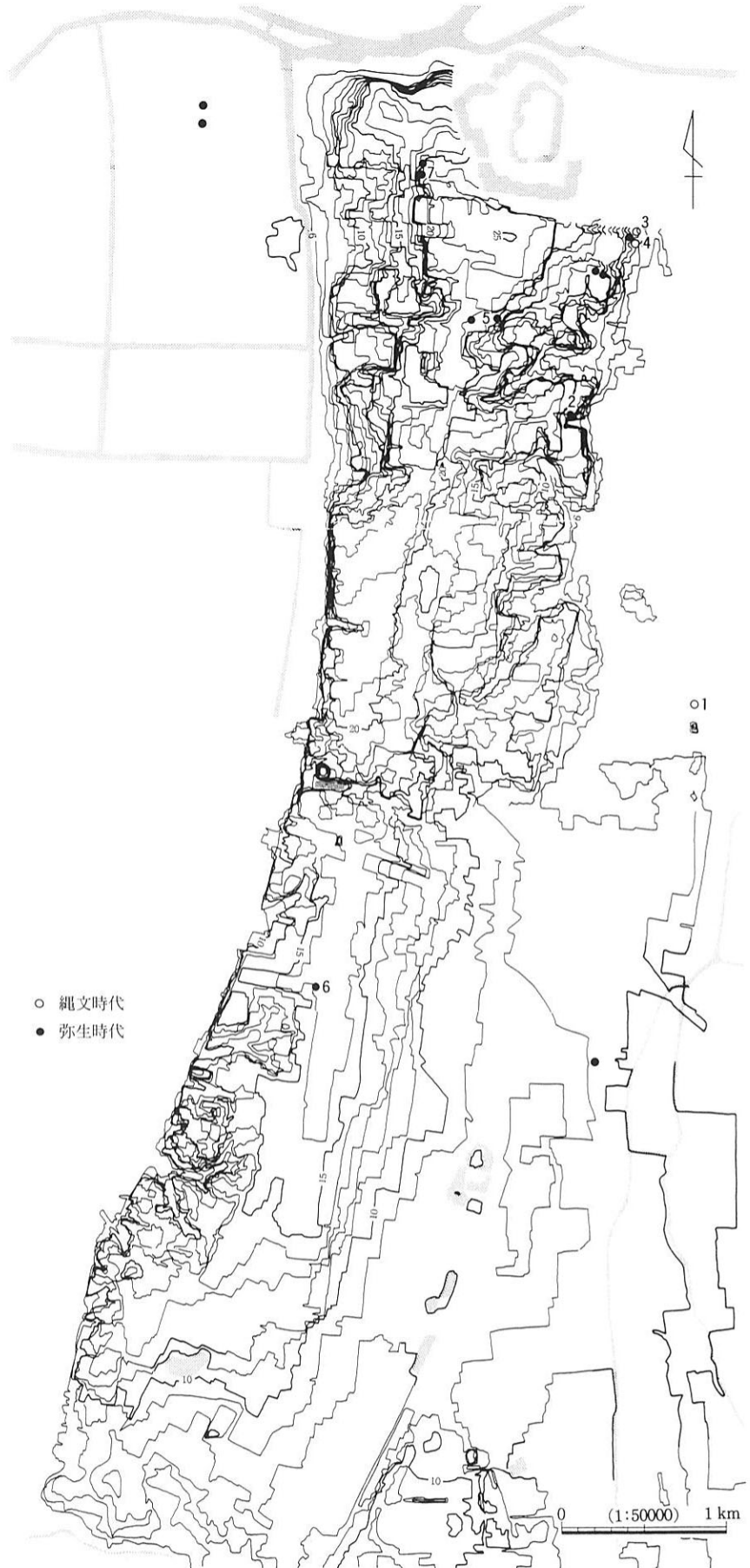


図4-III-3 縄文・弥生時代の遺物出土地点

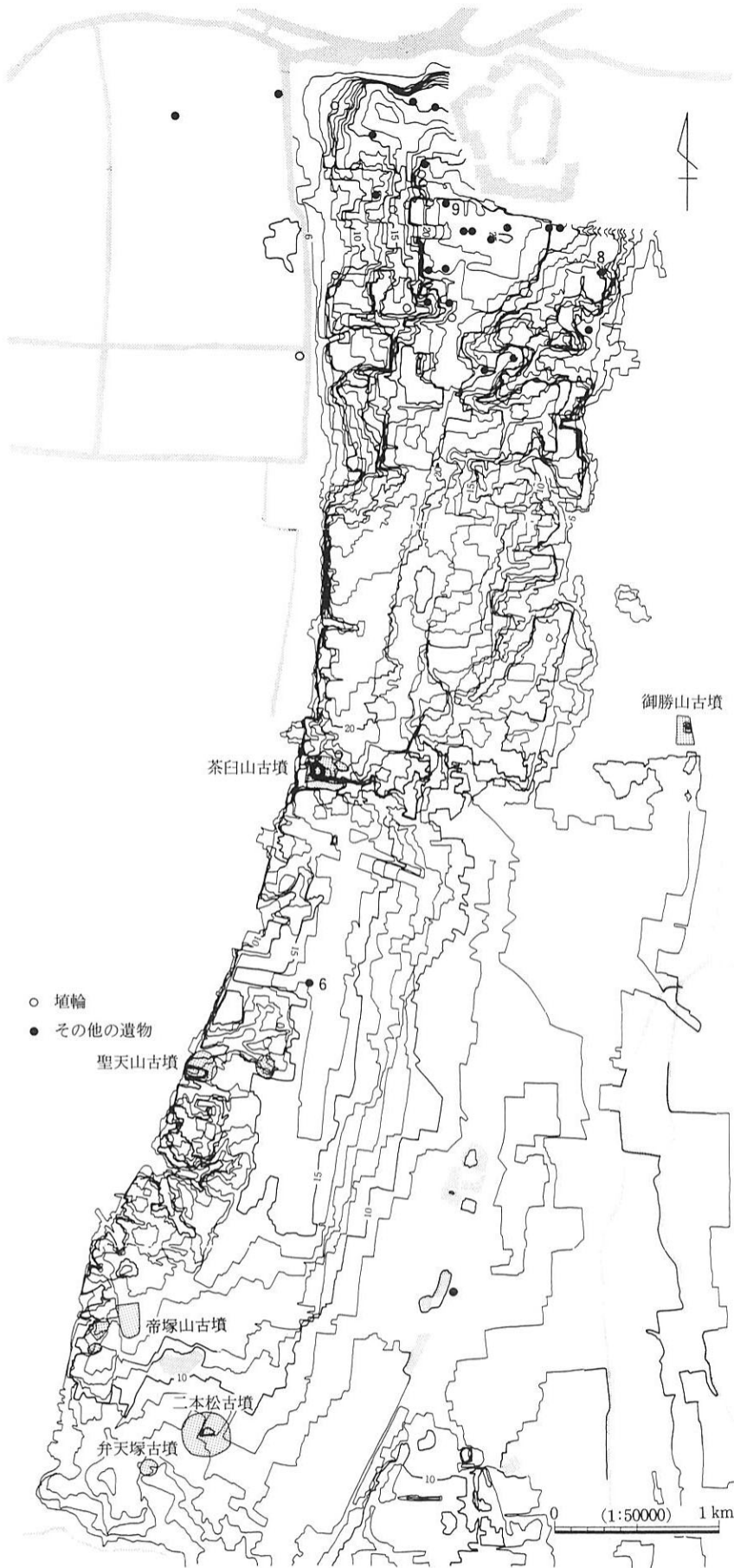


図4-III-4 古墳時代の遺物出土地点

代と大きな変化は認められない。森ノ宮遺跡では古墳時代初頭の一括資料が出土し、集落は継続していたと思われる⁹⁾。一方、この時期明瞭に集落として認められるものに阿倍野筋遺跡がある⁷⁾。古墳時代初頭の掘立柱建物や竪穴住居などの遺構だけでなく、土錘や飯蛸壺など漁労具が多数出土し、漁労を生業の主とした集落が台地上に形成されていたことが明らかになっている。しかし、阿倍野筋遺跡も古墳時代中期には廃絶し、変わって台地北端では標高20m以上の平坦面に古墳時代中期以降の遺物が急増する。この遺跡数の増加は、おそらく現在の大川と考えられる難波の堀江の開削などによって当地域が畿内の玄関口としての役割を果たし始めたからであろう。そしてその中心部には、倉庫群と思われる16棟以上の大型掘立柱建物が整然と正方位に並び、難波の繁栄を如実に物語っている¹⁰⁾。これ以後、難波宮下層遺跡では難波宮が造営されるまで、遺構が途切れることなく検出されており、台地北端の頂上部に難波宮造営につながる下地が形成されつつあったと思われる。

また集落だけでなく古墳時代中期以降、台地の西縁部に古墳が築造される。茶臼山古墳は古墳であるかどうか疑問

が提示されているが¹¹⁾、現在も墳丘が残る聖天山古墳、帝塚山古墳はいずれも比高約10mの急崖に沿うように立地している。これら以外にもすでに消滅してしまった古墳の存在が字名などから推定されているが、その多くが住吉区などに集中し、台地の西縁部に古墳群の存在が推定されている(上田1988)。台地北端でも標高15~20mの西側斜面を中心に5世紀以降の埴輪片が出土しており、頂上部付近で古墳が存在していた可能性が高い。

(3) 飛鳥・奈良時代

7世紀以降、上町台地上では難波宮造営に象徴されるように、政治や経済の拠点としての性格を強め、台地上の平坦面に遺構・遺物の出土地点が増加する。その中心となる難波宮は台地北端の頂上部において前期・後期難波宮大極殿や官衙域が検出されたほか、宮域の北西では谷地形を利用した大規模な石組み溝と池状の水溜が検出されている¹²⁾。

京城に関してはその存在も含めて不明な点が多いが、難波宮周辺では台地の尾根筋上の平坦部に遺構・遺物が集中している。四天王寺の北側では「米家」と書かれた8世紀中頃の墨書土器が井戸から出土しており、文献に記された

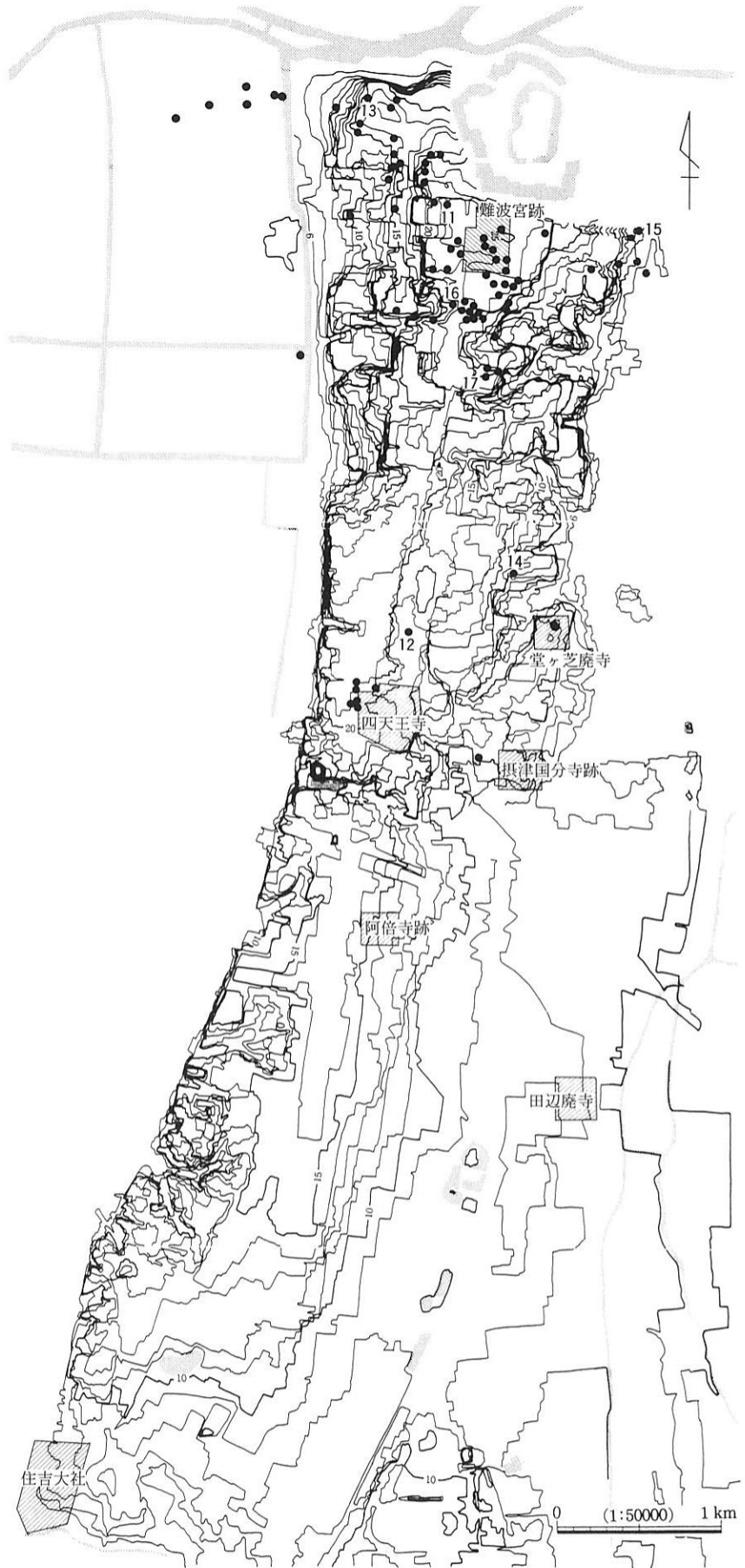


図4-III-5 飛鳥・奈良時代の遺物出土地点

「難波市」との関連が注目されている¹³⁾。また従来京域外と考えられてきた大川に面した台地北端部では、奈良時代の建物群や井戸などの遺構が集中しており、難波宮の玄関口としての施設が建ち並んでいた可能性が高い¹⁴⁾。

一方台地の尾根筋だけでなく、台地東縁の開析谷の斜面上に立地する細工谷遺跡では、谷の中心部に流れ込む溝から和同開珎の枝銭や埴塼などの金属加工関連遺物が多数出土している¹⁵⁾。森の宮遺跡においても7世紀後半の土器が出土する溝から斎串や舟形木製品が出土し、水辺の祭祀が行われていたと思われる¹⁶⁾。

また古代寺院も今に法灯を伝える四天王寺をはじめ、台地中央部に「百済寺」と推定される堂ヶ芝廃寺や摂津国分寺などが伽藍を構えていた。細工谷遺跡でも「百済尼」や「尼寺」などと記された墨書土器と尼寺の存在を示す木簡や多数の瓦が出土していることから、遺跡北側の台地上に「百済尼寺」が建立されていたと推定され、台地中央部の開析谷周辺に寺院が密集していたことがうかがえる。

4. まとめ

最後にこれまでみてきた遺跡の立地を限られた空間における地形利用の視点からまとめておきたい。

縄文・弥生時代を通じて森の宮遺跡を除けば、遺構・遺物も乏しくいずれも単発的な集落であったと思われるが、その分布は東縁部に偏っている。森の宮遺跡や宰相山遺跡では、河内湾から河内湖への変遷が確認されていることから、縄文海進時の汀線が台地の縁辺部にまで迫っていたことがうかがえ、外海より穏やかな河内湾・河内湖をのぞむ開析谷の縁辺部でわずかに集落が形成されていたにすぎないと考えられる。

しかし、古墳時代中期以降になると台地や開析谷の縁辺だけでなく、台地の尾根筋上にあたる標高15～20m付近の平坦面に遺構・遺物が急増する。おそらく先述した難波の堀江の開削に伴い、大型掘立柱建物群のような大規模な公的施設の造営のため、頂上部の平坦面の利用が始まるのであろう。細工谷遺跡で実施された花粉分析では、森林状態であった台地北半部が中期中葉頃に急激に開発されたと推定されており、遺跡数の増加とも一致する(金原1999)。

一方、上町台地上に築かれた古墳は御勝山古墳以外は西縁の段丘崖に沿って立地しており、段丘崖の比高が5m近くあることから、おそらく海上からの景観を意識したものと思われる。さらに視野を南に広げると、堺市百舌鳥古墳群や岬町淡輪古墳群も段丘崖に沿って立地しており、大阪湾沿岸における古墳立地と連動していると考えられる。

白雉元年(650)の難波宮造営は、上町台地において象徴的なできごとであるが、その立地をみると台地頂上部の平坦面に位置し、その南側には東西から開析谷が入り込んでいる。その結果、あたかも南側の京域とは分断され、宮域だけ独立した空間にあるかのような印象を与える。このように象徴的な場を利用するのは難波宮だけでなく寺院の立地も同様である。堂ヶ芝廃寺、摂津国分寺とも谷の浸食によって岬状に取り残された台地の先端部にあり、東に広がる平野部に向けて荘厳な伽藍をさらに際立たせる立地といえる。細工谷遺跡の北側に推定される「百済尼寺」も堂ヶ芝廃寺の対岸にあたり同様の立地である。また四天王寺は北東と南東方向にのびる谷の谷頭部に接し、尾根筋上の安定した平坦面に広大な伽藍を構えており、国家鎮護の寺として東の平野部だけでなく、古墳と同じく西の海上からの景観も意識した立地と考えられる。このように周囲より高く台地の先端にあたる場所では、建物の偉容をアピールする施設が造営され、谷など周囲より低い場所では細工谷遺跡や森の宮遺跡でみられたように手工業

や祭祀の場として利用され、地形を効果的に利用していたことがわかる。

さらに難波宮造営に際し1 m近く盛土を行ったり、方位より地形に規制された建物配置が、7世紀中頃から方位を優先した建物群がみられるなど地形を克服しようとする動きも認められる¹⁸⁾。すなわち、飛鳥・奈良時代の上町台地は、限られた空間において地形を有効に利用するとともに、地形の克服を試みるなど多様な地形利用の結果、古代難波の景観が形成されていたと考えられる。

5. おわりに

上町台地という起伏に富んだ限られた空間において、どのような場が歴史の舞台として選択されたかみてきたが、効果的に地形を利用していたことがわかった。本稿では、台地北半部だけを検討の対象としたが南半部の住吉周辺も検討し、難波と住吉を合わせた上町台地全体の地域性を考察する必要がある今後の課題としたい。

謝辞

執筆の機会を与えていただいた鋤柄俊夫氏には、小稿を成すにあたり示唆的なご意見、ご教示を多数賜りました。末筆ながら記してお礼を申し上げます。

小稿は拙稿1999「遺跡立地からみた古代の上町台地—台地北半部を中心として—」『文化財研究』第16号の再録である。

註

- 1) 大阪城本丸の南端ライン以北は、1:10000地形図(平成3年発行)より作成し合成した。また台地中央部の西縁は急傾斜地であるため、等高線は2 m間隔である。
- 2) 松本百合子1991 「はじめまして勝山遺跡です」(『葦火』31)
- 3) 松尾信裕・積山洋1996 「河内湾の岸辺から—天王寺区宰相山遺跡出土の縄文土器—」(『葦火』63)
- 4) 森の宮遺跡発掘調査団1972 『森の宮遺跡第1・2次調査報告』
- 5) 財大阪市文化財協会1996 『森の宮遺跡Ⅰ』
- 6) 財大阪市文化財協会1980 『昭和53年度難波宮跡緊急発掘調査報告』
- 7) 財大阪市文化財協会1999 『阿倍野筋遺跡発掘調査報告』
- 8) 財大阪文化財センター1993 『大坂城跡の発掘調査』3
- 9) 難波宮址顕彰会1978 『森の宮遺跡第3・4次発掘調査報告』
- 10) 財大阪市文化財協会1992 『難波宮址の研究』第九
- 11) 趙哲済1986 「「茶白山古墳」の調査」(『葦火』4)
- 12) 佐藤隆・李陽浩1998 「巨石を用いた前期難波宮の石組み溝」(『葦火』73)
李陽浩・佐藤隆1998 「池状水溜め、水溜め木枠」(『葦火』74)
- 13) 植木久1986 「難波宮および難波京内出土の墨書土器」(『葦火』4)
- 14) 伊藤純1991 「西成郡美努郷の一隅」(『葦火』30)
- 15) 財大阪市文化財協会1999 『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』
- 16) 財大阪市文化財協会1996 『森の宮遺跡Ⅱ』
- 17) 財大阪市文化財協会1991 『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 18) 財大阪市文化財協会1991 『上町台地の遺跡』

引用・参考文献

- 上田宏範1988 「大阪市域の古墳」（『新修大阪市史』第一巻）
金原正子1999 「細工谷遺跡の古環境復元」（『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』）
松尾信裕1993 「船場成立以前—考古学調査の成果から—」（『ヒストリア』139）

IV 聖武朝難波京の構造と平安時代前期の上町台地

鋤柄俊夫

はじめに

大阪平野の中心を南北にのびる上町台地の北端は、古代以来西からの玄関口として政治・経済・文化の様々な面でそれぞれの時代、大きな役割を果たしてきた。これまでその主な研究対象は難波宮と豊臣期の大坂城下町に向けられ、大阪市文化財協会と大阪府教育委員会および大阪府文化財調査研究センター（1995年までは大阪文化財センター）、大手前女子大学によって190カ所を越える地点の発掘調査がおこなわれ、多くの成果が上げられてきている¹⁾。

この中にあって、1995年に大阪府庁の建て替えに伴う調査地点から4基の墓が発見され、そのうちの2基から鏡が見つかった。時期は聖武朝難波宮が営まれていた8世紀と、都が平安京へ移った後の9世紀である。上町台地北端の難波宮宮域外の状況について、その西北端から7世紀の新羅系土器や奈良時代の建物跡が検出されていることはすでに一部で報告されてはいたが、宮内に比べてそれらの検討される機会は多くなかった。これに対し今回検出された墓の存在は、それ以前の宮域外の調査成果とあわせて難波宮の葬地と京の構造に関わる部分で大きな手がかりとなる可能性がある。そこで小論ではこの点に注目して問題を整理し、概要報告書よりその検討を進めていきたいと思う²⁾。

1. 発見された4基の墓

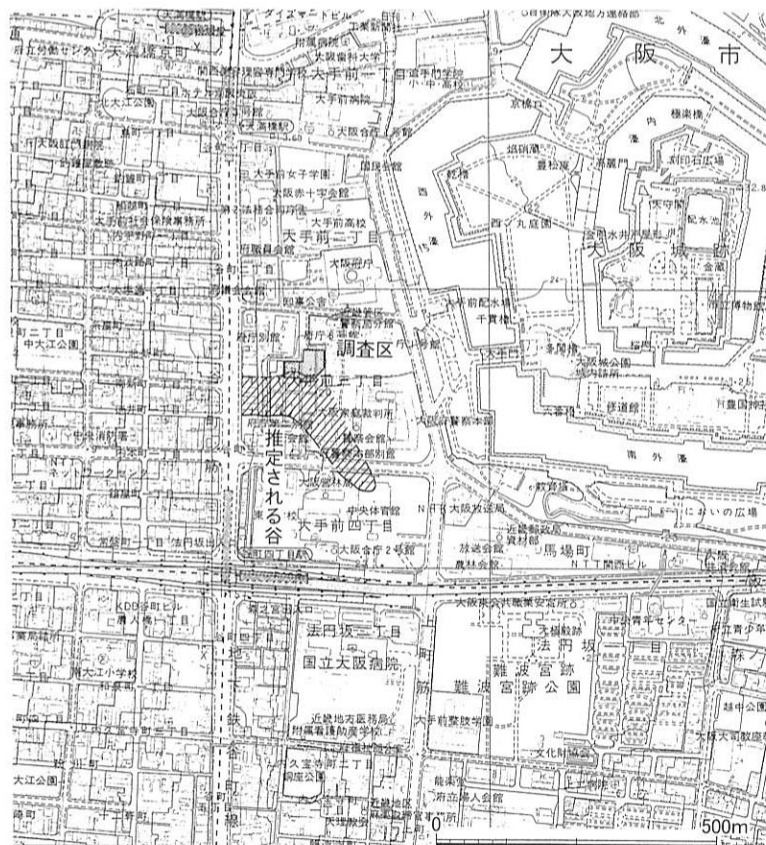


図4-Ⅳ-1 調査地の位置

(1) 墓1

調査区のほぼ中央北よりで、調査区南半を東西にはしる谷の北肩を上がった南斜面に位置する。木棺墓である。

墓壙の平面形は南北を軸とした長方形で、規模は掘り方が長軸2.5m、北辺の幅1.0m、南辺の幅0.9m、木棺部分は、上端で長軸が1.55m、短軸が0.75mである。また木棺が据えられていた範囲の中央やや南と北端部からは、深さが3cmほどの2条の溝が検出され、さらにその四隅からは、5×3cmで深さ5cmほどの長方形の穴が検出された。埋土は材の腐食した痕跡を示す灰色粘土である。なお断面の観察により、木棺部分で材の腐食した灰色粘土の堆積が認められたが、中世以降の削平により、

確認された掘り方の深さは約15cmであった。

遺物は、木棺内から鏡1面、銭貨29枚、水晶製数珠玉1個および、先の灰色粘土に混じり、炭化木の細片が木棺内の南および西方で、また細砂の塊がその四隅に近い位置で検出された。

銭貨と鏡は木棺内北東隅より約50cm南に位置する。当初その位置で30×20cmほどの範囲に板材が認められ、銭貨はその内の北半から、鏡は南半から見つかった。

銭貨は円形の木製容器（立ち上がり1cm以下）中に納まった形で確認された。総計で29枚出土したが、判読できた22枚は全て「隆平永寶」である。検出時にはひと塊になっていたが、観察の結果埋納時には十数枚ずつ重ねて2本の柱にして納められていたものと推定される。

鏡は銭貨の南約10cm以下の位置から、鏡面を下にして検出された。鏡の上面には2枚以上重なった状態の材が認められ、下面にもやはり材の薄い痕跡が認められた。なお、鏡の表面観察によると、両面共にわずかに布（種類不明）の痕跡があり、さらにその外側に板が残っているため、副葬に際しては、布に包み、鏡箱に納めていたものと考えられる。鏡は「蔓草夔麟鏡」と呼ばれる唐式鏡である。直径は17.3cm、重さは226gである。文様は、鈕の左右に2羽の鳳凰が向かいあい、上に麒麟、下に葡萄をついばむオウムが描かれている³⁾。

数珠玉は木棺内の北西部から出土した。母珠であり、水晶製で直径2.6cmを測る。

鉄製品は劣化が著しく、器種は不明である。層状剝離が認められることから鍛造品と考えられている。

また木棺の四隅に近い部分から検出された砂については、藤沢一夫氏の指摘するような「呪砂」の可能性があり、平安初期の葬送儀礼を知る貴重な例とされている⁴⁾。

なお数珠の出土状況から、頭を北におき、顔と数珠をもった手を西に向け、頭の後ろに銭と鏡を置いた状況が推定される。銭は「死後の安寧を直接的に保証する意味」あるいは「地鎮的要素がこめられている」ものと考えられており⁵⁾、鏡については、後述するようにひとつのステイタスと考えられるため、この被葬者は頭を北にして西向きに葬られた仏陀の「涅槃図」と同じ姿を想定することが可能とされる⁶⁾。

（2）墓2

調査区北端で検出された火葬墓であり、緩やかに南から北へ上る丘陵の最高点にほど近い場所に立地する。検出された平面形は隅丸方形を呈し、軸は北から西に約15度振っている。規模は0.8×0.6mであり、後世の削平により残存していた深さは約15cmである。

墓壙内から須恵器有蓋短頸壺と海獣葡萄鏡が出土した。須恵器骨蔵器の中には灰・焼骨を多量に含む淡黒灰色シルトが充満しており、炭混じりの褐色シルトで埋められていた。鏡は骨蔵器の北外側で鏡面を上にして置かれていた。鏡の下に板材が遺存しており、木箱（鏡箱）に納められ、須恵器骨蔵器を据える前に副葬されたことがわかる。

海獣葡萄鏡は、直径が13.3cmで重さは500gをはかる。龍形鈕で二重に区画された内側には4体の獣と2羽の孔雀が、外側には8羽の鳥と8匹の昆虫があらわされている⁷⁾。遺存状態は不良で内外面共に鍔が厚く付着する。また一部には鏡面側からの圧力により生じた複数の凹みがあり、全体形に歪みを生じさせている。なお蛍光X線による成分分析では、国産の範疇に含まれる。

須恵器骨蔵器は胴部下半以下の残存である。胴部は丸みを帯びた底部からやや直線的に立ち上がる。高台は厚く逆台形状に貼り付けられ、内面には叩き痕跡と板状工具による横位のナデ調整がみえる。胎土は良好で色調は明灰色である。

(3) 墓3

調査区の南東で墓2の南南東27mに位置する。平面形は南北を軸とした長方形であり、木棺墓の可能性が高い。墓境内より黒色土器高台付き皿と歯が出土した。規模は上端で長軸1.7m、短軸で0.65m、深さ0.5mである。なお掘削の過程で、棺の上面・棺底面・掘り方を示す3段階の面を確認した。

最上面は、底面が緩やかにくぼみ、下端の規模は、長軸1.55m、短軸0.45mを測る。掘り方の北西隅から皿部を内側に向けた黒色土器高台付き皿が出土した。当初棺上の北西隅にあったものが、棺の腐食により中央部が陥没し、内側を向いて壁に押しつけられた状況と考える。

中層面は底部中央が舟底状に下降するもので、南端はさらに幅0.15m程内側に傾斜した段状を呈する。またこの段階において墓1と同様に墓墳の長軸と直行する溝が3条確認された。なお棺の木質と推定される灰色粘土はこの中層面直上で確認され、その北端から歯が検出された。最下面は墓墳の長軸に平行して中央に、断面が逆台形の溝がみられる。

黒色土器高台付き皿は、体部が内彎気味に広がり、口縁端部はわずかに外反する。また高台は薄く「ハ」字状に張り出す。内外面とも遺存状態が著しく悪く調整は不明である。

(4) 墓4

調査区南西に位置する火葬墓である。立地は丘陵南斜面へ張り出した尾根状地形にはさまれた、谷の最奥部にあたる。平面形は正方位に軸をあわせた一辺0.6mの正方形で、深さは18cmの残存である。内部は大量の灰および炭化木で埋まり、その中央に南北50cm、東西30cm、高さ10cmの、おそらく木製容器に入れられた灰と焼骨の塊が置かれていた。

遺物は骨蔵器内部西側中央部から水晶製の丸玉が1点出土したのみである。なお水晶丸玉は表面に剝離がみられ、僅かに濁りが認められることから遺骸と共に焼かれたものと考えられている。

(5) 時期と墓相互の関係

最初に時期について整理する。墓1については、副葬されていた錢貨の年代と出土状況がその手がかりになる。錢貨は出土した29枚の内、判読できた22枚が「隆平永寶」であった。これらは曲物と考えられる木製容器に一連の塊として入れられており、それ故判読できなかった残り7枚も含めておそらくその総てが「隆平永寶」であった可能性は高いものとする。しかも蛍光X線分析によれば、これらの錢貨の成分は極めて類似した比率を示し、それはあたかも錢貨の鑄造所から二次的な使用を経ず持ち込まれた状況を想定させるものという。⁸⁾これはこれらの埋納が、796年に鑄造されて後、それほど期間をおかない時期におこなわれた可能性を示唆するものであり、少なくとも818年に「富寿神寶」が鑄造されて以後とは考えにくい状況を示すものと思われる。

墓2は須恵器骨蔵器を手がかりとする。この須恵器の特徴は丸底で高台が付く点、内面に同心円の叩き痕跡を残す点である。一方骨蔵器として最も多く用いられる須恵器はいわゆる「薬壺形」と呼ばれる器種であるが、その場合内面に叩き痕跡を残すものは7世紀にみられ、これは一般的な「海獣葡萄鏡」の年代とは合わないことになるため、本資料については、平城宮跡分類の「薬壺形」須恵器壺A以外に、須恵器甕Cに該当する可能性があるとする。なおその特徴は9世紀前半とされる平城京右京一条北辺四坊六坪火葬墓S X1075出土の灰釉壺より古く、⁹⁾8世紀末とされる平城京右京二条二坊十六坪S E0600出土の須恵器鉢Dより古い特徴を持っているとされ、¹⁰⁾8世紀の中頃を含む前半代に比定されることになる。¹¹⁾

墓3は黒色土器高台付き皿が指標となる。類例は垂水南遺跡河川内資料、¹²⁾平城宮跡S D650Aおよび¹³⁾

平城宮跡 S E 311 B または同 650 A 出土の緑釉陶器・灰釉陶器と器形の模倣関係にある¹⁴⁾。S E 311 B は 825 年を中心とした時期に比定されており、これが本資料の実年代を知るひとつの定点になる。

以上、実年代について検討を行ってきた。まとめれば、墓 2 が 8 世紀中頃から前半、墓 1 が 9 世紀前半、墓 3 が墓 1 に後出する 9 世紀中頃から後半であり、墓 4 については火葬墓であるためおそらく 8 世紀代の可能性が高いものとする。したがって、この場所には奈良時代から平安時代はじめにかけて 4 基の墓が、続いて築かれていたことになるのである。

それではこれらの墓はそれぞれどのような関係にあったのであろうか。次にはそれを主に立地の視点から考えてみたい。これまでみてきた様に、これら 4 基の墓は、いずれも南に谷をもった東西方向の丘陵上にあり、この立地は従来よりこの時期の墳墓の立地として指摘されてきた環境と共通する¹⁵⁾。そこで 4 基の墓の位置関係の細部をもう一度振り返ってみると、丘陵斜面に位置するのが墓 1・3・4 で、頂部に位置するのが墓 2 である。「海獣葡萄鏡」を副葬していた墓 2 は、尾根線上の最高点にあたる立地として最も良い場所にあったと言える。

そこで墓 2 を基準にほかの墓をみれば、墓 1 はほぼその真南に位置し、距離は 51m、墓 3 は墓 1 と墓 2 を結んだ線の中間のやや東 (10.8m) であり、墓 4 は同じく墓 1 と墓 2 を結んだ線から西へ 29m の位置にある。墓 1・2・3 は 1 町 (108 または 109m) を単位とした距離に近い規格で共通の関係があり、それは太安萬侶墓の推定される辺長に対比されるのである¹⁶⁾。また特に墓 1 は墓 2 のほとんど真南で、地形をみると、南の谷から上がった緩やかな斜面上にあっている。さらにこの面はその東西を小規模な谷地形によってはさまれており、そのため墓 1 は南に向かって舌状に張り出した狭い丘陵の中央に位置することになる。墓 1 は、墓 2 を意識して、しかも墓 2 に準じた重要な位置に葬られたとすることができるのではないだろうか。

同様に墓 3 と墓 4 についてみれば、それらは墓 1 と墓 2 を結ぶ線を基準として 1 町を整数で分割する距離に近い距離にあり、しかも墓 3 は、東西方向に開析された谷の南斜面の内で、さらに開析されて形成された小さな谷地形の最奥部に立地しており、それは太安萬侶墓の立地と共通し、齊藤忠氏が指摘した「陰陽五行説から発した風水思想に基く選地」につながる可能性も考えられるのである¹⁷⁾。いずれの墓も当時の葬送儀礼を強く意識し、しかも相互にはかなり近い関係があったと言って良いだろう。

以上、上町台地北端の調査区から発見された 4 基の墓について、それらの年代と相互の関係についてみてきた。その時代はまさに聖武朝難波宮から平安時代前期であり、この地区の歴史的な役割が大きく変化したとされる時期にあっている。そのような時期に造営された、互いに関係を持っていた可能性の強いこれらの墓は、それではこの時代のなにを反映した結果であるのだろうか。そこで次には同じ時期に造られた大阪府域のその他の墓を通観し、この問題を考えることにしたい。

2. 古代上町台地北端の史的性格

(1) 大阪府における奈良・平安時代前期の墓

大阪府域の奈良・平安時代前期の墓および墓誌は、現在 59 カ所をこえる地点で確認されている¹⁸⁾。分布は南河内を中心として、和泉丘陵と丹波山地から続く北摂の山塊でも点在する状況がみえる。立地はいずれも大阪平野を見おろす丘陵または山塊の先端である。

ただしこのうち獅子窟寺古墓 (10)、久米田寺古墓 (55) などはおそらく寺院に伴うものであり、検証はできていないが、海岸寺山古墓 (56)、高藏寺古墓 (52)、寺山古墓 (8) などともその関係とすれば、

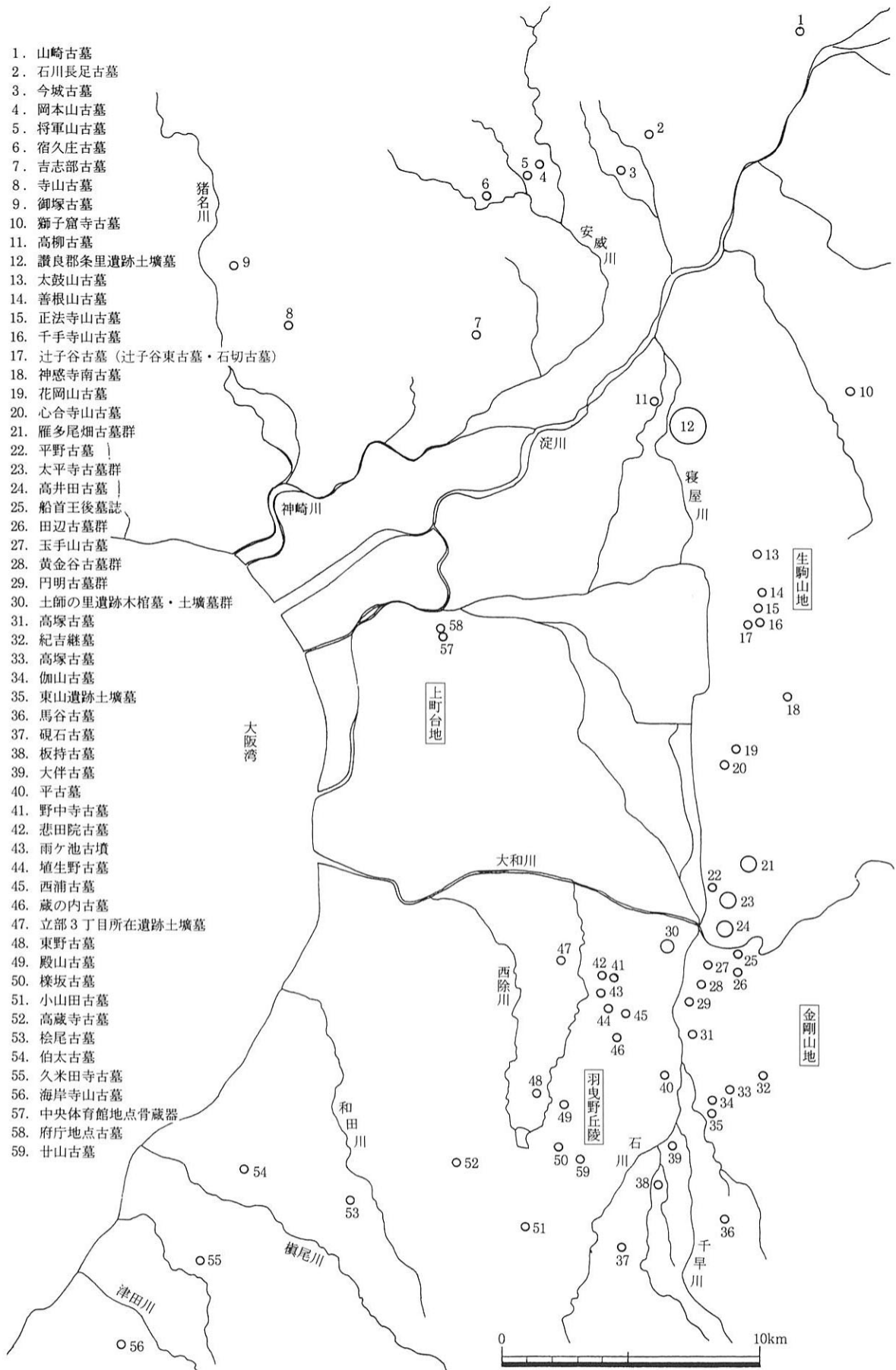


図4-IV-2 奈良時代～平安時代前期における大阪府下の墓

これらを除く分布の中心は、東大阪の石切周辺および、羽曳野丘陵と大和川と石川の合流点に近い、生駒・金剛山地の西斜面に限られる。

そこでこの地域の分布を整理すると、黄金塚古墓(28)は金銅の外容器を持っていたとされ、付加価値としての石櫃をもっている火葬墓は石川左岸の羽曳野丘陵に集中している(5・11・17・45・46・50・59)。また石川右岸には大仁品の官位を持つ船首王後(25)、従四位下の紀朝臣吉継(32)、正六位上の高屋連枚人(33)の墓誌がみられ、さらに隣接する伽山古墓(34)からは、石槨をもつ木棺墓と純銀製の銚帯と刀子が副葬品として出土しており、調査者は被葬者にこの地を本拠地とする五位以上の人物を推定している¹⁹⁾。

なお時期は下るが、平安時代初期とされる馬谷古墓(36)は、人頭大の丸石で組まれた槨をもつ木棺墓と推定され、双鳳文八稜鏡が出土している²⁰⁾。また黒崎氏の編年によりこれを時期的にみれば、8世紀初頭～中葉の墓は東大阪の石切を中心としており、石川流域の古墓は多くが8世紀後半の時期を示していることになる。したがってこれらの地域には、8世紀代を中心として官人が多く葬られていたと言える可能性がある。

一方これに対して岡本山墳墓群²¹⁾や玉手山遺跡古墓群²²⁾では、律令官人と共に一般の人々の墓も混在してみられ、そのためそれらは一定の地域における集団の伝統的な葬地であったとも考えられる。またこのような特定の地域を限り、特定の葬法に準じた人々の墓以外に、それほど目立った特徴や副葬品を持たない土壙墓や木棺墓も、平野部の讚良郡条里遺跡土壙墓群(12)や土師の里遺跡の墳墓群(30)などで確認されている。言うまでもなく古代の摂津・河内・和泉に居住していた様々な人々の階層を示す、多様な葬地のあり方をそこに見ることができると言える。

ところでこのような古代の葬地については、京都盆地を対象とした森 浩一氏の研究により、8世紀中頃における郡単位で、古墳時代後期の群集墳と重複しない山地形を利用した葬地が復原され²³⁾、奈良盆地については前園実知雄氏により、藤原京・平城京の南あるいは北を皇族と上流貴族の葬地とし(ただし奈良時代中期以降は、佐保山に下級官人の墓が営まれていたこともわかっている²⁴⁾)、皇都から東西に数kmから数十kmはなれた主要道路近くを一般の律令官人の葬地とした分析がおこなわれ²⁵⁾、加えて河内の場合、6世紀末以降の終末期古墳群地帯である磯長谷も、葬地としての機能を果たしていたとの指摘もされている²⁶⁾。

したがってこれらの研究成果をあわせて考えれば、大阪府域で見られるこれらの墓は、平野部に形成された一般の人々の墓(I類)と、森 浩一氏の「深草山型埋葬地」と対比されるような特定の地域の集団のためにその首長が山地形を限って設けた墓(II類)および、国家の規定により設けられた公の葬地(III類)の三種類に大きく分けられるものと考えられ、東大阪市の石切周辺に集中する墓は、難波宮東方で大和へ通じる街道沿いに設けられた、難波宮官人のための公の葬地(III類)であり、石川・大和川合流点周辺の墓群はII類であると同時に、丹比道に代表されるような京を離れるもう一つの官道沿いの立地として、III類も混在していた可能性が考えられるものとしておきたい。

良く知られているように、威奈真人大村は慶雲四年(707)に越後から遺骨を送られ、その本貫地ではなくおそらく公の葬地とされる二上山の穴虫峠近くに葬られた。これはまさに原則として公の葬地に葬られた事例の代表であろう。しかし一方で、都に上って朝廷に仕えた徳足比売が、故郷の因幡国府推定地のすぐ北の丘陵中腹に葬られるなど、官人の葬地の実態については、個々の事情に対する検討も課題として残されてはおり、その点が石川・大和川合流地点での墓の分布の意味を整理する手がかりにな

るものとする。

しかるにいずれにしてもこれらの状況から府庁地点の墓の性格を推定すれば、火葬墓である墓1・3に石櫃は見られなかったが、副葬品と立地および規格性のある相互の配置において、これらは東大阪の石切周辺の墓に対する難波京北方の葬地とみる事が可能と考えられ、それ故その被葬者は、同時期の平城宮で活躍した中央官僚ではないが、難波宮の運営に深く関与した高級官僚であった可能性は高いものと言えることになる。それではあらためてこの地が難波京の北の葬地であったとするならば、その南に位置した難波京はどのような景観を示していたのであろうか。

(2) 上町台地北端の奈良・平安時代遺跡

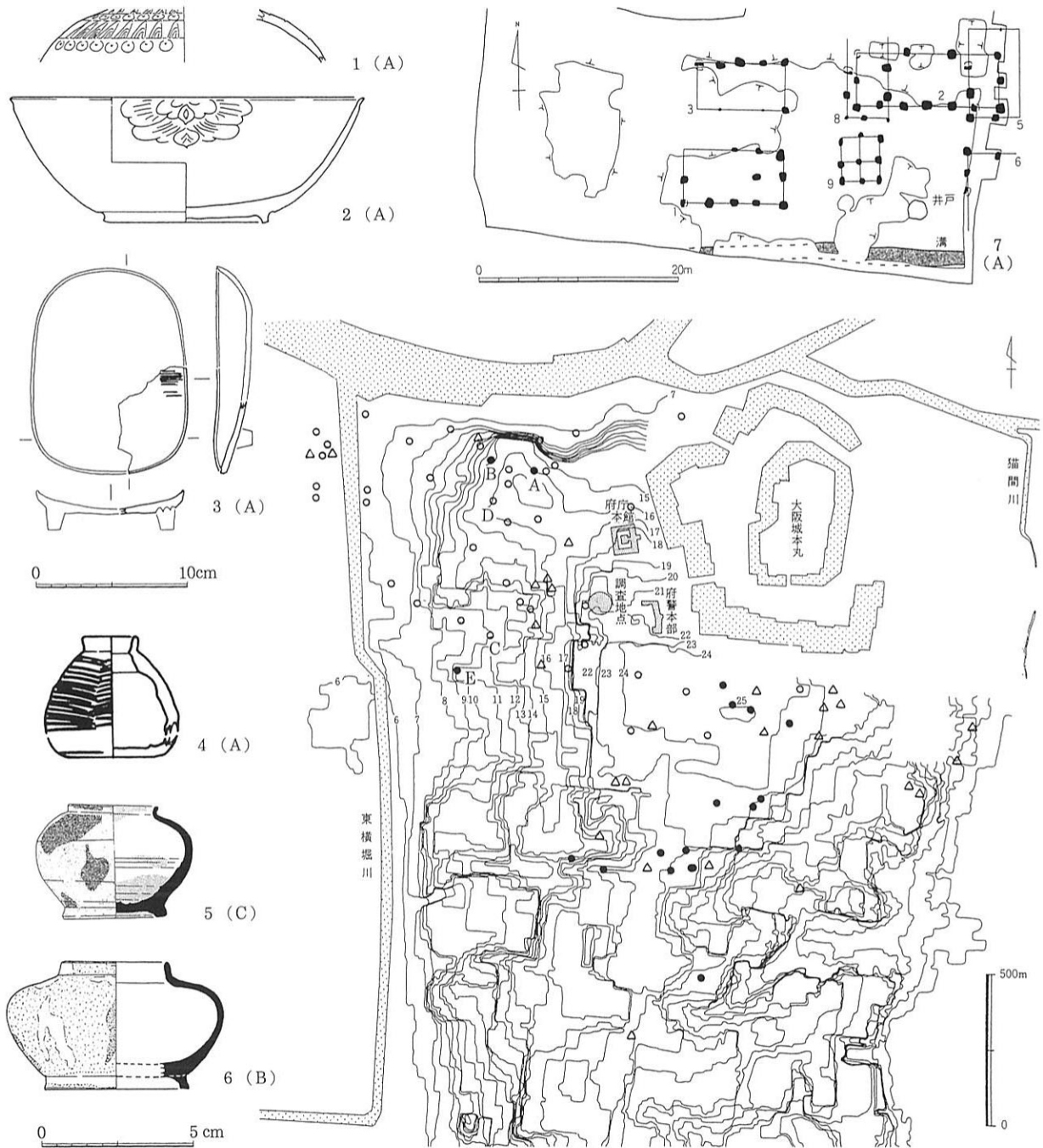


図4-IV-3 古代～中世における上町台地北端の遺跡分布
 (●…古代、○…古代～中世、△…中世)

1997年、四天王寺の北に位置する細工谷遺跡から、和同開珎の枝錢と「百濟尼」「尼寺」などと書かれた墨書土器および、長さ2mにおよぶ杉の屋根材が出土した²⁷⁾。この場所は難波宮の大極殿から南へ1.9kmでその中軸線の東側直ぐにあたり、地形的には上町台地丘陵頂部に近い東側緩斜面である。遺物の出土状況が原位置を保ったものではないため、実際の工房や寺院跡との関係は不明であるが、少なくともこの地区の近辺にそれらの施設のあったことは間違いないであろう。なお摂津国分寺跡はこの調査区の南約1.2kmにあり、四天王寺は南南西2kmに位置する。これは明らかに難波京の一部を構成した施設である。

ところが上町台地で検出される奈良時代遺跡は、このような難波宮南側の平坦地だけに存在するのではないのである。図4-Ⅳ-3は上町台地北端における奈良時代以降で豊臣期を遡る時期の遺構・遺物を検出した調査地点の分布であり、細工谷遺跡の調査結果を裏付けるように、現在難波宮が復原されている大阪城南側の平坦面に、古代から中世にかけての痕跡の集中する状況を確認することができ、特にその丘陵平坦面を東へ降りた地点で中世のデータが多くみられることは、中世文献でもあまり知られていない本願寺周辺の村落の一端を示すものとして、貴重なデータとなる。しかし問題は、大阪城西方で見られる古代・中世の分布の集中である。

調査地Aは中央区釣鐘町の旧東中学校地点であり、8世紀中頃から後半の時期に7棟の掘立柱建物と東西方向の溝、井戸などが見つかっている(7)。最大の建物は建物2の6×2間で、南側の溝に軸をあわせて配置されている。井戸から「厨」などと書かれた墨書土器、周辺から重圈文軒瓦、黒色土器の硯と水滴(3・4)、緑釉陶器(2)が出土し、調査者は近くに寺院や官のあった可能性を指摘している。またこの遺跡からは7世紀前半の土器と共に、統一新羅時代の土器(1)も出土しており、この地の重要性が7世紀まで遡ることを示している²⁸⁾。

調査地Bは中央区島町一丁目にあたり、奈良時代後半に廃絶した井戸が検出され、多量の灰と土器類と共に奈良三彩小壺が出土している²⁹⁾。調査地Cは中央区本町で、地形的には上町台地西側斜面に形成された開析谷中にあたる。出土状況は谷の埋積土中であるため、その元あった場所は難波宮中心部のあった丘陵上であったものと考えられる。そのほか、調査地Eから奈良時代の木組みの井戸、調査地Dから複数の奈良時代建物が検出されている³⁰⁾。

これらはいずれも上町台地より北西へのびる丘陵上平坦面を中心としたものであるが、これらの状況を勘案すれば、現大阪城の西側尾根上を中心とした地区に、奈良時代の上町台地のもうひとつの中心があったことは、否定できない事実となってくる。それではこのような状況はこれまでの難波宮と難波京研究とはどのように関わってくるのだろうか。

3. 難波京と難波津

あらためてこれらの墓を上町台地の歴史に対照させてみると、墓2・墓3の造営された奈良時代中頃は、聖武天皇による後期難波宮の時代、墓1・墓4の造営された9世紀は、難波宮が廃止され、都が平安京に移った後の時期にあたる。そこで最初に問題となるのが聖武朝難波宮および難波京と墓2・3との関係である。

今、奈良時代の難波宮を概観すれば、聖武天皇は神亀元年(724)の即位後、神亀3年に式部卿従三位藤原宇合を「知造難波宮事」に任命して宮の再建を始める。神亀4年には難波宮を造る雇民の課役などを免じ、天平4年(732)に石川朝臣枚夫を「造難波宮長官」に任命。天平6年には難波宮に行幸し

て「三位以上一町以下、五位以上半町以下、六位以下四分一町之一以下」の基準で宅地を班給。そして天平16年(744)には恭仁京より高御座・大楯・兵庫器仗を運び、皇都の勅をだすのである。しかしその翌年の天平17年には再び平城遷都がおこなわれ、その後は聖武・孝謙・光仁天皇の行幸記事の中にその姿を見ることとなる。そして墓2・墓3の造営されたのはちょうどこの頃にあたり、そのため被葬者が活躍していたのは、まさに難波宮再建の時期であった可能性が高いのである。

一方竹山真次氏を最初とする難波京研究についてここで繰り返す余裕はないが、天平6年(734)9月の「班給難波京宅地」、天平16年(744)閏1月の「恭仁・難波二京何定為都云々」、天平勝宝5年(753)9月の「摂津国御津村南風大吹、潮水暴溢。壊損廬舎一百十余区、漂没百姓五百六十余人。並加賑恤。仍追海浜民、遷置於京中空地」および延暦3年(784)5月の「難波市」により、少なくとも天平6年以降においては条坊制によった京のあったことが推定され、多くの先学によってその復原が試み³¹⁾られている。

そして今回出土した墓と難波宮周辺地区での調査成果は、大きく二つの点で難波京研究に新しい手がかりを与えたと考える。その第1点は宮または京の北限についてである。現在復原されている難波京の北限は大阪府庁本館の南辺に近い本町通り周辺とされている。しかし「喪葬令」に従えば、墓は京の中に造られないとされるため、これらの墓の位置する地区は、難波京の範囲外にあたる可能性が高いことになる。さらに先に見てきたように、これらの墓が南面する谷は、旧大阪市中央体育館地点の谷につながる可能性が高く、その結果、これらの墓は難波宮の北にあったこの谷を隔てたさらにその先の北の山に造営されていた、と見ることもできるのである。これは平城京の北に位置する佐保山とその周辺の墓をイメージさせる景観である。

そしてこの点についても一つ指摘できることとして、このような谷は、現在平坦に見える上町台地の各所に、浸食谷として多数存在しており、その景観は豊臣秀吉没年の慶長3年(1598)におこなわれた大坂城三の丸築造とその前後の時期におこなわれたと推定される船場造成まで変わらなかったのである³²⁾。細工谷遺跡を見るように、確かに難波宮が築かれた後、その中軸線を延長した近辺に寺院や官衙の設けられた可能性は高い。その意味で計画線としての難波京の存在を全く否定するものではない。しかしそれも実態は、僅かな面積しかない丘陵頂部だけのことだったのであり、現実的には、この丘陵上に区画された大規模な都市をつくることのできる広い平坦面は存在しなかったのである。

それでは実態としての難波京はどのような姿をしていたのであろうか。それが第2点の問題であり、その大きな手がかりが現在の大坂城西側部分で発見されている奈良時代およびそれ以前に遡る時期の考古学的調査の結果ではないかと考える。日下雅義氏が復原するように、上町台地北端が重要視された³³⁾最も大きな要因は、この地が難波津の所在した大川周辺のラグーン地帯に接していたという点であるが、それは言うまでもなくこの地が、大陸からもたらされた様々な文化に、畿内で最初に接することのできる最も大きな市または都市であったということの意味する。従ってこの地は難波宮の有無に関わらず、難波宮がつくられる以前から文化と経済の繁栄していた地であったと考えられるのである。

それゆえ広義の難波京の都市としての構造、という言い方が許されるのであるならば、それは当然難波津を合わせた二重構造によって機能していたと整理されるべきであり、それはさらに難波津が難波京の単なる港としての役割だけ果たしていたという意味ではなく、むしろ実態として、特に経済的な面においては、難波京と対等あるいは、難波京より優位な位置にあったという意味で整理されるべきではないかと考えられるのである。

既に文献史研究によって明らかにされているように、難波京も含めた難波の行政官庁は、他の国司より一段高い京官扱いの摂津職（大夫は正五位上相当）であり、その独自の職掌として「津濟」「上下公使」「検校舟具」などといった、港と渡し場の管理、難波津を經由して上り下りする公使のチェック、中央の兵部省主船司のつかさどる公私の船とその付属物を現地で管理する仕事があったことの意味は、その点でより注意されるべきもの³⁴⁾と考える。もちろん摂津職が難波京だけではなく、摂津国全体を管理していたため、摂津職の存在を難波宮や難波京と直接結びつけて解釈するのは適当ではないともされるが、摂津職の庁舎が難波京内にあり、京の管理もその管轄下にあったようなので、その特徴的な職掌に関わる難波津を難波京と並べ、そのような二重構造の都市景観を考えてみることは、それほど大きな間違いではないもの³⁴⁾と考える。

そして墓1と墓3の存在というものが、実はそれを裏付けているのではないかと考えられるのである。墓1は副葬された「隆平永寶」の初鑄が796年である以上、この墓に葬られた人はそれ以後に亡くなったことになる。ところが、延暦3（784）年に始まる長岡京の造営に際して後期難波宮の瓦が再利用されているところから、この人物の晩年には難波宮がその建物すら存在せず、さらに摂津職が廃止されたのは延暦12年（793）3月9日の太政官符であるため、この人物の没する直前には摂津職も存在していなかったのである。しかし墓2と関係する立地および副葬品などから、墓1の被葬者も墓2の被葬者と同様あるいはそれに準ずる立場にあったことが考えられるため、そのような人が難波宮の廃止以後もここで生活していたということは、平安時代に入って以後もこの地が直ぐにさびれた訳ではないことを示していることになる。難波宮が失われた後も、この場所が葬地として続いたのは、上町台地北端の歴史的な役割が難波宮によってのみ成立していたのではなく、和銅3年（710）銘のある伊福吉部徳足比売骨蔵器が、因幡国府推定地のすぐ北で、国庁跡・国分寺・国分尼寺を見おろす丘陵中腹に立地しているように³⁶⁾、この丘陵を降りた北西で繁栄していた難波津を中心とした大川隣接地域の重要性に依っていたのであり、それがまさに、上町台地の歴史の特質であると言えるのではないだろうか。

これまで上町台地の歴史は、その中心部である難波宮にのみ関心が寄せられてきたが、今回述べてきた墓群を軸に視野を大川周辺まで広げると、聖武朝難波京と難波宮が廃止された以後のこの地は、難波津と複合的に理解されるべきことが明らかとなり、それによってこの地が、難波宮の時代だけにとどまらず、大陸への玄関口として重要な役割を担い続けていたことを、改めて認識させることになったと考える。それではそのような場所に葬られたのはどのような人物だったのであろうか。最後にまとめて代えてその展望を述べてみたい。

まとめにかえて一被葬者像へのアプローチ

手がかりは2枚の鏡と29枚の錢貨である。このうち出土した海獣葡萄鏡については、肥塚隆保氏の集成があり、1988年時点で22点確認されている³⁷⁾。その後天理市杣之内火葬墓鏡³⁸⁾と東大阪市西ノ辻遺跡河川鏡³⁹⁾および飛鳥池遺跡の海獣葡萄鏡鑄型の出土が知られており、管見で鏡24点、鑄型1点を数える。ただし墓から出土したものは、奈良県明日香村の高松塚古墳出土鏡と天理市杣ノ内火葬墓出土鏡および、出土状況は不明であるが、福岡県八女郡星野村の真名子古墳出土とされる鏡など8点（伝承を含む）であり、そのうちの7点は古墳出土であるため、火葬墓に副葬された例は杣ノ内火葬墓の一例のみで、さらに奈良時代の骨蔵器が各地で発見される中、鏡を伴った例は本遺跡の墓2以外知られていない。異例の海獣葡萄鏡である。

一方平安時代以降の副葬鏡については、梅原末治氏による一連の調査⁴¹⁾と後藤守一氏の研究が知られている。例えば山科西野山墳墓では木炭槨の中に木棺を置き、金銀平脱双鳳鏡の他に石帯・硯・太刀など⁴²⁾を持っている。同様に京都府竹野郡弥栄町の鳥取古墓の場合も木炭槨をもち龜鈕瑞花双鳳文八稜鏡の他に石帯と刀剣を副葬し、また向日町の長野古墓では木炭槨をもち、さん貍双鸞六花鏡と丸玉が出土しており、中でも西野山古墓出土の金銀平脱双鳳鏡は、正倉院伝世鏡に次ぐ貴重な資料と言われている。

なお京都市安祥寺下寺跡推定地の木棺墓は、木炭で充満した木槨をもち、龍の文様の描かれた白銅鏡が出土し、その被葬者像について、安祥寺に関わる高位の人物ではないかと報告されている⁴³⁾。

同様に前田洋子氏は平安時代以降の鏡を集成する中で、大阪府岡本山墳墓群の400余基の鎌倉時代墳墓群の中で、鏡の出土が1点（山吹双鳥文鏡）のみであること、鳥取県長瀬高浜遺跡の33基の墓群の中でも菊水双雀文鏡（15世紀）の出土は1点とされていることから、その被葬者は集落の中で特別の社会的位置にあり、鏡はその象徴としてかなりの権威と財力を持つ者のみが所持しえた高価で貴重な品であったとしている⁴⁴⁾。

先に墓の立地から、上町台地の北端で発見された4基の墓の被葬者像について、難波宮または京の運営に関わった在地の高級官人の可能性を述べてきたが、これらのことから、鏡を副葬していた少なくとも墓1と墓2の被葬者は、官人層または貴族層につながる可能性が高まったものと考えられることになる。しかしここで注意しなければならないのは、いずれの鏡も国産であり、それに加えて墓1の被葬者が鑄造後間もないと推測される銭貨を副葬していたことである。したがってこの点も重視すれば、被葬者は難波宮または難波京の運営に関わった在地の高級官人であると同時に、その人物かあるいはその人物に近い人々は、青銅器生産にも詳しい立場にあった可能性が出てくるのである。もちろん銅鏡の生産と流通については、杉山洋氏の考察にあるような詳細な検討が必要である⁴⁵⁾。しかしそれをふまえつつもなお推論を進めてみれば、その両方の条件を充たした氏族が、この時代、河内に居住していたのであった。それが多治比公氏である。

『新撰姓氏録』と『古事記』『日本書紀』『日本三代実録』によれば、多治比公氏は宣化天皇の子、上殖葉（賀美惠波）皇子を祖とし、多治比王の時に丹比公を称し、天武13年（684）に真人を賜っている。同名の丹比部の伴造であった丹比連は多治比王の乳母の一族と言われている。多治比公氏は天武朝中期から中央政界で活躍をはじめ、その後裔は橘奈良麻呂の乱に際し一時失脚するが、平安時代前期までの間に左右大臣、大中納言、参議などをつとめ、それ以外に専門の職掌として、遣唐押使、遣唐大使、送高麗人（渤海人）使、造船使長官、船頭判官などの外交関係に長じた⁴⁶⁾とされる。そして難波との関係をみれば、天武6年（677）に麻呂が摂津職大夫、三宅麻呂は養老3年（719）に三宅麻呂が河内国撰官、天平15年（743）に土作が亮、天平勝宝2年（750）に占部が大夫、天平宝字元年（757）に国人が大夫、宝亀7年（776）に蔵主が亮、宝亀10年（779）に長野が大夫、延暦16年（797）以降に今麻呂が摂津守、元慶9年（889）に藤善が摂津守を歴任し、その回数⁴⁷⁾は在地の豪族の中で最も多いものとなっているのである。

そして重要な点は、その氏族の本拠地とされる丹比地域が、平安時代後期から鎌倉時代に全国で活躍する金属加工技術集団の「河内鑄物師」の本拠地でもあり、その中心地である黒山に近い太井遺跡から8世紀前半と10世紀の鑄造遺構と遺物も発見されているのである⁴⁸⁾。さらに8世紀初めの官人である多治比真人三宅麻呂は、和銅元年（708）に催鑄銭司、家主は天平13年（741）に鑄銭長官、乙安は宝亀年間に鑄銭司長官、藤善は貞観12年（870）に葛野鑄銭所近傍の五神に新鑄の貞観永宝を奉納する使いをつ

とめていることが記録より知られ、この氏族と金属加工関連とのつながりも可能性の高さを示しているのである。

多治比真人氏とは、在地豪族の中でも難波に深く関わった最も高級な官人と言え、しかもその一族は、銭を初めとする金属加工の集団を統括し、実際それに直接関わっていた可能性も、発見された遺跡から指摘できるのである。

すでに古墳時代中期に遡って宮跡の伝承をもつ上町台地とその周辺にとって、難波宮と難波京および難波津に関わった氏族がひとり多治比真人氏だけでなかったことは言うまでもない⁴⁹⁾。それゆえこれ以上の推論をすすめることは避けるが、これまで平城京などの大和との関係においてのみ語られる部分の多かった難波宮に対し、上町台地を主役とすることにより、小論が摂津・河内・和泉を中心とした畿内の、古代から中世をつなぐ研究の一助となれば幸いである。

小論の作成にあたり、勝部明生・黒崎 直・久保智康・小林義孝・栄原永遠男・新海正博・杉山 洋・巽淳一郎・中尾芳治・成瀬正和・藤沢一夫・藤沢典彦・藤原 学・前田洋子・前園実知雄・松村恵司・水野正好・森 浩一・森田 稔の各氏からご教示を賜りました。記して謝意を表します。

小論は鋤柄俊夫 1999 「聖武朝難波京の構造と平安時代前期の上町台地」『文化学年報』48号よりの再録である。

註

- 1) 鋤柄俊夫 1994 「大坂城下町にみる都市の中心と周辺」『都市空間』新人物往来社
- 2) 新海正博ほか 1996 『大坂城跡の発掘調査』6 大阪府文化財調査研究センター
- 3) 前田洋子氏のご教示による。帝室博物館 1937 『天平地寶』。片山昭悟 1994 『奈良時代の鏡』
- 4) 藤沢一夫 1970 「火葬墳墓の流布」『新版 考古学講座』第6巻 雄山閣出版株式会社
山内紀嗣 1988 「天理市岩屋谷の古墓をめぐる」『天理大学学报』第157輯
横田 明・小林義孝 1997 「光明真言と葬送儀礼」『歴史民俗学』第8号
- 5) 栄原永遠男 1993 「日本古代銭貨と呪力」『日本古代銭貨流通史の研究』塙書房
小林義孝 1997 「葬送儀礼における銭貨(1)」『歴史民俗学』第7号
- 6) 藤沢典彦氏のご教示による。
- 7) 勝部明生氏のご教示による。
- 8) 成瀬正和 1996 「大坂城跡三の丸地点出土の鏡と銭の金属材質調査」『大坂城跡の発掘調査』6 大阪府文化財調査研究センター。成瀬正和氏のご教示による。
- 9) 奈良国立文化財研究所 1984 「右京一条北辺四坊六坪の調査」『昭和58年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
- 10) 奈良国立文化財研究所 1982 『平城京右京二条二坊十六坪発掘調査概報』
- 11) いずれも巽淳一郎氏のご教示による。
- 12) 鋤柄俊夫ほか 1986 「垂水南遺跡発掘調査概要」『節・香・仙』(大阪府文化財調査速報第40号)
- 13) 奈良国立文化財研究所 1974 『平城宮発掘調査報告』VI
- 14) 奈良国立文化財研究所 1976 『平城宮発掘調査報告』VII
- 15) 内藤正恒 1970 「古代・中世の墓制」『新版 考古学講座』第6巻
久保常晴 1975 「墓地と火葬場」『新版 仏教考古学講座』第7巻
- 16) 太安萬侶の墓は、底辺が約100m、上辺が50~60m、高さが約4mの台形状墓域をもつと考えられており(前園実知雄編 1981 『太安萬侶墓』(奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第43冊)奈良県立橿原考古学研究所)、当遺跡の墓1・2の距離はその1/2にあたる。

- 17) 水野正好氏のご教示による。久保常晴 1975 「墓地と火葬場」『新版 仏教考古学講座』第7巻。齊藤 忠 1935 「上代に於ける墳墓地の選定」『歴史地理』第65巻第6号。齊藤 忠 1961 『日本古墳の研究』吉川弘文館
- 18) 黒崎 直 1980 「近畿における八・九世紀の墳墓」『研究論集』6 (奈良国立文化財研究所学報第38冊)
地村邦夫 1995 「大阪府における古代・中世の木棺墓について」『大阪府埋蔵文化財協会 研究紀要』3
東大阪市立郷土博物館 1998 『河内国へのいざない』(1998年度特別展示)
その他の参考文献として、倉敷考古館 1981 「岡山県下奈良・平安期墳墓の類例」『倉敷考古館研究集報』第16号。
山内紀嗣 1988 「天理市岩屋谷の古墓をめぐって」『天理大学学報』第157輯。佐藤竜馬 1993 「讃岐における古代の火葬墓」『財団法人香川県埋蔵文化財センター研究紀要』I
- 19) 山本 彰 1987 「奈良時代墳墓の一形態」『文化史論叢』(上)横田健一先生古希記念会
- 20) 小林義孝 1990 「馬谷古墓と出土鏡」『泉北考古資料館だより』No.42
- 21) 森田克行 1982 「岡本山墳墓群の調査」『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会第6回資料』大阪文化財センター
- 22) 古代を考える会 1976 『玉手山遺跡の検討』(古代を考える7)
- 23) 森 浩一 1970 「古墳時代後期以降の埋葬地と葬地—古墳終末への適及的試論として」『古代学研究』57
- 24) 奈良県立橿原考古学研究所 1984 『佐保山遺跡群発掘調査現地説明会資料』
- 25) 前園実知雄 1984 「律令官人の墓」『季刊 考古学』第9号
前園実知雄 1991 「古代都市と墓」『季刊 考古学』第34号
- 26) 前園実知雄 1987 「墓誌」『季刊 考古学』第18号
- 27) 大阪市文化財協会 1997 『葦火』68・69・70号
- 28) 大阪市文化財協会 1991 『葦火』30・31・34・35号
- 29) 大阪市文化財協会 1987 『葦火』10号
- 30) 大阪市文化財協会 1991 『葦火』32号
- 31) 中尾芳治 1986 『難波京』(考古学ライブラリー46) ニュー・サイエンス社
- 32) 鋤柄俊夫 1994 「大坂城下町にみる都市の中心と周辺」『都市空間』新人物往来社
- 33) 日下雅義 1986 「大地の変貌と古代人の営為」『日本の古代』(第5巻 前方後円墳の世紀)中央公論社。直木孝次郎 1989 「難波津と難波の堀江」『ヒストリア』第124号
- 34) 利光三津夫 1957 「難波京の官司について」『東洋大学紀要』第11集
利光三津夫 「摂津職の所在について」『続日本紀研究』第4巻第9号
東野治之 1988 「律令制下の難波」『新修 大阪市史』第1巻
- 35) ほかに旧大阪市中央体育館地点から8世紀末～9世紀初頭の須恵器骨蔵器をもった火葬墓(S X401)が検出されている。大阪市文化財協会 1992 『難波宮址の研究』
- 36) 久保常晴 1975 「墓地と火葬場」『新版 仏教考古学講座』第7巻
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 1979 『日本古代の墓誌』同朋舎
- 37) 肥塚隆保 1988 「海獣葡萄鏡小論」『寺家遺跡発掘調査報告』II (能登海浜道関係埋蔵文化財調査報告書VII) 石川県立埋蔵文化財センター
- 38) 竹谷俊夫 1991 「柚之内火葬墓の発掘調査」『発掘調査20年』埋蔵文化財天理教調査団
- 39) 東大阪市教育委員会 1995 『西ノ辻遺跡第22次発掘調査報告書』
- 40) 飛鳥資料館 1992 『飛鳥の工房』
- 41) 梅原末治 1920 「山科村西野山ノ墳墓ト其ノ発見ノ遺物」『京都府史蹟勝地調査会報告』第2冊
梅原末治 1923 「向日町長野ノ墳墓」『京都府史蹟勝地調査会報告』第4冊
梅原末治 1927 「鳥取村の平安朝初期の墳墓」『京都府史蹟勝地調査会報告』第8冊
梅原末治 1971 「山城大枝の奈良時代の一古墓」『史迹と美術』第418号
- 42) 後藤守一 1931 「本邦出土の唐式鏡」『考古学雑誌』第21巻第12号
- 43) 京都市埋蔵文化財研究所 1993 『安祥寺下寺跡推定地発掘調査の概要』。ほかに奈良県池上木棺墓から伯牙彈琴鏡が出土している。奈良県教育委員会 1991 「池上木棺墓」『奈良県遺跡調査概報』1990年度第2分冊
- 44) 前田洋子 1986 「和鏡の用途の展開について」『歴史における政治と民衆』日本史論叢会
- 45) 杉山 洋 1989 「唐式鏡の生産と流通」『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念事業会
杉山 洋 1995 「唐式鏡の生産と流通」『文化財論叢』II 奈良国立文化財研究所
- 46) 吉田 晶 1979 「古墳と豪族」『古代の地方史』第3巻 朝倉書店
- 47) 伊藤 純 1982 「摂津職官人の本拠地からみた難波京」『大阪文化誌』14

- 48) 鋤柄俊夫 1993 「中世丹南における職能民の集落遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集
49) 吉田 晶 1982 『古代の難波』（教育社歴史新書 日本史 37）

V 三の丸築造以前の基準資料

鋤柄俊夫

はじめに

財団法人 大阪府文化財調査研究センター（1995年までは財団法人 大阪文化財センター）では、大阪府庁舎周辺整備事業に伴う緊急調査として、1990年より大坂城跡府庁地点の発掘をおこなっている。これまでの調査により、1A・3A・3B調査区を中心として、豊臣秀吉による大坂城本丸築造以降、江戸時代に営まれた京橋口御城番屋敷まで、複雑に移り変わった大坂城下の変遷と形成過程が、複数の生活面と数次にわたる膨大な盛り土の中から明らかにされ、不明な部分の多かった上町台地北端の歴史的環境について、古代から近世におよぶ長い期間で貴重な成果を得ることができた。

なかでも3A調査区からは東西方向の開析谷が発見され、三の丸の造成が、この場所においては具体的に谷を埋める行為であったこと、そしてその行為がおこなわれる以前、すなわち本丸築城以降で三の丸が築造される直前までの町並みは、いわゆる近世の城下図にみられるような方格の整った町並みではなく、地形の制約を受けた、とくにこの場所では、谷の上と下に分かれた姿をしていたことが明らかになった。これはこれまでの豊臣期の大坂城下町のイメージを大きく変えるものである¹⁾。

さらに3A調査区の調査では、三の丸の築造と思われる1 m余の盛土の下から、少なくとも3期に分けられる生活面が確認され、遺物もそれぞれ遺構に伴った形で得ることができた。これらは出土状況において、明らかに三の丸築造以前に廃棄された資料群である。そこで以下はその中でも一定の量の遺物を出土した溝90を中心に、三の丸築造以前の基準とされるべき資料群の検討をおこないたいと考える。

なお瀬戸・美濃窯製品については、藤澤良祐氏に実見の上ご教示いただけたため、氏の同定による分類をそのまま提示したものである。また掲載した遺物番号は、本調査区の他地点資料とあわせて検討されることを考慮して、現在編集中の大坂城跡府庁地点正報告の番号をそのまま使用している。ご了承いただきたい。

1. 遺構の検討（図4-V-1）

既に概要報告などで述べているように、三の丸の築造によると推定される盛土の下からは少なくとも3期に分けられる生活面が検出された。第1期は、北から南へ緩やかに下降する地形にあわせて、調査区の南半部では粗い砂層を基盤層として、小規模な竈と流しが密集して展開する。竈は平瓦と粘土でつくられ、いずれも2連であり、遺存状況の良好なもの全てに、瓦または木材で組んだ流しが伴う。また、北側の竈については焚口は北に設けられ、東西軸にあわせて南北にずらして交互に配置された状況もみてとれる。明らかに短期間に設けられた臨時の施設である。一方調査区の北側には地口が2または3間で奥行きがおそらく7間と推定される狭い屋地が数軒毎に路地を隔てて並ぶ。やはり密集した状況を示している。なお、今回とりあげる溝37の上層は、この段階まで残っていた可能性がある。

第2期はこの粗い砂層を除去することによって現れる。調査区の中央を東西に道がはしり、その南北に短冊型の地割りがみえる。溝36・37は、この道の側溝であり、第1期の竈が溝36を埋めた上に設けられていることから、その先後関係は明瞭である。道を境にして、北側では地口が3～6間程度の、第1期より広い屋地が並び、南側では地口が5間以上で、10連近い竈をもち、100㎡以上の礎石建物をもつ

た屋敷地が並ぶ。そしてこの大形の礎石建物は、その礎石の上に大量の瓦が載った形で検出された。

第3期は第2期の基盤層としていた黒色の土壌化層を除去して現れる。今回取り上げる溝90は、第2期にあった東西軸の道の中心に流れており、道はこの溝90を埋めることによって設けられていた。この点においてそれらの先後関係も明確である。溝90の南北から鑄造溶解炉の基底部分が発見され、とくに北側中央からはさらに2時期に分かれて、鑄型・坩堝と共に鑄造土坑もみついている。また小規模の竈が点在して確認されており、鑿・漆篋などの様々な工具も検出されている。

以上より推定できることを、記録に残る大坂城の変遷と対比させてみる。最初に遺構の変遷を整理すると、第3期から第1期への変化は、第3期＝職人→第2期＝城下町→第1期＝臨時的施設→三の丸築造(1598年)となる。これに対して文献に記された変遷は、本丸築造(1583年)→二の丸築造(1585年)→惣構築造(1595年)→慶長伏見地震(1596年)→三の丸築造(1598年)である。以下推測を述べれば、第1期の状況は、都市の中枢に近い部分の状況としてその構造は明らかに不自然であり、その意味でのこれらの施設は応急処置的なものと考えられ、それが三の丸築造に極めて近い時期であるため、その背景に慶長伏見の地震を考慮することも可能ではないかと考える。そしてそうであるならば、第2期でみつかった大形の礎石建物はまさにこの地震で倒壊したものであり、その結果この建物などを構成要素として成立していた町並みに伴う溝36・37もこの時に埋没したと考えられ、それは実年代として1596年に比定されることになる。したがって第1期にも一部機能していた可能性のある溝37については1598年が下限であるが、溝36についてはおおむね1596年を下限にできるものと考えられる。

次に問題になるのが、溝90の埋没時期、すなわち第2期の町並みの成立時期である。この点に関して

手がかりとなるのは、第3期にあった鑄造の操業期間と城下町形成のメカニズムに対する地理学的な要素の検討である。最初に鑄造作業についてみれば、それは先に述べたように、層位的に2時期にわたることがわかっている。また鑄造以外にも種々の工人が住んでいた可能性も指摘できる。一方これに対して地形的な要素を振り返れば、これまで述べてきたのはいずれも谷底の町並みであり、最初に指摘したように、この時期の大坂城下町が地形的な制約の下にあったのであれば、最初に家並みが整備されたのは、堺とのルート上にあった上町台地上の地区と、それにつながる丘陵上の部分であり、一般論としての谷部の整備については、相対的にそれに後出するものと考えられることができるのではないだろうか。そう

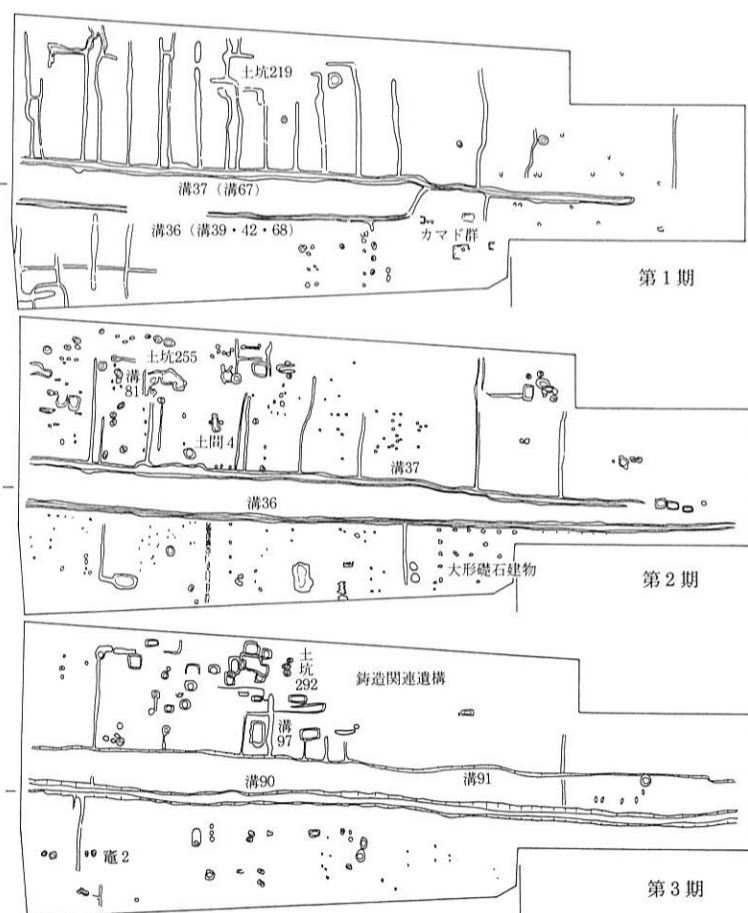


図4-V-1 3A調査区三の丸築造以前の遺構変遷

であるならば、第3期から第2期への変化は、第3期の町並みの核を構成していた工人達のここでの役割の終わった時期に対比されることになり、その契機には惣構の築造がもっともふさわしいものと考えられることになる。その場合溝90の埋没時期は1595年である。ただしこれはあくまで記録に残っていた限りでの城下町形成の諸段階であり、とくに第2期の成立が惣構の築造を遡る可能性について、それをここでまったく否定するものではない。

2. 遺物の検討

(1) 3A溝90

A. 瀬戸・美濃窯製品 (図4-V-2)

a. 大窯第3段階前半

105は灰釉内禿皿、109は鉄釉丸皿であり、全面施釉で底部内外面に輪ドチを残す。貫入が目立つ。106は鉄釉(褐色釉)稜輪花皿である。底部内面にトチン、外面には輪ドチと読解不明の線刻がみられる。150・149は共に褐色釉で体部下半に錆釉を施した小天目碗である。

b. 大窯第3段階後半

111～114は灰釉内禿皿であり、113は熱を受け、底部外面に輪ドチ痕を残す。104は灰釉折縁皿、100は内面に丸ノミ状工具による刻文(ソギ)のみられる灰釉折縁皿であり、100の口縁部は鈍く底部内外面に輪ドチ痕を残す。

158は黄天目碗である。

138・140～142・144～146・151～154・156・157は天目碗である。138は黒色釉、140は褐色釉、141は黒色釉で口縁部のみ褐色を呈する。142・144・151・153・157は褐色釉、146・156は黒色釉で体部下半の露胎部には錆を施している。154は褐色釉で体部下半の露胎部には錆を施している。また145は暗い褐色の釉で内面全体に漆がこびり付き篋先で掻きとった痕跡がみえる。

185・162は黄瀬戸丸碗、163は鉄(黒色)釉丸碗である。155・159は灰釉丸碗であり、155は内面の貫入がめだつ。

c. 大窯第4段階前半

147・139・161は天目碗である。148は透明度の高い黒色釉、139は褐色釉で161は透明度のある褐色釉である。102は同段階の灰釉で内面に丸ノミ状工具による刻文(ソギ)の入った折縁印花皿である。

d. その他

181は大窯第3段階または第4段階の鉄釉徳利である。黒色と褐色の釉が重複している。

160・148は大窯第3段階の天目碗である。共に黒色釉であり148はとくにその透明度が高い。

110・103・107・108・48は大窯第3段階の灰釉丸皿である。110は底部外面に段をもち、全面施釉、103の釉はガラス質を呈し、貫入をもって底部に溜まる。107は全面施釉で底部外面に輪ドチ痕をもつ。108は底部外面の中心部が露胎である。48は底部外面に輪ドチ痕が残り、ガラス質の釉が底部内外面に溜まる。なお101は大窯期の灰釉丸皿であるが被熱により釉は灰白色に変色している。

B. 備前窯製品 (図4-V-3)

166・169・172・171・168・170は播鉢である。いずれも断面板状の口縁部をもち、その内端部には、凹線による段が、外面には沈線または幅の狭い凹線が数条巡る。口縁部の外縁下端の形状により、171のように体部からそのまま「L」形に成形されるもの、169・168・166のように体部と口縁部の境に平

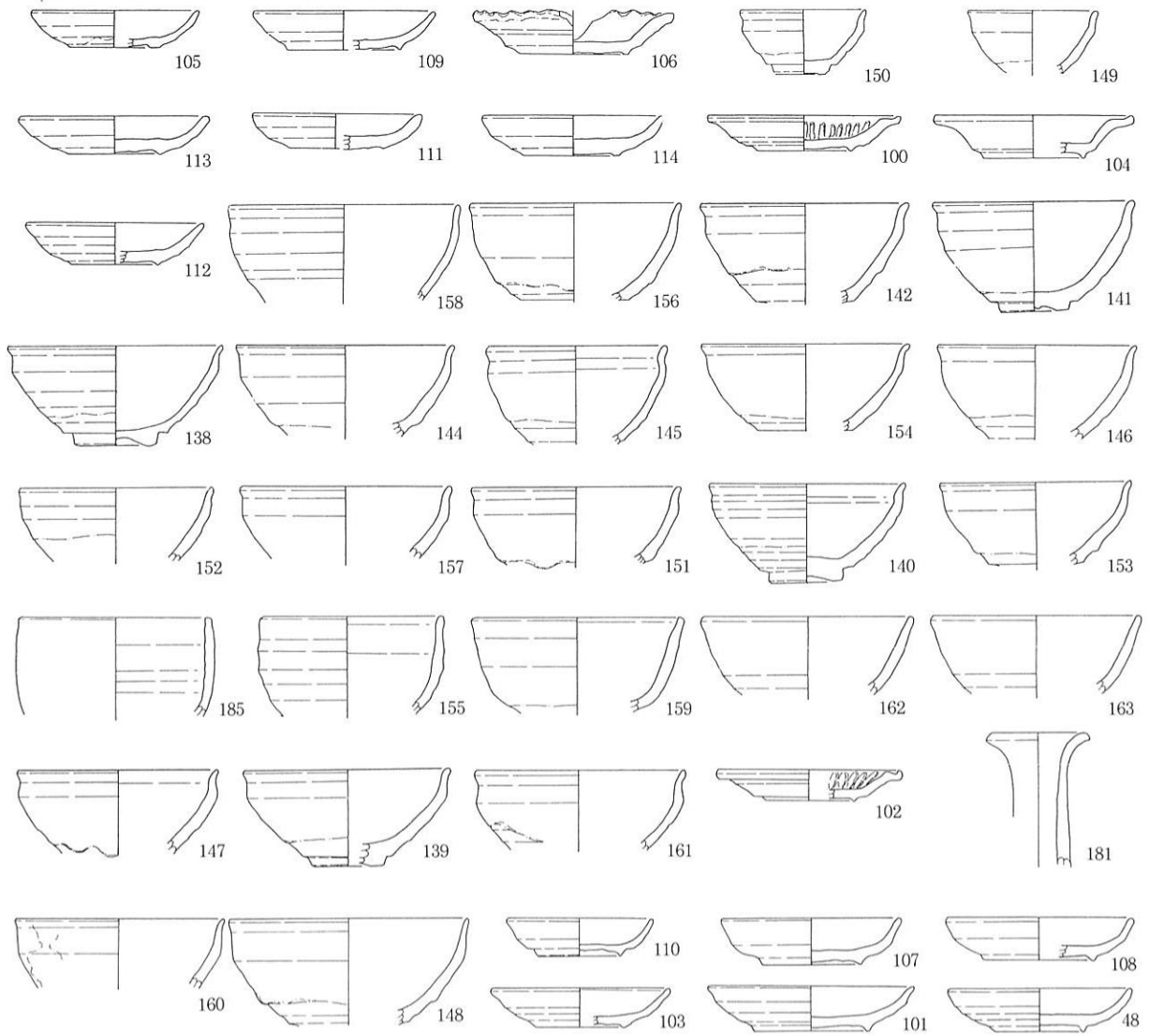


图4-V-2 3A沟90出土瀬戸・美濃窯陶器 (1/4)

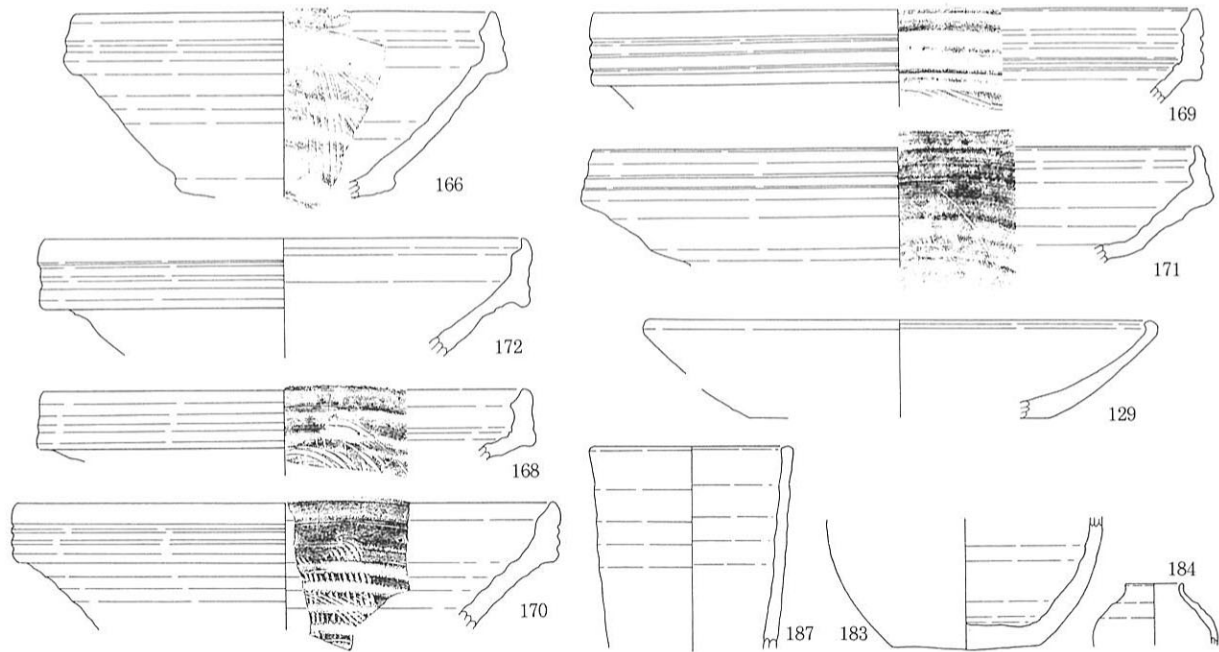


图4-V-3 3A沟90出土備前窯陶器 (1/4)

坦面をもつものとその中間の形態（170）、そして172にみられるような下端部の発達したものに分けられる。129は盤である。体部外面下半は丁寧なケズリで仕上げられ、内側へ折り曲げられた口縁部をもつ。187は筒型の容器である。内外面に轆轤による凹凸が残る。183は徳利の底部、184は小壺の上半である。

C. 土師器・瓦器製品（図4-V-4）

188・190～201は土師器皿であり、191・200を除きこの時期に京都で出土する同器種と形態が類似する。197は底部を上押し上げたいわゆる「ヘソ皿」に類似するが、同時期の京都での出土は知られていない。188は丸底で内彎気味の体部と、尖らせて口縁端部内側につまみ上げによる凹線を巡らせた形態をもつ。京都では16世紀第3四半期に比定される山科本願寺石室内資料より出現する。その他、この器種は基本的に口縁端部にみられるつまみ上げの省略で変遷をおさえることができるが、いずれもつまみあげが失われる直前でその痕跡が平坦面になっていく過渡的な段階におさえることができる。なお、京都では体部上半が外反気味に成形されるのを一般的なものとしており、その点で内彎形態をとり底径の広い191と200は大坂で製作されたスタイルと言えよう。

178は土師質に焼成された小形釜である。その形態的特徴は和泉を中心として、出現が13世紀後葉に遡る瓦器釜の後裔に類似するが、法量は著しく異なる。180は大和で生産された土師器釜である。124・125は土師質焼成の盤または蓋である。胎土は178に似た砂粒の多い粗いもので、内面に煤の付着するものもみられる。外面は口縁部がナデ、底部が不調整であり、内面はナデにより、一部に刷毛状調整痕のみられるものもある。

174・173は大和で生産された瓦器挿鉢、175は京都でみられる瓦器捏鉢、189は瓦器香炉である。175の類例は京都の烏丸線内遺跡No.15濠1や内膳町遺跡のSD164などでみられ、丸みを帯びて仕上げられた口縁部と内面に施された磨きを特徴とする。

D. 輸入陶磁器ほか（図4-V-5）

115～123・126～128・132・134は中国製染付である。119は底部内外面が露胎で薄いコバルトの圏線をもつ。120は体部内面上半に斜格子文、底部には圏線を配す。また高台際に釉の溜まりがみられる。122は底部内面に「長命富貴」と圏線、外面に「大明年造」と2重の圏線を描く。127は鮮明なコバルトで底部内面に花文と2重圏線、底部外面に方角の文字文を記す。115は口縁部内面に圏線、底部内面に2重圏線と花文を配す。釉調は鈍い。117は鮮明なコバルトで底部内面に鱗状の文様を描く。高台端部には砂が付着する。118は鈍い釉調で体部内面に花文と口縁部内面に圏線を描く。128は底部がやや盛り上がり、底部内面と体部外面に鮮明なコバルトで玉取獅子が描かれる。126は内面に2重圏線と花文、高台内に匏ケズリの痕跡がみられる。121は高台内が露胎で、底部内面は輪状の掻き取りと外面に逆「V」字の連続文がみられる。132は底部内面に圏線、外面に大柄の花文が描かれる。高台内は露胎でコバルトは鈍く、内面には炭素が付着している。

177は丹波窯の盤、176と186は信楽窯のそれぞれ挿鉢と水指と考える。

E. 漆器（図4-V-6）

皿と椀に分けられる。皿の92・93は共に赤色漆を内外面に施したもので、特に93の色調は朱を呈する。無文である。94・95は低器高の椀、96～98は高器高の椀と考えられる。95は内外面赤色漆、97は内外面黒色漆で、それ以外は外面が黒色、内面が赤色漆である。なおいずれも破片資料であるが、96と97の外面には草花文の装飾が確認された。

(2) 3A溝37 (61~67)、3A溝36 (45~59) (図4-V-7)

61・62・43・44は漆器である。43以外は内外面赤色漆で、62には外面に動物と草花を組み合わせた吉祥文様をもつ。43は内面が赤色漆で外面には金箔が貼られ、底部を持たない器形である。組み合わせ式の台であろうか。57は丹波窯挿鉢、55・56・58・59は備前窯挿鉢である。

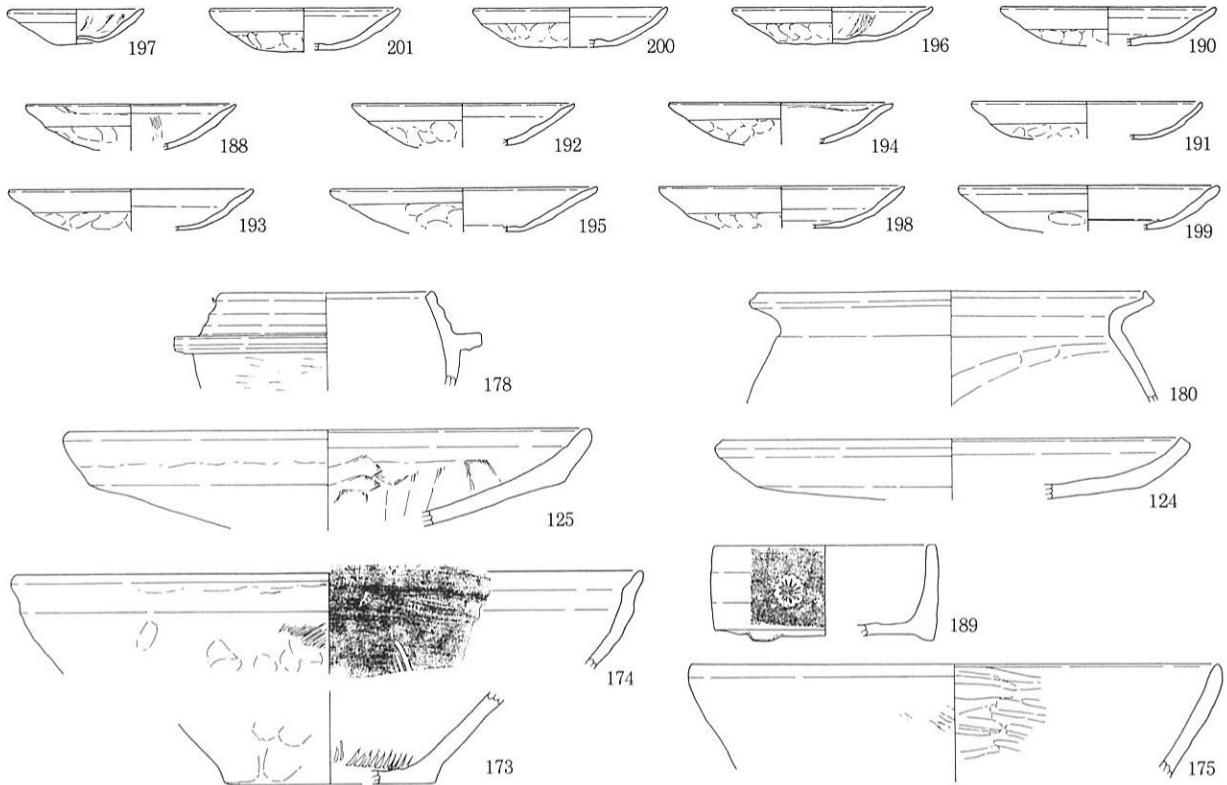


図4-V-4 3A溝90出土土師器・瓦器製品 (1/4)

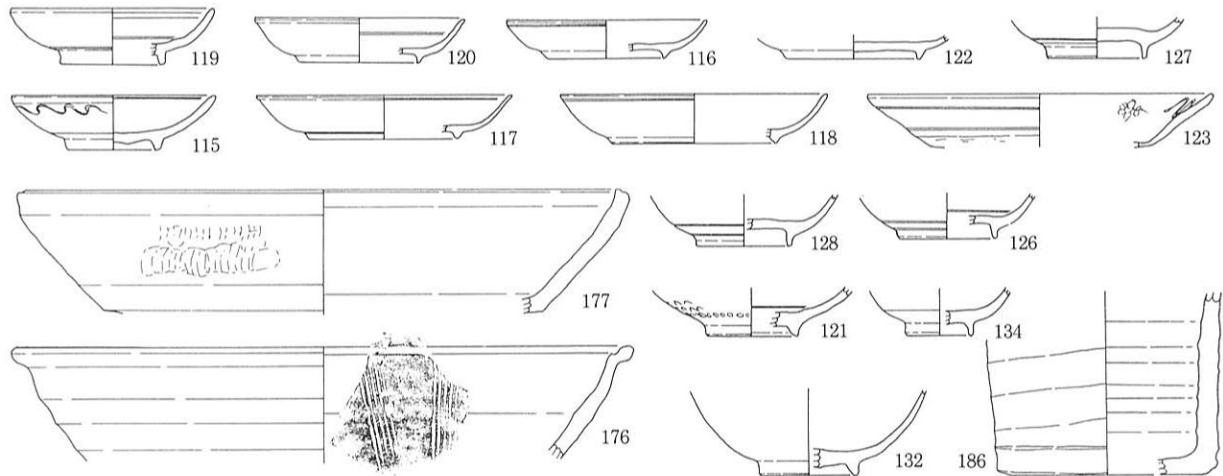


図4-V-5 3A溝90出土輸入磁器と丹波・信楽窯製品 (1/4)

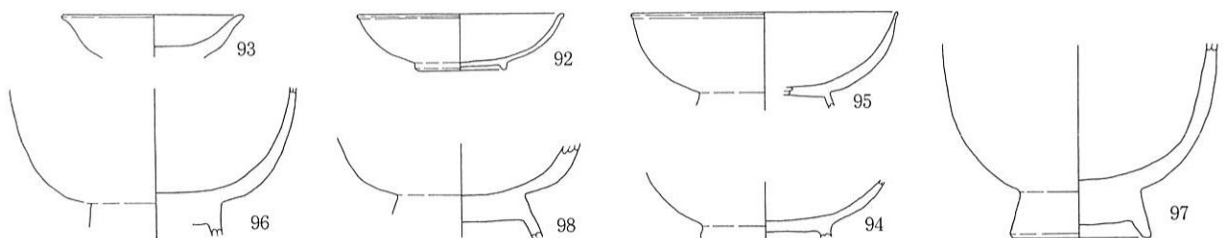


図4-V-6 3A溝90出土漆器碗 (1/4)

瀬戸・美濃窯製品は大窯第3段階前半から第4段階前半までの時期の製品がみられる。第3段階前半の資料は45の鉄釉稜皿である。全面に褐色釉が施され、底部内面の3カ所にトチン痕、外面に輪ドチ痕が残る。第3段階後半の資料は46・50・52・63である。46は透明度の高い黒色釉の天目茶碗であり、口縁部は褐色釉がみえる。なお底部際には薄い錆が施される。50は明るい褐色釉の天目茶碗であり、体部下半に厚い釉が溜まる。52は褐色釉の折縁皿である。外面の底部際は釉が薄く、褐色の錆釉の施された器壁がみえる。内面には黒色の斑をもつ。薄く低い輪高台を有する。63は灰釉折縁皿である。底部内面は露胎で外面に輪ドチ痕が残る。第4段階前半は65と66である。65は底部際に錆を施した褐色釉天目茶碗、66は灰釉丸碗である。64と47は第3段階の灰釉丸皿と器面の荒れた暗褐色釉の天目茶碗である。

3. 小結

(1) 時期について

出土状況から推定できる遺構の時期については、すでに前項で述べたとおりである。そこでここでは瀬戸・美濃窯と備前窯における生産地での研究成果からこの問題を検討してみたいと考える。

A. 瀬戸・美濃窯

瀬戸・美濃窯において当該時期の資料群は、連房式登窯以前で半地下式の穴窯とも区別された、一般に大窯の時代と呼ばれている時期の資料群にあたる。これまでその編年研究は、赤塚幹也氏以来、中央自動車道の建設に伴う土岐市内での調査を経て、樫崎彰一・今井静夫・田口昭二・井上喜久男氏らによ

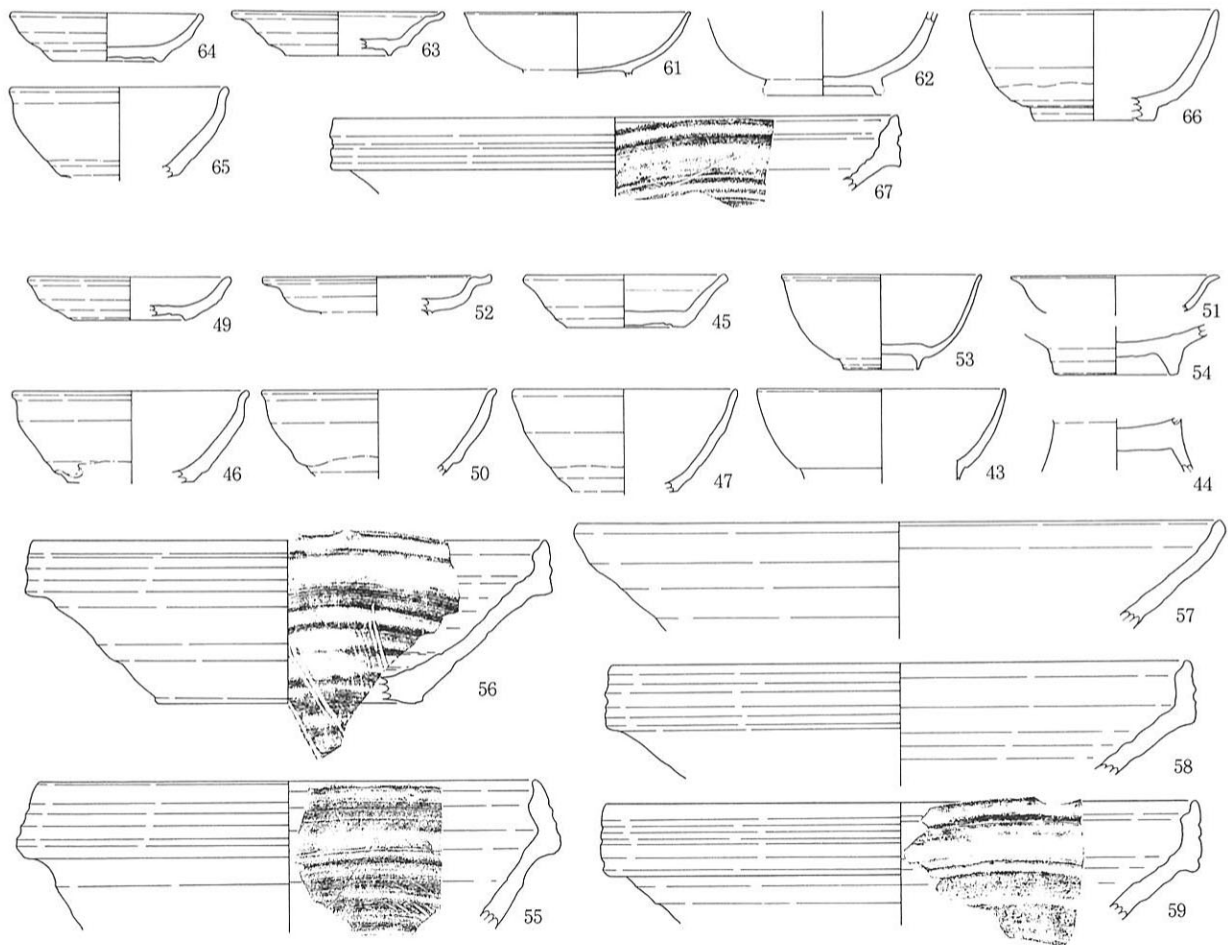


図4-V-7 3A溝37(上)・3A溝36(下)出土遺物(1/4)

ておこなわれてきたが、近年、藤澤良祐・伊藤嘉章の両氏により、窯単位ではなく型式学的な視点によるその再検討が進められている。以下藤澤氏による『瀬戸市史』（陶磁史篇）4を対照しながら本資料に関係する第3段階と第4段階の確認をしていきたい。

藤澤氏によれば、第3段階とされる窯は瀬戸市の月山窯、多治見市の尼ヶ根2号窯、土岐市の定林寺東洞1号窯であり、筒形碗、内禿皿、折縁皿、大皿、徳利、水指、建水、茶釜が新たにつくられ、向付も最末期に登場するとされる。また釉は内禿皿と折縁皿が灰釉で、他の器種は主に鉄釉である。一方第4段階は土岐市の定林寺西洞1号窯、隠居西窯、高根窯沢窯などとされ、平碗、端反皿、丸皿1類が消え、丸皿2類、稜皿、内禿皿も激減する。そしてそれに代わって登場するのが志野丸碗・筒形碗・丸皿（初現的なものが第4段階前半、本格的な生産は第4段階後半）、瀬戸黒茶碗（筒形）、織部黒茶碗（杵形）、鉄絵皿、菊皿、反皿、輪禿皿などのいわゆる桃山陶器類である。

さてこれらの資料の中で最も出土量の多い天目茶碗の変遷を辿れば、第1段階前半は「高台幅が狭く高台脇の削り込みの浅い輪高台で、体部の立ち上がりは強く、口唇部はあまりくびれず口縁端部は玉縁状になる」。第1段階後半は「高台内の削り込みの浅い内反り高台」が出現。共に高台周辺は濃い錆釉が施される。第2段階は内反り高台で体部が直線的に開き、口唇部がくびれ、高台周辺に錆釉が施される。器形は前半から後半へむけて扁平化し、高台周辺の錆釉も薄くなる。また後半には「削り出し輪高台で、体部が直線的に立ち上がり、口唇部も直立した」2類が出現する。第3段階は高台径が広がり「体部はやや丸みを帯び全体に厚手」となり、高台周辺の錆釉もかなり薄くなるか、見られなくなる。第4段階では「さらに器高が低く、体部の丸味は強くなり、口唇部のくびれも大きく、端部は玉縁状になる。2類も扁平な形状になる。高台周辺の錆釉はほとんどみられない」。

ところで第3段階の標識とされる月山窯では、天目茶碗が輪高台（A～D類）と内反り高台（E類）とに分けられ、さらにE類はその体部形態により輪高台のA～C類に対比されている。その詳細は、A類は体部がほぼ直線的に開き、口唇部が直立して端部のやや外反するもの、B類はA類と同様な口縁部形態で体部の丸味を帯びたもので、高台は断面が逆台形、C類は「全体に小振り」で器壁が薄く、口縁部が一旦内傾するために断面がS字状を呈するもの、D類は「全体に大振り」で、体部の立ち上がりは強く（傾きが急）、口唇部は直立して端部の外反の弱いもの、である。

そこでこれらの分類を溝90資料と対比してみると、第3段階とされた天目茶碗（14点）の内、高台周辺に錆釉を施したものは3点で約21%をしめる。また、高台に残っている2点は共に削り出し内反り高台のE類であり、口唇部の内傾が見られず、体部に緩やかな丸味があるためB類に該当する。それ以外の資料は高台を欠くため高台の違いを特徴とするAとB類の識別が難しいが、158は大振り口縁部の屈曲が弱いためD類、144と145は口縁断面がS字状を呈することによりC類、142・153は体部が直線的なためA類、それ以外は体部が丸味を帯びたB類の特徴が強いものと考えられる。以上、これらの資料はいずれも第3段階の要素で説明されたことになる。

さて大窯の実年代については藤澤氏の整理によれば、第一段階の成立は文明8年（1476）に今川義忠に攻められて廃城となった静岡県勝間田城で大窯製品が見られないところから、これ以降におかれ、第3段階については、永禄2年（1559）に織田信長によって落城した愛知県岩倉城の資料にみられ、永禄5年（1652）に没した北向道陳が好んだという箱書きのある黄瀬戸茶碗が第3段階に比定され、天正3年（1575）に廃絶したとされる一乗谷朝倉氏遺跡の朝倉館で第1段階と第2段階の製品と共に第3段階後半の折縁ソギ皿がみられることから、その成立は1559年頃、その後半は1575年頃におか

れるとされる（これらを総合した藤澤氏の年代観は、1555～1590年）。

一方第4段階については、可見市の大萱窯下2号窯から採集された文禄2年（1593）銘の黄瀬戸向付が第4段階の資料であり、天正18年（1590）に落城した八王子子城にこの時期の前半の播鉢が見られる点、天正19年（1591）に没した千利休所持と伝えられる黄瀬戸花生がやはり第4段階であること、そして京都市上京区下立売通千本東入田中町出土の慶長8年（1603）銘黄瀬戸向付がこの時期であるため、その成立は1590年頃、終わりは1603年頃を基準とすることができるとされる（同じく、1590～1610年）。

それではあらためて3A調査区溝90とこれらの資料関係はどのようになるのであろうか。遺跡の変遷を繰り返せば、3A溝90は現位置から離れていた可能性を考慮しても、金箔瓦を埋土中に含んでいるため、少なくとも豊臣秀吉による大坂城築造（1583年）以降に機能していたものであり、その廃絶は前項の理由により惣構が築造された1594年より新しくなることはないものと考えている。したがって、この溝に廃棄されていた資料群の帰属する年代は、原則的に1583～1594年におかれる、と言えることになる。一方、この実年代を藤澤氏の編年にあてはめれば、およそ氏の第3段階の終わりから第4段階の初めに比定されることになるが、これは先に述べてきたように、3A溝90資料が藤澤氏による第3段階前半～第4段階前半の資料から構成されている点と矛盾しない。量の中心が第3段階後半にあるため、おそらく藤澤氏による第3段階後半の一時期に持ち込まれ、その後に補充されたのが第4段階前半の資料なのであろう。さらに類推を進めれば、第3段階前半の資料が少ない上に器種に特別なものが見られないため、第3段階後半の始まりは、この溝に面して町並みがつくられ始めた1583年前後におかれ、また第4段階が含まれていることを前提にすれば、逆にこの溝の廃絶は1590年以降に限定できることになる。その場合、その原因は惣構築造に決めることができ、その結果3A調査区第2期の景観は大手前地区における惣構期の実態として、あらためて今後の大坂城下検討に資する貴重なデータとなりえよう。

なお志野製品については、3A溝90ではみられず、第2期の溝36・37でも確認されていない。さらにこれまでの知見で、本調査区周辺における三の丸築造以前の包含層中での出土もみていない。遺物と遺跡の関係を編年基準にする場合には、出土状況の確認に関してこれまで以上に煩雑な手続きの求められることは既に別稿で述べたのでここでは繰り返さないが、この現象が藤澤氏の第4段階の細分に関わる議論に発展するのであれば、志野製品の有無に関わらず、これらの資料は今後求められる課題に対し、有効なデータを提供しえたものとする。

B. 備前窯

備前窯におけるこの時期の資料は、間壁忠彦氏による備前窯5期の製品にあたり、伊部の集落をとりまく形で西・北・南に集約された3つの大窯がその主要生産地である。以下、根木 修氏の整理によれば、²⁾南大窯の成立は、記録において慶長8年（1596）銘の丸形サヤと、この時期を特徴付ける石入りの大甕の紀年銘が元亀2年（1571）から寛永元年（1621）まで知られており、その年代的位置づけに手がかりを与えている。

一方出土資料においては、慶長5年（1600）年に廃城となった岡山県の富山城と寛永14年（1637）に成立して寛永16年に廃止された二日市遺跡の岡山銭座跡が比較される。富山城の資料は、2石入り大甕・大形水屋甕・壺・鳶口小壺・播鉢・徳利などでいずれも5期後半の特徴をもち、一方二日市遺跡銭座跡からは播鉢・大甕・水屋甕・徳利・壺・茶入れ・大皿などが出土し、いずれも5期より新しい様相を示すものであると言う。そしてこの中で播鉢の特徴をみれば、二日市銭座出土の播鉢は、富山城出土の播鉢に対して器高を減じ、口縁部は肥厚して断面が三角形を呈している。本調査区でのありかたと共通す

る状況である。

(2) 組成と定量について (図4-V-8)

溝90の組成を検討するに際して、最初に確認しておかなければならないのが、これらの製品を使用(廃棄)した人間像についてである。先に整理したように、特に第1期に比定される溝90の隣接地からみつかった遺構群は、铸造関連の施設および簡易な礎石と竈であり、それゆえ小稿ではこの時期のこの地区住人の特徴を「職人」と位置づけてみた。したがって溝90から出土したこれらの資料の多くは、いずれも铸造に関わった職人などの家財道具であったものと考えられることになる。

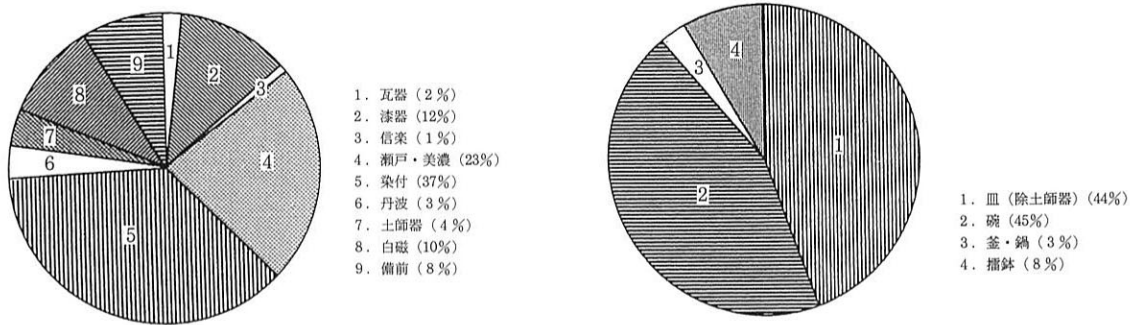


図4-V-8 3 A 溝90出土遺物の定量グラフ

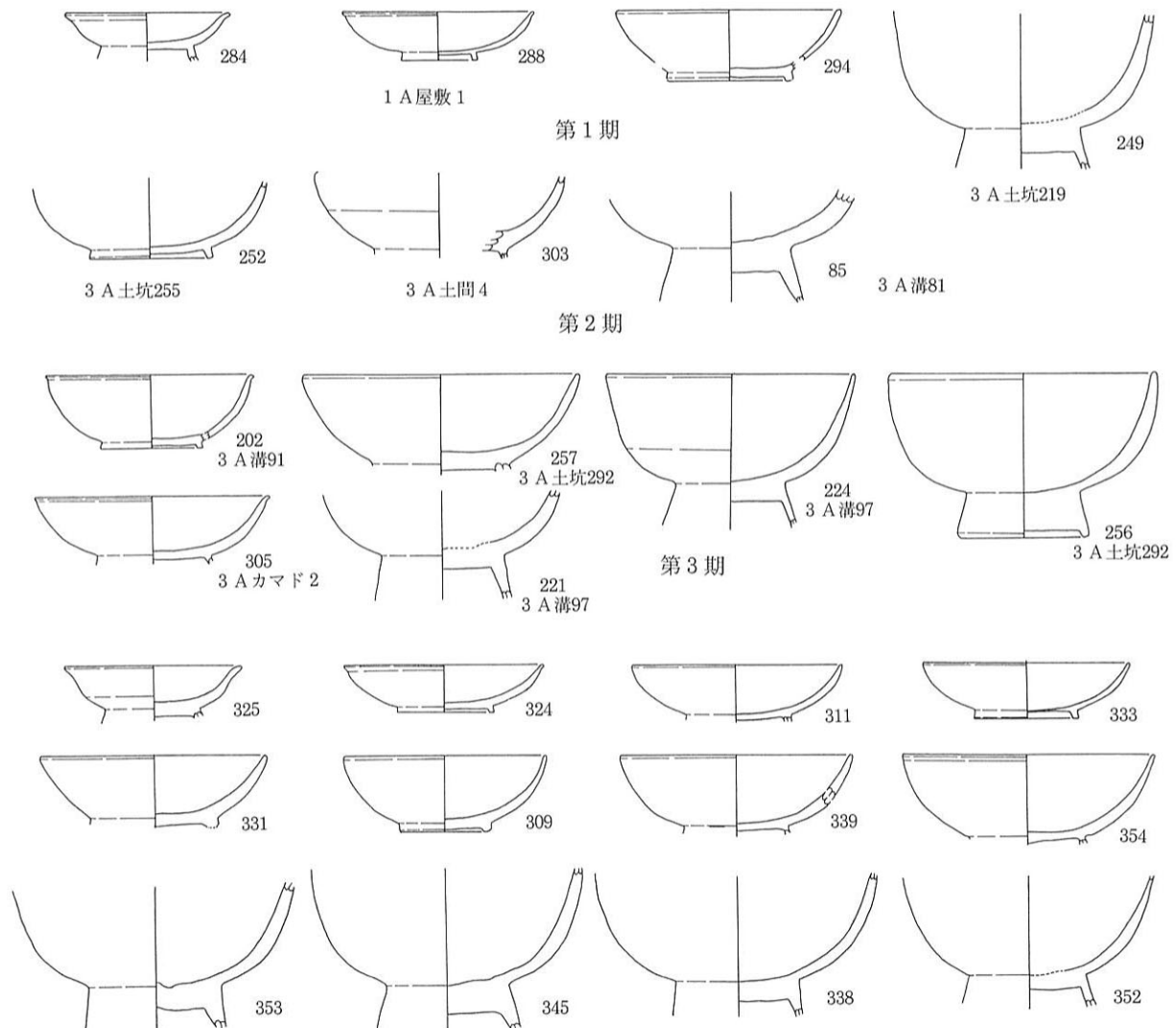


図4-V-9 三の丸築造以前の遺構および包含層出土漆器 (1/4)

そこでこれを前提として器種構成をみていくと、食膳具が漆器碗・皿、土師器皿、中国製染付碗・皿、朝鮮製白磁碗、中国製白磁皿、瀬戸・美濃窯碗・皿、備前窯盤、丹波窯盤、土師器盤、調理具が大和型土師器釜、和泉系土師器釜、備前窯播鉢、信楽窯播鉢、大和型瓦器播鉢、京都系瓦器捏鉢、貯蔵具が備前窯甕・壺、信楽窯壺？などであり、これに、溝90では出土していないが、鉄鍋、播磨型土師器鍋、瀬戸美濃窯播鉢、和泉系土師器甕などが加わる。ただしここで分けた用途分類はあくまで便宜的なものであり、土師器皿の全てが日常の食膳具に使用された訳ではなく、煮炊具の主体は鉄鍋であったものと考えられる。

さてこれを前提としてまずはじめに気づくのが肥前系陶器の欠落である。これは三の丸築造以後にみられる同製品の大量出土と特に著しい対比をみせ、それは主に皿器形の出土量の差となって現れてくることは既に別稿で述べたとおりである³⁾。次に中国製品とそれ以外の製品の関係であるが、瀬戸・美濃窯と漆器の合計よりも染付と白磁の合計数の多くなっていることがわかる。これはその使用者であった職人層を考慮すれば、中国製品が国産の製品に対して、一般においても相対的にそれほど特別なものではなかったことを示していると考えられることになる。

一方これらの製品の定量比では、いずれも破片数で土師器を除いた数値であるが、碗と皿がほぼ同数になっている。この結果は概要報告で整理した1A調査区の屋敷1（3A調査区に対比すれば、第2期の町屋にあたるものと考えられる）と同様であり、この結果は、三の丸築造以前の時期の一般家庭が消費していた食膳具の組み合わせの実態に近いものをあらためて確認したと言えるのではないだろうか。

(3) 漆器碗について (図4-V-9)

三の丸築造以前の基準となる資料に関して、これまで土器・陶磁器を中心にみてきたが、本調査区では漆器も多量に出土しており、この製品についても確認しておかなければならない要件がある。

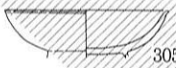
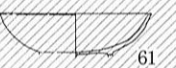
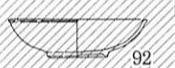

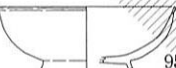
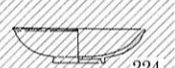
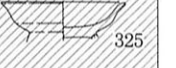


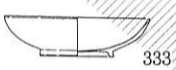


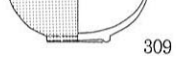

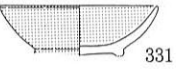
分類	I	II	III	IV	V
A	a	 305	 61	 92	 284
	b	 95		 224	 325
B	 224	 354	 333		
C	 256	 257	 309		斜線は皿器形
D	 345		 331		スクリーントーンは黒色漆

図4-V-10 三の丸築造以前の漆器分類図

最初に漆の色についてみれば、内外面共に赤色漆を塗布したものは、44・61・62・92・93・95・202・221・224・249・284・288・305・311・324・325・333・339・352・354、内外面ともに黒色漆を塗布したものは、85・97・345であり、これら以外の製品は、338が内面黒色漆・外面赤色漆であることを除き、いずれも内面が赤色漆で外面が黒色漆の塗布となっている。次に器形であるが、大きく皿と椀に分けられ、椀は高台より上の高さで、おおむね5cmを境にして高器高の椀と低器高の椀に分けられる。たとえば皿は92・93・284・288・311・324・325・333であり、低器高の椀は61・62・94・95・202・252・294・305・309・331・339・257・354でありそれ以外の椀は高器高に該当する。

一方文様であるが、35点中15点で確認でき、多くが破片のため、残存部位以外に施文されていた可能性を含めると、半数以上の漆器に文様が付けられていた可能性がある。具体的には草花文か鶴などの描かれた吉祥文が多く、96・97・62・256・331・309・339・333にそれがみられる。次に多いのが家紋系文様であり、249では巴と分銅、345では瓢箪、221では銭文など、ほかに311・354でも同類の文様が記されている。

他に本調査区出土漆器の特徴として底部内面に焼け痕のある製品がみられ、中には貫通しているものも認められる。44・249・324・338がそれらであり、324以外はいずれも高器高の椀である。

以上これらの特徴を整理したのが図4-V-10である。漆色の塗り分けと器形の特徴によりA～Dの4群に分けられ、法量によりI～Vのサイズが認められる。A・B群は内外面赤色漆の製品であり(305は底部外面のみ黒色漆)、このうち器高・口径の減少するII～IV類は、口縁部の形状により大きく外反するA-aと小さく外反するA-bおよび外反しないB群に分けられる。なおA-V類はI～IV類と相似形にない特殊な器形を呈する。

C群は外面黒色漆・内面赤色漆の製品であり法量はB群と同様にI～IIIの段階をもつ。なお256は高台高の特に厚い製品であるが、これによってC群の器形が代表されるものではない。D群は内外面黒色漆の製品であり、今回の調査区では法量がIIの資料は認められなかった。

さてこれらの分類が示す意味を考えると、分類図で明らかなように、皿器形はほぼA群に限定できそうである。C・D群については法量規格のIV・Vは見られず、法量IIIについても器形は椀に近い。次に椀形は口径が15・14・12cmの3段階に分けられそうであり、それらはD群を除きいずれのグループにも当てはまる。D群についても将来出土する可能性を指摘しておきたい。一方これらの分類を文様の要素と合わせると、A群は305が目につれない底部外面を黒色漆としている以外文様を持たないことで共通する。これに対してB群は全ての製品において動物・草花・家紋系などの多彩な文様を外面にもつ。そしてC・D群においても多くは外面に文様をみることができる。したがってこの状況から類推すれば、他の器形と異なる特徴として口縁部の外反するA群は、法量規格の点においてもB・C・D群と区別され、さらに文様の有無においても区別されることになるのである。

これ以上の議論は民俗資料をふまえる必要があるが、三の丸築造以前の漆器の実態を推測するものとして、A群はいわゆる「晴れ」の場で使われる特殊品であり、日常品としての漆器はB・C・D群の中に見いだされ、したがって日常品としての漆器の皿は無く、椀はおそらくそれぞれ違った料理の入った3つの法量からなっていた可能性が高いことになるのではないだろうか(図4-V-11)。

なお漆器椀の法量分析によれば、時代を経ることにより体部厚さの薄い製品が多くなる傾向と、一方三の丸築造以降のある段階において、1.9cmを中心とした、体部に対して底部の著しく厚い一群の存在したことを確認することができる。また口径と器高については完存している製品が少ないため数値の

全体

全体

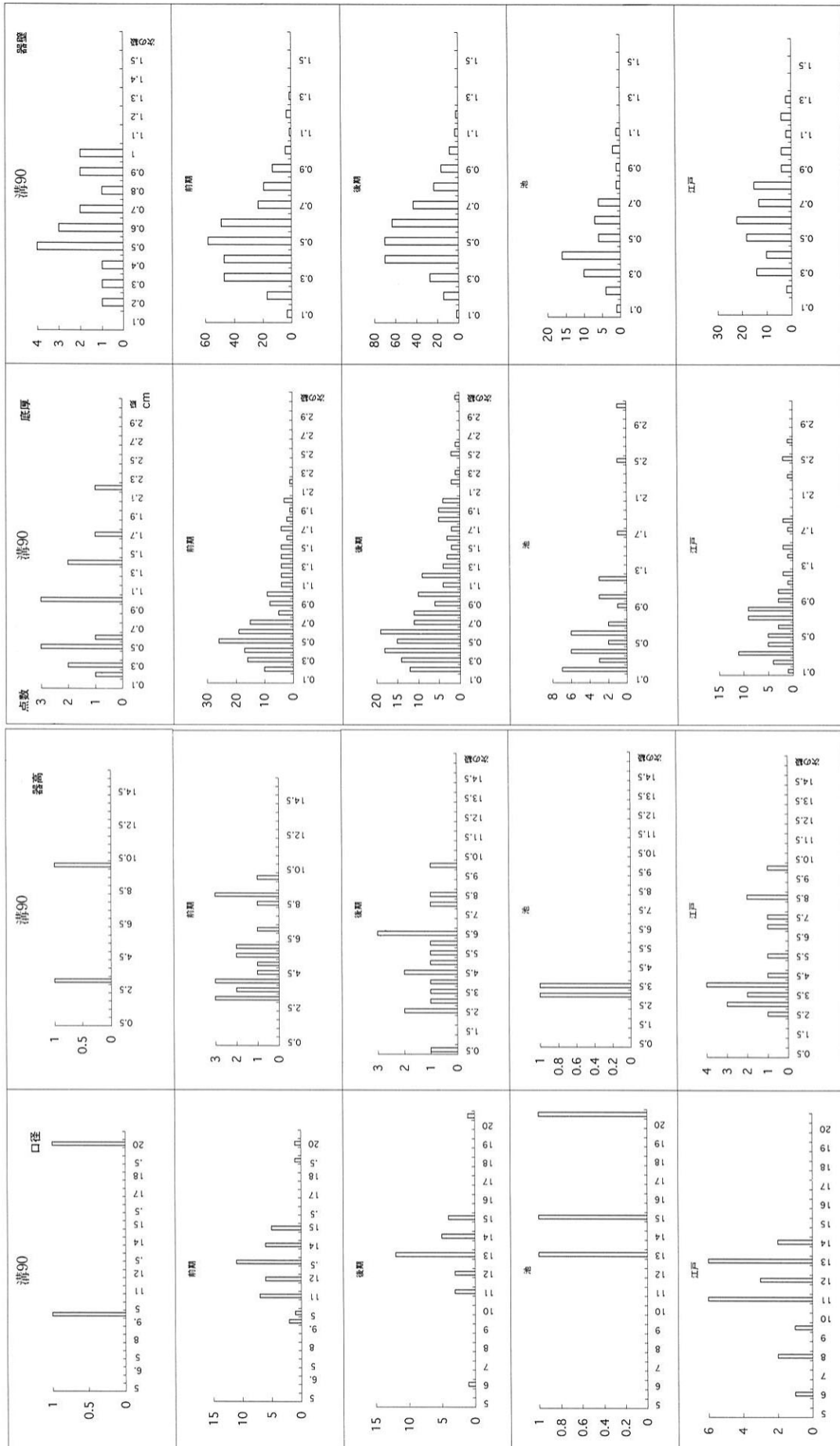


図4-V-11 漆器碗の時期別法量グラフ

信頼性は高くないが、江戸時代以降のデータでは器高が3 cm程度の皿と8.5 cm程度の椀に分けられ、基本的にはその規格が三の丸築造以前まで遡及できる見通しが得られた。さらに椀については豊臣期において器高が6 cm前後の製品もあったことがわかる。なお口径は基本的に13 cm前後がこれらの時期に共通する規格と言うことができよう。

また本調査区の東に位置するトレンチからは、製品以外に漆器椀素材と思われる木地椀が2点出土している(337は2D調査区・後432は3C調査区)(図4-V-12)。これまで木製品の椀として多く取り上げられてきたのは、完成品の漆器であり、土器・陶磁器が生産地を前提として議論されるのに対し、その生産と流通については言及される機会が無かった。これに対して本調査区では、漆が先端に付いた篋が多量に出土し、漆容器として使用された天目茶碗のあることも見てきた。加えてこれらの木地椀が、トレンチは異なるものの出土したのである。しかもこれらはいずれも轆轤目の残った未仕上げの椀なのである。この木地椀は、この時期の大坂に塗師以外に轆轤師も定住していたことを示しているのであろうか。あるいは塗師がおこなっていた製作工程の未分化の部分を示しているのであろうか。

民俗と文献史料に現れる古代から近世の漆器生産については、橋本鉄男氏の研究が詳しい⁴⁾。その中で木地椀の製作に関わる工程をみれば、木地挽きは、原材を根伐・間伐・玉伐し、荒木取りと中切りを経た後におこなわれ、滋賀県でのその工程は大きくアラビキとシアゲに分けられる。アラビキは荒木地から椀のだいたいの形を作る工程で、シアゲはブリキヤリとシゲカンナにより、またそのままでは鉋目が

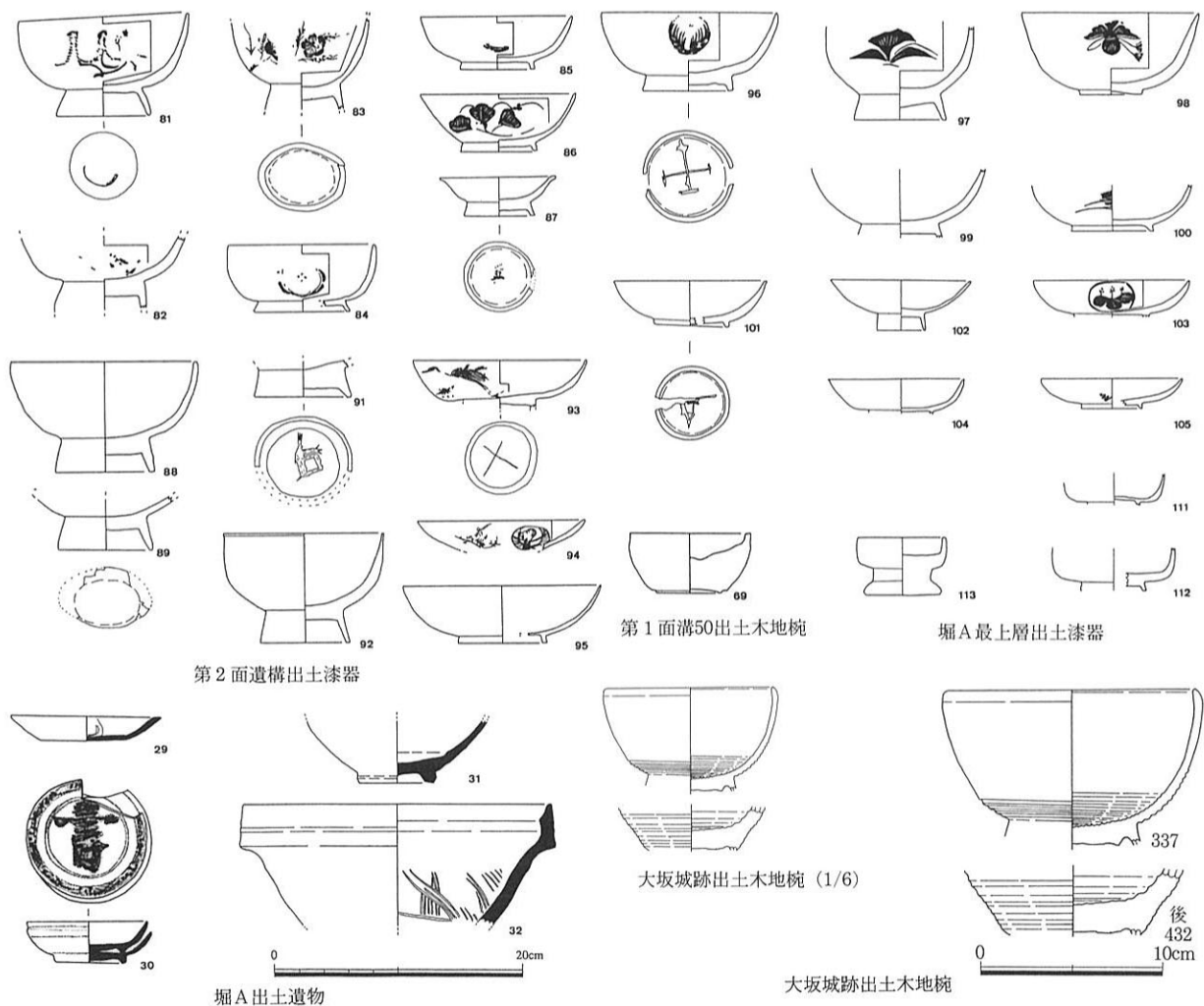


図4-V-12 京都・旧二条城跡堀A出土の漆器と木地椀

筋になって残るため、キサギという鑿状の工具で取り除き、その後爪跡を切り落としてさらに木賊で磨くとされる。

337は高台裏のヘソが完全に切り落とされておらず、鉋目が残ったままなので、このシアゲの工程の前段階か途中の段階と思われる。さらにヘソが不整形に残っているため、作業途中で轆轤の爪にくい込ませていたヘソが折れてはずれたため、そのまま放棄された個体であるとも考えられる。近世の木地椀は、シアゲ工程を経て搬出（荷持ち）される場合と形木と呼ばれる原材のまま運び出されて、里で挽かれる場合もあったとされるが、塗師が木地挽きのシアゲ工程のみの工具を揃えるのは合理的でなく、木地屋としての木地挽きの一貫性を重視するならば、本遺跡で出土した木地椀は、シアゲ工程を経ずに荷持ちされたものではなく、大川を流されてきた原材よりつくりだされた椀屋または椀師の品物であった可能性が考えられることになる。木挽きに必要とされた鉄製工具の再検討が、将来必要である。

それでは都市における椀製作は文献でどのように記されているのだろうか。やはり橋本氏の研究によれば、京都では大永⁵⁾3年（1523）の引付に、禁裏御大工職であった轆轤師の内木小太郎宗盛が登場し、天文4年（1525）の「口宣案」では同名の人物が左近衛将曹（従7位下で御大工職）に任ぜられている。さらに彼らは永正16年（1519）に御物の挽物を調進し、諸国往反と洛中洛外の商売を認められたとしており、室町幕府の京都所司代を勤めた春長軒貞勝が永禄6年（1563）にそれを追認している。近江における惟喬親王伝説や小椋谷にある蛭谷の木地屋根元地記録で知られるように、彼らの本拠地はおそらく山野であり、常に洛中にいたかどうかはわからないが、少なくともこの頃には洛中の市町の職人として彼らが存在していたことは、うかがうことができる。

すでに「延喜式」の漆部司に遡り、13世紀代の「伊予国免田注文」と室町時代の「庭訓往来」に現れる、轆轤師と塗師屋または塗物師から推測されるように、この時まで彼らは分業の関係にあるのが前提であったといえる。しかるに天文3年（1534）以降につくられた蒲生氏の日野椀のように、城下町を構成する都市民として各種の職人が集住させられるにいたり、やがて出羽国川連の椀師のように、木地挽きから漆塗りまでを一貫作業でおこなう姿も現れてくるのである。ただし木地屋と塗師屋の関係の全てが川連椀師の様であるかという点、輪島塗りの場合は逆に専門が高度になるにしたがい分業が進んでおり、需要と製品の特徴によってそのあり方が多様であったことも考慮しておく必要がある⁶⁾。

そして大坂の場合、近江の筒井峠には京都江戸大坂の木地屋惣中が元禄7年（1694）に建てた石標があり、正徳3年（1713）の「和漢三才図絵」では「今もまた摂陽順慶町に漆椀多く之れ有り」「其れ根来椀最も佳し。今絶えて出さず。京大坂の椀を以て上と為す」と記され、「氏子狩帳」からは大坂木地屋は順慶町・備後町をはじめとして15にのぼる店を知ることができるのである。

今回出土した木地椀とこれらの関係については今後の課題であるが、これらの状況より、すくなくともこの木地椀から当時「上」とされた「大坂漆器」の原型を復原することは可能になった訳であり、やはり京都で出土している木地椀と比較すれば、それぞれの産地の特徴を抽出し、この資料はその系譜論・流通論に発展するものと考えられる。また木地屋と塗師屋の関係については、この木地椀が漆塗り工房の近くから出土し、さらに大手の間近にあったということ以上に現段階で述べることは無いが、この問題は、都市における職人の自立とスポンサーの関係の観点において、豊臣大坂城下町の実態を復原する新たなテーマにもなる。あわせて今後の課題としたい。

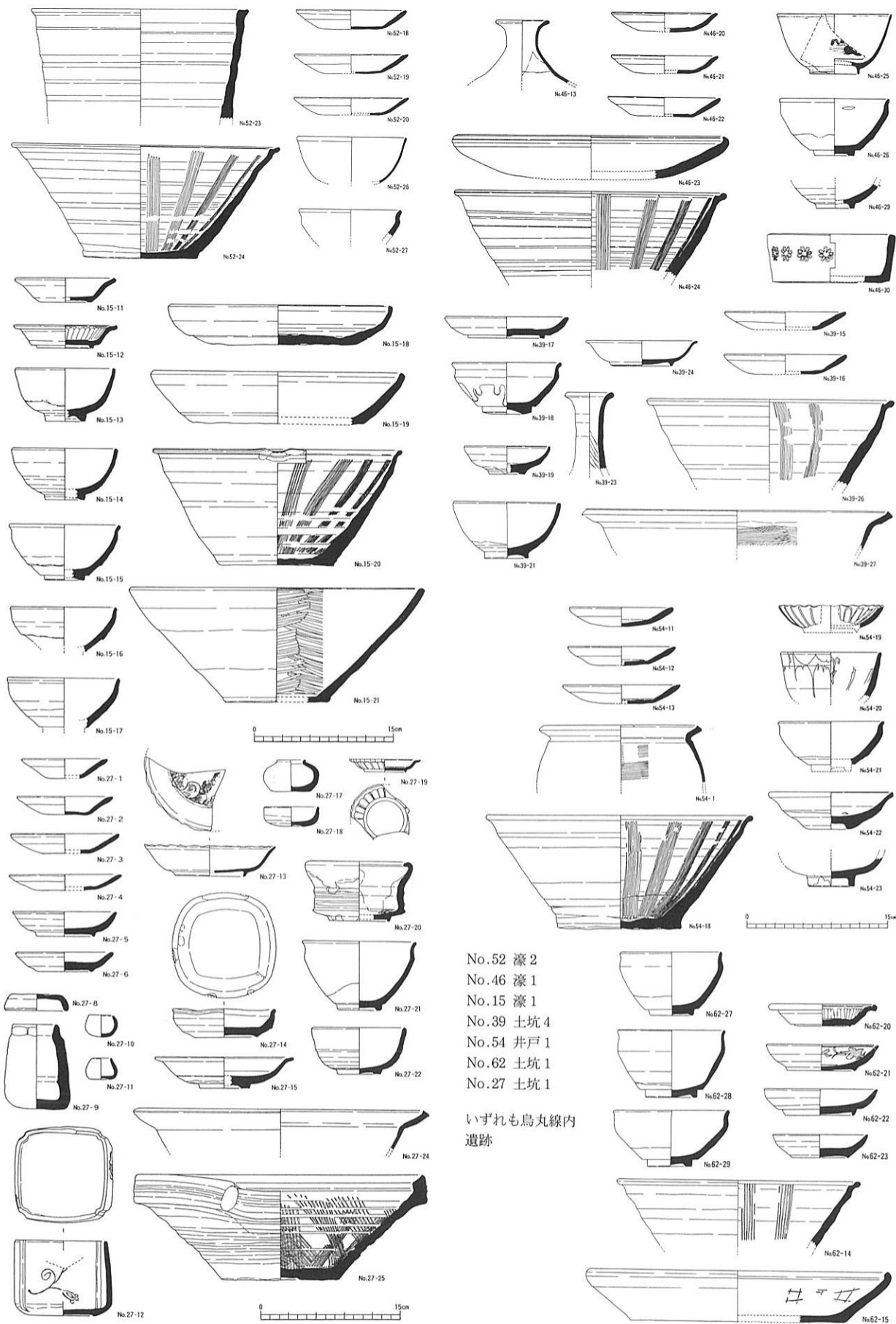


図4-V-13 京都出土の16世紀後半～17世紀初頭の陶磁器

まとめ

京都との関係 (図4-V-13)

これまで見てきたような大坂のあり方が、はたして当時の一般的な状況であったのか。ここではその一例としてやはり秀吉が都市改造に大きな影響をおよぼした京都をみてみたい。

京都におけるこの時期のエポックは、永禄11年(1568)の信長入洛以降、永禄12年(1569)におこなわれた禁裏御料西隣にあった武衛陣邸跡での足利義昭新第(旧二条城)の造営、天正元年(1573)の信長による上京焼き討ち、天正2年(1574)の信長による伏見城の破却、天正5年(1577)の禁裏築地の修築と天正10年(1582)の本能寺の変を経て秀吉の時代を迎える。秀吉時代以降については鎌田道隆氏にしたがって整理すれば、天正11年(1583)には二条南、西洞院西の妙顕寺跡地に京都支配のための政庁が新造され、これは「要害ヲカマヘ、堀ヲホリ、天主ヲアゲ」た構造であったという。この天正12年(1584)までが、鎌田氏による前政権を継承した前期豊臣政権である。次いで天正13年(1585)～天正18年(1590)までが後期豊臣政権への移行期とされる。天正14年(1586)には聚楽第が築造され、その規模は堀が幅20間(約36m)、深さ3間(約5.4m)、四周の延長は1000間(約1800m)であったという。あわせて天正17年(1589)と19年(1591)には聚楽町の条規が定められ、武家屋敷建設のために聚楽町の民家が移転させられている。そして下京の短冊型町割や天正19年(1591)のお土居の構築など激しい京都改造のおこなわれたのもこの時期であった。鎌田氏によれば、これに寺院町の形成などを加えた姿が、中世都市から近世都市への京都の変貌の直接的な現象であると言う。しかし文禄3年(1594)の伏見城竣工以降、秀次を自殺させると共に文禄4年(1595)には聚楽第を破却、秀吉は慶長3年(1598)にその生涯を閉じるのである。なおその後の京都改造に関わる事項は、慶長7年(1602)に家康によっておこなわれた二条城の造営である。

一方このような文献史研究の整理に対して、主に土師器皿の型式分類から編年された資料が図4-V-13の一群である⁸⁾。このうち濠はいずれも足利義昭の新第(旧二条城)に伴う遺構と考えられており、先の事情により、これらの遺物が天正10年(1582)より古い年代におかれる可能性は高いことになる。なお土師器皿の型式分類により、その先後関係はNo.52濠2→No.46濠1=No.15濠1と考えられる。器種構成は、土師器皿、信楽窯水指・播鉢、中国製磁器染付碗、瀬戸・美濃窯灰釉折縁ソギ皿・鉄釉天目碗、肥前または朝鮮系德利・碗、瓦器捏鉢・香炉、備前窯盤、丹波窯盤であり、天目茶碗は第3段階の製品と考える。

次いでNo.39土坑4とNo.54井戸1の資料群は、土師器皿の口縁部つまみ上げの痕跡である平坦面も失われ、その特徴により、先の資料より後出する時期のものと考えられる。ただし体部外面のナデはほぼ上

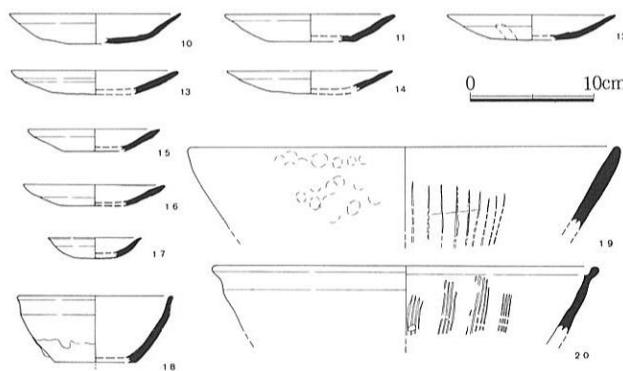


図4-V-14 聚楽第堀出土遺物

半に及んでいる。器種構成は中国製白磁皿・青磁皿、瀬戸・美濃窯皿・碗、信楽播鉢に肥前系陶器碗・皿が加わる。この資料に対して実年代を与える要素は少ないが、土師器皿の型式差を時期差におきかえることができれば、1583年以後で、さらに大坂では土師器皿の外面ナデが省略されるのが三の丸築造以後のため、その点においてこれらの資料を1598年以前にあてることも可能かもしれない。

そしてNo.62土坑1とNo.27土坑1の資料は、絵志野や志野向付をもった第4段階後半（藤澤）の一群である。備前窯播鉢についても口縁部断面が三角形を呈している。前記資料群と土師器皿での型式差を明確にすることは難しいが、17世紀に入った時期を推定する。

なお、図4-V-14は中立売大宮で調査された推定聚楽第堀出土の資料である。⁹⁾丹波窯播鉢、信楽窯播鉢、第3段階後半と思われる天目茶碗、土師器皿がみえ、出土状況がプライマリーであれば、これが文禄4年（1595）を下限とする基準資料とされ、それは3A調査区第1期と対比されることになるはずである。

以上、京都における土師器皿編年での対照資料と、聚楽第堀出土の基準として検討されるべき資料をまとめてきた。さてここで問題とされるべき大坂との対比であるが、年代については、当時の政治の中心にあった京都は、それゆえ実年代基準の要素となりうる事項が多く、特に大坂城下町の三の丸築造以前についてそれを細分するデータが豊富である。しかしいずれのケースにおいても検出された遺構と記録に残る構築物との関係の検証が難しい状況にあり、また特に濠遺構の場合は出土状況に厳密な一括性を有しないこともあり（たとえば足利義昭の新第は天正元年（1573）の室町幕府の滅亡によりその機能を減少させるわけであるが、天正10年（1582）の本能寺の変の際には、織田信忠、京都所司代村井貞勝は二条城で死んでおり、元の館のすべてかどうかはわからないが、「二条城」がこの時まで機能していたことがわかる。）、これらの実年代を示す考古資料の提示は、多くが未だ検討過程にあるのが事実である。

しかるに地下鉄烏丸線遺跡を中心とした土師器皿編年において、出土状況が示す先の事情にかかわらず、京都と大坂の変遷に大きな齟齬のみられないことは確認できたように考える。ただし、本来期待された1590年前後の京都大改造に関わる時期の検討されるべき基準資料は乏しく、今後の調査により、上京焼き討ち下層、お土居下層、天正地割り下層などの遺構が検出され、遺構の下限年代を示す有効なデータの得られることが期待される。

また組成と定量については、対照できる京都のデータが少ないが、17世紀初頭とされるNo.62土坑1では信楽窯播鉢27、丹波窯播鉢4、瀬戸・美濃系碗36、同皿26、肥前系碗34、同皿43の数値があり、碗と皿の比はほぼ1：1で、播鉢は信楽窯製品が卓越している状況を指摘することができる。このうち定量については、碗と皿の量比が同等を示すのは大坂では三の丸築造以前であり、三の丸築造以後は皿が碗より多い数値を示しているため、条件がまったく同じ訳ではないが、その点での違いを指摘できるかもしれない。今後の課題である。次いで播鉢についてであるが、京都では信楽窯製品が卓越し、備前窯製品はほとんどその姿を見ない。これは生産と流通に関して指摘できる、京・大坂での明確な地域差である。ただし、No.27土坑1では口縁部断面が三角形の備前窯播鉢が出土している。同時期の他資料の検討は十分ではないが、あるいは豊臣秀吉の死後、徳川家康の入洛によって、陶器の需要と供給に変化があったとしたら、これは中世から近世への都市の流通を考えるひとつの手がかりとなる。また中国製品についても京都は大坂より少ない可能性がある。あわせて今後の課題としたい。

限られた資料の中で、豊臣秀吉を共通の因子とする京と大坂の二つの都市をみてきた。結論をまとめる段階には至っていないが、両都市には共通する要素と異なる要素があり、中でも異なる要素に注目すれば、大坂はむしろ秀吉と無関係に成長してきた界と強く共通する要素（中国製陶磁器・備前窯製品）を多くもっていることが指摘でき、その点において秀吉が大坂に与えた影響が、他と比べてどのようなものであったのか、視点を変えてもう一度検討してみる必要も考えている。

小論の作成にあたり、藤澤良祐・森 毅氏よりご教示を賜った。記して謝意を表します。なお小論は、
 鋤柄俊夫 1998 「三の丸築造以前の基準資料」『大阪文化財研究』14号を基に作成した、鋤柄俊夫・
 森 毅 1999 「三の丸築造以前の基準資料」『研究紀要』第2号 大阪市文化財協会より鋤柄執筆分
 の再録である。

註

- 1) 鋤柄俊夫 1994 「大坂城下町にみる都市の中心と周縁」『都市空間』（中世都市研究1）新人物往来社
- 2) 根木 修 1983 「近世備前焼の変遷と年代観」『古備前図録』岡山市教育委員会
- 3) 鋤柄俊夫 1992 「大坂城三の丸跡（1A調査区）の調査」『貿易陶磁研究』12 日本貿易陶磁研究会
- 4) 橋本鉄男 1979 『ろくろ』（ものと人間の文化史31）法政大学出版局
- 5) 橋本鉄男 1985 「市町の木地職」『都市と田舎』（日本民俗文化大系第11巻）小学館
- 6) 天野 武 1986 「輪島の塗物」『技術と民俗』下巻（日本民俗文化大系第14巻）小学館
- 7) 鎌田道隆 1994 「秀吉の京都改造」『絢』（京の歴史と文化4 戦国・安土桃山時代）講談社
- 8) 京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』Ⅲ
 鋤柄俊夫 1994 「平安京出土土師器の諸問題」『平安京出土土器の研究』（古代学研究所研究報告第4輯）古代学研究所
- 9) 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993 「平安京跡（聚楽第跡）」『京都府遺跡調査概報』第54冊
 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994 「平安京跡・旧二条城跡」『京都府遺跡調査概報』第59冊

VI 大坂城跡 6 A 調査区検出の地震痕跡について

鋤柄俊夫（はじめに・1. 考古学的調査）

寒川 旭（2. 地滑り跡の形態と発生時期）

通産省工業技術院 地質調査所 地域地質研究官

はじめに

大坂城跡府庁地点の発掘調査は、大阪府庁舎周辺整備事業の一環として、平成2年度よりおこなわれている。これまでの調査により、不明な部分の多かった上町台地北端の歴史変遷について、古代から近世におよぶ長い期間で貴重な成果を得、そして明らかにすることができたが、その中でもこの地区の歴史的環境の根幹として注目されたのが、3A調査区を中心にみつかった東西方向の谷であった。

確認されたその位置は、谷の北肩が5B調査区のほぼ中央、南肩が1A調査区のほぼ中央にあり、一方その西端は調査区外へのび、東は1A調査区の東端で南へ曲がりさらに延長する状況をみせている。なお、大坂城跡発掘調査概要11で指摘しているように、その延長上には5A調査区の北東端で検出された谷肩が存在し、それはそのまま大阪市文化財協会の調査による、旧大阪市立中央体育館北端の谷頭につながっている。さらに同体育館北端調査で検出された推定難波宮期の石組溝と類似した石組が5B調査区でも確認されており、この谷の源のひとつが、旧大阪市中央体育館北端である可能性は高いものと考えられる。

現状で確認できるその規模は、上端での間隔が約60m、東西の長さが100m以上、豊臣期の三の丸築造以前におけるこの谷の深さは5mである。そして豊臣期の三の丸築造以前の町は、この谷の下と上に分かれて営まれていたのであったのだ。近世の絵図からだけでは、この上町台地北端も平板なイメージしか得られないが、実はこの場所は標高20～25m程度の山塊が連なった丘陵の先端部であり、その東西斜面には、浸食によって形成された複数の谷が存在していたのである。そして豊臣秀吉が最初につくった町並みはまだその地形条件の制約下にあったのである。

そんな起伏の多い町に、あるとき地震が起きたらいったいどうなるのであろうか。その痕跡とも考えられる遺構が、6A調査区の西南部分から発見されたのである。そこで小稿ではその事実関係を確認し、それが投げかける二、三の問題について考えてみたいと思う。

1. 考古学的調査

(1) 遺構および亀裂部の検出状況

豊臣期関連の遺構面は3期に分けられる。最初に江戸時代の盛土である5層を除去すると、一部では地表下2mほどで夏の陣に推定される焼土の整地層が検出され、同時にその南側の5B調査区の谷に対応するかたちで、南に弧状に開く形で5層の堆積が深くなり、全ての5層を除去すると、トレンチの大部分で焼土がひろがり、さらにその中央から南には、

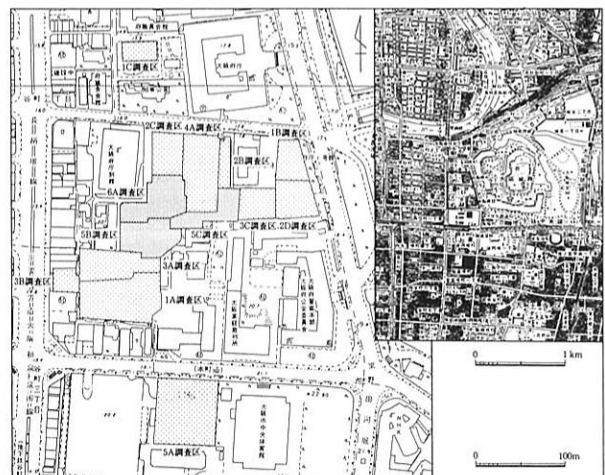


図4-VI-1 調査区位置図

半円状に開く谷が現れる。なおこの面に伴う遺構は、トレンチの北端で検出された南北軸の耕作溝および、西部で谷へ導かれている溝70であり、後者はとくに耕作に支障となる排水を担っていたものと推察される（第Ⅰ期）。

次にこの面の焼土層を除去すると、谷を上がった段上では、整地層上面から軸を西へ降った溝および土坑（瓦溜まり3）が検出され、また西部の谷斜面からは、2次焼成を受けた瓦の廃棄が確認された（第Ⅱ期）。そしてこの整地層を除去すると、基盤層面で東西軸の柱穴列が並び、それは弧状を呈する谷により中央の一部が削平されていた（第Ⅲ期）。さらにこの段階で谷斜面を精査していると、西端と中央の2カ所でいずれも焼土を挟み込んだ亀裂が見つかり、その断面観察の結果、その成因が地層のズレによるものであることが確認されたのである。

（2）遺物

この地区から取り上げられた遺物は少なく、各面の時期について詳細な年代決定の材料になるものも無い。なお瓦溜まり3と土坑175は同一の土坑と考えられ、土坑177は溝68との先後関係において第Ⅲ期としているが、それが第Ⅱ期内での先後関係である可能性も否定はできない。

瓦当4の巴尾部は長く巻き込むが、圏線とはならず僅かに途切れる。外縁の内端には粗い面取りが施される。丸瓦部凹面には布痕と、斜位で比較的密な切り放し痕跡が残る。また瓦当裏面から16cmの位置に凸帯の痕跡をもつ。5の瓦当文様は立体的で肉厚である。外縁の内端はナデにより丸く仕上げられている。胎土は精緻で砂粒はみられない。丸瓦部凹面には粗い斜位の切り放し痕跡残り、吊り紐形状は佐川正敏氏による深いD型である。

（3）小結

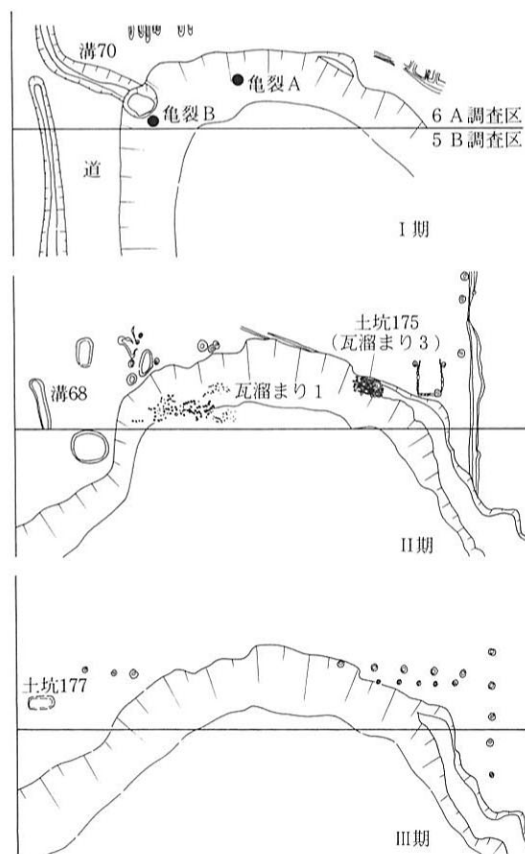


図4-VI-2 遺構変遷図 (1/500)

いうまでもなく発掘調査で得られた情報は、あくまでそれによって機能していたものが終わった後の情報であり、地形についても、それが機能していた時の状況を示しているばかりではない。そして本事例の場合も、夏の陣の焼土層で覆われた地形が豊臣期の全ての時期の景観を表しているわけではなかったのである。

事実を再度確認すれば、豊臣期のこの地点に最初にもうけられた構築物は、谷を上がった位置に並ぶ東西方向の柱列であった。しかしある時期、それはなんらかの原因により崖の一部が崩落し削平される。そしてその後再び谷の上の面では整地層が形成され、いくつかの遺構が作られる。しかしそれも夏の陣によって焼け落ち、焼土がその上を覆う。そして最後に、その焼土を耕作土とした畑が設けられるのである。

この時点で問題は2点顕在化する。その第1点は、最初の東西柱列を崩壊させた地盤の動きがいつ起ったかであり、2点目は、それでは地盤が崩落する以前の景観はどのようなものであったのか、である。最初にその第1点目から考えていってみたい。

最初の問題に対する手がかりは、谷斜面で検出された2カ所の亀裂にある。それらはいずれもその内部に焼土を挟み込んでおり、この亀裂の形成がこの焼土の生成以前であり、しかもそれほど焼土の生成と時間を隔てていなかった可能性を指摘することができる。そしてこの亀裂の原因が東西建物を崩壊させた原因と同じであれば、それによってこの崖面の崩壊の時期を特定することができるものとなる。ただしこの焼土内に時期を判定できるような考古資料は含まれていなかった。

それではこの亀裂の中に包蔵されている焼土はいつのもので、なにによって生成されたものであろうか。最も自然に考えられるのは夏の陣による焼土であり、亀裂は慶長伏見の大地震によるものである、という説明である。確かに谷斜面が崩落する以前に建っていた柱列は、三の丸造成に遡る時期の遺構として層位的におさえることができ、しかも豊臣期を遡る時期の遺構は付近では奈良時代以外見られないため、この柱列が本丸築造から三の丸築造までの間につくられたものであることは、蓋然性の高いものと言える。しかるに仮にこの亀裂を、三の丸築造以前で最も著名な地盤変動としての慶長伏見の大地震によるものとするれば、その形成は1596年であり、その結果亀裂の形成と焼土の埋没までの間に20年近い間隔をおくことになってくる。これは現実的にありうるのであろうか。考古学的な所見において、この問題に対するいくつかの可能性を整理していきたい。

まず谷斜面で検出された廃棄瓦の意味についてである。三の丸の造成の意味は、第1に本丸・二の丸の中枢部に近い場所を第3の防御ラインとして整備することとされている。そうであるからこそ、その造成後にはたとえば推定佐竹屋敷などの重要な施設が営まれたのである。しかるにその場所も夏の陣終結後は無人の地となり、焼土層は畑の耕作土に再利用されていく。すなわち、三の丸地区というのは、明確な目的をもって造成された区域であり、したがってそこが造成後に人の入らない空闲地としてそのままにされるとは考えにくいのである。ただしもちろんこれは全体の概観であり、細部においてはそのような場所があることを否定するものではない。しかし基本的な状況がそうであるならば、三の丸造成後のこの場所にも重要な役割を果たした建物が建っていたはずであり、それが夏の陣で焼け落ちれば、その廃材はその後の畑に邪魔なものであり、当然どこかにまとめて捨てられなければならないことになってくる。谷斜面で検出された瓦はそれらであると考えるのが妥当ではないだろうか。

したがってそうであるとするならば、亀裂が慶長伏見の大地震（1596年）を原因とした場合、その空隙が三の丸の築造（1598年）以降の生活によって埋まらないことは考えにくく、一方でそこに包含されていた焼土が、瓦の廃棄理由から夏の陣（1615年）によるものだとすれば、それらの関係には亀裂の形成と充填の過程において矛盾が介在することになってきてしまうのである。

それではこの亀裂は慶長伏見の大地震と無関係のものなのか、それともこの亀裂に入り込んだ焼土は夏の陣以外を原因とするものなのであろうか。次にこの点に絞って考えてみたい。

最初にこの亀裂が慶長伏見の大地震と無関係

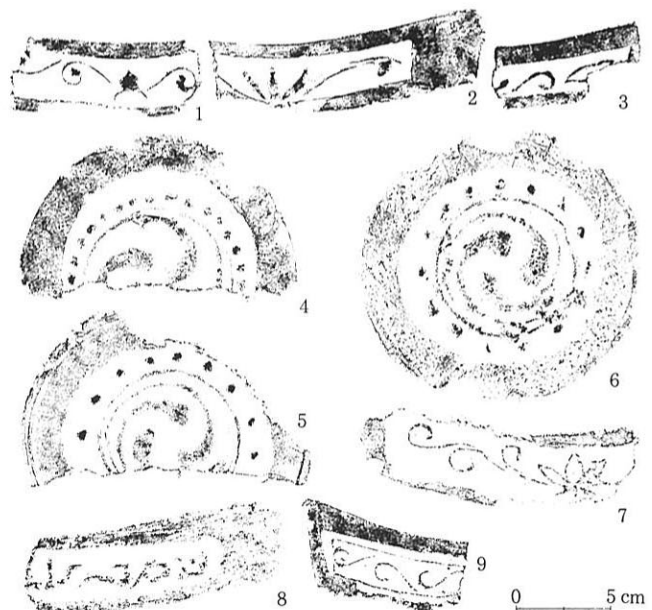


図4-VI-3 出土遺物（1～3：瓦溜まり1，
4・5：瓦溜まり3，6～8：土坑175，9：土坑177）

のものだとすれば、それ以外の原因を考え出さないといけない。この点については、次項の寒川氏の観察による判断によりたい。

次にこの焼土が夏の陣以外の原因によるものだという可能性を考えたい。その最も考えやすい例は、この亀裂が慶長伏見の大地震によるものだとすれば、それによって発生した火災で倒壊した建築物の残骸である、という考え方である。しかし、1990年以降6年間におこなわれた当府庁周辺整備地内の調査において、現在までに、三の丸築造以前と考えられる生活面で、顕著な火災の痕跡あるいは焼土の整地層はみられない。代表的な三の丸築造以前の事例である1A・3A・3B調査区において、みられるのはいずれも土砂による埋没である。またこの地点のみ火災が発生したとして、それを谷側へ廃棄したとしても、該当する5B調査区でそのような焼土層の堆積は確認されていない。また詳しい観察はできなかったが、倒壊した柱列やその生活面において、さらにその上層の整地層においても、焼土は目立たなかった。

したがって慶長伏見の大地震が上町台地を襲ったとしても、少なくともこの地点では大きな火災は起こっておらず、当然整地すべき焼土も無かったと言えることになる。なお、考慮すべきデータとして、瓦溜まり3（土坑175）の資料がある。図でわかるように、この瓦溜まりは谷を上がった段上に存在し、その点において谷斜面に溜まっている瓦溜まり1とは性格の異なるものである。さらにその出土状況は、浅い土坑に放り込んだかまたは詰めたとみえる可能性もある。加えて、その平面形は一部を谷の崩落によって失っているようにも観察されるのである。当初の検出状況から三の丸築造以降と考えたが、その場合は、斜面の崩落が1598年以降もあったことを示していることになる。

このように、亀裂内の焼土が慶長伏見の大地震に伴うものではない可能性が高いことによって、考古学的な所見では、この亀裂の出現は、夏の陣に近い時期と考えるほか無いようである。ただしここで言えるのは、あくまで亀裂に焼土が埋まった時期についてであり、ズレの発生した時期についてはなんら発言できるものはない。この点についても次項の寒川氏の検討により明らかにされるであろう。

次に考えなければならないのは、地層のズレと崩落の時期が確定できないにかかわらず、調査によって明らかにされた地形形状が、そのまま豊臣期の地形形状と考えてはいけないことであり、そう

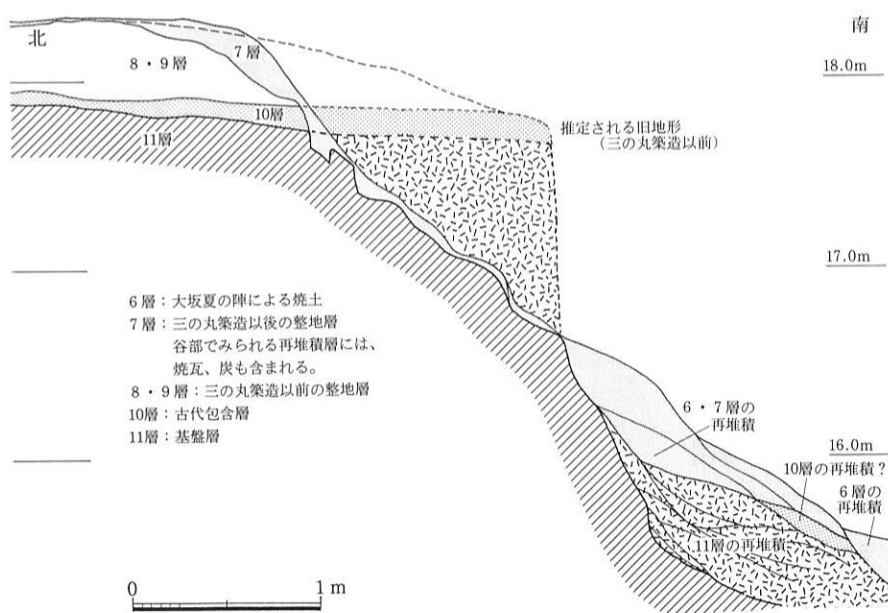


図4-VI-4 中央部南北断面図

であれば、本来の地形形状とそれによって形成された当時の景観はどうであったか、という問題である。さて、そこで問題となる崩落以前の柱列の時期であるが、それは先に述べたように、三の丸築造以前の本丸築造から惣構が整えられていた時期に比定される。この時柱列に従えば、この谷の北端はさらに南にあり、また弧形に広がった谷地形の末端の形状をみれば、本来谷肩は方格に整えられ、柱列と平

行していた可能性も考えられることになるのである。

この時期の城下町の景観については、すでに概要報告において自然地形に従った谷の下と上からなる町並みを復原してきたが、今回の事例を考慮すれば、その整備にあたり、場所によっては丘陵の縁辺を方格に変更していた可能性が高いのである。その目的はもちろん谷底の住民のためではなく、段上の住人の屋敷配置の意図によるものと考えられるが、当然その工事は谷底の住人に何らかの影響を与えるものであり、それが三の丸築造以前の時期のどの段階で、どのようにおこなわれたのか。この時期の都市と都市民の関係を考えるに際し、新たな問題を投げかける重要な資料になるものと考ええる。

そしてこの地層のズレと亀裂の生成および谷斜面の崩壊が、慶長伏見の大地震によるものだったとすれば、それは確かに建物を倒壊させるものであったのであり、その意味でその2年後におこなわれた三の丸の築造原因のひとつとして、中枢部での地形的制約が招く様々な都市機能の停滞や障害を嫌った、為政者による新たな都市計画の意味を、これまで以上に強く考慮しても良いのではないかと考えるところである。この問題については当該箇所以外での検討も必要であり、ここでは問題を提示するにとどめておきたい。

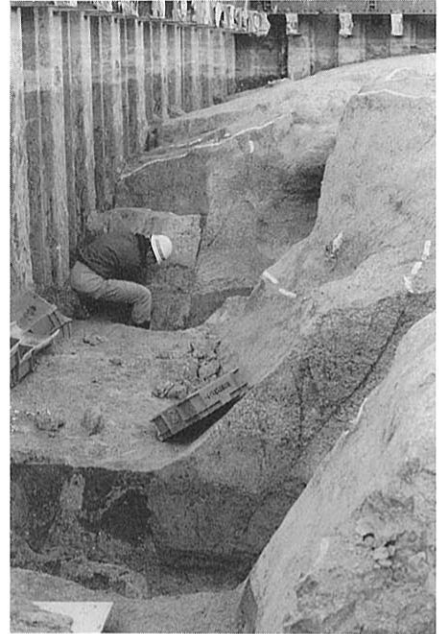


図4-VI-5 地滑りに直交する2つのトレンチ
(手前がA・向こう側がB)

2. 地滑り跡の形態と発生時期

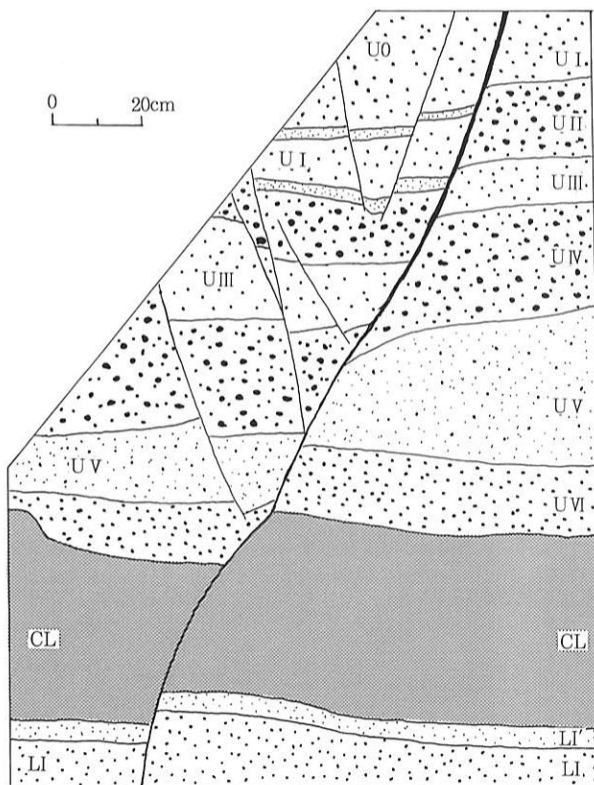


図4-VI-6 トレンチA西側壁面の断面図
(図の右方向がN13° E, ドットの大きさは粒子の大きさを表現している)



図4-VI-7 トレンチAの西側壁面上部

大坂城跡6A調査区の南端（5B調査区との境界付近）において、南に向かって開いた円弧状の地滑りの痕跡（南側が低下）が検出された。このため、図4-VI-5のように、2ヶ所で地滑り面に直交する小トレンチ（東側がA、西側がB）を掘削して、地層の食い違いと地滑りの発生時期を検討した。

（1）地滑り跡の形態

①トレンチAについて

トレンチAでは、粘土・砂・礫の互層に顕著な食い違いが生じている（図4-VI-6・7）。赤褐色の粘土～細粒砂が特徴的でよく連続するので、この層を基準の層（CL層）とし、上位の地層をU0～UVI層、下位の地層をLI層と名付けた。

U0・U1層は礫を含む粗粒砂で、下部に厚さ2cm程度の中粒砂を伴っている。U2層は粗粒砂を含む細礫。U3層は粗粒砂。U4層は粗粒砂を含む細礫。U5層は粗～中粒砂。U6層は細礫を含む粗粒砂。そして、LI層は礫を含む粗粒砂である。

滑り面は約60度の傾斜をもち、CL層より下では約80度とやや高角になる。CL層より上位の地層では、滑り面の南側に小断層が多く発達している。これらは、U0～U5層までを北側が低下するように小さく食い違わせており、下方は礫～粗粒砂の中で消滅している。地滑りによって滑り落ちた側（南側）に水平方向の引張力が加わり、地層が切断されながら下降し、小さな食い違いが生じたものである。特に柔らかくてすき間の広い礫～粗粒砂層は、地層中の粒子が移動することによって対応し、切断を免れたのであろう。

地滑りによる食い違い量は最大20cm、小断層による食い違い量は最大4cmである。

②Bトレンチについて

トレンチBでは、まず上半分を掘削し（図4-VI-8・9）、その後、壁面を少し後退させながら下

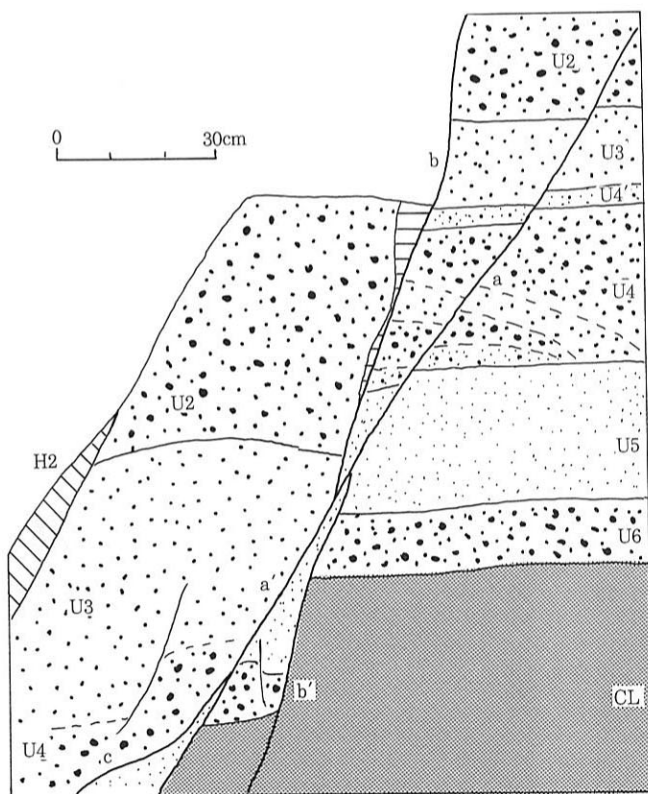


図4-VI-8 トレンチB西側壁面上部の断面図
（図の右方向がN20°W、bに沿ってしみ込んだH1は横線で示してある）



図4-VI-9 トレンチBの西側壁面

半分を掘削した（図4-VI-10・11）。ここでも、赤褐色の粘土～細粒砂を基準の層（CL層）とし、上位をU2～U6層、下位をL1～L3層に区分した。U2層は粗粒砂を含む細礫（最大径1.5cm）。U3層は細粒砂を含む粗粒砂である。U4層は細礫～粗粒砂で構成され、下部にはやや北へ傾いた層理（堆積構造）が見られる。そして、上位に厚さ4cmの粗～中粒砂（U4'層）が堆積している。U5層は粗粒砂と中粒砂の互層（交互に堆積した層）。U6層は最大径1.5cmの細礫層で、U7層は粗～中粒砂である。L1層は粘土層をレンズ状に含む粗粒砂、L2・L3層は共に粗粒砂で、L3層（図4-VI-12のように粒子の大きさが均一な粗粒砂）はうすい赤褐色を呈している。

図4-VI-8では、滑り面は大きく3系統に分かれている。北側の滑り面aは直線的で、約50度の傾きを示している。中間の滑り面bも直線的で約75度の傾きを示しているが、図の中央でaに切断されてbとb'に分かれている。aに沿う食い違い量がわずかなので、地滑りの最終段階でaが発生して、すでに存在していたa'と連続し、逆に、bとb'に沿う滑りが停止したものと思える。南側の滑り面cは南へ少しわん曲している。

地層の食い違い量は、aに沿っては2～3cmと小さく、a'およびbに沿って60～70cmとかなり大きな値となっている。b'については約25cmである。それ以外には、図の下部に小断層が2本認められる。

図4-VI-10では、壁面を少し後退させたため、滑り面の様子が図4-VI-8と少し異なっている。また、新旧2層の遺物包含層（下位よりH3・H2層）が認められる。

図4-VI-10の滑り面dは、図8のa'・b'に対応するもので、65度前後の傾斜で直線的に続いている。しかし、L3層の上部（L3層とH3層の境）に達した段階で、ほぼ水平な方向に角度を変えている。これは、L3層の上部に沿って、上位の地層が時計まわりの回転を伴いながら、南（図4-VI-10の矢印の方向）へ向かって一気に滑り動いたことを示している。

図4-VI-10には、図4-VI-8に対応する滑り面cが見られる。cは下方で地割れ状に口を開き、この内部に上位の地層（U5～U7層）が落下している。これも、滑り落ちた地層に水平方向の引張力が強く働いたことによるものである。

dによる地層の食い違い量は5～7cm、

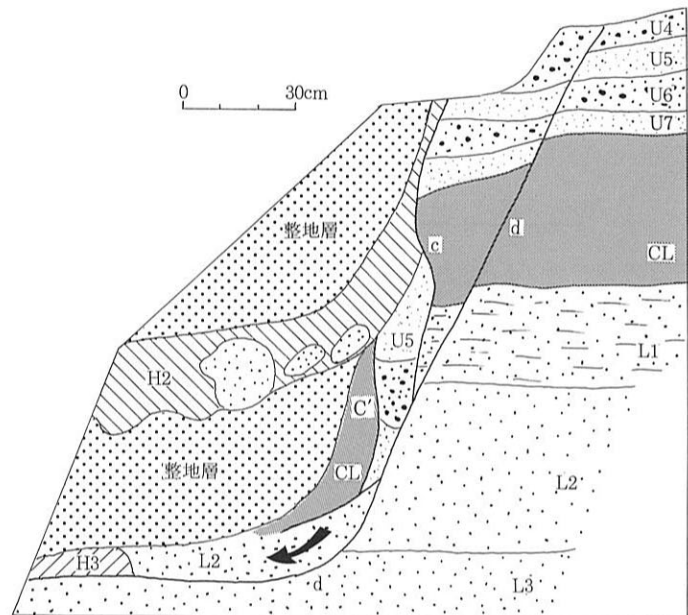


図4-VI-10 トレンチB西側壁面下部の断面図
（図の右方向がN24°W、矢印は地滑りの方向を示す）



図4-VI-11 トレンチBの西側壁面下部

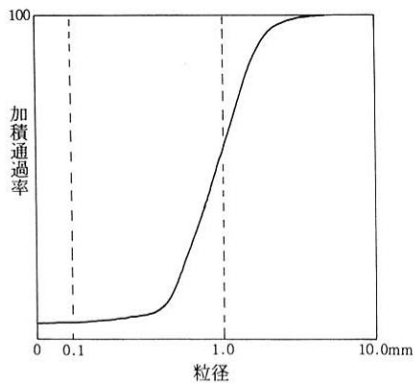


図4-VI-12 L3層の粒度分析結果

cによる地層の食い違い量は約40cm（CL層の上端）で、地割れに落下した垂直方向の量は約60cm程度である。

図4-VI-10の状態から、一連の地滑りは、L3層の最上部（当時は崖の脚部で地表付近の位置にあった）を境にして、崖の表面の地塊が厚くはがされるように、下方および水平方向に滑り動いたものとわかる。

（2）地滑りの発生時期

図4-VI-10より、地滑りは遺物包含層のH3層が形成された直後に発生したものと考えられる。なお鋤柄氏によれば、「H3

層はこれまでの周辺調査により豊臣期に該当し、しかも、夏の陣の産物と考えられる焼土層や、その下の遺物包含層および厚い整地層の下位に位置するため、三ノ丸築造以前（1583～1598年）に当時の生活面として形成されたもの」と解釈されている。このため、地滑りの時期も、概ね1598年以前に限定されることになる。

地滑りの発生後、滑り落ちた土塊をならすような整地が行われている。さらに、整地層（厚さ30～40

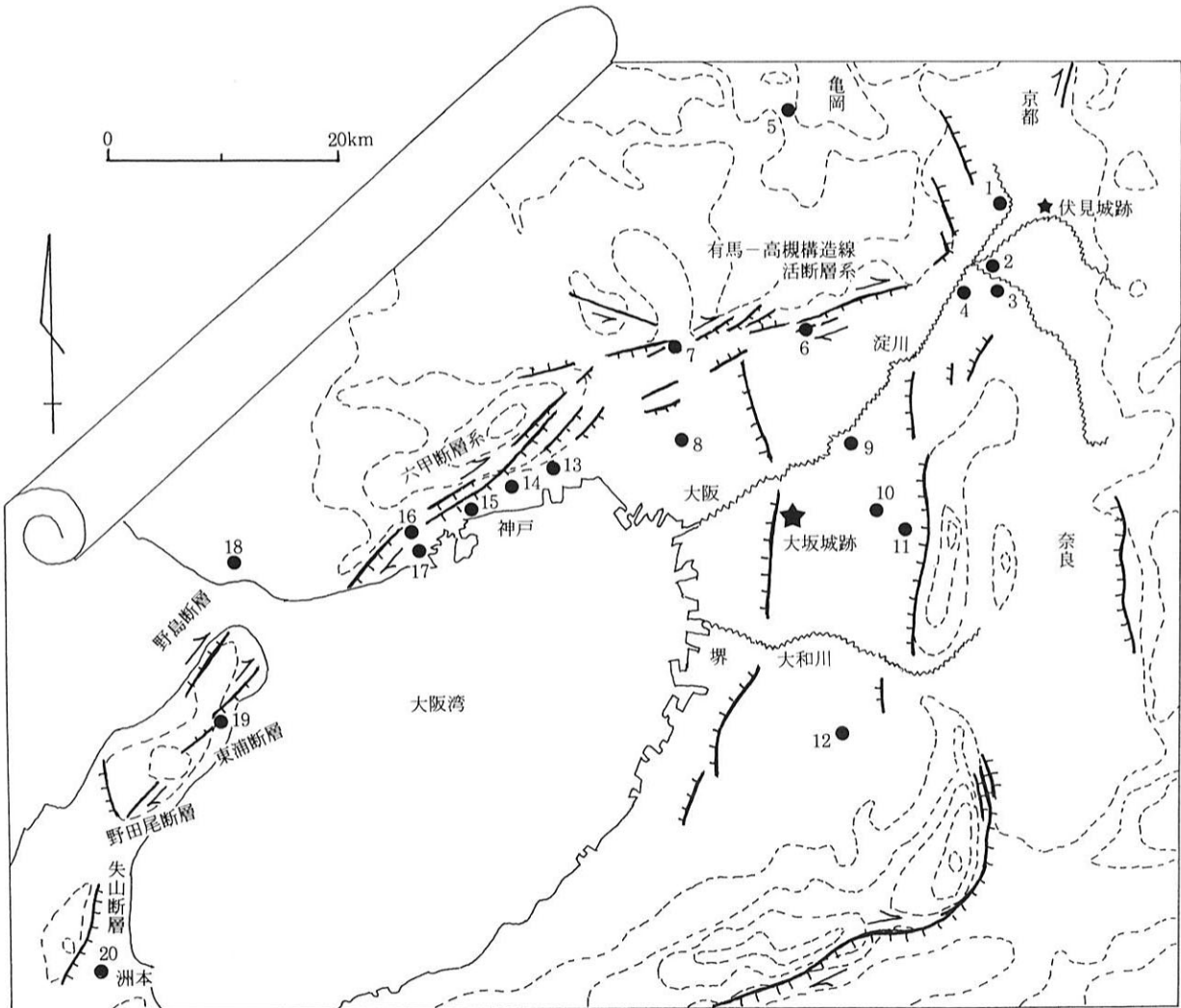


図4-VI-13 大阪平野周辺の活断層

太実線が活断層で、相対的に低下する側にケバをつけた。矢印は横ズレの方向。黒丸印は伏見地層による可能性の強い地震跡が検出された遺跡。1 志水町, 2 木津川河底, 3 内里八丁, 4 樟葉野田, 5 鹿谷, 6 耳原, 7 栄根, 8 田能高田, 9 西三荘八雲東, 10 西鴻池, 11 水走, 12 狭山池北堤, 13 寺田・業平, 14 住吉宮町・坊ヶ塚, 15 西求女塚古墳, 16 長田神社, 17 兵庫津, 18 玉津田中, 19 佃, 20 下内膳

cm)の上位に遺物包含層(図4-VI-8・10に示したH2層)が見られる。この層中には直径20cm程度の丸い土塊が含まれ、当時、崖部からの転石があったことがわかる。

包含層(H2)の上にさらに整地層がみられ、これを覆って(図4-VI-8・10の範囲外)大坂夏の陣(1615年)の焼土を含む包含層(H1)が堆積しており、この一部が図4-VI-8の滑り面bに沿う亀裂にしみ込んでいる。

地滑りの滑り面に亀裂が生じ、内部に柔らかい地層が流れ込む状況には、次の2つのケースが考えられる。——①その地層が地滑り発生前から地表を覆っており、地変と同時に口を開いた滑り面に沿って流れ込む、②地滑り後、滑り面の直上を覆って(多くは人為的に)厚く堆積し、まだ固着していない滑り面に沿って内部に浸み込む——であるが、今回は②のケースにあたる。

(3) 慶長伏見地震

今回の地滑り跡は、河川などによる浸食作用(崖の脚部が浸食によってえぐり取られ、重力の作用によって下方へ滑り落ちる)に起因するものではなく、強い震動などの、水平方向の外力が働くことによって生じた可能性が強い。

事実、地滑りが発生した年代(1583~1598年)に合致する1596(文禄5・慶長元)年9月5日には京阪神地域を中心に大きな被害を与えた伏見地震が発生している。

この地震はM(マグニチュード)8近い超大型地震で、大阪平野北縁の有馬-高槻構造線活断層系や淡路島の東浦・野田尾・先山の活断層が活動したことが確実で、六甲山地南縁の六甲断層系も活動した可能性が高い。また、図4-VI-13のように、広い範囲で、この地震に伴う可能性の強い鮮明な地震の痕跡が検出され、大阪城付近でも少なくとも震度6以上の揺れがあったことは確実である。

「言経卿記」には「大坂には御城不苦了、町屋共大略崩了、死人不知数了」とあり、地盤の良好な大阪城内での被害は少ないものの、周辺の低地で大被害が生じたことが示されている。今回の調査区は、谷地形に沿う地盤の不安定な位置にあるため、伏見地震によって地滑りが生じた可能性は大である。

今後、大阪城周辺で発掘を行う過程で、地震の痕跡にも十分な注意を払う必要がある。また、伏見地震の痕跡の場合、1596年という歴史的に興味深い年代に生じているため、大阪城の変遷の歴史を考えるうえで大きな役割を果たすであろう。

参考文献

- 工業技術院地質調査所 1996 『平成7年度活断層研究調査概要報告書』
 埋文関係救援連絡会議・埋蔵文化財研究会 1996 『発掘された地震痕跡』
 寒川 旭 1992 『地震考古学』(中公新書)
 寒川 旭 1997 『揺れる大地』同朋舎出版
 寒川 旭 1998 「考古遺跡にみる地震と液状化の歴史」『科学』岩波書店
 宇佐美龍夫 1996 『新編日本被害地震総覧 増補改訂版』東京大学出版会

Ⅶ 大坂城跡府庁地点出土の瀬戸・美濃産陶磁器について

藤澤良祐・金子健一（財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター）

我々は、『瀬戸市史』編纂に伴う近世瀬戸焼の流通調査の一環として、財団法人 大阪府文化財調査研究センターのご厚意により、大坂城跡府庁地点における13の近世遺構（層）出土の土器・陶磁器の接合後の破片数をカウントする機会を得た。その成果の一部は『大坂城跡の発掘調査』6や『瀬戸市史陶磁史篇六』で既に公表されているが、本報告の刊行にあたって今一度まとめておきたい。

1. 陶磁器の産地別組成

13遺構のうち、総破片数が100点以上確認されている8つの遺構を中心に、府庁地点における近世陶磁器の時期別・産地別の搬入状況を概観しておく。これら8遺構は、瀬戸・美濃産陶磁器の編年観により次の4つのグループに分類することができる。

まず、第1グループとして1 B土坑1の遺物群が挙げられる。瀬戸・美濃産は登窯第5・6小期（17世紀末～18世紀前葉）を主体とし、第7小期（18世紀中葉）のものが僅かに認められる。第1グループでは陶器製品と磁器製品の破片数がほぼ拮抗する。磁器はすべて肥前産で、陶器も肥前産が主体を占めるなか、京・信楽窯をはじめとする関西産陶器も一定量みられるが、瀬戸・美濃産は極めて少ない。

続く第2グループとしては、5 B土坑101と5 A土坑210の遺物群がある。瀬戸・美濃産は第7小期と第8小期（18世紀後葉）が主体で、第5・6小期のものが若干含まれる。第2グループでは磁器製品の占有率が陶器製品を上回っている。磁器では前段階と同様ほぼ100%肥前産であるが、陶器では肥前産が激減し、それに代わって瀬戸・美濃産や関西産陶器が高比率を占めるようになる。

第3グループには、5 A土坑31と5 A土坑184があり、5 B土坑114の遺物群もこのグループに含められよう。瀬戸・美濃産は第8小期と第9小期（19世紀第1四半期）が主体で、第7小期のものも少なからず含まれる。このうち5 A土坑31のデータは、瀬戸・美濃産以外の産地別の分類が不充分であるが、5 A土坑184をみる限り、陶器製品と磁器製品の産地別構成比は、前段階とほとんど変わらないようである。なお、5 A土坑184では、僅かではあるが瀬戸・美濃産の磁器が出土している。

第4グループには、1 B土坑2・1 B土坑3・5 A 3層があり、その他にも5 B区の土坑1・土坑13・土坑119などが挙げられる。瀬戸・美濃産は第8小期以降を主体とし、第11小期（19世紀中葉）のものまでが認められる。このグループでは陶器製品と磁器製品の占有率が逆転し、陶器が磁器を上回っている。陶器では瀬戸・美濃産が減少し、在地窯と考えられる関西産陶器が圧倒的多数を占める。磁器では肥前産が後退し、瀬戸・美濃産や関西諸窯と思われるものが一定量出土するようになる。

2. 瀬戸・美濃産陶磁器の搬入状況

続いて、府庁地点出土の瀬戸・美濃産陶磁器の時期別の搬入状況について、これまで製作技法や胎土の類似性から「瀬戸・美濃」として一括されてきた両者を分離することにより、少し詳しくみていきたい。実見した13遺構の瀬戸・美濃産陶磁器の総数は218点である。このうち、大窯期後半（16世紀末）の折縁皿と第3小期（17世紀中葉）の天目茶碗が各1点確認されたが、これらはおそらく混入であろう。

第2段階（第5～7小期）の瀬戸・美濃産陶器製品は47点、第5・6小期のものは8点と少なく、瀬

表4-VII-1 遺構別土器・陶磁器組成表

産地	土 器																				瀬 戸																					
	土 器					施釉土器					瓦 器		人形		焼塩壺			瀬 戸																								
器 種	火鉢	小皿	灯火具	植木鉢	蓋	煮炊具	その他	不明	小計	灯火具	碗	小皿	蓋	その他	不明	小計	火鉢	その他	不明	小計	人形	小計	身	蓋	小計	計	茶碗	天目	小皿	湯呑	碗蓋	供膳鉢	調理鉢	植木鉢	水甕	その他	小計	計				
5 A 土坑184	2	37		2		28	5	2	76	90	20	3	2	1	4	2	122	7			7	50	50	4	3	7	262	7		1	1	2	3		3	5	1		1	3	24	3.36
5 A 土坑210	2	27		1		130	47		108	63			1	1	2	67	5	1		6	56	56	4	2	6	243	5										2	4	26	3.14		
5 A 土坑31	12	32	14			30	3		91	67		22		6		95					43	43	10	20	30	259	14		3		2	2	1	3	3		2	1	31	4.22		
5 A 3層									23	5		1				6					17	17	2	2	4	50	1	1	1							1	1	3	8	17	7.83	
1 B 土坑 1									74	1						1								4	6	10	85	1											1	2	0.69	
1 B 土坑 2									35															1		1	36			2	2									4	2.34	
1 B 土坑 3									28															4	5	9	37	1		1								1	1	4	1.74	
5 B 土坑 1						1	2		3									3			3	1	1	1	1	1	8															
5 B 土坑13	2					7			9									2	1		3	5	5			17												1	2	2.6		
5 B 土坑101	4	2	1			3	3	2	15	3						3		1	1	7	7	7	2	2	28	1	1	3										1	7	6.67		
5 B 土坑112	1	6				1			8	1						1	1			1	1	1			11																	
5 B 土坑114										2	1					3		1	1	1	1	1	1	1	6	1	1	6	1									14	15	35.7		
5 B 土坑119	5			1		1	7		10.3								3	3		6	2	2	1	1	16													1	2	2.94		

産地	陶 器																																								
	丹波		備 前					肥 前										不 明																							
器 種	插鉢	小計	瓶	德利	壺	插鉢	窯道具	その他	不明	小計	碗	小皿	蓋物	瓶	德利	水注	神仏具	供膳鉢	壺	不明	小計	碗	天目	小鉢	德利	瓶	灯火具	水注	蓋	湯呑	蓋	壺	壺	插鉢	煮炊具	その他	小計	計			
5 A 土坑184	3	3	1	2		2	3	1		9	6	1						10	3		20	2			1	5			1	7	1	1	1		1	19	19.7	2.36	24.5		
5 A 土坑210	4	4		2	1		1			4	6	1	1					5	1	1	15	1		1	1	2	2	1	1	2					2	14	188	1.83	24.6		
5 A 土坑31																																					61	103	8.3	14	
5 A 3層											4	2		1	1	1	1			10					3	1										7	12	93	5.53	42.9	
1 B 土坑 1				1						1	31	6		1			2	19	3	1	64																			98	34
1 B 土坑 2	1	1										1		1				3		5							1	1										3	93	1.75	54.4
1 B 土坑 3	3	3	1	1		1		1		4	5	2			1		4			12																2	2	105	0.87	45.7	
5 B 土坑 1	2	2		2	1	1				4	11							3		14	1																1	22	2.17	47.8	
5 B 土坑13				1						1								1		3																1	2	23	2.6	29.9	
5 B 土坑101					1					1	2	1	1		1	5				9		1															4	36	3.81	34.3	
5 B 土坑112						1				1								9		11																	4	27	8.33	56.2	
5 B 土坑114											2									22.9																				22	52.4
5 B 土坑119							2			2		1								1																				27	49.7

戸窯産は天目茶碗と丸碗、美濃窯産は丸碗・丸皿・鬘盥・洩瓶・汁次・有耳壺蓋がそれぞれ各1点みられる。第7小期のものは39点確認され引き続き美濃窯産が主体である。瀬戸窯産は10点で、うち瀬戸村産の香炉・水盤・片口・火入があり、赤津村産では銭甕がみられるが播鉢類は出土していない。美濃窯産は29点で、前時期の器種に加えて拳骨茶碗・小碗・輪花皿・摺絵皿・片口・折縁輪禿鉢・香炉などが認められるが、生産量の多い尾呂茶碗は全くみられず、江戸遺跡では搬入量の多い徳利類も非常に少ない。

第3段階（第8～11小期）の瀬戸・美濃産陶磁器は陶器製品が136点、磁器製品が33点、計169点が確認されている。陶器では、第8・9小期に位置付けられる131点のうち117点が瀬戸窯産で前段階より急増するが、美濃窯産は僅か14点と減少している。瀬戸窯産には、刷毛目茶碗・奈良茶碗・丸碗などの茶碗類をはじめ、腰錆・せんじ・小中などの湯呑類、梅文皿・染付皿・輪花皿などの小皿類、練鉢・片口などの調理具の鉢類、馬の目皿・水盤等の盤類、水甕をはじめ植木鉢・火鉢・瓶掛・手水鉢などの住用具も一定量出土しており、当時瀬戸村で生産された大半の器種が確認できる。一方、美濃窯産は鎧茶碗・丸碗・鎧湯呑・小碗・灯明皿・有耳壺・徳利・蓋物・洩瓶などの器種が各少量みられるにすぎない。なお、確実に第10小期（19世紀第2四半期）以降とされる陶器製品は、時期が確定できない2点を除くと瀬戸窯産の染付皿と水甕が計3点確認されるに留まり激減する。

磁器のうち、時期が確定できるものは第9小期は3点にすぎないが、第10小期が13点、第11小期が15

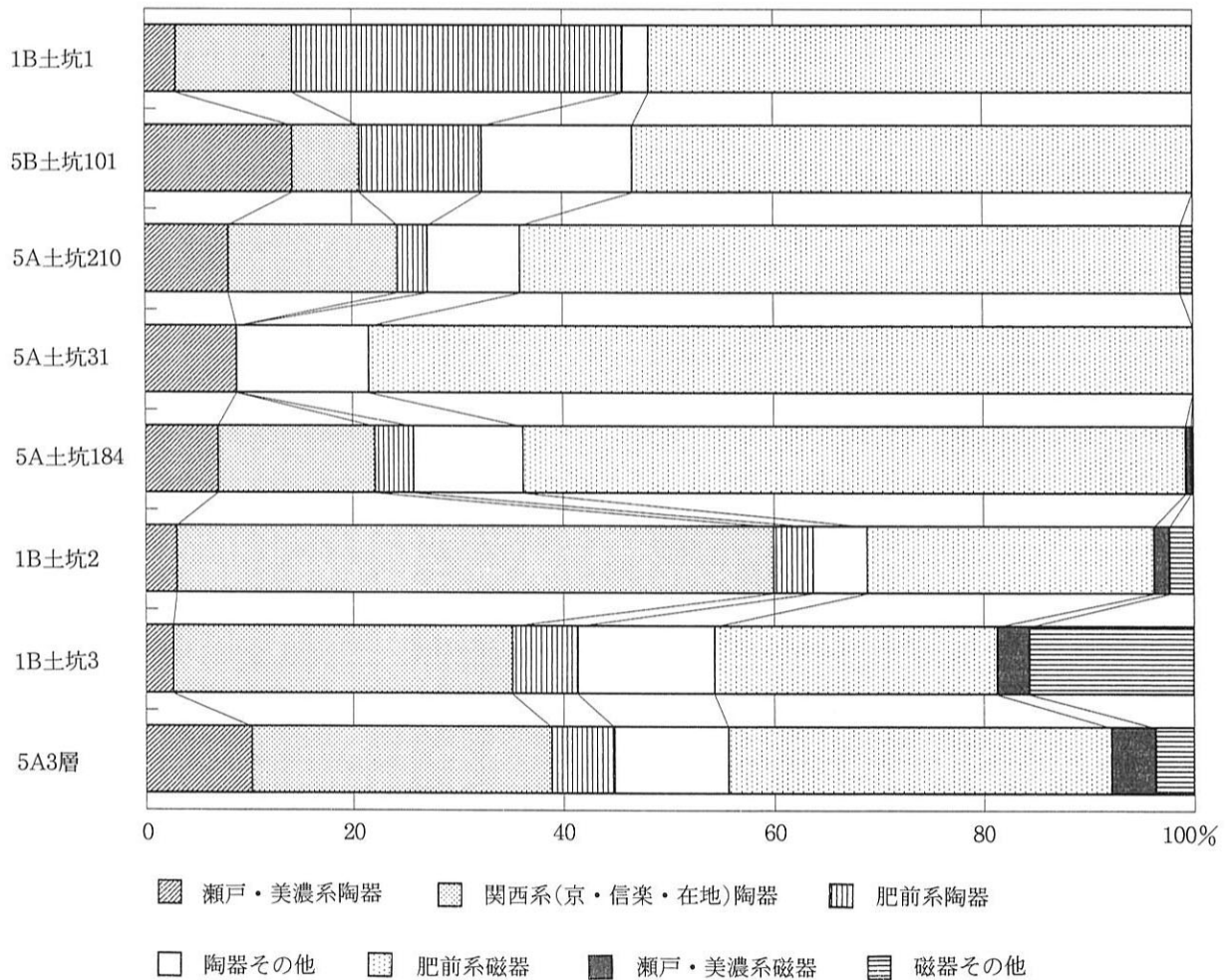


図4-VII-1 陶磁器の産地別組成

点と第10小期以降急増する傾向が窺われる。器種は端反碗形の茶碗や湯呑を主体とし、筒形湯呑・型打皿・蓋物などが少量出土している。磁器製品における「瀬戸」と「美濃」との明確な分離方法は未定立であるが、生産状況からみて第9・10小期は瀬戸窯産、第11小期は美濃窯産が主体を占めるものと思われる。

以上のことから、大坂城跡府庁地点における瀬戸・美濃産陶器は、肥前産陶磁器全盛の中で第5小期以降、量は少ないながらも美濃窯産を主体に確実に搬入されており、その後徐々に増加する傾向がある。そして、第8小期には美濃窯産は減少するものの、全国的な陶磁器需要の拡大に伴い瀬戸窯産が急増し第9小期にかけてピークに達する。しかし、第10小期以降は在地の関西産陶器に圧迫される形で激減している。それに対して瀬戸・美濃産磁器は、当時瀬戸村で開発されたばかりの第9小期のものは少ないが、第10小期以降に急増し、第11小期には生産が本格化した美濃窯産が中心になっていくようである。

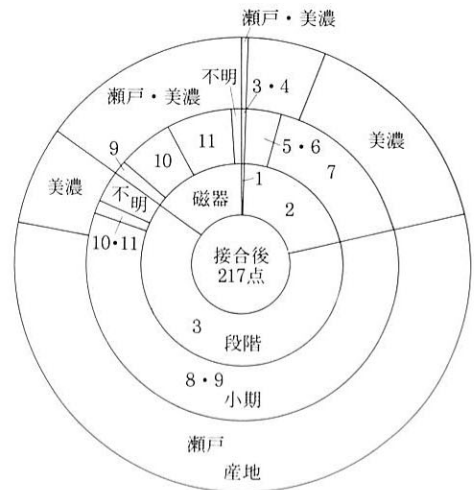


図4-Ⅶ-2
大坂城跡の瀬戸・美濃焼時期別搬入状況

写真図版4-Ⅶ-1



5 A 調査区土坑31出土美濃窯製品



5 A 調査区土坑31出土瀬戸窯製品



5 A 調査区建物1 (3層) 出土瀬戸・美濃窯製品



5 B 調査区土坑101出土瀬戸・美濃窯製品



5 A 調査区土坑184出土瀬戸・美濃窯製品



5 A 調査区土坑210出土瀬戸・美濃窯製品

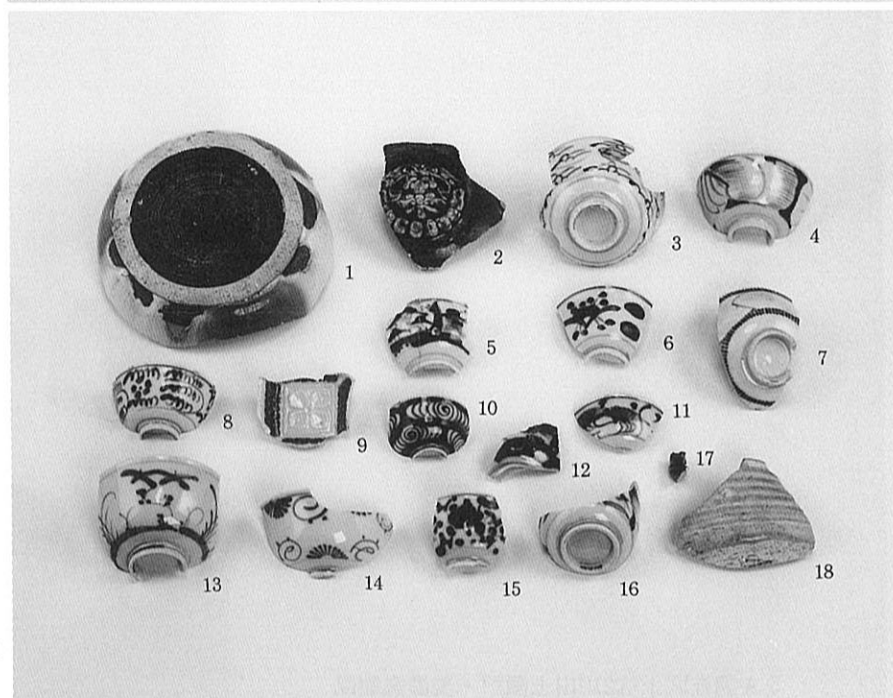


同 上



5 A 調査区 4・5 層出土瀬戸・美濃窯製品 (上)

5 A 調査区 2 層出土瀬戸・美濃窯製品 (中・下)



5 B 調査区土坑13 (1~11)、土坑1 (12)、土坑

119 (13~18) 出土瀬戸・美濃窯製品



5 B 調査区土坑114 (1~3)、土坑112 (4)、
1 B 調査区土坑1 (5~10) 出土瀬戸・美濃窯製品



5 A 調査区土坑184出土瀬戸・美濃窯製品



美濃

1 B 調査区土坑 3 出土瀬戸・美濃窯製品



1 B 調査区土坑 2 出土瀬戸・美濃窯製品

VIII 福建省漳州窯系陶磁器（スワトウ・ウエア）について

森村健一

はじめに

豊臣期の遺跡調査によって出土する中国製青花は、大きく景德鎮窯系とそれ以外の地域で生産された製品に2分することができる。このうち景德鎮窯以外の生産地については、従来より福建省を中心とした地域が推定されてきていたが、1980年前半代以降から同省南部を数次にわたり、福建省博物館、平和県博物館において考古学的な分布・表面調査が実施されて、特に平和県南勝・五寨地区の窯跡群では最も精密な調査が実施されてきた。漳州窯は其中で最も注目されてきた生産地であり、範囲は福建省華南県、平和県、漳浦県、紹安県に及ぶと考えられる。

1. 製品の特長

(1) 青花

- 釉：乳濁釉は分厚く粘性度の高い釉を掛けたため、釉溜まりや釉切れが生じている。
- 胎土：陶器質も見られるが灰色、黒灰色でカオリンが少なく酸化鉄やチタンを含み「ス」が多い磁器質である。その為に、ピンホールや先貫入が顕著となる。
- コバルト：紺色系が主流で少量ながら淡緑系もある。
- 文様：基本的には、景德鎮窯系を模倣しているが、極めて簡略化された太筆描きである。
- 器種：盤、皿、碗には規格サイズで生産されている。胎土のカオリンが少なく分厚く成形せざるを得ない事と、高温によってヘタリが生じる事から器高20cmを越す器形の物は極めて少ない。他には小壺、香合が知られるぐらいである。注意しなければならないのは、折枝花文碗（写真図版4-VIII-8-(16)）、八宝托結帯文碗（写真図版4-VIII-9-(17)②）のように従来景德鎮窯系と考えられていた薄手の青花も漳州窯系紹安県秀篆である点である。いずれにしても漳州窯系製品の最大の特長は、五彩・瑠璃地を含め高台と高台際にかけて幅広く無造作にひろがる荒い砂（折枝花文、コイン文、八宝托結帯文碗・皿類には細長い繊維状の砂を付着する）。そして、兜巾高台が多く、分厚い内ぐりのない畳付けに施釉がある。

(2) 五彩

従来美術史方面から「呉須赤絵」といったタイプである。形態、胎土、技法は、青花と類似する。形態としては、盤が主流で魁文鉢、兜鉢がある。

(3) 匣

全ての器種は、景德鎮窯系とは異なった福建省特有の大小の器種を問わずM形の匣で焼成する。

2. 年代観

漳州窯系製品は、大坂城下町遺跡と全国の出土例を総合すると大きく3期の画期が存在する。

I期 出現期：16世紀後半

大坂城下町遺跡・石山本願寺期（1580年以前）、堺環濠都市遺跡1575年大火面、根来寺1585年焼亡、一乗谷朝倉氏遺跡1573年焼亡。器種は、碗、皿のみで漳州窯系の生産輸入されたが極めて少量であった。

大坂城・石山本願寺期（S D506）漳州窯系2個体対景德鎮窯系30個体。

II期 大画期：16世紀末～17世紀初頭

本報告分は、すべてこの時期に含む。堺環濠都市遺跡—S K T—（慶長伏見大地震後、1596年～大坂夏の陣大火1615年）、大坂城下町遺跡・豊臣前期（1583年～1598年）、豊臣後期（1598年～1615年）、京都市内膳町跡1604年記年銘木簡一括品、静岡市駿府城三ノ丸1617年記年銘一括品、堺環濠都市遺跡S K T 19地点S F 01出土、1585年銘木簡一括品、平戸・オランダ商館跡石垣築造埋土内の一括品（1609年～1616年）、ヴィテ・レウ号沈没船（1613年）、石川県金沢兼六園・江戸町跡の一括品（1601年～1622年）、姫路城下本町遺跡（1601年～1608年）一括品、大坂城下町遺跡A Z 87—5次調査、S X 201「元和6・7年」（1620年・1621年）銘木簡共伴（年代幅1615年～1621年）器種としては、青花・五彩に小壺、香合、兜鉢、魁文鉢、盤、瑠璃地が出現・出土する。中でも盤が質・量共に顕著な出土で唐津の盤の出現期とも合致しこの時期における茶の湯や食生活の変化を物語る。景德鎮窯系との比率は、S K T 19地点、1585年記年銘木簡一括品（1585年～1594年頃）、景德鎮窯系55個体対漳州窯系30個体、平戸・オランダ商館跡一括品（1609年～1616年）景德鎮窯系308個体対漳州窯系23個体大坂城下町遺跡中央体育館地点、豊臣前期（S K 506他）景德鎮窯系196個体対漳州窯系77個体、豊臣後期（S K 525他）景德鎮窯系89個体対漳州窯系24個体。本報告の量的比較としては、豊臣前期の井戸—1で景德鎮窯系4片対漳州窯系2片、豊臣後期では溝48が景德鎮窯系2片対漳州窯系1片、溝52が景德鎮窯系8片対漳州窯系2片、溝47が景德鎮窯系1片対漳州窯系1片、溝80が景德鎮窯系3片対漳州窯系1片、土坑296が景德鎮窯系14片対漳州窯系1片、3 B地区池1が景德鎮窯系23片対漳州窯系5片、屋敷1が景德鎮窯系8片対漳州窯系3片、屋敷2が景德鎮窯系38片対漳州窯系4片である。

大坂城下町遺跡では、漳州窯系製品は豊臣前期以降におけるその出現・存在は、突然かつ顕著である。またそれは、堺環濠都市遺跡（1596年～1615年）と同一現象である。

III期 17世紀中葉

島根県・富田川河床遺跡811 P 区S B 020「寛永21年」（1644年）銘の一括品、マイケルハッチャー・コレクション（沈没船）1643年～1646年の一括品。S K T 14地点S F 01一括品（1626年～1647年）。長崎（出島商館・銅座町・万才町・興善寺町遺跡）1641年以降。江戸遺跡：東京大学本郷構内遺跡・御殿下記念館地点678遺構（1650年～1660年代）、新宿区内藤町遺跡C—170号遺跡。第III期の漳州窯系製品の大消費地は江戸である。又、器種の主流は、鉢、大盤である。

景德鎮窯系と漳州窯系との量的比較をみると東京大学・御殿下678号遺跡景德鎮窯系218点に対し漳州窯系は約10%以下である。

3. まとめ

- ① いわゆる「福建・広東産」のグループの内青花、五彩、瑠璃地、素三彩の生産窯の大半を「漳州窯系」に求めることが出来る。
- ② 今後消費地において景德鎮窯系製品との分類・判別が明白になる。景德鎮窯系に分類していた折枝花文・托結帯文碗等のグループが漳州窯系と判断されることにより従来より漳州窯系製品の比率が相当増大する。このことは、大画期である第II期における福建・広東省沿海貿易がいかに重要であるかが再確認される。
- ③ 芙蓉手青花の出現は大坂城下町遺跡における慶長伏見大地震面（1596年）や豊臣前期・後期を別け

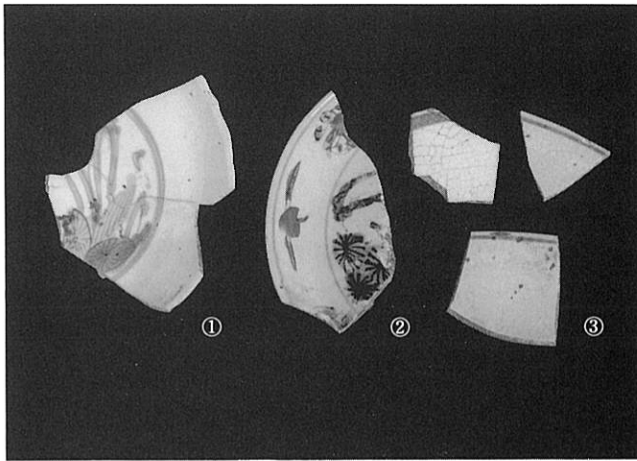
る1598年面を確認する重要な遺物である。それを裏付ける新資料としては、1991年～1993年に発掘されたフィリピン・ルソン島・バタンガス州・フォチューン島沖で1600年12月14日に沈没したスペイン旗艦サンデイエゴ号より引き揚げられた景德鎮窯系青花芙蓉手盤、漳州窯系平和県五寨壠仔山窯青花青海波文盤が総数13000点に多数含まれる。

なお蛇足になるが、S K T 19地点 S F 01出土「天正13年」（1585年）銘木簡一括品（1585年～1594年前後）では、芙蓉手は見受けられない。

なお小稿の作成にあたっては、森村健一を代表とする公益信託西田記念東洋陶磁史研究助成基金によって、榎崎彰一先生の指導および熊海堂（中国・南京大学教授）、栗建安（中国・福建省博物館・考古隊副隊長）、薛翹（中国・廈門市博物館）、松尾信裕（大阪市文化財協会主任）との共同研究によるご協力をいただいた。記して謝意を表すものである。

参考文献

- 出川哲朗 1990. 1 『呉須赤絵について』中国陶磁シリーズ4 呉須赤絵展・図録
- 森村健一 1993. 5 『大坂・博多・堺出土の福建省平和県窯系青花・赤絵（スワトウ）』「秀吉時代の都市と貿易陶磁器」（漳州窯と1993年10月改める）
- 栗建安・松本啓子訳・森村健一・松尾信裕 1993.12 『明末清初の中国陶磁器—特に福建省平和窯系[漳州窯]青花等について』第5回関西近世考古学研究会大会・発表要旨 福建省博物館考古学部・平和県博物館
- 栗建安 1993.11 『平和県明末清初青花瓷窯址調査』『福建文博』1993年第1・2期合刊
- 福建省博物館・福建省考古博物館学会・公益信託西田記念東洋陶磁史研究助成基金共同研究チーム・中日共同研究学術討論会 発表要旨 1994. 2 『明末清初福建省沿海貿易陶磁研究—漳州窯系出土青花・赤絵と日本出土の中国貿易陶磁器—「SWATOW」』編集森村健一
- 奥田誠一 1932 『呉須赤絵に就いて』陶磁4—5
- 上田恭輔 1932 『呉須赤絵に就いての一考察』陶磁4—6
- 小森忍 1932 『呉須赤絵技考談片』陶磁4—6
- 尾崎旬盛 1932 『呉須赤絵』陶磁4—6
- 宮脇剛三 1932 『或問、呉須赤絵考』陶磁4—6



(1) 2D井戸1 (後期)

① 景德鎮窯系窯青花稜花蓮花文皿

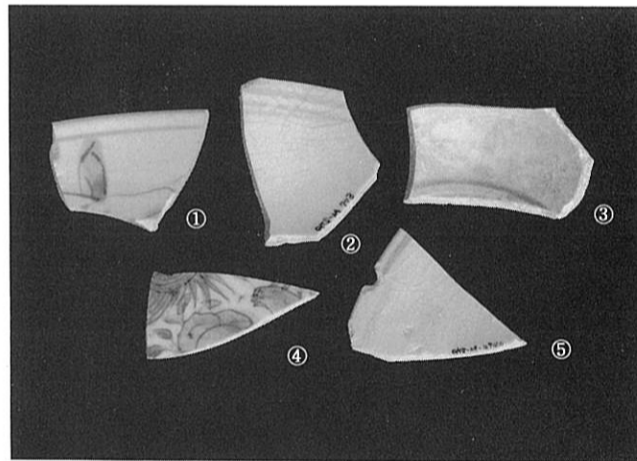
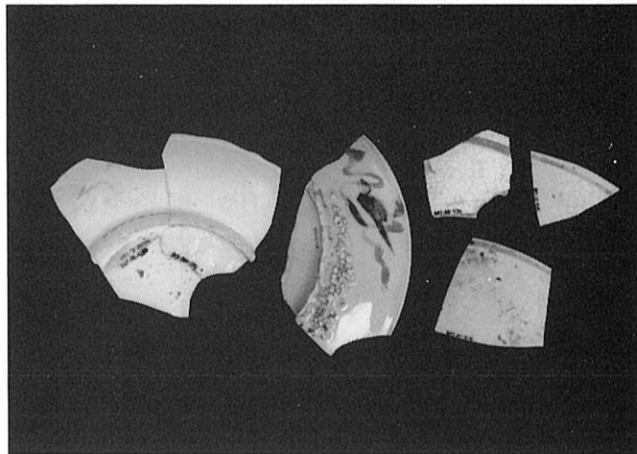
コバルトの発色、文様タッチ、畳付け無釉から判る。

② 景德鎮窯系五彩端反皿

荒い砂が付着するが三角形の高台と畳付けの無釉、高台内の放射状のカナナ痕から判断して景德鎮窯系民窯である。通常の白磁端反皿をベースにしている。同タイプは松山市湯築城跡でも5組セットで出土している。

③ 漳州窯系青花碗

胎土は陶器質で貫入、ピンホールが多い。界線も雑で太さの差が大きい。



(2) 1A包含層 (後期)

① 漳州窯系青花盤

外口縁部の界線が太い。

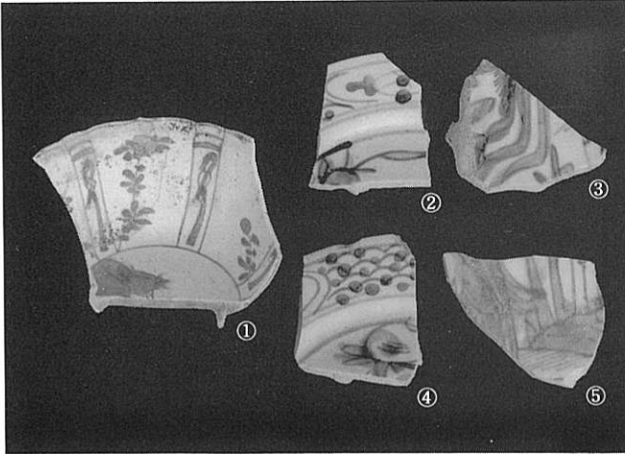
②・③・⑤ 漳州窯系青花折枝花文碗

②・③は同一個体の可能性がある。ピンホールや釉切れがみられ、漳州窯系青花碗の特徴とも言うべき器高が景德鎮よりやや低い。おそらく胎土からくる問題である。漳州窯系紹安県内の窯跡陶片に類例がある。⑤は透明釉が分厚い。

④ 景德鎮窯系青花鳥文皿

類例は、ヴィテ・レウ号タイプ (1613年沈没船) である。外底部には放射線状カナナ痕あり。





(3) 1 A 屋敷 2 (後期)

① 景德鎮窯系青花芙蓉手花鳥文鉢

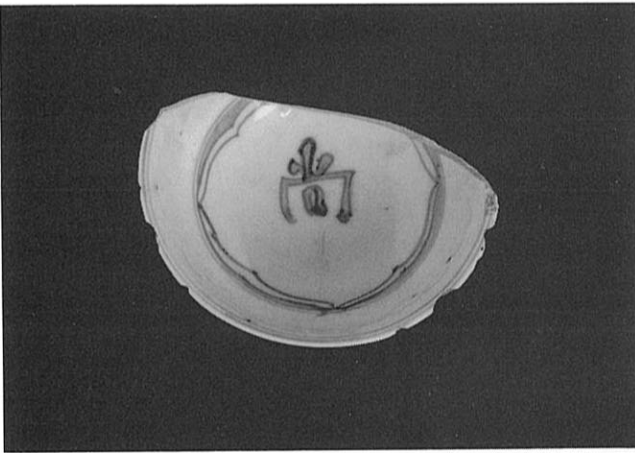
内型押しタイプで、二次焼成による“かせ”がある。ヴィテ・レウ号タイプや平戸・オランダ商館・石垣築造埋土内一括品（1609～1616年）のそれと酷似する。同タイプは、珠北西路中山路西側地点の窯跡に見られる。

②・④ 漳州窯系青花青海波文折縁盤

外面には漳州窯系の特徴であるピンホールが目立つ。畳付けは総釉で繊維状砂が付着。漳州窯系平和県五寨壩仔山窯・港口窯に類例がある。なお中国との共通認識として口径15cm以上を「盤」とした。

③・⑤ 漳州窯系青花孔雀文盤

総釉で畳付け付近には荒い砂を無造作にバラまく。漳州窯系平和県五寨壩仔山窯・港口窯に類例がある。両者は、共に「ス」が多く⑤は二次焼成による“かせ”がある。

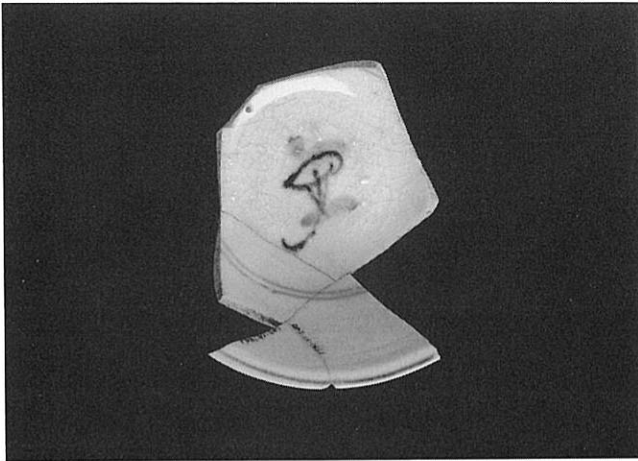


(4) 1 A 包含層 (後期)

漳州窯系青花忠信孝悌字文碗

畳付けにも釉がかかり繊維状砂が多数付着する。「ス」が多く、素地に乳濁釉（白化粧）を掛けた後青花文を描き、粘性度の高い透明釉を施釉する。兜巾高台のケズリには、景德鎮窯系のような放射線状カナ痕はない。内ぐりは鈍く、高台も分厚く、景德鎮窯系とは相異なる。文字は格座間内を書く。

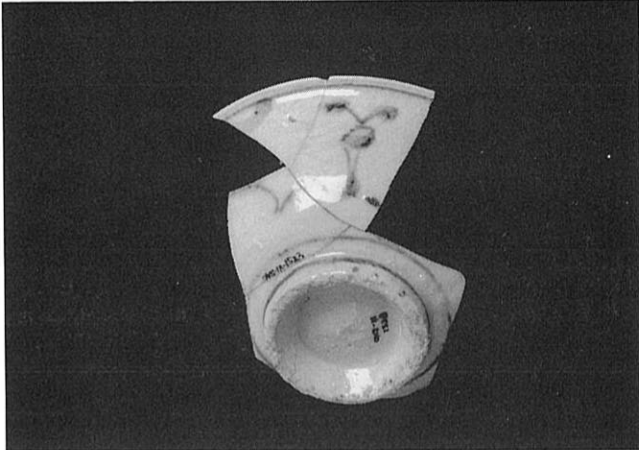




(5) 1 A 溝47 (後期)

漳州窯系青花折枝花文碗

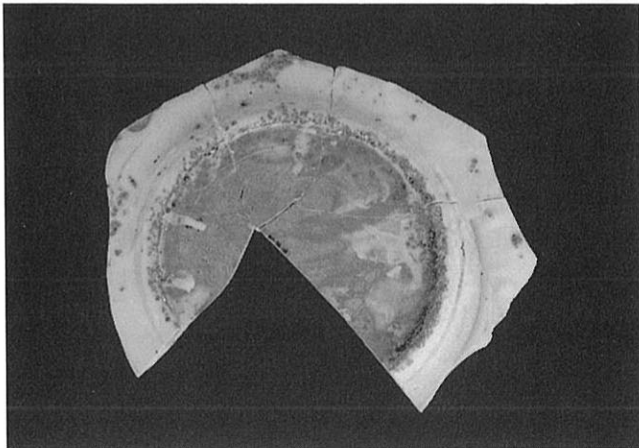
器高は低く、高台は分厚い台形を呈する。胎土は陶器ぎみのせいか、高台内は景德鎮窯系には見受けられない兜巾になっている。畳付けは砂が付き施釉されている。類例を漳州窯紹安県内の窯に求められる。コバルトは、淡緑色部分もある。

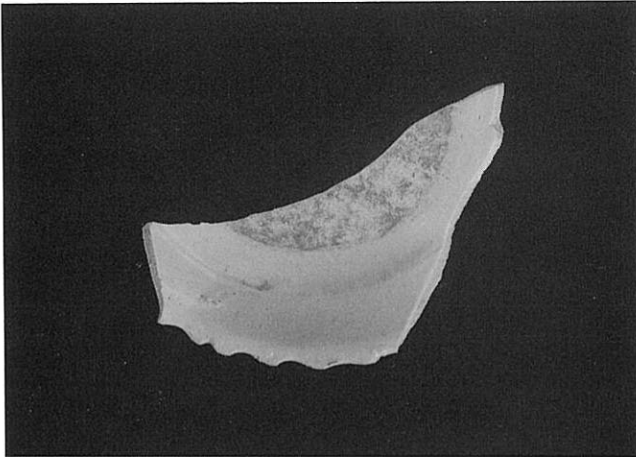


(6) 3 B 池 1 (後期)

漳州窯系青花孔雀文盤

「ス」が多く、未焼成のためか褐色系になっている部分がある。M形匣にに入れて焼成しているため腰部まで荒い砂が付着する。高台内は、回転ケズリで乳濁釉や透明釉を掛けていない。これも漳州窯系青花盤の特徴である。この技法では見込みでのピンホールができにくいと考えられる。漳州窯系平和県五寨壠仔山窯に類例がある。

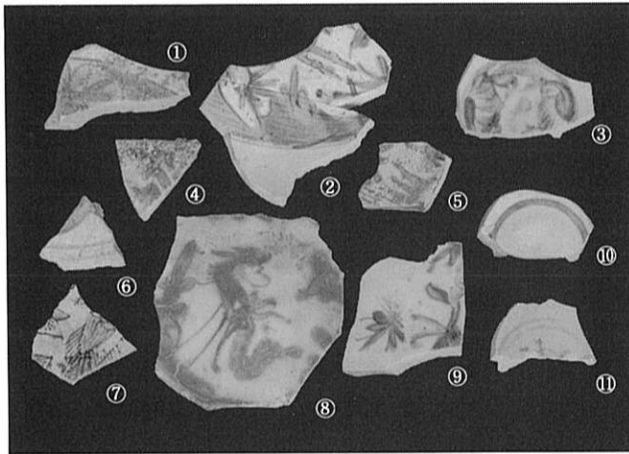
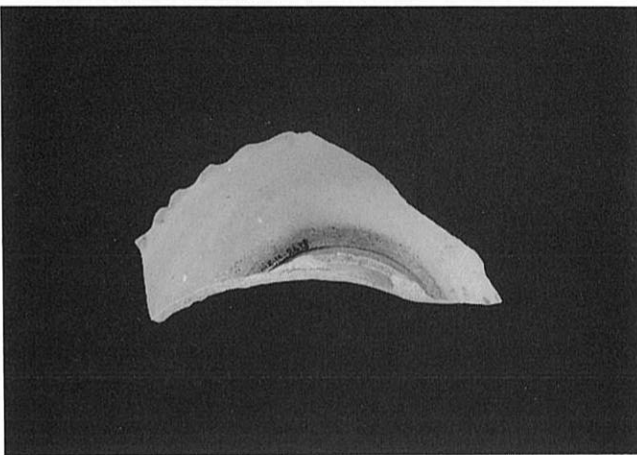




(7) 1A 包含層 (後期)

漳州窯系白磁稜花皿

陶器質で見込み、高台は重ね焼き焼成を行うため分厚い乳濁釉の施釉後に削り取っている。



(8) 1A 包含層 (後期)

③・⑩・⑪漳州窯系青花碗

3点とも台形の高台で、⑪は陶器質で貫入が顕著である。③のコバルトは緑系である。全て兜巾高台で、③・⑩高台内は無釉である。

②漳州窯系青花鉢

乳濁釉の粘性度が高い為に釉切れピンホールが多く認められる。畳付けは使用時に研磨している。胎土は陶器質である。

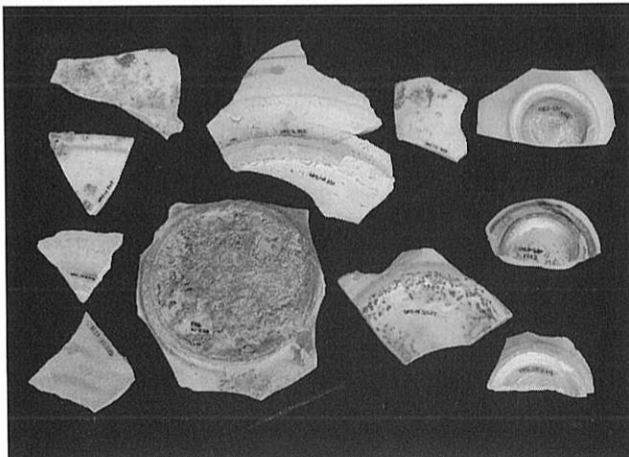
⑧景德鎮窯系青花龍文盤

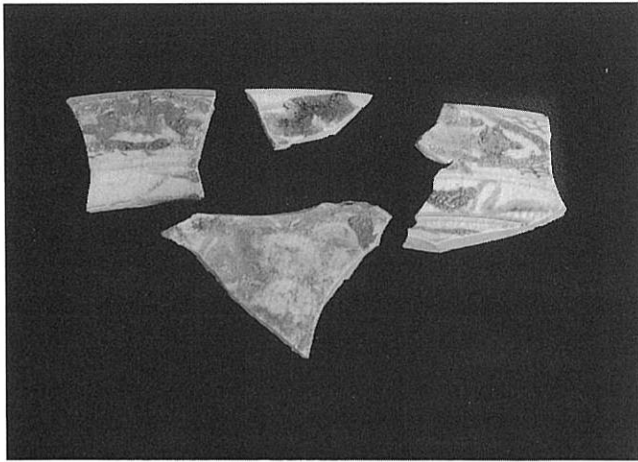
ヴィテ・レウ号タイプの時期によく知られる。ペンシルドローイングタイプで畳付けの釉を削り取る。

①・④・⑤・⑥・⑦漳州窯系青花盤

⑦の高台内は乳濁釉を掛けるが透明釉はない。①・④・⑤は二次焼成を受けており、⑥は陶器質で見込みに鏡を作る。貫入あり。①・⑤は同一個体である。①は高台際の4cm幅で荒い砂が付着。④は芙蓉手タイプである。

⑨は漳州窯系青花盤

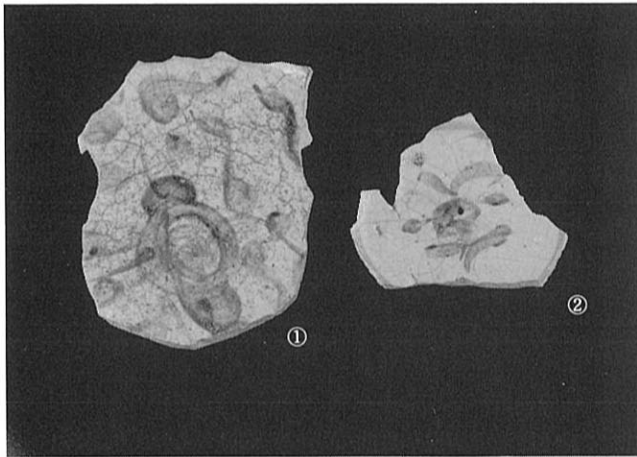




(9) 1 A 土坑293 (後期)

漳州窯系五彩盤

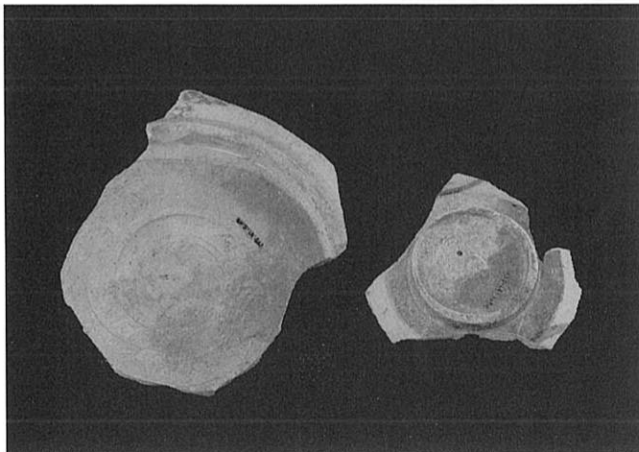
二次焼成によって釉上彩や乳濁釉がかせている。青海波文の間には、花文を中心にした格座間がある。類例は漳州窯系平和県南勝花仔楼窯、仔山窯、五寨仔港口窯にある。

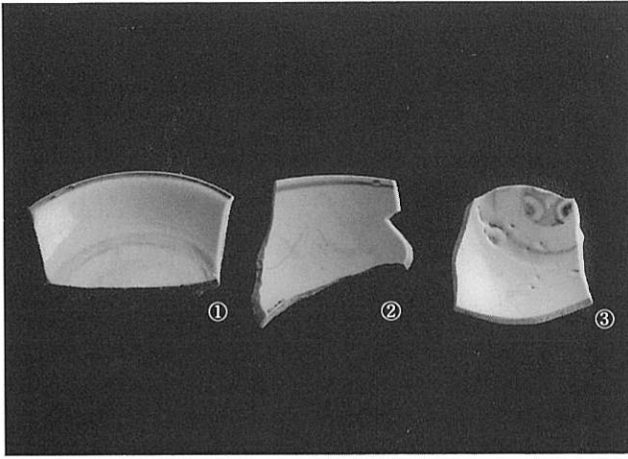


(10) 1 A 包含層 (後期)

①・②漳州窯系青花折枝花文盤

①・②共に美濃焼に似た「スワトウ」の陶器質の胎土で、乳濁釉や透明釉は高台又は、高台際までしか掛けていない。両者とも貫入が知られ、②は兜巾となり三ヶ月高台の荒い仕上げである。漳州窯系平和県五寨壠仔山窯に類例が見られる。





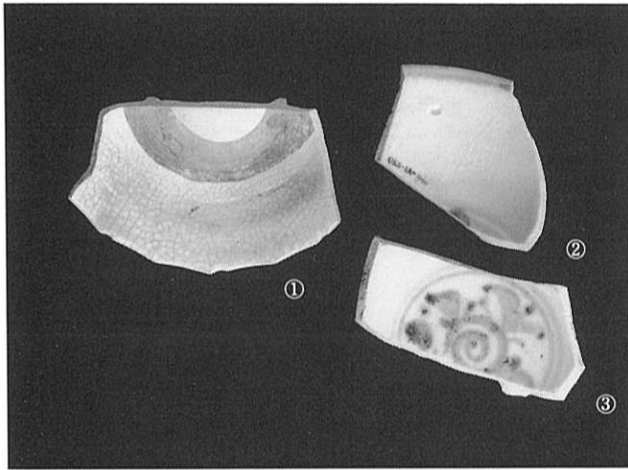
(11) 1 A 包含層 (後期)

①漳州窯系青花界線端反皿

器形が全体に分厚く重い。分厚い低部と台形の高台を有する。高台際より内側は乳濁釉と透明釉がない。使用時に行った黒漆による接合痕がある。

②・③漳州窯系青花丸文碗

粘性度の極めて高い白濁釉をかけているため、虫喰や釉切れ、釉だれが発生している。見込みにコイン文（八宝文の一つ）を配する。兜巾高台で厚みが1 cm近くある。漳州窯系紹安県内の窯跡、平和県南勝花仔楼窯仔山窯跡・五寨狗興山窯跡に類例が見られる。同一タイプは堺環濠都市遺跡（1596～1615年大火面）やフィリピン・ロイヤルキャプテン環礁沈没船（16世紀末～17世紀初）・ヴィテ・レウ号タイプに類例がある。



(12) 1 A 屋敷 1 (後期)

①漳州窯系白磁稜花皿

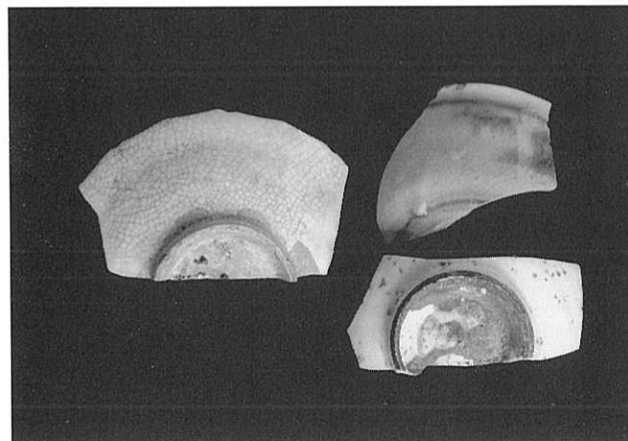
見込みは乳濁釉を掛けた後に蛇の目状釉切りを行う。透明釉を粗悪な陶器質上に施釉している為、冷却率が異なることによって、先貫入が無数に生じている。高台内は無釉で台形高台である。

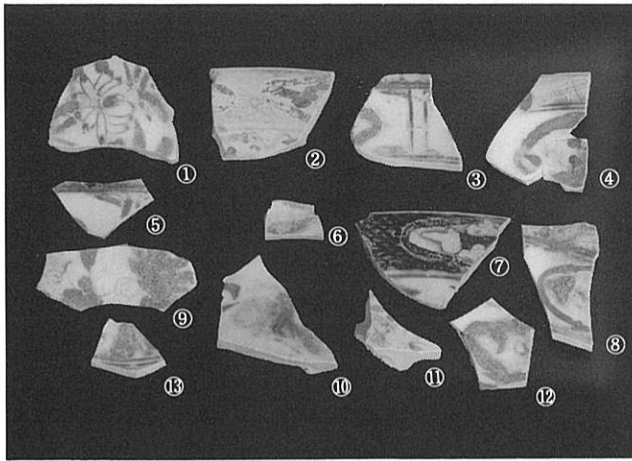
②漳州窯系青花碗

乳濁釉が釉溜まりを起こしている。界線のコバルトは淡緑色系でにじんでいる。

③漳州窯系青花花文碗

ピンホールが外面に多く知られ、兜巾高台は幅1 cm近い。台形高台は無施釉で縮緬状になり、胎土に「ス」が多い。豊付けが釉切りである。





(13) 1 A 包含層 (後期)

①・⑤・⑥・⑨・⑬漳州窯系五彩蓮花文鉢

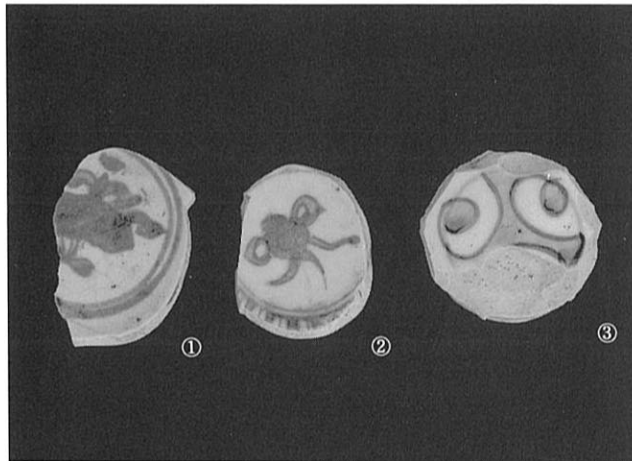
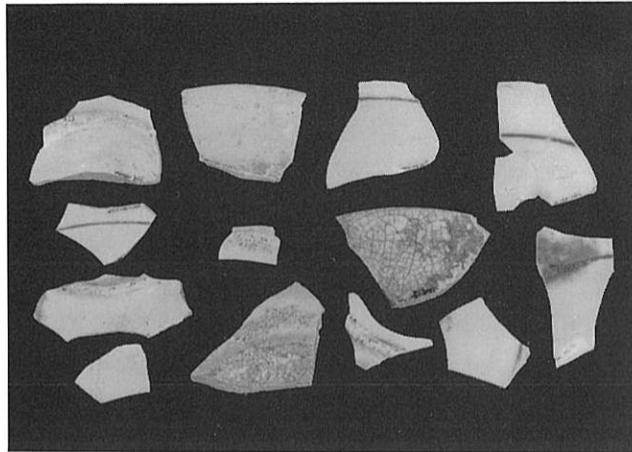
青花と同じく乳濁釉と高台の荒い砂、畳付けの施釉は共通している。

②・⑦漳州窯系五彩青海波文盤

磁器質が少なく「ス」が多く、折縁タイプである。格座間に簡単な花文を入れる。

③・④・⑧・⑩・⑪・⑫漳州窯系五彩鉢

いわゆる日本でいう「兜鉢」タイプの深鉢である。口縁部には四方禪文、その下に格座間を配している。漳州窯系製品の中では薄手で乳濁釉も純白で胎土も磁器質の高い優品である。畳付けは荒い砂が付着する。外面に乳濁釉の釉切れがある。全て二次焼成を受けている。漳州窯系平和県南勝花仔楼仔山窯と五寨港口窯に類似品を見る。



(14) 1 A 包含層 (後期)

①漳州窯系青花花文碗

胎土に「ス」が多い為高台内にピンホールが目立つ。畳付けは釉切りされ、高台は薄く高い。高台は②・③とも台形で施釉され細かい繊維状の砂を多数付着させている。

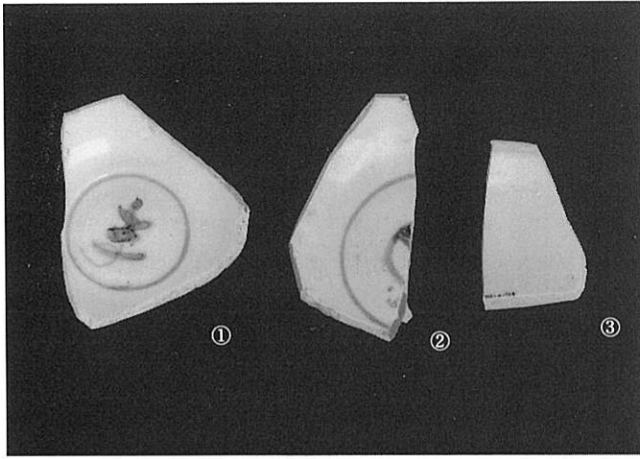
②漳州窯系青花八宝托結帶文碗

類例は漳州窯系平和県南勝・五寨と紹安県の窯跡にみる。

③漳州窯系青花コイン文鉢

灰色系の胎土に「ス」が多く、粘性度の高い乳濁釉を高台内に見ることが出来る。高台内には透明釉がない。尚、この陶磁器片は「メンコ」として再利用しているようで、人為的カットがある。漳州窯系紹安県内の窯跡と平和県南勝花仔楼仔山窯跡・五寨狗興山窯跡に似た陶片を知る。





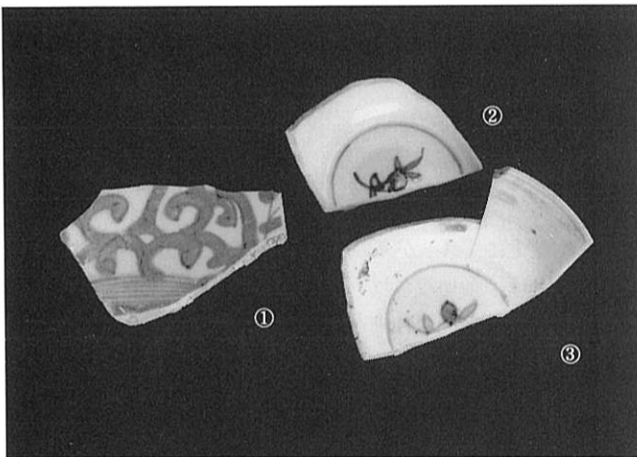
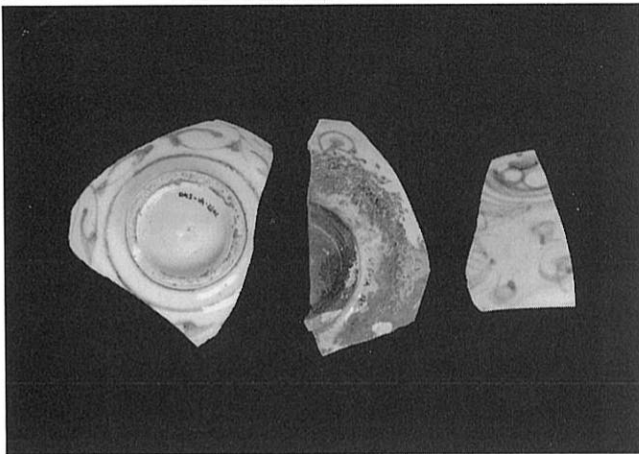
(15) 1 A 包含層 (後期)

①漳州窯系青花折枝花文碗

他の漳州窯系青花に比して乳濁釉の純白度が高い。一見景德鎮窯系グループに似るが、高台、内ぐり、繊維状の砂から漳州窯系と判断される。このタイプは、ヴィテ・レウ号タイプ・堺環濠都市遺跡 (1596年~1615年大火面) で検出される。景德鎮窯系製品にみる高台内の放射状のカンナ痕がなく、兜巾高台である。漳州窯系紹安県の窯跡に類似品を見る。

②・③漳州窯系青花丸文碗

この2片は、同じタイプである。乳濁釉の為にコバルトも鮮明ではない。③は、胎土が陶器質で「ス」が多く、後貫入がある。高台内は無釉で、乳濁釉はつけ掛けを行っただけで、景德鎮窯系のように総釉掛けした後、高台内の再削り出しを行っていない。尚、②の碗には珍しく荒い砂が大量に溶着しており、分厚い台形高台で無釉である。類例は、漳州窯系紹安県内の窯跡と平和県南勝花仔楼窯仔山窯跡・五寨狗興山窯跡にある。



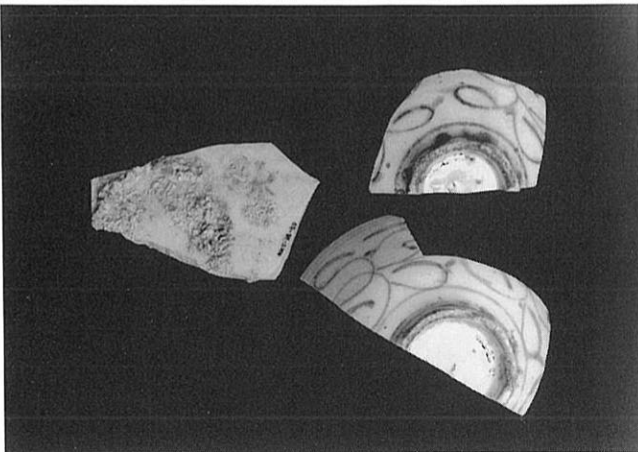
(16) 3 B 池 1 (後期)

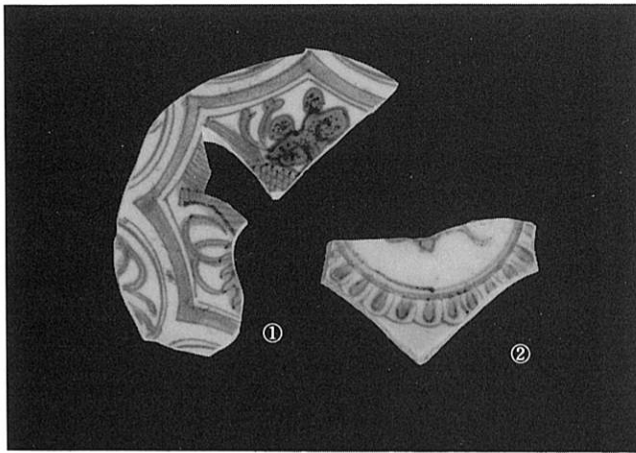
①漳州窯系青花唐草文盤

明末清初における景德鎮窯系製品にみる輪郭を描きダミを入れる手法そのままを導入をしている。

②・③漳州窯系青花折枝花文碗

景德鎮窯系の同タイプに比して器高が低く畳付けの施釉、コバルトのにじみ、繊維状砂高台・内ぐり、兜巾高台の相異がある。共に高台際に乳濁釉の釉溜まりがある。類例は漳州窯系紹安県内の窯跡に知る。





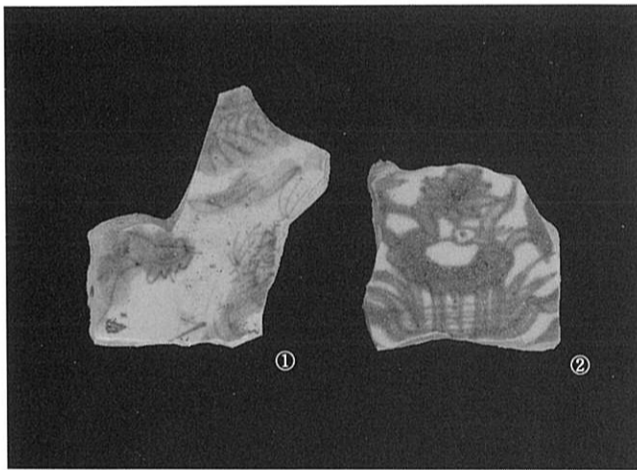
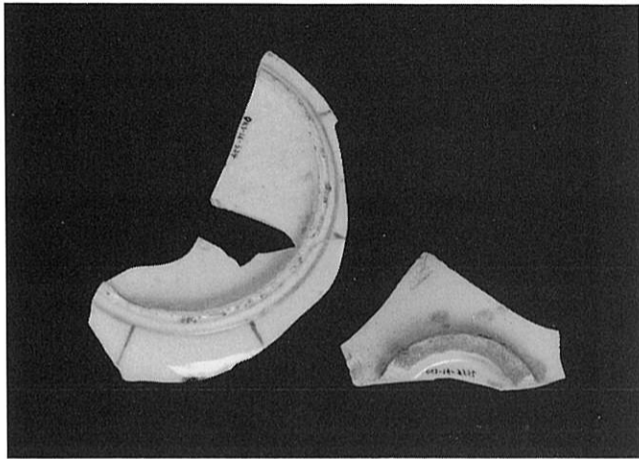
(17) 1 A 包含層 (後期)

① 景德鎮窯系青花名山手八宝文盤

中国で「八開光盤」と呼ぶタイプである。景德鎮窯系にみる三角形の薄い高台、施釉後の畳付けカット、砂、高台内の放射状カンナ痕を顕著に残す。同タイプはヴィテ・レウ号タイプ、平戸オランダ商館跡（石垣一括品）に見いだす。

② 漳州窯系青花八宝托結帯文碗

景德鎮窯系の天啓期にみる輪高台状のような高台削り出し作業の手抜き技法がこの碗にもみられる。見込みは鏡となっている。畳付けは繊維状砂が付着し陶器質・薄手で景德鎮窯系に似せている。類例としては、漳州窯系平和県南勝・五寨と紹安県内の窯跡に見る。



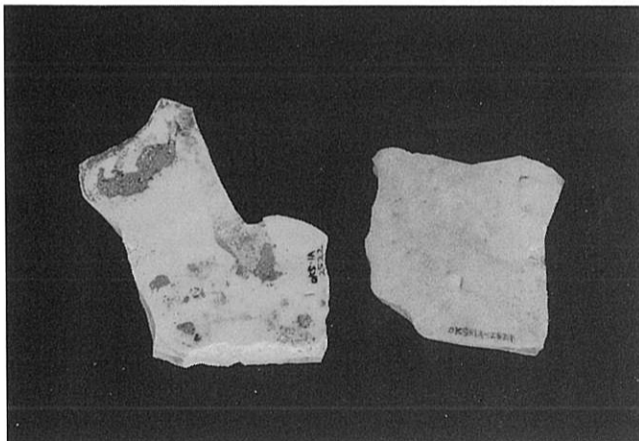
(18) 1 A 包含層 (後期)

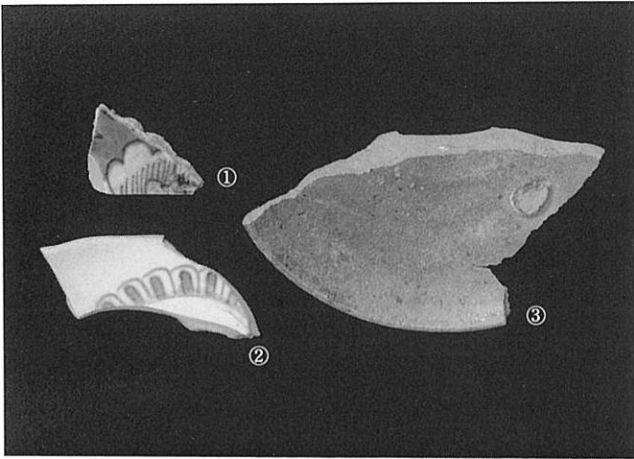
① 景德鎮窯系鳥文盤

ヴィテ・レウ号沈没船（1613年）にみるペンシルドローイングの手法で描かれたもので、二次焼成による熔着物がある。

② 漳州窯系青花蓮花鳥文盤

胎土が黒灰色を呈し、コバルトを描く為の分厚く乳濁釉を掛けているのが明白である。又、外器表には粘性度が高い為に釉溜まりやムラが生じ凹凸である。





(19) 1 A 溝52 (後期古段階～前期新段階)

①漳州窯系青花盤

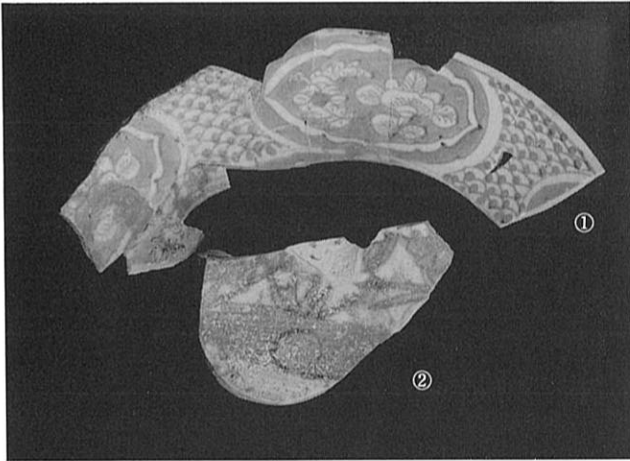
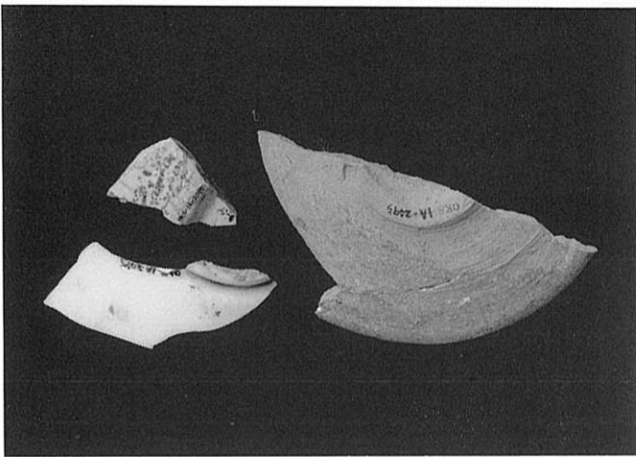
総釉で高台から高台際にかけて幅広く砂が熔着している。胎土は陶器質である。

②漳州窯系青花拖結帯文碗

1 A 地区では目立つ量のタイプである。外面に乳濁釉の釉切れ部分がある。総釉で畳付けに繊維砂が付着する。類例は漳州窯系平和県南勝・五寨と紹安県内の窯跡にある。

③唐津窯系丸皿

内面には大き目の胎土目、黒色鉱物粒吹き出し、後貫入が認められる。外面には、土見が広い範囲で見られる。

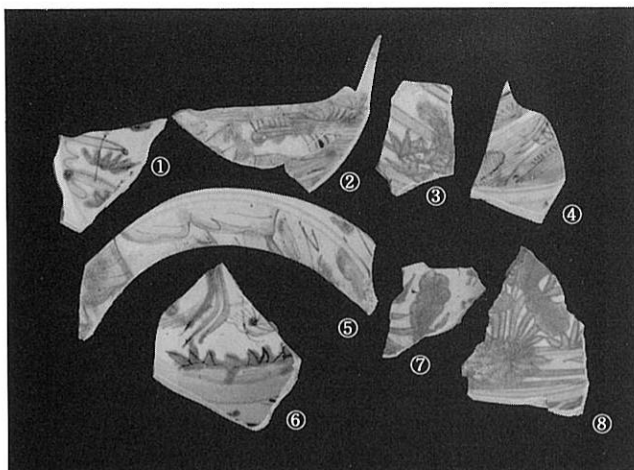


(20) 1 A 土坑293 (後期)

①・②漳州窯系青花盤

内彎型である。中央に花文を配した格窓文と格座間との間には青海波をぎっしり配する。外面にはピンホールと総釉の高台際まで広範な荒い砂をM形匣とのハナレ砂として使用している。胎土は比較的磁器質である。尚、二次焼成によってかせている。類例は漳州窯系平和県南勝・五寨窯にある。





(21) 1 A 包含層 (後期)

①・⑥漳州窯系青花孔雀文盤

折縁型で畳付けには粗い砂が付着している。景德鎮窯系に似せるように純白の乳濁釉を掛けている。高台内は、無数のピンホールがある。

②・⑤漳州窯系青花盤

畳付けは総釉で荒い砂が付着、磁器質であるが「ス」が多い。使用時に研磨している。

③・④・⑦・⑧漳州窯系青花盤

胎土と乳濁釉と透明釉の膨脹率の差が焼成後に生じ、漳州窯系製品の特徴とも言うべき先貫入が入る。⑧の腰部には釉切れが一直線に発生している。先貫入と釉切れとピンホールが至るところに見られる。尚、⑦・⑧は同一個体の可能性がある。①～⑧の類例は漳州窯系平和県南勝・五寨に知る。



(22) 1 A 包含層 (後期)

①・③～⑤・⑧・⑨・⑩漳州窯系青花芙蓉手盤

口径40cm前後の内彎タイプで外面に釉切れピンホール・先貫入が目立つ。この芙蓉手タイプは、大坂城下町遺跡で豊臣前期(1583年～1598年)と豊臣後期(1589年～1615年)面を判別する有力な考古学的遺物である。

②漳州窯系青花盤

格座間内に花を有する。外面には貫入と一直線の釉切れが生じている。

⑥漳州窯系青花孔雀文盤

火災時の炭化物が付着。透明釉は景德鎮窯系に類似して良質である。(23) ⑧と接合する。

⑦漳州窯系青花孔雀文盤

高台内は不定方向のケズリの後、乳濁釉・透明釉を掛けていない。葉脈や鳥体部はペンシルドローイング手法を似せた為、線状の凹みがある。

⑪漳州窯系青花盤

小片にもかかわらず釉切れ先貫入が著しく、乳濁釉は他の者より分厚く、高台の内ぐりは高い。

⑫漳州窯系青花芙蓉手鉢

日本ではあまり出土しないサイズで虫喰が多い。高台付け根部分に乳濁釉の釉切れがある。高台内は乳濁釉を掛けない。胎土は極めて陶器質である。

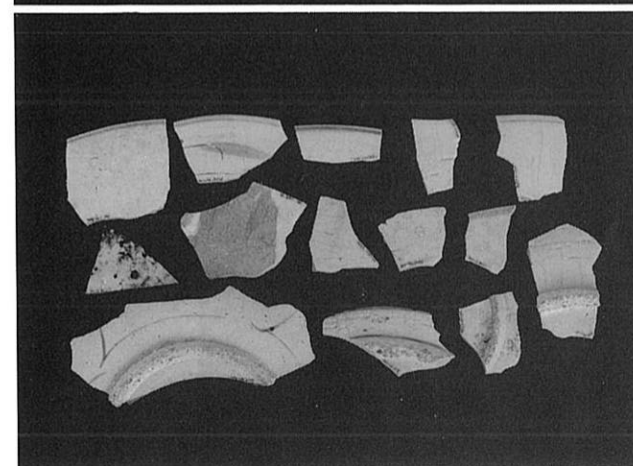
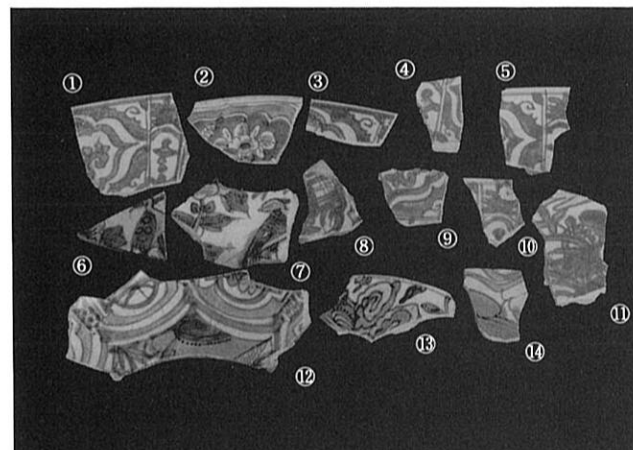
⑬漳州窯系青花盤

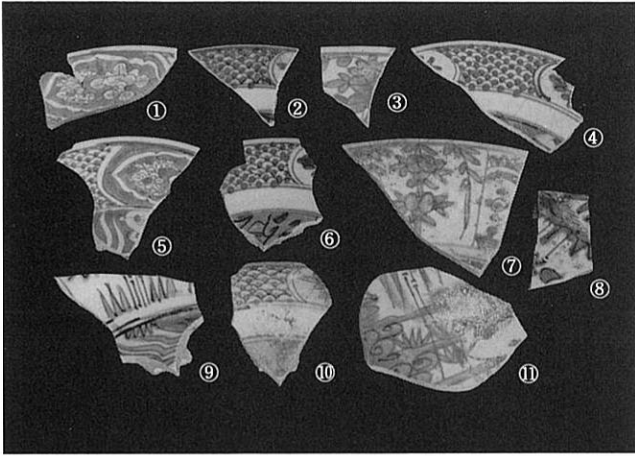
高台際に釉切れが集中、胎土に「ス」が多い。

⑭漳州窯系青花孔雀文盤

高台は低く、高台際に釉切れ、釉溜まりがある。

①～⑤と⑦～⑭は、漳州窯系平和県南勝・五寨窯跡に類例を見る。





(23) 1 A 包含層 (後期)

①・⑤漳州窯系青花孔雀文盤

多く外面に釉切れが生じている。この破片も例外ではない。格座間内に花を配する。

③・④・⑥・⑩漳州窯系青花青海波文盤

口径20cm台の折縁形で格窓内に折枝花文を配する。漳州窯系平和県五寨壩仔山窯に類例を見る。

③・⑦・⑪漳州窯系青花芙蓉手盤

口径40cm台の端反り型で二次焼成による「かせ」と変色が見受けられる。類似品は漳州窯系平和県南勝花仔楼窯仔山窯にある。

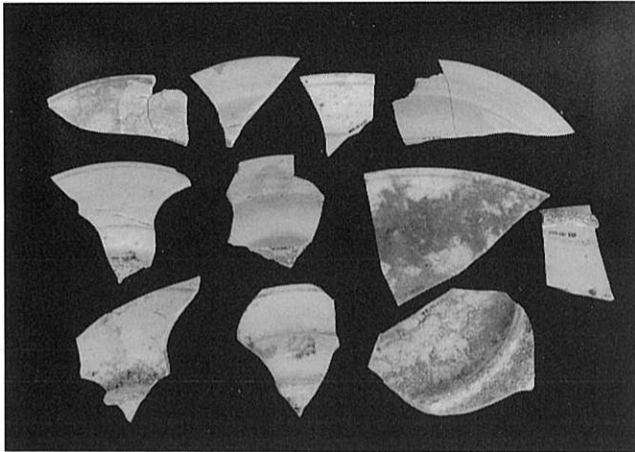
⑧漳州窯系青花盤

漳州窯系に珍しく、高台内で純白度の高い乳濁釉とガラス質の良質な透明釉を掛ける。(22) ⑥と接合。

⑨漳州窯系青花孔雀文盤

端反り型で純度の高い乳濁釉を使用している。口径は40cmタイプ。

①・⑤・⑧・⑨・⑪は漳州窯系平和県南勝・五寨窯跡に類似する。



(24) 1 A 包含層 (後期)

①漳州窯系青花花文鉢

漳州窯系の特徴とも言うべき、純白度の乳濁釉をかけた分厚い三角形の高台に荒い砂がこびりつく。胎土は、灰色で磁器質である。

②・④漳州窯系青花盤

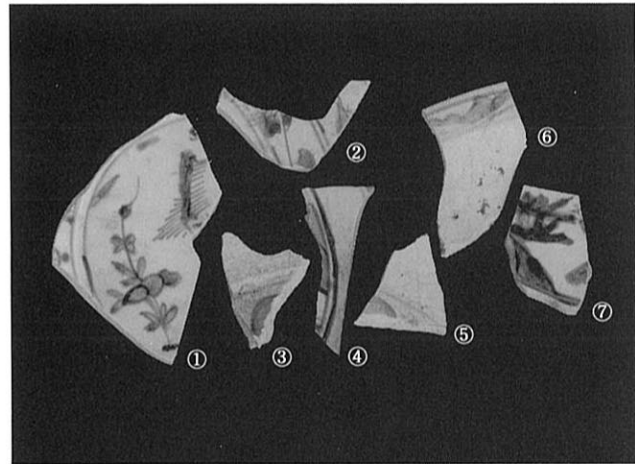
④は端反り型で、漳州窯系には、共に上手の薄い部類である。

③・⑤・⑥漳州窯系青花盤

端反り型であり、胎土が極めて美濃系に似ている陶器質のため、先貫入やピンホールが無数に見える。乳濁釉も淡黄色で、コバルトも淡緑色系である。高台際から無釉である。

⑦漳州窯系青花盤

畳付けに直径2mm大の砂が匣との緩衝剤となっている。コバルトは濃紺系で、砂の付着状態から判断して、いかに漳州窯系製品の透明釉、乳濁釉の熔点が低いかを物語っている。①～⑦は全て漳州窯系平和県南勝・五寨窯跡に類似品を見る。



IX 大坂城跡出土の漆器について

亀井 聡

はじめに

これまでに大坂城跡の発掘調査より出土した漆器について、既刊の概要報告書^{1・2)}では整理中間報告という形で、あるいは研究調査報告³⁾において他地域の遺跡との比較検討を行ってきた。

まず概要報告書では大坂城跡より出土した漆器の中で特に塗色と文様に注目し、出土遺物としての傾向を探ってみた。その結果、出土した漆器の内外面に塗布される色の構成と、器面に施される文様の間には関連性がみられることを明らかにした。このような傾向が大坂城跡特有のものであるかを検証するため、他の遺跡から出土した漆器について同様に傾向を探り、大坂城跡の出土漆器と比較検討を行った。これにより、漆器の塗色には地域性が存在し、また文様には遺跡それぞれの性格が反映されている可能性を示した。

1997年、北陸中世土器研究会により漆器に関する貴重な研究成果が報告された⁴⁾。越後から若狭にかけての出土事例を集成し、各地域の様相から北陸の特色を検討しようという試みであり、筆者のいう地域性の検討をより詳細に行った事例である。その前書きの中で四柳嘉章氏は「北陸の」と限定しているが、これまでの漆器研究史をまとめ、多岐にわたる研究成果を記された。また、氏はその資料集について、「全国の漆器研究の基準として利用されることになるだろう」と述べているが、同研究会の長年にわたる漆器に関する研究活動の成果が網羅されており、地域研究の手本ともいべき資料となっている。

紙数の都合上、本稿では先学の漆器研究史についての記述を省略させていただくが、同研究会の資料は近年における漆器考古学の最新成果を示しており、興味のある方はこちらを参考にされたい。

これまでの大坂城跡における漆器の分析では、時間軸の設定は行わず、中近世というひとくくりの時間の中で、大坂城跡という一つの小地域の傾向を明らかにしようとしてきた。現在、大坂城跡から出土した漆器は1,000点近くに達し、資料数が大幅に増加していることや、出土遺物の帰属する遺構や層位の編年が整理されてきたことから、これまでの整理過程における認識を再検討する必要が生じてきた。そこで、本稿ではこれまで行った漆器に関する整理作業を振り返り、時間軸という別の側面からみた出土漆器の傾向を探ることにより、大坂城跡という一つの地域の検討を試みることにする。

1. 整理・分析の概念について

本文中に掲載する「表14 観察表⁵⁾」の基本でもある、これまで行ってきた大坂城跡における漆器の整理概念の詳細については拙稿²⁾を参考にされたい。現時点における基本的な整理方針に変更はなく、ここではその後修正を行ったものを中心に簡単な説明を行っておく(図4-IX-1)。

漆器の観察は、いくつかの属性を設定して分類あるいは計測を行っている。土器の場合と同様、計測については口径・器高・底径を基本とする。漆器の性質上、出土遺物に完形品が少ないことから、前述の項目のデータ不足を補うために、比較的残りの良い底部から高台について高台内径・高台径・器厚・高台高・底厚の計測を追加している。高台高のように、器種によっては「0」と計数するものがあることから、不明なものは空白とする。また、それぞれの破片がどの部位にあたり、どのような形状であるかを残すため、全体を口縁・腰部・高台の三つの部位に分割し、それぞれを凡例図のように分類してい

る。本稿において最も重要な分析対象であり、漆器の特徴でもある塗色と文様についての詳細は、やはり拙稿³⁾を参照していただきたい。塗色は黒・青（緑）・朱・赤・茶・紫の6色に分類し、観察表ではそれぞれの色に対応する1～6の数字を用い、内面・外面の順に二桁の数字の組み合わせで示している。また、剥離などにより不明なものは0と表示する。文様は家紋文様と絵画（非家紋）文様の二つに大別し、それぞれ家紋文様は植物門（MS）・文様門（MY）・器材門（MK）・文字紋（MJ）・その他（MX）、絵画文様は植物（KS）・動物（KD）・その他（KX）に分類している。文様も不明なものと同様のものの混同をさけるため、不明なものは空白、明らかに文様の描かれていないものは無と記している。なお観察表の文様番号は、既知の文様と同一の場合に区別するため、「表14」の対応する文様番号を記載し、新出のものはPと注記している。新出の文様については、本文の記述を参考にいただきたい。できるだけ紙面に無駄のないよう、観察表は略号を用いて記載しており、それだけではやや見難いものとなってしまったことをここにお詫びする。

前述のように、大坂城跡の調査・整理の中で設定した時期区分により、遺構の所属時期が明らかとなり、そこから出土した遺物についても時期設定が可能となった。観察表の「時代」の項目は漆器の出土した遺構や層位に与えられた時期区分をそのまま当てはめたものであり、本文を引用すると、前期は豊臣前期（大坂城築造から三の丸築造直前）、後期は豊臣後期（三の丸築造以後から大坂夏の陣直前）、畑は中世末期（大坂夏の陣集結から徳川大坂城再築直前）、江戸は江戸期（徳川大坂城再築以後）となる。このように、本分析の基本となる時間軸は漆器の帰属する遺構や層のものであり、漆器そのものの形態的特徴によるものではないことをあらかじめお断りしておく。この他にも多数の属性について計測・観察を行っているが、本文中では紙面の都合上、すべてのデータを掲載することは不可能であった。

過去の分析においては、資料番号1つを1個体とみなして集計を行ってきた。データの重複を避けるためであり、観察の段階から同一個体と思われる破片についてはできる限り同じ番号を設定し、備考欄

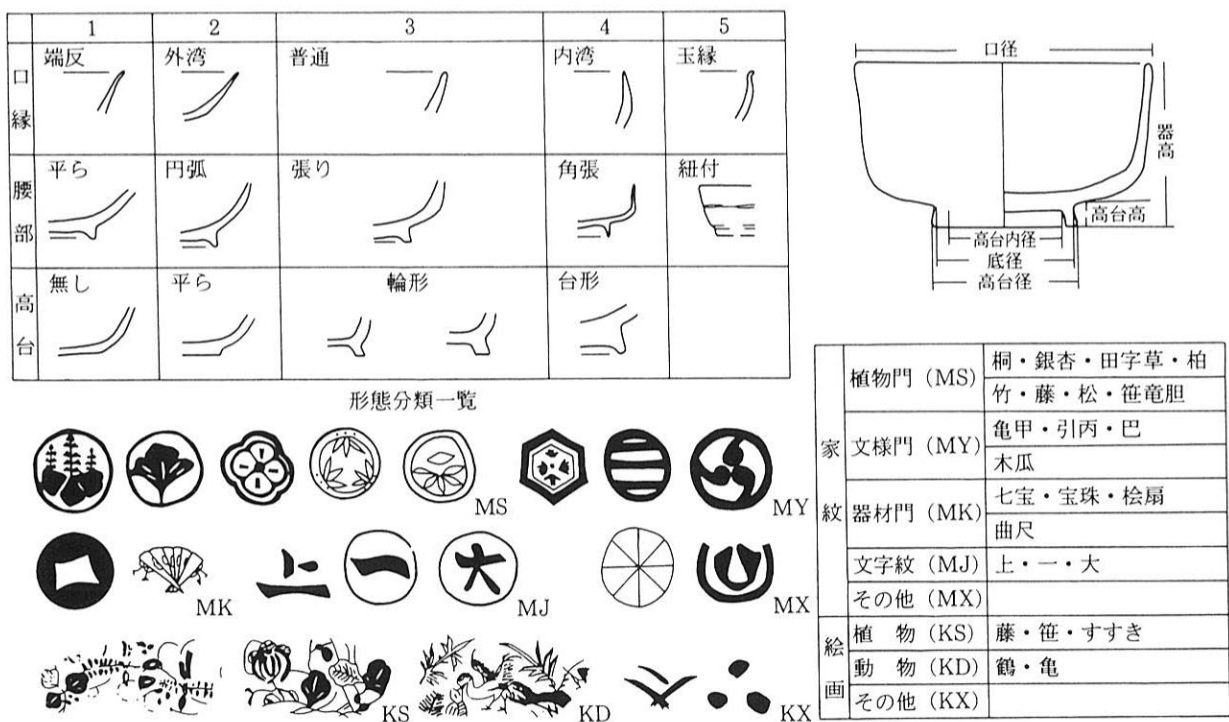


図4-IX-1 漆器の観察概念（注3より）

表4-IX-1 塗膜分析済漆器の一覧

個体番号 (シ-ラー)	肉眼による観察					分析番号		分析結果		作成切片 試料番号	残存率	登録番号	調査区	出土状況 層位・遺構	時代	転用・備考他	
	内色	内底色	肉眼 外色	外底色	口縁	内文色	外文色	内面	外面								内面
107	赤		赤					1				0.05	1A1957	1A	後期		
122	濃赤		濃赤					2				0.05	1A2194	1A	後期		
129	赤	赤	赤	赤				3					1A2285	1A	後期	内底焼け	
7	赤		黒					100	5	H	F,C	0.01	1A402	1A	後期		
9	赤		赤					101	6	FO	FO	0.10	1A432	1A	後期	変色	
13	濃赤		濃赤					102	7	FO	FO	0.05	1A551	1A	後期	内面焼け?	
15	赤		赤					103	8	H	FO		1A552	1A	後期	内面重ね塗り	
26	赤	赤	赤	赤				104	9	FO	FO	0.10	1A614	1A	後期	内面・口縁焼け	
40	黒	黒	黒	黒				105	10	F	F		1A730	1A	後期	くろ目	
56	黒		黒					106	11	FO	FO	0.01	1A1004	1A	後期		
78	朱		朱		黒(口縁)			107	12	H,F	H,F	0.01	1A1261	1A	前期	口縁すり切れ、良品	
77	赤	赤	赤	赤				107	12	H,F	H,F		1A1261	1A	前期	重ね塗り、はげ目	
80	赤	赤	赤	赤				108	13	H,F	H,F		1A1263	1A	前期		
83	赤		赤					108	13	H,F	H,F		1A1263	1A	前期		
84	朱赤		朱赤					109	14	H,FO	FO,H		1A1264	1A	前期	内面はげ目	
102	茶	茶	茶	茶				110	15	FO	FO	0.10	1A1876	1A	後期	内面焼け	
108	朱		黒					111	16	H,F	H,F	0.01	1A1988	1A	前期		
116								112	17	FO	FO		1A2114	1A	後期	変色、重ね塗り	
118	濃赤	濃赤	黒	黒				113	18	FO	FO	5	0.60	1A2129	1A	後期	内底焼け?
138	黒	黒	黒	黒				114	19	FO	FO		1A2339	1A	後期		
152	赤	赤	黒	黒		朱		115	20	FO	FO	0.15	1A2582	1A	後期		
162	黒	黒	黒	黒				116	21	FO	FO	0.10	1A2667	1A	後期	溝80上層(7a)	
163	黒	黒	黒	黒				117	22	FO	FO	0.25	1A2718	1A	後期	溝73	
61	?		焦げ茶	焦げ茶				119	24	FO	H	0.15	1A1063	1A	後期	削身	
60	朱		黒	黒				119	24	FO	H	0.05	1A1063	1A	後期		
62	朱		黒	黒		朱		119	24	FO	H	0.05	1A1063	1A	後期		
63	朱		黒	黒				119	24	FO	H	0.05	1A1063	1A	後期		
294	黒		黒					120	25	F	F,H	0.05	2D451	2D	前期	井戸1下層	
296	赤		焦げ茶			朱、赤		121	26	F,H	F	0.15	2D453	2D	前期		
147	赤		赤					122	27	FO	FO		1A2486	1A	後期	江戸	
165	朱赤		朱赤					123	28	FO,F	FO	0.10	1A2750	1A	後期	谷1上層	
315	赤		赤					34		H,FO		0.05	3A462	3A	前期		
319	朱	朱	朱	朱		黒		35		FO,H		0.15	3A486	3A	前期		
328	?		朱赤					36		FO		0.10	3A552	3A	前期	削身	
333	朱		朱			黒		37		FO		0.10	3A651	3A	前期		
335	赤		黒			朱		38		FO		0.10	3A676	3A	前期		
339	朱赤		焦げ茶					40		H,FO		0.10	3A701	3A	前期		
353	朱	朱	朱	焦げ茶				41		FO		0.30	3A792	3A	後期		
359	朱		朱			黒	125	42	H	H,FO		0.05	3A825	3A	前期	はげ目	
365	朱赤		黒					43		FO		0.05	3A870	3A	後期		
484	黒		黒					44		F		0.05	3A2691	3A	前期	溝90下層?	
489	焦げ茶		焦げ茶					45		FO		0.05	3A2747	3A	前期	溝68	
504			黒		(赤)			46		F		0.10	3A2958	3A	後期	削身	
555	赤	赤	赤	赤				126	47	FO	FO	0.15	3B32	3B	後期	池1	
569	黒		黒					127	48	H	F,H	0.01	3B46	3B	後期	池1東上層	
571	赤	赤	赤	赤		黒		49		F		0.20	3B55	3B	後期	池1中層	
578	茶		茶					50		FO		0.30	3B66	3B	後期	池1中層	
712	黒		黒					128	51	FO	H,FO		3B88	3B	後期	池1中層	
588	茶赤	茶赤	黒	黒		赤		128	51	FO	H,FO	0.20	3B88	3B	後期	池1中層	
591	茶赤	茶赤	黒	黒				129	52	FO	F	0.20	3B93	3B	後期	池1東畦	
630	朱赤	朱赤	朱赤	朱赤				130	54	FO	FO	0.10	3B652	3B	前期		
660	茶赤		黒					55		FO,H		0.05	3B1041	3B	前期	中央列南中	
662			黒					56		F	F,C		3B1120	3B	後期	土坑34	
663			赤					57		FO,H		0.05	3B1132	3B	前期		
16	赤		赤					58		FO,H		0.01	1A553	1A	前期	土坑140	
45	赤		赤					132	59	FO,H	FO	0.05	1A801	1A	後期	溝35	
59	赤		黒					60		F		0.05	1A1026	1A	後期	土坑140	
64	朱		黒					133	61	FO,H	F	0.05	1A1063	1A	後期		
65	朱		黒					133	61	FO,H	F	0.25	1A1063	1A	後期		
66	朱		黒					133	61	FO,H	F	0.05	1A1063	1A	後期		
87	赤		赤					134	62	FO	FO	0.15	1A1271	1A	前期	屋敷11-2	
139	赤		黒			朱		63		H,FO		0.10	1A2344	1A	後期	土坑296	
155	赤	朱	朱			黒		64		FO		0.30	1A2655	1A	後期	屋敷3	
164	赤		赤					65		FO		0.25	1A2719	1A	後期	溝35	
672	赤	赤	赤	赤			135	66	FO,H	H,FO		0.20	3B1217	3B	前期	溝34	
664	赤	赤	赤	焦げ茶				67		FO,H		0.20	3B1168	3B	前期		
667	黒	黒	黒	黒				68		H,FO		0.20	3B1197	3B	前期		
668	茶赤		黒					68		H,FO		0.15	3B1197	3B	前期	変形	
673	朱	朱	朱	朱				69		FO,H		0.05	3B1227	3B	前期	江戸	
669			朱					70		H,FO			3B1209	3B	前期	溝15	
521	朱		朱					71		FO		0.05	3A3204	3A	前期	溝37上層	
520	赤		赤					72		FO,H		0.05	3A3197	3A	前期		
326	赤		赤				137	74	H,FO	H,FO			3A552	3A	前期		
511	赤		黒					75		FO		0.05	3A3034	3A	前期	井戸6	
340	黒	黒	赤	赤				76		FO			3A705	3A	前期	溝40	
349	朱		黒			朱		77		FO		0.35	3A764	3A	後期	変色、外面砂付着	
341	赤	赤	黒	黒				78		FO		0.20	3A711	3A	前期	内底焼け	
401	赤	赤	黒	黒				79		FO			3A1434	3A	前期	全焼け?	
570	赤	赤	黒	黒				80		FO		0.10	3B47	3B	後期	池2上・中層	
608	朱	朱	朱	朱			黒	138	81	FO,H	H,FO	+	0.70	3B237	3B	前期	良品?
603	朱	朱	朱	朱	(黒)		黒	139	82	FO	FO,H		0.80	3B193	3B	前期	補修塗り
313	朱	朱	朱	朱			黒	83		FO,H		0.80	3A433	3A	前期	内底焼け、内外焦げ	
282	朱	朱	朱	朱			くろめ	140	84	FO,H	FO,H		0.20	2D308	2D	前期	
298	赤		黒					85		F		0.20	2D457	2D	後期		
148	朱	朱	焦げ茶	焦げ茶				86		FO		0.40	1A2508	1A	後期		
363	朱		黒					87		FO		0.30	3A833	3A	前期		

に破片数を注記した。この方法は点数の少ないうちは有効であったが、総数約1,000点となっていた現在では同一個体を判断することが困難となってきた。筆者は以前、計測における数値化について小考を著したことがあるが、⁶⁾上記の方法では破片数計測と何ら変わるところがなく、分析結果に同一個体の存在を否定できるほど点数も少なくない。しかし他の方法についても、口縁残存率では口縁部の残っているもの以外が除外されるためにすべてを網羅できない、重量法では水漬けと乾燥品に大きな差が発生するなど、一長一短があるために適していない。そこで本稿では個体残存率を採用し、一つの資料番号分が完形の個体に対して何%ほど残存しているかを計測した。主観的な誤差を含んでしまう可能性は

残るものの、全資料を分析の対象にできる利点があり、以下の集計はこの個体残存率の合計によるものである。

表4-IX-1は大坂城跡から出土した漆器資料のうち、外部に委託して塗膜の化学分析を行ったものの一覧である。表中の「分析番号」がサンプルのデータ番号、「分析結果」が検出された化学成分であり、それらの詳細については別章を参照されたい。スペースの関係から、表中の化学記号は略号で表現しており、Hは水銀、Fは鉄、FOはベンガラ、Cは銅を示す。この他にも鉛等が検出されているが、微量のため省略する。左側には肉眼による観察の色分類を記しており、化学成分から想像される色と肉眼観察による色が異なるものに関してはトーンを貼付している。トーンは化学成分から想像される場合の黒・朱・朱赤・赤の順に濃い～淡いの四段階で示している。漆液の色付けはベンガラや水銀・炭素粒子などを混合して作ることが知られており、塗膜内の化学成分を分析することにより、客観的に塗膜の色を区別できるとも考えられる。しかし、全く異なる色漆を重ね塗りすることもあり、見た目と内包する漆膜が必ずしも一致するとは限らない。表は参考までに化学分析と肉眼観察の違いを示すため作成したものである。

前述の分類基準のように黒・朱・赤・茶などの色分けにより肉眼観察した場合、化学成分との合致率は約20%と非常に低い値となる。しかし、これは肉眼観察の信頼性を否定するものではない。写真図版4-IX-1は筆者が作成した塗膜断面の顕微鏡写真である。番号118・667は、化学分析においてベンガラあるいは水銀を含む赤色顔料系の成分が検出されており、その結果から赤色の漆器と考えられるものである。しかし、断面写真によると、炭素あるいは鉄粉粒子らしき混合物のある下地上に、赤点をわずかに含む褐色の漆層がみられるだけであることがわかる。この赤点がベンガラ等に相当する可能性は高いものの、褐色に変化している漆層の透過性が良く、肉眼では下地の色が透けて黒く認識された。このように化学分析と「見た目」が一致しないことは十分にあり得ることであり、塗色分析の難しさを改めて認識させられる結果となった。このように塗膜を検討する上では見た目だけではなく、化学分析や断面観察など多角的に検証することが重要である。すべての出土漆器の切片試料を作成することは容易ではなく、膨大な時間と労力を必要とするが、塗膜断面写真のわずか数点の中にも塗り方の違う個体があり、断面観察の必要性を物語っている。

このように塗色については若干の問題点が浮上してきたため、本稿では赤系と黒系の2色に大別して分析を行うことにする。このことにより前述の誤差は大幅に減少される。また筆者は、遺跡出土の漆器から、赤系と黒系の2色の構成に地域性がみられることを明らかにしており³⁾、今回の分析対象とする塗色を赤黒に大別してもその結果に矛盾は生じないと考える。

2. 形態・器種の変化について

遺構に設定された時間軸は、古代・豊臣前期・豊臣後期・畑（中世末）・江戸・近代に大別されることは前述のとおりである。それぞれの時期の詳細については本文を参照されたい。鋤柄氏によると、調査区によっては時期の細分が可能であり、細分化による基準資料の呈示も行っている⁷⁾。氏はその中で三の丸築造以前から江戸期にかけての漆器の変遷についても触れている。本稿では、すべての調査区から出土した漆器資料を分析の対象とすることを念頭にし、あえて時期の細分は行わない。これにより分析の対象範囲を拡大し、より広範な大坂城跡における様相の把握に努めることにする。

口径と器高について図示したものが図4-IX-2である。2つの計測値について双方が明らかなもの

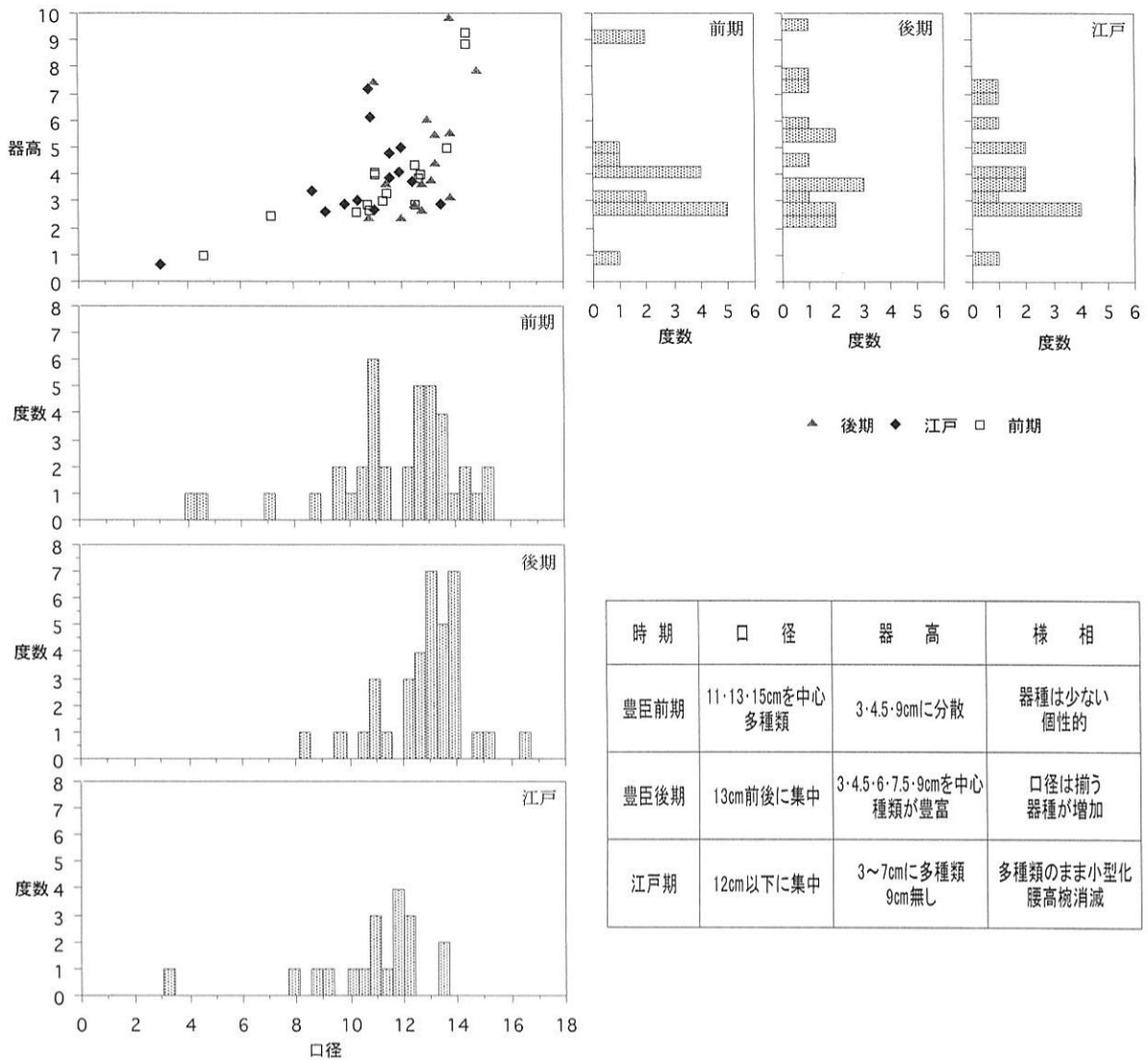


図4-IX-2 時期別の口径・器高

を二次元の散布図に示し、片方のみが計測可能であったものを各時期別のヒストグラムによって示している。以下の図4-IX-3・4についても同様である。

口径と器高について、鋤柄氏は「口径13cm前後を共通規格として、器高が3cm程度の皿と8.5cm程度の椀に分けられ、豊臣期には器高が6cm前後の製品もみられる⁷⁾」としている。口径は、豊臣前期に11・13cm前後に集中がみられ、その他に7cm以下や15cm前後にまとまりがみられる。豊臣後期では11cm前後のものがやや減少し、13cm前後に集中するようになる。江戸期になると、12cm前後を中心に全体的にやや小振りとなる。器高は漆器の器種を分類する基本になると考えられ、豊臣前期に3cm前後の皿、4.5cm前後の平椀、9cm程度の腰高椀がみられ、豊臣後期に6cm前後、7.5cm前後の椀が現れ、江戸期には9cm以上の腰高椀がみられなくなる。このことから、豊臣前期は器種としては種類が少ないものの、口径に多様性がみられる段階から、豊臣後期は口径が画一的となり、器種が増加する段階へと変化する。江戸期は豊臣後期と同様に器種は豊富であるが、いわゆる中世的な腰高椀が消え、全体的に小型化したと考えられる。

器厚・底厚については、鋤柄氏は「次第に薄手の作りとなるが、三の丸築造以降のある段階に底部が

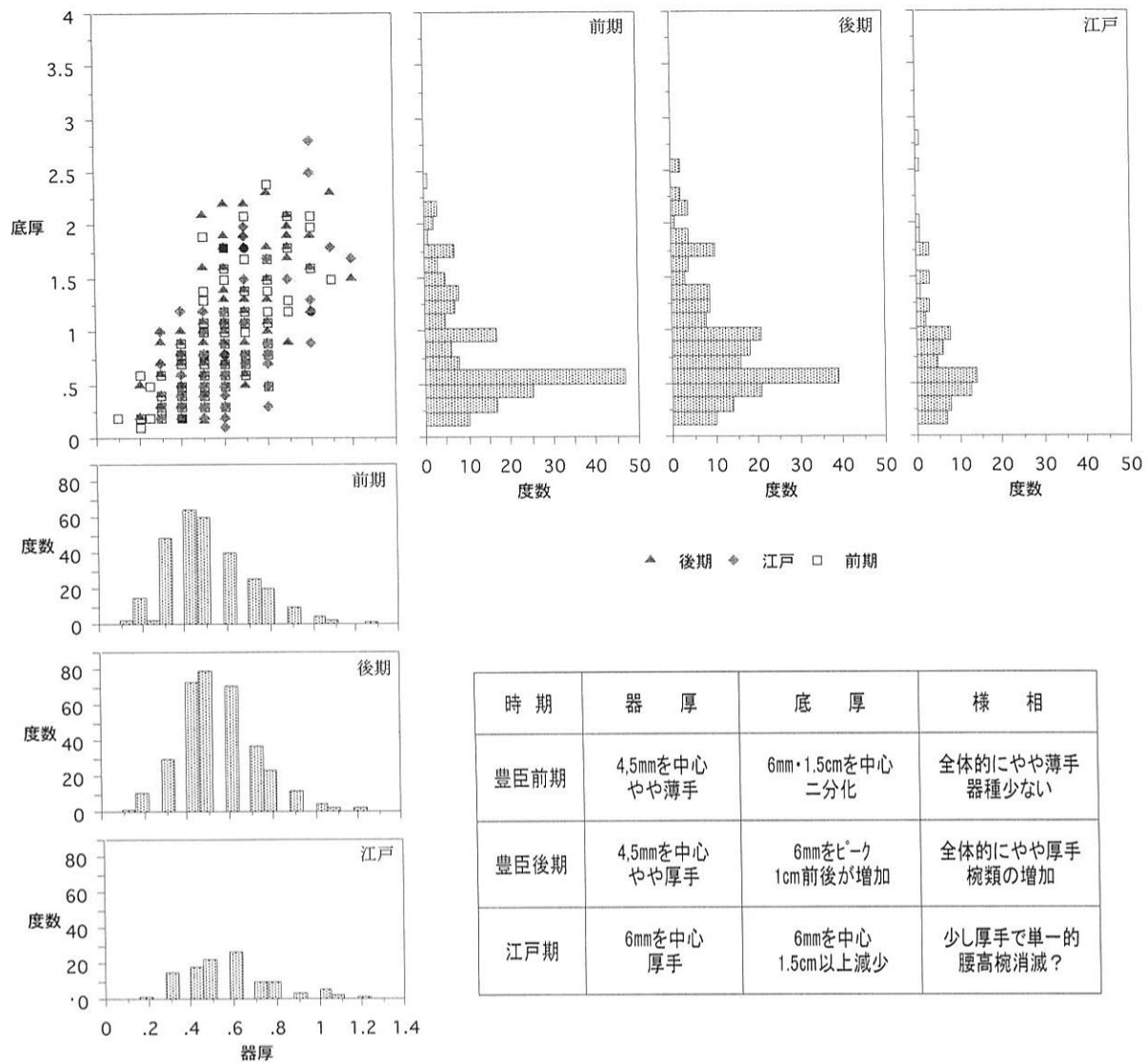


図4-IX-3 時期別の器厚・底部厚

著しく厚い製品がみられる」としている。⁷⁾ 図4-IX-3は器厚と底部厚を示したものであるが、器厚は腰部の厚さを計測したものであり、豊臣前期から江戸期にかけて5mm前後を中心にあまり変化のない状況がみられ、鋤柄氏と若干異なる結果となった。これは豊臣前期から後期を細分化した鋤柄氏との差が現れたものであろう。ヒストグラムの形状をみると、同じ5mm前後を中心としながらも豊臣前期はやや薄手、豊臣後期はやや厚手のものに偏っており、江戸期では6mm前後を中心にわずかに厚くなる傾向がみられる。底部の厚さについては、豊臣前期では6mm以下と1cm以上の二種類がみられ、豊臣後期では1cm前後のものが増加し、全体的に厚手傾向となる。江戸期になると1cm以上のものは減少し、ほとんどが1cm以下の薄手のものとなる。底部が1.5cm前後と厚いものは中世を通してみられ、江戸期に減少することから、前述において同様の変化がみられた腰高椀がこれに相当すると考えられる。鋤柄氏のいう「著しく底部の厚い製品」は、確かに豊臣後期に多くみられるが、この時期は同時に1cm前後の底部をもつものが増加しており、前述の口径・器高の現象と合わせてみると、この時期に椀類の器種が増加したことを示すものとする。

そこで、これらの椀類の器種分類を表す形態の一部として、比較的残りの良い高台部に注目してみる。

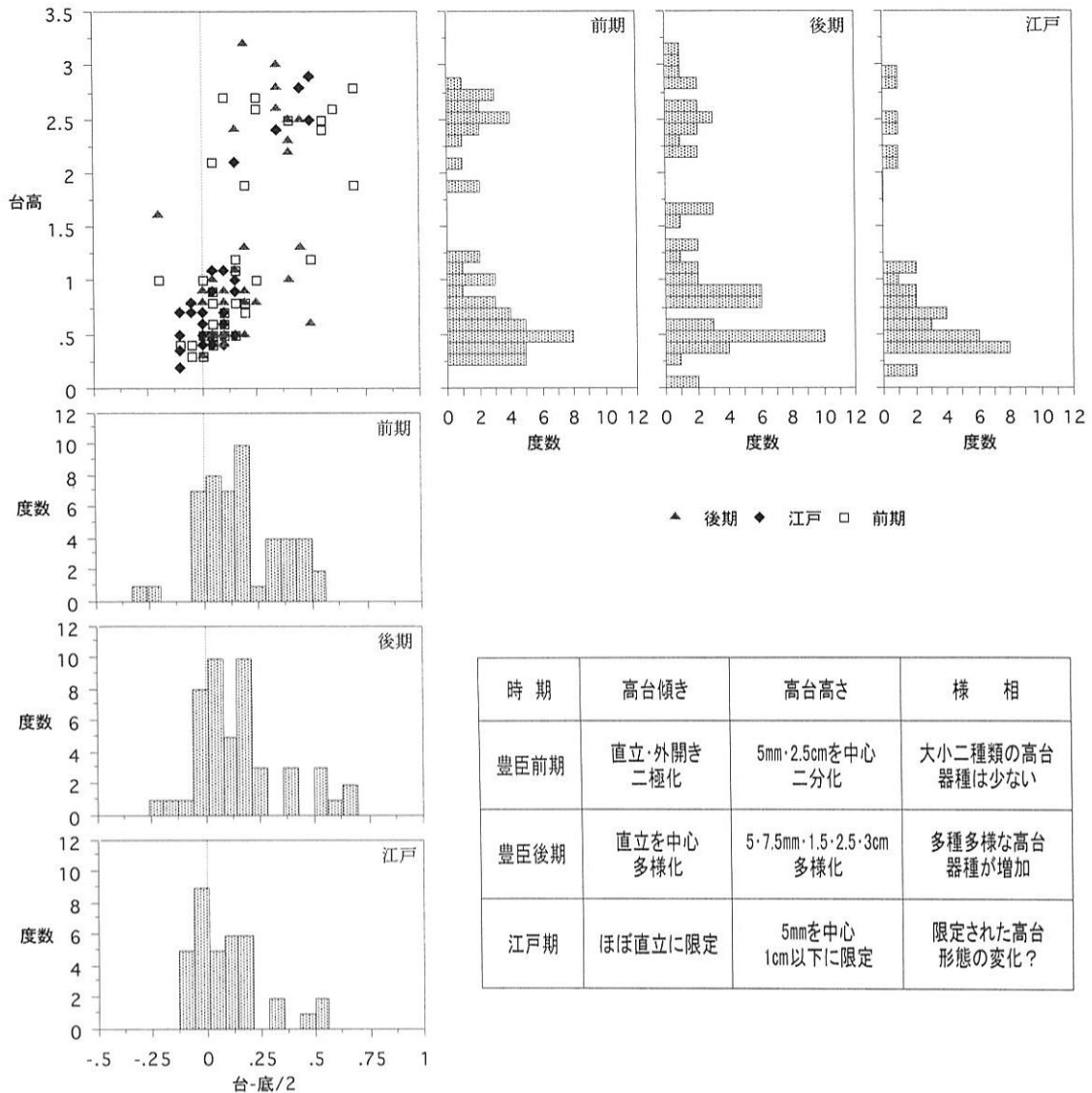


図4-IX-4 時期別の高台部傾き・高さ

高台の高さと、高台径と底部径の差から、高台の大きさと傾きを表したものが図4-IX-4である。ここにいう高台と底部の差は、数値が+ほど高台が外に開き、-ほど内傾しており、0に近いほど直立していることを示している。

高台高は、豊臣前期では0.5cm前後と2.5cm前後の大きく二つのグループに分けられる。豊臣後期ではこの二つの間を埋めるような1.5cm前後のものや、3cmを越える大型の高台が現れ、種類が増加している。江戸期になると高台の小さなものが大半を占め、1.5cm以上のものは大幅に減少する。高台の傾きは、豊臣前期では直立と外開きの二つのグループに加え、内傾する高台がわずかにみられる。豊臣後期では明確なグループはみられず、直立する高台を中心に内傾から外開きまで幅広い種類がみられるようになる。江戸期には直立する高台を中心に、外開きのものがわずかにみられる程度である。

これらのことから、高台は、豊臣前期に大型で外に開くものと低位で直立気味のものの二種類であったが、豊臣後期に小型から大型、内傾から外開きと多種多様なものがみられるようになる。しかし、江戸期には小型で直立気味の高台に集約され、これが大半を占めるようになる。

以上、器種の変遷についてまとめてみることにする。豊臣前期は大型の高台をもつ腰高椀と、低位の

高台をもつ平碗や皿に分けられるものの、口径に関しては多様であり、個別的な様相を呈している。しかし、豊臣後期では口径が規格化され、逆に高台に多様性が現れるようになる。高台のバラエティは器種の増加を示しており、一方で口径に統一がみられることから、食器を揃える意識の存在した可能性が考えられる。江戸期は豊臣後期と同様、器高から多くの器種が存在したと思われるものの、高台は小型化して画一的となる。これは器種の多様性が残ったまま、形態的に統一されたことを示すものであろう。

鋤柄氏は大坂城跡周辺の遺物に関する使用者について、豊臣前期を職人・町人、豊臣後期を武家と想定している⁷⁾。本稿における漆器では豊臣前期から後期にかけて器種の増加と碗揃えという大きな変化がみられ、大坂城跡周辺が町屋から武家屋敷へと変化したことにより使用者層が大きく異なったとする氏の見解と一致する傾向が認められた。一方、豊臣後期から江戸期にかけて、漆器の器種構成には変化がみられず形態のみが変化するという様相は、豊臣氏から徳川氏へと城主が代わるものの、大坂城周辺には武家屋敷を中心とする使用者層の存在があり、むしろ時代的な変化が強く影響したことを示したものと考えられる。

3. 塗色について

これまでに大坂城跡出土の漆器を他の遺跡と比較し、本遺跡の塗色がバラエティに富んでおり、独特の地域性を持つことを明らかにした³⁾。その中でも、特に大坂城跡特有の傾向として赤系の塗色が多くみられることを挙げ、本遺跡における漆器の特徴とした。ここでは大坂城跡より出土した漆器の塗色の構成を時期毎に検証し、漆器の塗色の変遷から本遺跡の特徴の再検討を行うことにする。

図4-IX-5は各時期における漆器塗色の点数と構成比である。これによると、豊臣前期では出土した漆器の半数が総赤であることが分かる。このような傾向の遺跡は他に例をみない。東京都にある増上寺はこれに近い傾向を示す唯一の遺跡であるが、ここは中世後期から江戸期にかけて江戸城の保護の下に繁栄し、諸大名家の宿坊としても利用された寺院である。大坂城跡ではそのような性格の遺構はみつかっておらず、前述のように町屋を中心とする遺跡としては、やはり特異な傾向と言わざるを得ない。

豊臣後期では総赤の漆器がやや減少し、代わって内赤外黒および総黒のものが大幅に増加する。全体の構成としては総赤と総黒がほぼ同様にあり、内赤外黒がそれよりも若干多くみられる程度である。このような塗色の構成も他の遺跡にはみられず、独特の様相を呈している。この時期、大坂城周辺は三の丸が整備され、諸大名の屋敷地を建設したことが明らかである。これにより、内赤外黒を主体とする関

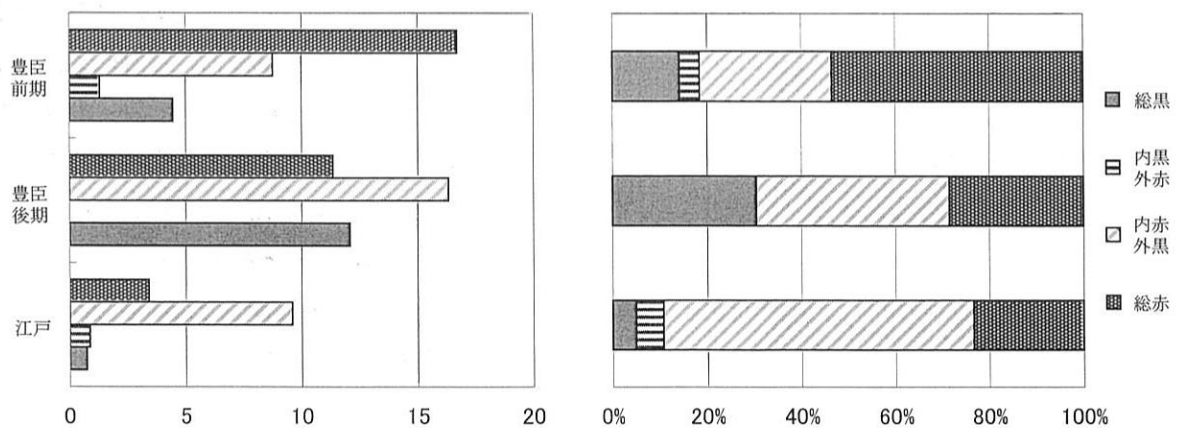


図4-IX-5 時期別の塗色量比

東や総黒を主体とする北陸等³⁾、他の地域の漆器が大坂城周辺に持ち込まれ、新たな地域性が生まれたという解釈が可能である。しかし、当該期の漆器について個々の産地や地域性を鑑みた観察を行っていないため、あくまでも推測の域を脱しない。ただし、他の地域に例をみない均一的な塗色の構成が豊臣後期の段階に現れることは確かであり、これに大坂城周辺における環境の変化が大きく関わっている可能性が高いと考えるのは当然である。

江戸期になると、これまで独自の様相がみられた漆器の塗色に大きな変化が起きる。増加する遺構の検出量とは相反し、出土する漆器の点数が大幅に減少する。内訳としては、前段階に引き続き総赤の漆器が減少し、総黒のものは激減する。全体の構成は7割近くを内赤外黒の漆器が占めており、総赤が2割強、その他の1割が総黒・内黒外赤となる。このような内赤外黒が多数を占める様相は、関東の遺跡の特徴に一致しており、時期的なものも含め、非常に興味深い結果である。比較対象としている江戸の遺跡は中世後期から江戸期にかけての町屋跡や中小の大名屋敷跡であるため、これらの漆器の特徴が関東という地域性だけでなく、江戸期という時期的な様相を示す可能性も考えられ、今後の検討が必要である。しかし、大坂城跡における江戸期の漆器が、これまでのような独特の様相をもつ豊臣期の段階から大きく変化していることは明らかであり、徳川氏支配による新たな大坂城下町の誕生と深く関わっていたものと思われる。

4. 遺構の変遷と漆器について

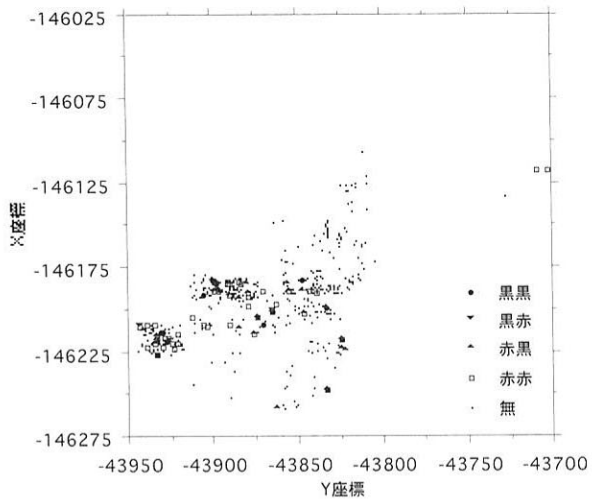
これまで漆器そのものの時間的な変化を検討してきたが、ここでは遺構分布と漆器の出土地点の変遷から、大坂城跡という空間における漆器の様相を明らかにし、本遺跡周辺についての検討を試みることにする。

図4-IX-6は、各時期の遺構および出土した漆器の分布を示したものである。漆器の出土した範囲に限定するため、全調査区のうち、出土点数の少ない北東側1B・2D調査区と南側5A調査区を除いている。出土点数については各遺構(地点)毎に残存率を集計し、1個体未満を少、1～5個体の中、5個体以上を多と区分した。遺構の分布に関する詳細は鋤柄氏が別章に著しているので、そちらを参考にされたい。

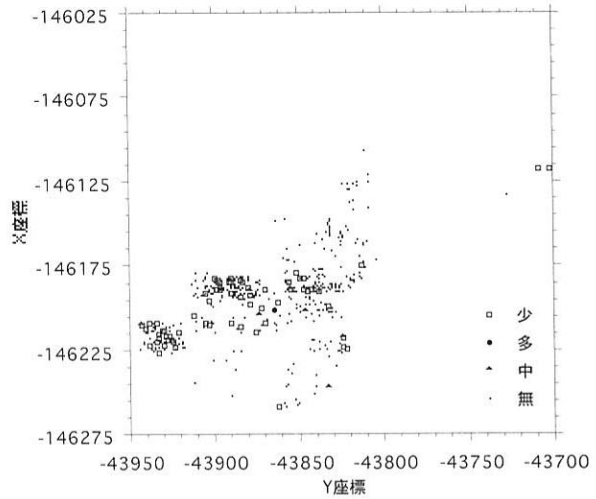
豊臣前期では、遺構は南西部にまとまって分布しており、その中でも漆器は西側に集中する。これは調査区では3A・3Bに相当する。豊臣前期に特徴的にみられる総赤の漆器は、3A調査区北側と3B調査区に集中しており、それ以外の総黒や内赤外黒もほぼ同じ分布範囲に収まっている。出土点数はその範囲の中でもやや東側にあたる3A調査区東側にまとまっているが、突出するものではない。

豊臣後期では、遺構の分布範囲は南西から北東に向かって拡大しており、ほぼ調査区の全体にみられるようになる。漆器の分布も全体に広がる傾向がみられるものの、調査区の中央付近となる5B・6A調査区では確認できない。また、前段階のような出土地点の集中は全くみられず、散漫な状況を呈する。この時期に増加する総黒と内赤外黒の漆器は分布範囲が大幅に拡大し、逆に総赤の漆器がそれらの分布の中に点在する格好となっている。注目すべき点は、塗色の異なる漆器が同じ地点に出土する例が多いことと、一箇所の出土点数が多いことである。

豊臣前期の段階は総赤と他の塗色の漆器が別々の出土地点にみられることが多く、一箇所の出土点数も少ない例がほとんどである。このように豊臣前期では出土地点が近接し、集中している割にそれぞれの出土点数が少ないのに対し、豊臣後期では出土地点が点在している割に各地点の出土点数が多く、ま

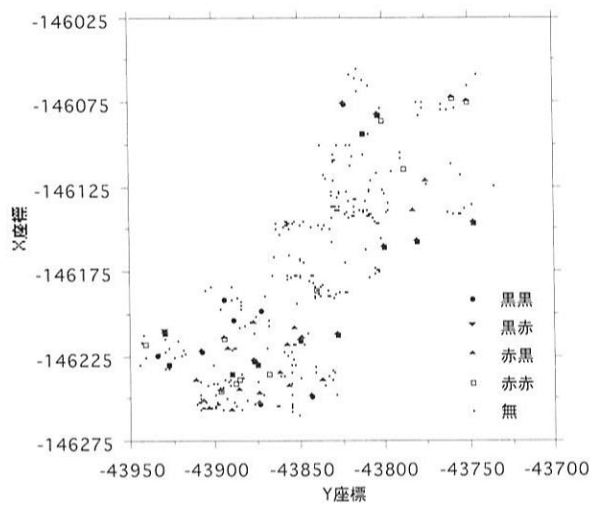


〈塗色〉

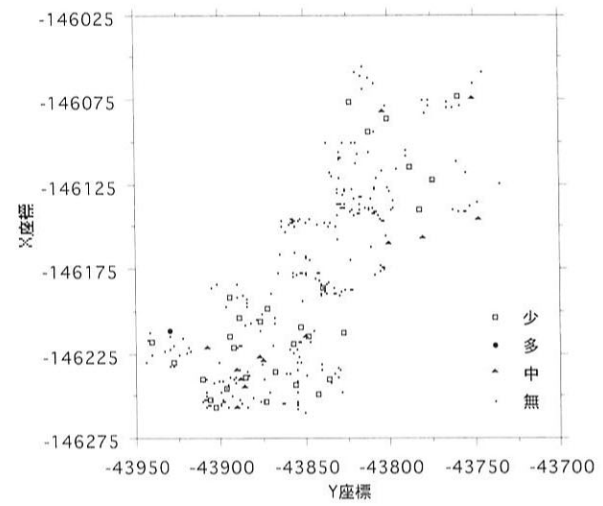


〈出土数〉

豊臣前期（三の丸築造以前）

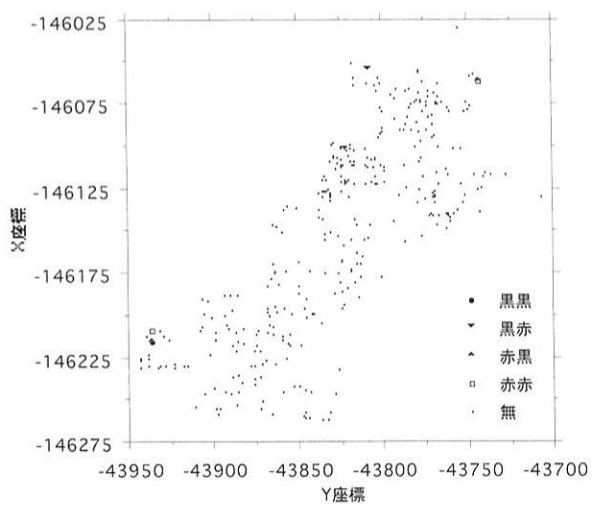


〈塗色〉

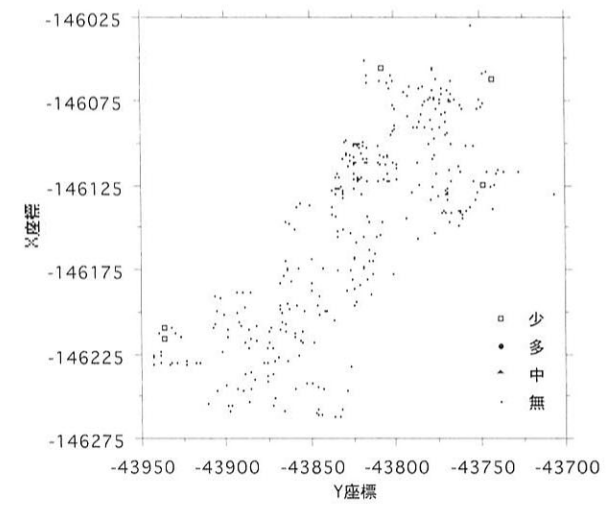


〈出土数〉

豊臣後期（三の丸築造以後）



〈塗色〉



〈出土数〉

江戸（徳川大坂城）

図4-IX-6 時期別の漆器出土遺構の分布

た同一地点に複数の塗色が出土するようになる。この現象は、前述の豊臣前期から後期にかけて土地区画が小規模な町屋割から大規模な武家屋敷へと変化したことや、それによる使用者層が変化した状況と一致するものである。

江戸期になると、豊臣後期に比べて遺構の検出数や範囲はそれほど変化しないのに対し、漆器の出土地点は大幅に減少する。西側3B調査区や北側2B・2C調査区にわずかにみられる程度と、図では示せなかった欄外の南側5A調査区や北側1B調査区などに分布がみられるようになる。それらの出土地点は同時期に大半を占める内赤外黒の漆器を中心としており、点在しているものの、一箇所の出土地数は増加する傾向がみられる。これらは豊臣後期の武家屋敷が払拭された後、新たな町の配置が行われたことを示しており、徳川氏による大坂城周辺の再編を示すものであろう。

このように漆器の分布と点数から、豊臣前期では小規模な区画の集合として調査区の南西に集中した遺構群が、豊臣後期には大規模な区画をもって調査区全体に広がり、江戸期では遺構群の中心が別の場所へ移動していった様子を明らかにした。このような状況が、これまで示してきた分析の結果と矛盾するものではないことは各時期の様相において述べたとおりであり、町屋から武家屋敷、徳川大坂城へと変化していく様子を裏付ける結果が得られた。

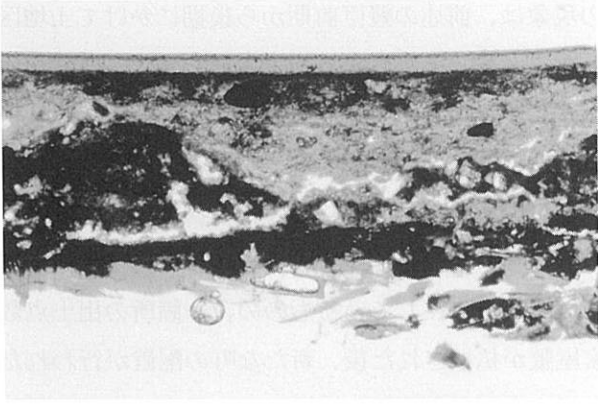
まとめ

以上、大坂城跡より出土した漆器について、新たに加わった時間軸を中心に分析を試みた。出土遺物としては少数の漆器でさえ、大坂城跡における豊臣前期から江戸期にかけての時代背景が色濃く反映されていることが分かった。漆器の中でも、特に塗色という独特の要素に注目して分析を行ってきたが、地域性のみならず時代性を考える上でも有意であることが明らかとなった。このように漆器から大坂城跡という遺跡に検討を加えられたことは、漆器資料のもつ情報の有効性を示せたという点においても一応の成果があったと自負する。しかし、塗色の細分に関する問題や、施文と塗色の関係の検討など課題も多い。また、漆器そのものの分析としては、残念ながら不十分な結果に終わってしまった。今後も増加する漆器資料の活用も含め、諸氏の御叱正をお願いする次第である。

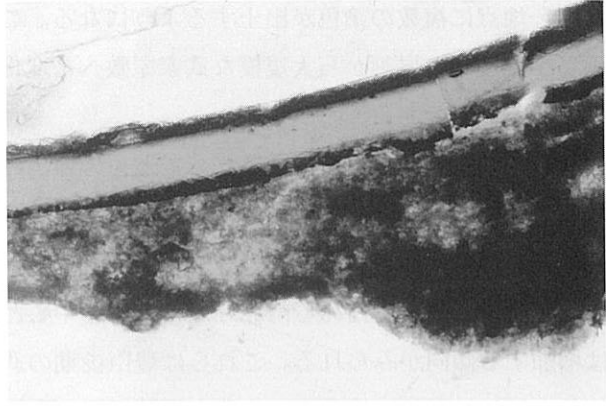
最後に、本稿をまとめるにあたり鋤柄俊夫、小林和美の両氏には大変なご迷惑をお掛けした。末文ながら、記して感謝の意としたい。

注

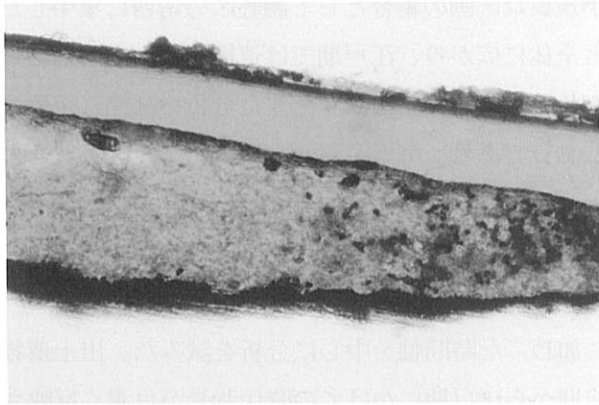
- 1) 亀井 聡 1993 「漆器整理中間報告」『大坂城跡の発掘調査報告』3 (財)大阪文化財センター
- 2) 亀井 聡 1994 「漆器整理中間報告」『大坂城跡の発掘調査報告』4 (財)大阪文化財センター
- 3) 亀井 聡 1997 「中近世における漆器の地域性について」『研究調査報告』第1集 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 4) 北陸中世土器研究会 1997 『北陸の漆器考古学—中世とその前後—』
- 5) 本文中に掲載している漆器観察表は、これまでの整理作業において蓄積したデータである。筆者が、個人的に計測誤差であると認識したものについては独自に修正を行っているため、本稿における分析の基礎データとは若干異なっている。よって、本文観察表を元に検証した場合と、筆者の分析結果は必ずしも一致しない。ただし、観察(計測)の基本概念は同一であるので、データの名称等についての相違はない。
- 6) 亀井 聡 1995 「日置荘遺跡その2調査区の景観復原」『大阪文化財研究』第7号 (財)大阪文化財センター
- 7) 鋤柄俊夫・福岡正春 1998 「豊臣期大坂城下町遺跡における三の丸築造以前の基準資料」『大阪文化財研究』第14号 (財)大阪府文化財調査研究センター



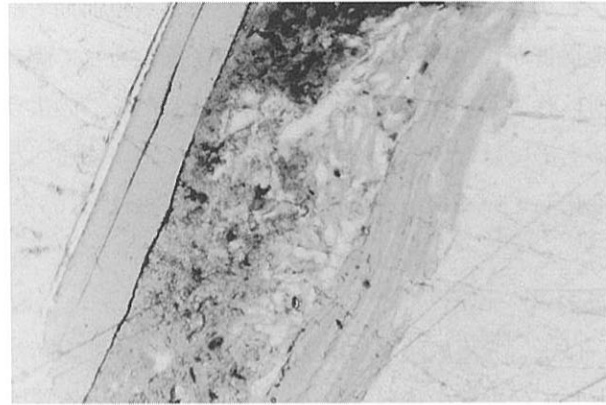
番号97



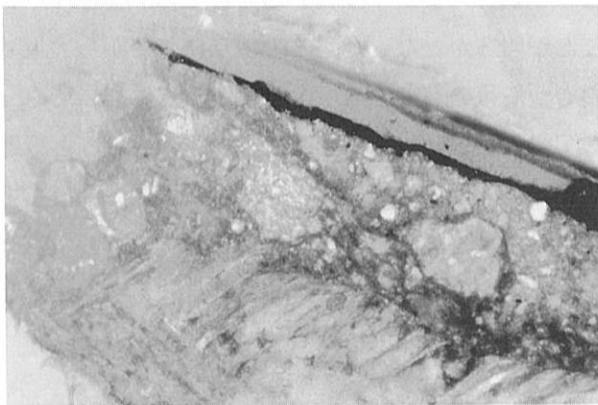
番号667



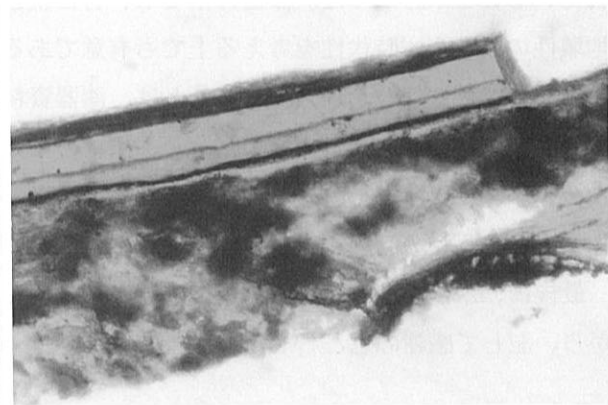
番号118



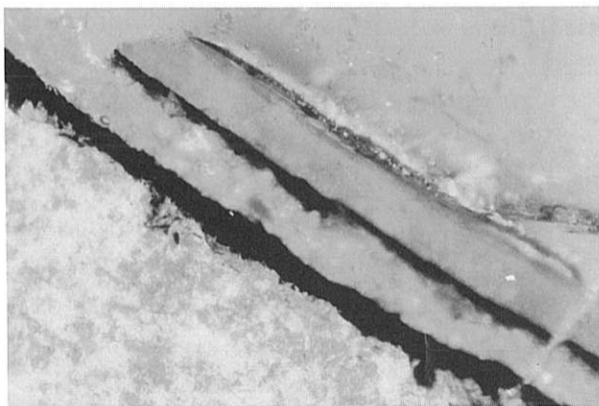
番号811



番号126



番号839



番号306



番号929

写真図版4-IX-1 出土漆器の塗膜断面(40倍)

※番号は本文表14漆器観察表による

X 大坂城跡の竈跡について

合田幸美

はじめに

今回の庁舎周辺整備事業に伴う大坂城跡の調査で検出された竈遺構は、表4-X-1に示したとおり83基を数え、その年代は豊臣大坂城築造以降、三の丸築造直前（豊臣前期）～徳川氏による大坂城再築後（江戸～近代）に及ぶ。年代別の竈遺構数は、豊臣大坂城築造以降、三の丸築造直前（豊臣前期）が72基、三の丸築造以降、大坂夏の陣直前（豊臣後期）が5基、大坂夏の陣終結後、徳川大坂城再築直前（畑の時期）が4基、徳川氏による大坂城再築後（近代）が2基であり、ほとんどが豊臣大坂城築造以降、三の丸築造直前（豊臣前期）に属する。

本稿は、これら竈遺構のうち残存状態の良好なものを取り上げ、今回の調査で様相が明らかになった豊臣前期を中心とする近代までの竈を整理し、紹介することを主眼とした。そのため、竈遺構の図、記述については本文と重複する部分があるが、ご容赦願いたい。

また、周辺の大坂城調査において検出された竈を概観し、今回の調査で検出された竈遺構との比較検討を試みた。次いで、中世～近世竈の雑駁な集成から中世～近世竈における大坂城の竈の位置づけを考えてみた。

1. 竈遺構の整理

豊臣大坂城築造以降、三の丸築造直前（豊臣前期）の竈遺構

豊臣前期の竈遺構72基のうち、17基について概観する。遺構は検出状況などからつぎの6項目に分けて見てみたい。

屋敷に伴う竈（図4-X-1）

遺構番号1A調査区竈4（遺構番号886）（以降、調査区、遺構番号は略し1A竈4（886）のように記述する。）、3A竈3（1069）がある。

1A竈4（886）は、屋敷5に伴う竈である。屋敷5は、東西6m、南北4mの範囲で盛土によって平坦面が形成される。竈は屋敷5の中央よりやや東側に位置し、焚口は西側へ向く。竈は土製で、平面形は円形であり、直径75～95cm、燃焼部径40cmである。焚口側は竈の設置面よりやや低く、焚口前面には瓦片が敷かれる。瓦片は焚口前面から約2m伸びる。竈から遺物は出土していない。竈の南側は横板が立てられていたようであり、材の一部が残存する。竈の背面となる東側では竹材が平行して検出され、垣根の可能性が考えられている。屋敷5とした平坦面には礎石は認められず、上屋の有無は不明である。

屋敷5の西側には、屋敷5と同じく盛土によって平坦面が形成される屋敷4が北面をそろえて隣接する。屋敷5と屋敷4の間には井戸13があることから、これら遺構周辺が台所として機能していた可能性が考えられる。屋敷5の南東側には、南北軸の礎石立ち建物である屋敷6があり、屋敷5の盛土は、その南東隅部から東へ通路状（長さ2m、幅50cm）に屋敷6に向かって伸びていることから、屋敷5、屋敷4、井戸13からなる台所は屋敷6に付随する可能性が考えられる。

3A竈3（1069）、3A竈6（1072）、3A竈7（1073）は屋敷2に伴う竈である。屋敷2は、南北軸の礎石立ち建物を中心とする東西24m、南北11mの範囲であり、礎石立ち建物の北側には溝36が東西方

表4-X-1 竈遺構一覧

番号	調査区	遺構	時期	遺物	焚口の方向	大きさ	掲載
883	1A	竈2	豊臣前期		北		掲載
884	1A	竈1	豊臣前期		北		掲載
885	1A	竈3	豊臣前期		北西		掲載
886	1A	竈4	豊臣前期		西		掲載
931	3A	瓦敷竈	豊臣前期				
1068	3A	竈2	豊臣前期	漆器椀、箸、膳の板、釘、小柄、小刀	南東		掲載
1069	3A	竈3	豊臣前期	瀬戸・美濃灰釉皿、漆器椀、下駄	東		掲載
1070	3A	竈4	豊臣前期				
1071	3A	竈5	豊臣前期				
1072	3A	竈6	豊臣前期	染付、瀬戸・美濃天目碗、白磁皿、土師器皿、齒	北		掲載
1073	3A	竈7	豊臣前期		東、西		掲載
1074	3A	竈8	豊臣前期		北	直径30cm	掲載
1075	3A	竈9	豊臣前期		北	直径30cm	掲載
1076	3A	竈10	豊臣前期		南	直径30cm	
1077	3A	竈11	豊臣前期				
1078	3A	竈12	豊臣前期		西?		
1079	3A	竈13	豊臣前期				
1080.1	3A	竈14	豊臣前期		東		掲載
1080.2	3A	竈14	豊臣前期		西	直径30cm	掲載
1081	3A	竈15	豊臣前期		北	直径30cm	掲載
1082	3A	竈16	豊臣前期			直径30cm	掲載
1083	3A	竈17	豊臣前期		南	直径30cm	掲載
1084	3A	竈18	豊臣前期		東	直径30cm	
1085	3A	竈19	豊臣前期		西	直径30cm	
1086	3A	竈20	豊臣前期	金箔瓦、スラグ	北	直径30cm	掲載
1087	3A	竈21	豊臣前期		北	直径30cm	掲載
1088	3A	竈28	豊臣前期				
1089	3A	竈29	豊臣前期				
1090	3A	竈30	豊臣前期				
1091	3A	竈31	豊臣前期				
1092	3A	竈32	豊臣前期				
1093	3A	竈33	豊臣前期				
1094	3A	竈34	豊臣前期				
1095	3A	竈35	豊臣前期				
1096	3A	竈36	豊臣前期		西		
1097	3A	竈37	豊臣前期				
1098	3A	竈38	豊臣前期				
1099	3A	竈39	豊臣前期				
1100	3A	竈40	豊臣前期				
1101	3A	竈41	豊臣前期				
1102	3A	竈42	豊臣前期				
1103	3A	竈43	豊臣前期				
1104	3A	竈44	豊臣前期				
1105	3A	竈45	豊臣前期				
1106	3A	竈46	豊臣前期				
1107	3A	竈47	豊臣前期				
1108	3A	竈48	豊臣前期				
1109	3A	竈49	豊臣前期				
1110	3A	竈50	豊臣前期				
1111	3A	竈51	豊臣前期				
1112	3A	竈52	豊臣前期				
1113	3A	竈53	豊臣前期				
1114	3A	竈54	豊臣前期				
1115	3A	竈55	豊臣前期				

1116	3A	竈56	豊臣前期				
1117	3A	竈57	豊臣前期				
1118	3A	竈58	豊臣前期				
1119	3A	竈59	豊臣前期				
1120	3A	竈60	豊臣前期				
1121	3A	竈61	豊臣前期				
1122	3A	竈62	豊臣前期				
1123	3A	竈63	豊臣前期				
1200	3B	竈1	豊臣前期				
1201	3B	竈2	豊臣前期				
1202	3B	竈3	豊臣前期				
1203	3B	竈4	豊臣前期				
1319	5B	竈2	豊臣前期				
1320	5B	竈3	豊臣前期	銭、石、焼土。周辺で貝、木。			
1333	6A	竈1	豊臣前期	焼土			
1334	6A	竈2	豊臣前期				
1335	6A	竈4	豊臣前期				
1336	6A	竈5	豊臣前期				
664	3A	竈1	豊臣後期	塩壺、瀬戸・美濃志野			
665	3A	竈27	豊臣後期		南?		掲載
752	5B	竈	豊臣後期				
753	5B	竈1	豊臣後期	周辺で銭			
849	6A	竈3	豊臣後期				
475	3A	竈22	畑		南		掲載
476	3A	竈23	畑		南	直径50cm	掲載
477	3A	竈25	畑	周辺で焼塩壺、羽子板	東		掲載
478	3A	竈26	畑		東		掲載
65	6A	炉1(竈3)	近代		北		掲載
66	6A	炉2(竈4)	近代		北		掲載

向にはしる。

3 A 竈 3 (1069) は礎石立ち建物の南西隅部に近接し、焚口は東側へ向く。竈は土製で、平面形はC字形であり、幅1.5m、奥行き1m、燃焼部径50cmである。焚口には直径50~60cmの浅いくぼみがある。竈からは下駄、瀬戸・美濃灰釉皿、漆器碗が出土する。礎石立ち建物の礎石は竈の北側までであり、竈周辺には規則的に並ばないことから、竈は建物内に配されるというよりも、軒先のような建物の端に位置したと考えられる。

3 A 竈 6 (1072)、3 A 竈 7 (1073) は礎石立ち建物の東に位置する。礎石立ち建物から、3 A 竈 6 (1072) は約7m、3 A 竈 7 (1073) は約6m離れた地点にある。

3 A 竈 6 (1072) は3連で、焚口は北側へ向く。竈は土製で、平面形は各々C字形である。袖部を共用し、共用する袖部には平瓦を入れて補強材とする。全体の幅1.2m、奥行き50cm、燃焼部径20~30cmで、各々小型の竈である。西端部の竈がやや大きく、その西袖部および背面にはそれぞれ2枚の平瓦が入れられ比較的堅固に補強される。竈からは染付、瀬戸・美濃天目碗、白磁皿、土師器皿、歯などまとまった遺物が出土する。

3 A 竈 7 (1073) は南端が矢板で区切られ全体の様相は不明である。背面を共用する竈で、東側に5連、西側に2連の竈があり、焚口は東西両側へ向く。竈は土製で、平面形は各々C字形である。全体の幅2m、奥行きはそれぞれ50cmで計1m、燃焼部径20~30cmである。両側とも南端部の竈がやや大きく、東側南端部の竈は焚口をやや北東へ向ける。



図4-X-1 豊臣前期 屋敷に伴う竈

等間隔で並ぶ竈 (図4-X-2)

3A竈8(1074)、3A竈9(1075)、3A竈20(1086)、3A竈21(1087)の4カ所計5基(3A竈8(1074)は2基)の竈が等間隔で検出されている。

東西方向の溝37の北側で、先述の竈4カ所計5基(3A竈8(1074)は2基)が約5m間隔でほぼ東西方向に並ぶ。焚口はいずれも溝37の反対側、すなわち北側へ向く。竈はいずれも土製で平面形はC字形であり、幅、奥行きともに60cm~1m、燃焼部径40~50cmである。竈から遺物は出土していない。

5基の竈はいずれも溝37から約2m離れた地点にあり、先述の通り等間隔に並ぶことから、ほぼ同時期に構築されたものと考えられる。5基の竈の東、西には溝37から北に伸びる小溝があり、その東、西側には竈は広がらないことから、この小溝に挟まれた東西26m、南北9m以上の空間を4分割するような区画が存在した可能性が考えられる。これら5基の竈周辺では礎石、柱穴はみとめられないものの、この4分割される区画からは長屋のような建物の存在が考えられる。

瓦敷竈 (図4-X-2)

3A竈14(1080)がある。

先述の溝37の南側にあり、溝37から南へ延びる小溝の東側に位置する。

3A竈14(1080)は焚口を西側へ向け、底部に平瓦を敷く。底部のみの検出である。

流し枡を伴う竈 (図4-X-2)

3A竈15(1081)、3A竈16(1082)、3A竈17(1083)の3基がある。

等間隔で並ぶ竈・瓦敷竈

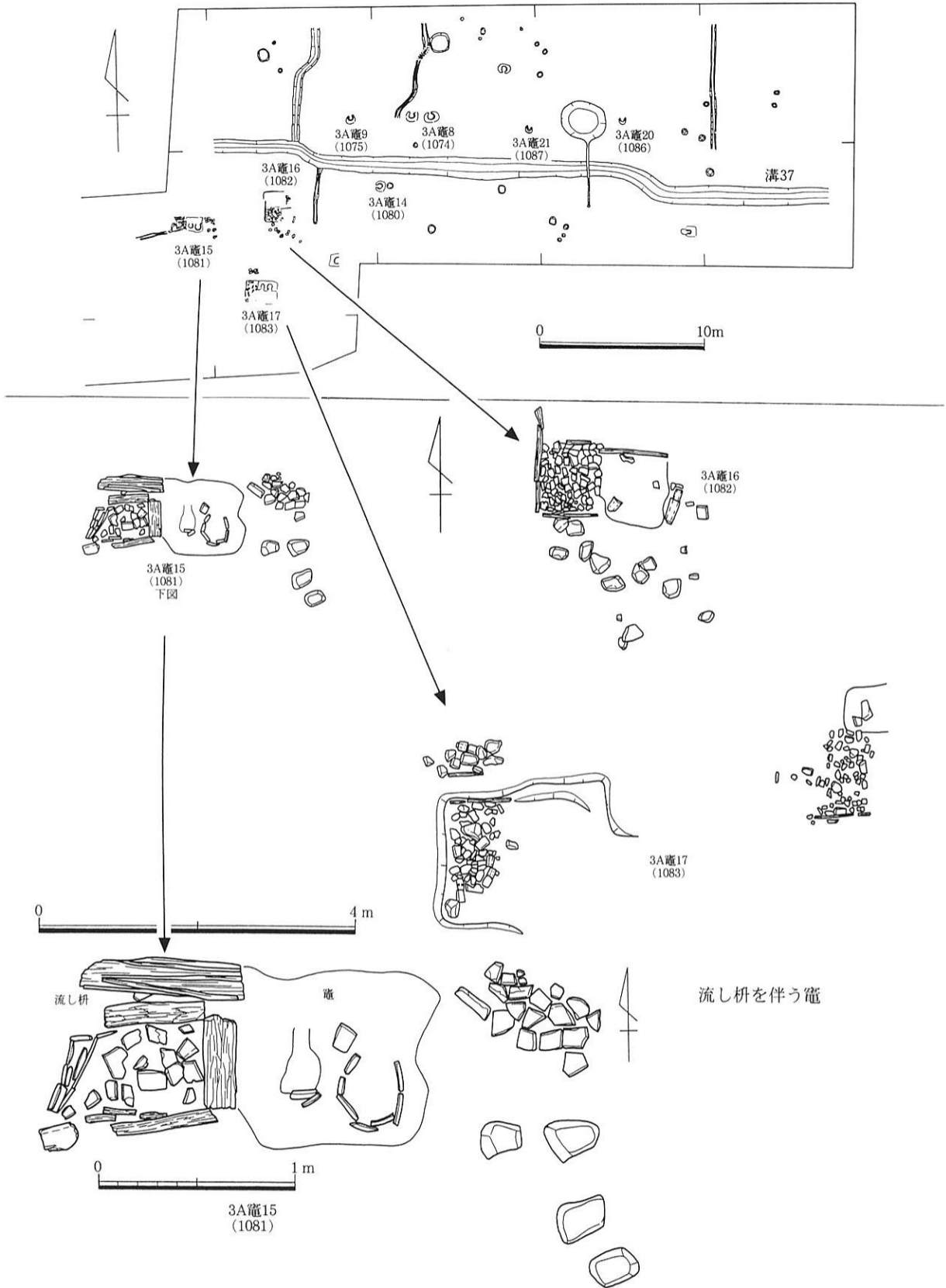


図4-X-2 豊臣前期 等間隔で並ぶ竈・瓦敷竈・流し枡を伴う竈

先述の溝37の南側にあり、溝37から南へ延びる小溝の西側に位置する。

3 A 竈15 (1081) と 3 A 竈16 (1082) は約 4 m 隔てて東西に並び、3 A 竈17 (1083) はこれらの南約 4 m の箇所にある。3 基とも遺構配置状況が共通し、同様の構造をもつものと考えられる。

3 A 竈15 (1081) は残存状況が最も良好である。東に 2 連の竈、西に流し枡があり、竈の範囲は東西 1 m、南北 90 cm、流し枡の範囲は東西 90 cm、南北 90 cm である。竈は焚口を北側へ向け、粘土と瓦で構築される。平面形は C 字形であり、幅 20~30 cm、奥行きともに 40 cm、燃焼部径 20~30 cm である。竈から遺物は出土していない。流し枡は底面が瓦敷き、側面が横板である。南側に東西方向の排水溝があり、排水溝はそのまま西へと延びる。

3 A 竈17 (1083) は焚口を南側へ向け、他の状況は 3 A 竈15 (1081) と類似する。

大型竈 (図 4 - X - 3)

3 A 竈 2 (1068) がある。3 A 屋敷 1、溝33の西側に位置する。

近接して平行する 2 基が検出され、焚口はいずれも南東側へ向く。竈はいずれも土製で平面形は他に比べ奥行きが長い U 字形であり、幅 60 cm、奥行き 1 m、燃焼部径 30~40 cm である。竈からは、漆器椀、箸、膳の板、釘、小柄、小刀が出土する。

一般的な竈 (図 4 - X - 3)

1 A 竈 1 (883)、1 A 竈 2 (884)、1 A 竈 3 (885) の 3 基が比較的残存状態が良好である。3 基は、先述した 1 A 竈 4 (886) が設置される 1 A 調査区屋敷 5 の北側に位置する。

3 基はいずれも直径 30 cm と小規模な竈であり、1 A 竈 1 (883)、1 A 竈 2 (884) は 1 m、1 A 竈 2 (884)、1 A 竈 3 (885) は 3 m の距離で 3 基が密接して検出された。焚口は、1 A 竈 1 (883)、1 A 竈 2 (884) が北、1 A 竈 3 (885) が北西へ向く。竈はいずれも土製で瓦が補強材に使用される。3 基とも平面形は C 字形になると考えられ、幅 60 cm、奥行き 60 cm、燃焼部径 30~40 cm である。燃焼部には炭化物が残る。竈から遺物は出土していない。

2. 三の丸築造以降、大坂夏の陣直前 (豊臣後期) の竈遺構

大型竈 (図 4 - X - 4)

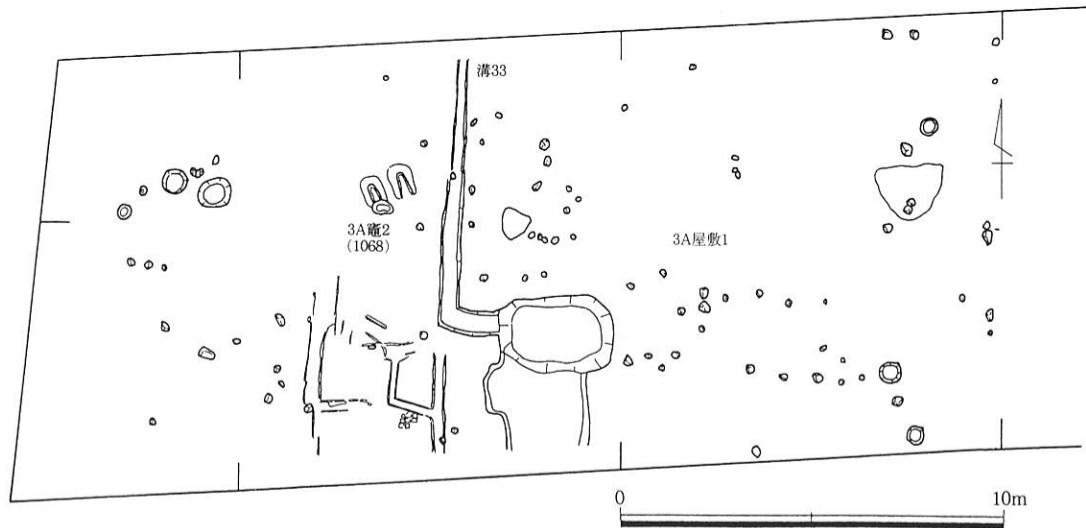
3 A 竈27 (665) がある。3 A 調査区の北西隅に位置する。焚口は南側へ向く。平面形は C 字形で、焚口を除く本体に直径 20~30 cm の石を 8 個円形にめぐらせる。直径 1 m、燃焼部径 50 cm、焚口幅 45 cm である。竈から遺物は出土していない。

3. 大坂夏の陣終結後、徳川大坂城再築直前 (畑の時期) の竈遺構

等間隔で並ぶ竈 (図 4 - X - 4)

3 A 竈22 (475)、3 A 竈23 (476)、3 A 竈25 (477)、3 A 竈26 (478) の 4 基がほぼ等間隔で検出されている。4 基は 3 A 調査区西中央、畑に挟まれた 3 列の屋敷地群の中央列でほぼ東西方向に並び、3 A 竈22 (475)、3 A 竈23 (476) は 7 m、3 A 竈23 (476)、3 A 竈25 (477) は 9 m、3 A 竈25 (477)、3 A 竈26 (478) は 5 m の距離をもつ。

3 A 竈22 (475) は 2 連で、焚口は南側へ向く。竈は底面の粘土のみが高さ 5 cm 程度残存するのみで



大型竈

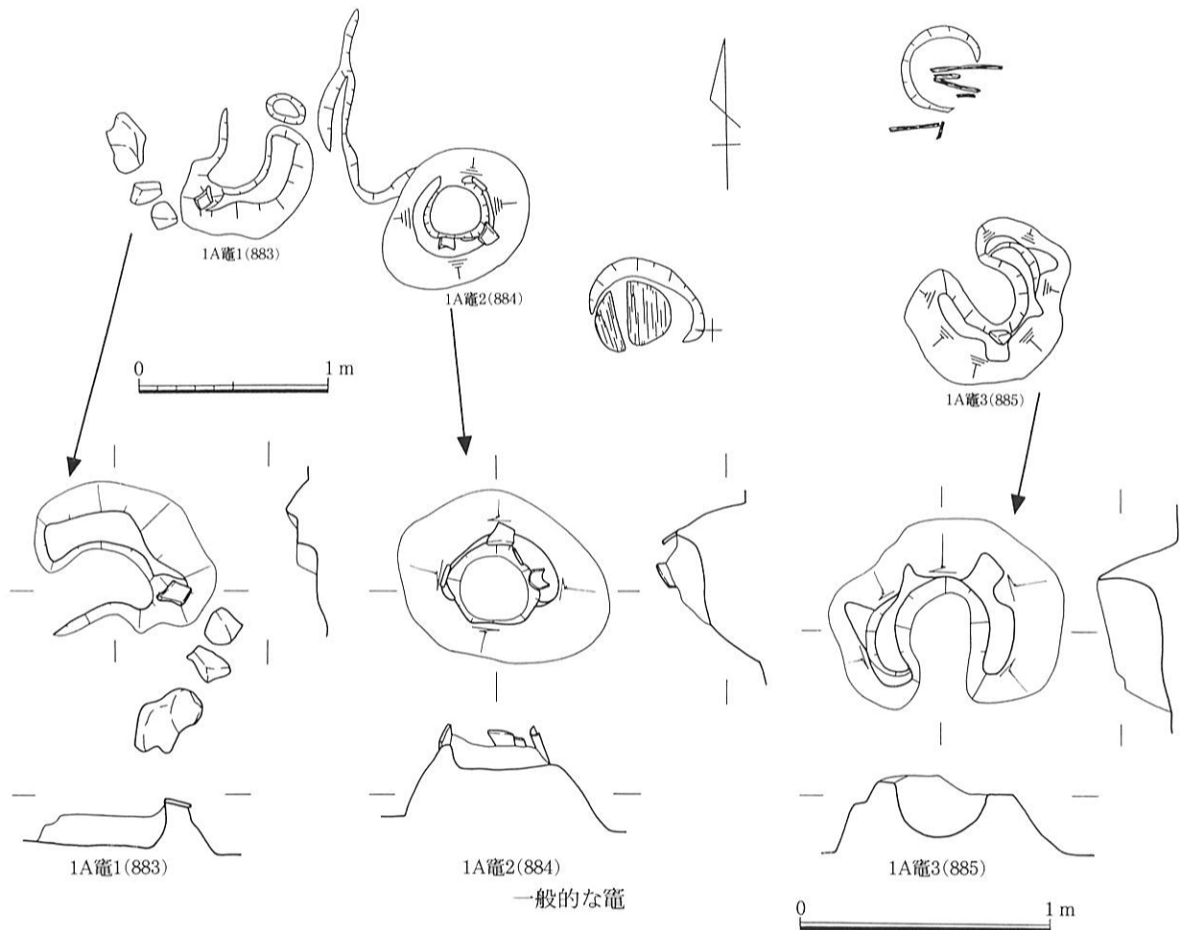


図4-X-3 豊臣前期 大型竈・一般的な竈

ある。平面形はC字形で、燃焼部径は20cmと30cmである。竈から遺物は出土していない。

3 A 竈23 (476) は1連で、焚口は東側へ向く。竈は底面の粘土のみが残存する。残存部は一边50cmの方形を呈し、中央の燃焼部径は25cmである。竈から遺物は出土していない。

3 A 竈25 (477) は2連で、焚口は東側へ向く。竈は底面の粘土のみが高さ5cm程度残存するのみである。平面形はC字形で、燃焼部径は20cmと30cmである。竈周辺で焼塩壺、羽子板が出土する。

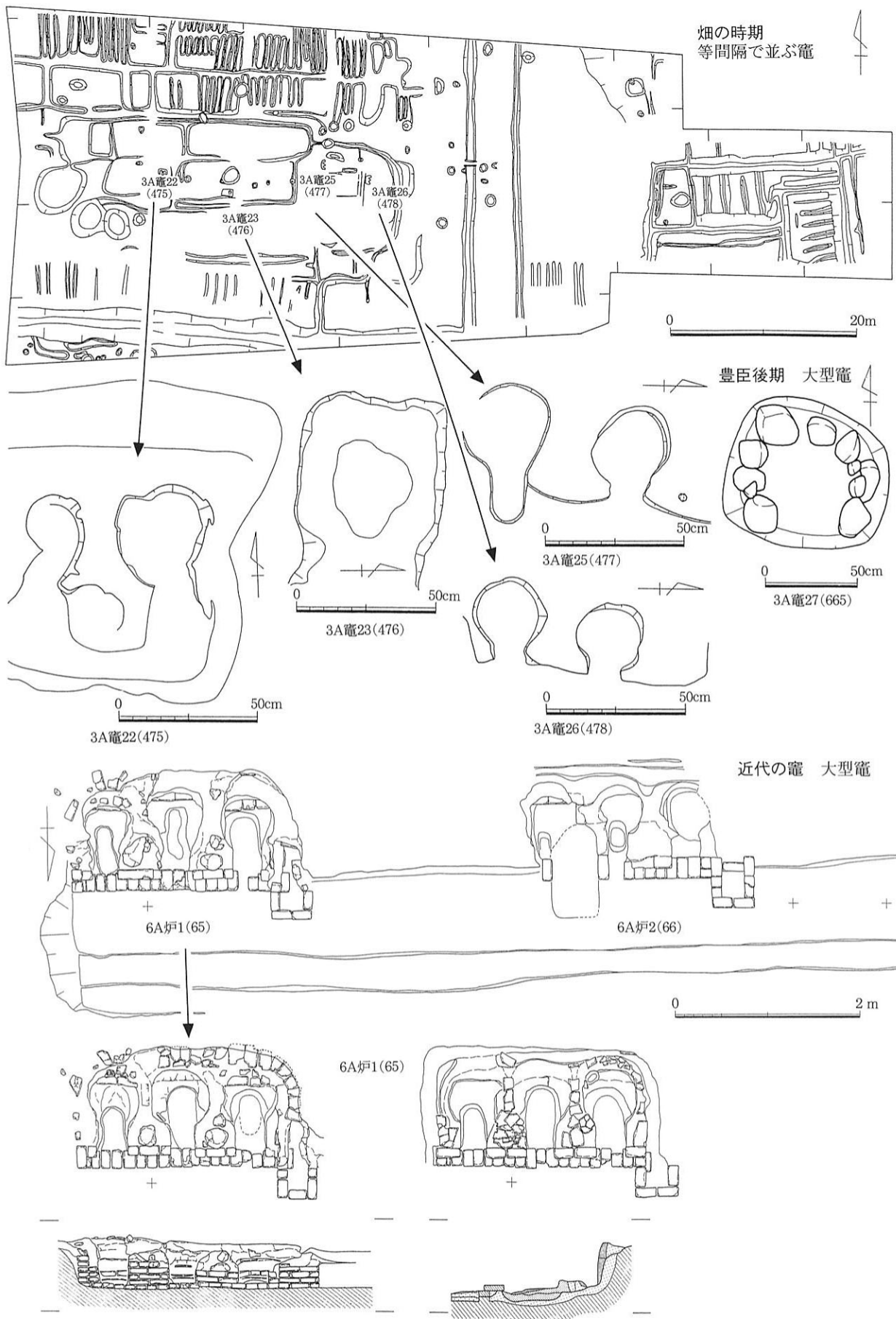


図4-X-4 畑の時期 豊臣後期 近代の竈

3 A 竈26 (478) は3 A 竈25 (477) と類似する。

竈のあり方および周囲をめぐる溝から、屋敷地の基本的な範囲は東西7 m、南北5 m前後とみられる。

4. 徳川氏による大坂城再築後（近代）の竈遺構

大型竈（図4-X-4）

6 A 炉1 (65)、6 A 炉2 (66) がある。6 A 調査区の北西に位置し、2 C 調査区との境に近い。約2 mの間隔で、ほぼ東西方向に2基が並んで検出される。いずれも3連で、焚口は北側へ向く。竈の全体形は直方体で、レンガとそれを覆う粘土で構築される。6 A 炉1 (65)、6 A 炉2 (66) は規格がほぼ同じであり、それぞれ幅2.3m、奥行き1.3m、燃焼部径40cmで残存高50cmである。燃焼部背面の煙道は横方向に貫通し、竈西側で北へ屈曲し、焚口横に煙出口がある。これら煙道部および煙出口に、炭化物は付着しない。焚口の前面は3基を連結するかたちで通路状になっており、その幅は90cm～1.3m、長さ8 m以上でレンガ敷きである。竈から遺物は出土していない。

周辺遺構からは「SHINAGAWA」の刻印をもつレンガが出土しているが、本竈を構築するレンガは無文であり、「SHINAGAWA」の刻印をもつレンガは含まれない¹⁾。

本竈は当初舎密局に伴うものかと考えたが、舎密局建物図面のなかでみられる竈とは場所が異なり、本竈の場所は空閑地となっており該当する施設はみられない²⁾。

舎密局は明治2 (1869) 年の開設後、理学校、大坂開成所などつぎつぎと組織、名称が変遷し、明治19 (1886) 年に第3 高等学校となり、明治22 (1889) 年には京都に移転し、旧制第3 高等学校となる。京都への移転にいたるまで、名称の変更とともに建物の増改築がなされ、幾枚かの図面が残存しているが、これらをもつても本竈に該当する施設はみられない。また、明治31年から大正11年にはこの地に陸軍幼年学校があり、これに関する図面においても本竈に該当する施設はみられない³⁾。

出土遺物もなく年代の確証は得られないが、陸軍幼年学校の後、この地には軍の施設が設けられており、これについての詳細は不明であるが、本竈はこの軍の施設に伴う可能性が大きいと考えられる。

5. 周辺の大坂城調査における竈

今回の調査後、大阪府警察本部新庁舎建設工事に伴う発掘調査が近隣でなされ、豊臣期の竈が検出されている（図4-X-5-1⁴⁾）。豊臣-3面では竈685が、豊臣-1面では4連の竈527、5連の竈533が検出され、他に豊臣-2面においても竈が検出されている。竈533は2回以上の作り替えがみられ、竈の開口部に木組みがみられることから何らかの施設の存在が想定されている。

屋敷に伴う竈は、府立大手前高校における発掘調査において検出されている（図4-X-5-2⁵⁾）。三の丸下層の城下町下面で検出された建物13と建物14の間に竈が1基、また、これと道路を挟んで対峙する建物12に伴う竈が1基検出されている。道路に面する側を建物の表とみると、竈は2基ともに、建物の裏手にあたる箇所位置している。3 A 屋敷2に伴う3 A 竈3 (1069)、3 A 竈6 (1072)、3 A 竈7 (1073) も屋敷2の北側を東西にはしる溝36を道路側溝とみると建物の裏手にあたり、屋敷内における竈の位置に共通点がみられる。

惣構北西隅では、大坂夏の陣以前の豊臣政権の大名クラスとみられる武家屋敷が検出され、屋敷内では9棟の建物が調査されている。うち建物1の土間中央には焚口を10～11もつ湾曲する多連竈が検出されている（図4-X-5-3⁶⁾）。3 A 竈6 (1072) は3連、3 A 竈7 (1073) は背面を共用する東側5連、

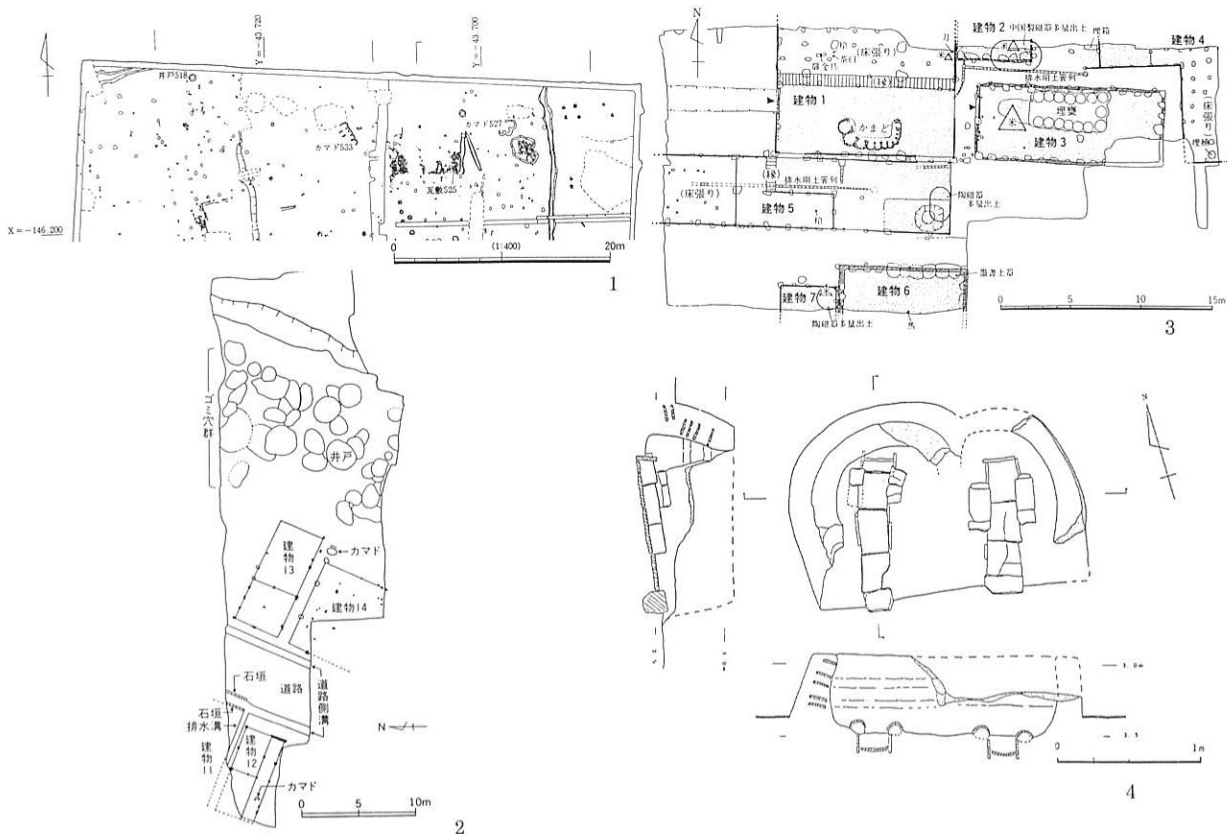


図4-X-5 周辺の大坂城跡調査における竈

西側2連の多連竈であり、多連竈にも3A竈6(1072)は3連、3A竈7(1073)のように直線に並ぶもの、建物1中央の竈のように弧を描く曲線に並ぶものなど多様な形態がみられるようである。

上記以外では、豊臣期前半の惣構内の町屋に伴う竈(OS85-28次⁷⁾、三の丸築造以前の残存状況が良好な竈(OS88-56次⁸⁾(図4-X-5-4)があげられる。後者は、東西約2m、南北1.4mの2連の竈で、焚口から燃焼部にかけて底面および側面に平瓦を敷き並べ、側面の平瓦の上には丸瓦をのせ、焚口前面には石を据える。竈に関連する遺構は検出されておらず、竈が何に用いられたものかは不明である。3A竈2(1068)と類似する遺構である。

6. 大坂城の竈の整理と注意点

大坂城に関わる豊臣期～徳川初期の竈については鈴木秀典氏がまとめられている⁹⁾。そのなかで氏は竈を焚口が一つのものとは複数のものに分けられ、前者を長方形と鍵穴形のものに細分されている。これにならって、今回の資料を含めた大坂城の竈をみてみたい。

焚口が一つで長方形のものは、豊臣前期の大型竈である3A竈2(1068)がある。これは幅60cm、奥行き1mであり、直径50cm前後の資料が大半を占める今回の資料のなかでは大型の竈である。鈴木氏は長方形の竈が鍵穴形より多いとされるが、今回の資料では確実に長方形の竈は3A竈2(1068)のみであり、焚口が一つの竈は、これ以外ほとんどが鍵穴形である。長方形の竈と鍵穴形の竈の比率は、今後大坂城周辺の竈遺構をみるにあたり注意すべき点のひとつである。このような長方形の竈は、先述したOS88-56次の竈(図4-X-5-4)のほか江戸時代の遺構として、伊丹郷町で酒造用の大型竈(図4-X-6-42)として、住友銅吹所跡では銅精錬関係遺構(図4-X-6-41)として検出されており、いずれも石を用いた大型の竈である。この2例をみると、長方形の大型竈は生産関連の竈とも考えられ

るが、類例が少なく今後の資料の蓄積をまって判断したい。

焚口が一つで鍵穴形のもの、先述したとおり今回の資料の大半がこれに属する。粘土のみで構築されるものが多いが、3 A 竈15 (1081) のように燃焼部の壁に瓦を貼り付けるものや3 A 竈27 (665) のように石をめぐるものがあり、前者は平野環濠都市遺跡で検出された竈 (図4-X-6-35) に類似する。また、3 A 竈14 (1080) は底面のみを検出であるが、底面に瓦片を敷くことが確認されている。他に1 A 竈4 (886) は前面に瓦片を敷く。これらの竈は上部が削平された状態で検出されるものが大半であり、竈の上部構造を知ることは困難であるが、図4-X-3 下段に示した断面図に明らかなように燃焼部の壁はわずかに内湾しながらたちあがっており、絵巻物資料¹⁰⁾にみられるようなドーム形になるとみられる。

焚口が一つの鍵穴形の竈が2基並んで検出される例は3 A 竈15 (1081) (図4-X-2)、3 A 竈2 (1068) (図4-X-3)、3 A 竈22・25・26 (475・477・478) (図4-X-4) など多くみられる。一方、複数の焚口をもつ多連竈は、3 A 竈6 (1072) や3 A 竈7 (1073) (図4-X-1)、大阪府警察本部新庁舎建設工事に伴う発掘調査において検出された竈527、竈533、建物1の土間中央に据えられた多連竈があるものの、鈴木氏が指摘されるように数少ない遺構しか検出されていない。数少ない遺構ながら、多連竈は屋敷に伴って検出される例が大半であり、多人数の煮炊きをまかなった竈とみられる。奈良県今井町に残る江戸時代民家を見ると、豊田家 (1662年) でやや弧状に並ぶ5連の竈が、河合家 (18世紀後半) では直線に並ぶ3連の竈が造られており、旧米谷家 (18世紀中頃) では直線に並ぶ5連の竈が復元されている。旧米谷家の竈には大羽釜、大鍋、羽釜、羽釜小、小鍋と大きな煮沸具から小さな煮沸具へと順に並べられていたようである¹¹⁾。3 A 竈7 (1073) や建物1に伴う多連竈も、燃焼部直径の大きな竈から小さな竈へと並んでおり、多連竈の基本形は豊臣前期以来のものである可能性が考えられる。しかしこの点についても、資料数が少なく、豊臣前期以前にさかのぼる可能性もあり、今後の資料の蓄積をまって判断していくべきであろう。

他に注目すべき点として、流し枡を伴う竈と等間隔で並ぶ竈があげられる。

3 A 竈15 (1081)、3 A 竈16 (1082)、3 A 竈17 (1083) は豊臣前期の流し枡を伴う竈として貴重な資料である。流し場の遺構は、瓦や石を組み、排水用の土管列をつなげた徳川初期のものは検出されているが、これには竈が伴わず台所に伴うものか否かは不明である。鈴木氏が大坂城周辺の竈を検討された1989年には、註6) の文献で記されているように豊臣期の流し場遺構は検出されておらず、3 A 竈15 (1081)、3 A 竈16 (1082)、3 A 竈17 (1083) は竈に流し枡が伴う例として大坂城周辺では初現になる可能性がある。

3 A 竈15 (1081)、3 A 竈16 (1082)、3 A 竈17 (1083) は近接しており、長屋のような小規模な宅地が密集していた可能性がある。これは等間隔で並ぶ豊臣前期でも新しい段階に位置づけられる3 A 竈8 (1074)、3 A 竈9 (1075)、3 A 竈20 (1086)、3 A 竈21 (1087)、畑の時期とされる大坂夏の陣終結後、徳川大坂城再築直前に位置づけられる3 A 竈22 (475)、3 A 竈23 (476)、3 A 竈25 (477)、3 A 竈26 (478) にみられるように、長屋の各戸に作り付けられた竈とみられる。3 A 竈15 (1081)、3 A 竈16 (1082)、3 A 竈17 (1083) はその基盤層が溝37を埋めており、3 A 竈8 (1074)、3 A 竈9 (1075)、3 A 竈20 (1086)、3 A 竈21 (1087) が溝37から一定の間隔をおきこれに平行して構築されていることを考えると、3 A 竈8 (1074)、3 A 竈9 (1075)、3 A 竈20 (1086)、3 A 竈21 (1087) → 3 A 竈15 (1081)、3 A 竈16 (1082)、3 A 竈17 (1083) となる可能性がある。これに3 A 竈22 (475)、3 A 竈23

(476)、3 A 竈25 (477)、3 A 竈26 (478) が後続することをみると、当初こうした長屋作り付け竈は各戸に1基であったのが、豊臣前期でも新しい段階では各戸に2基並列する竈が主体になった可能性がある。

今回の調査における資料のみでの変遷であり、普遍的にみられる事象であるか否かは周辺の資料をあたらないと判断できないが、長屋の各戸に作り付けられた竈は豊臣前期でも新しい段階からみられ、当初1基であったものが豊臣前期の最末期および大坂夏の陣終結後、徳川大坂城再築直前の段階では2基並列ものが主体となる点が今回の資料では指摘できる。

7. 中世～近世竈の素描

大坂城に関わる竈は中世末～近世初頭に位置づけられ、このころの竈の様相の一端を示すことができたと考える。つぎに、大坂城の竈が中世～近世の竈のなかではどのような位置を占めるのかを考えるため、中世～近世の竈の素描をこころみたい。近年、城郭を中心とする中世～近世の遺跡の発掘件数は夥しく、すべてを網羅する力量はもち得ないため、中世末～近世の集落が集成された資料から竈資料を抽出し、これにいくつかの資料を追加したものを基とした。また、近世の竈については、山上雅弘氏の研究¹³⁾を参考にさせていただいた。

今回集成した中世～近世竈は表4-X-2に示したとおり52例を数え、青森から鹿児島にいたる地方で13世紀から19世紀の竈がみられる。これらのうち実測図、写真の明瞭なものを地方別、年代別に並べたものが図4-X-6である。この表4-X-2、図4-X-6からいくつか気づいた点を述べてみたい。

まず、もっとも年代がさかのぼる資料として13世紀の大阪府大庭寺遺跡、大阪府陶器南遺跡、大阪府上町東遺跡、神奈川県佐助ヶ谷遺跡の4資料があげられる。大阪府大庭寺遺跡、大阪府陶器南遺跡では掘立柱建物の一画を占める土間に粘土で馬蹄形の竈が作り付けられる。一方、神奈川県佐助ヶ谷遺跡では建物の一画に一部石組みを用いた竈が作り付けられる。平安時代後期から鎌倉時代を中心とする絵巻物資料にはドーム形の竈が描かれ、考古資料ではこの4例が年代的に近い資料となる。絵巻物資料をみると、一遍聖絵や慕婦絵詞では風呂用の竈が、法然上人絵伝では茶所とみられる場所の竈が、信貴山縁起では製油のためえごまを焙っているとみられる竈が、慕婦絵詞では多人数の煮炊きをまかなう台所の調理用竈が描かれている。いずれも人物の大きさと比較すると直径あるいは長辺が1～3mの大型のものであり、庶民の各戸の煮炊きに伴うものではなさそうである。大阪府大庭寺遺跡、神奈川県佐助ヶ谷遺跡は焚口の幅が約3mであり、これらの竈も庶民の各戸の煮炊きに伴うものではなく、絵巻物資料でみられるような用途に用いられた可能性が考えられる。

鎌倉の庶民の住まいとみられる遺構では、囲炉裏は検出されるが竈の検出例は皆無である¹⁵⁾。西日本においても網羅的に探索したわけではないが、大阪府の3例以外明確な竈はみられない¹⁶⁾。13～15世紀の竈遺構は稀少であり、とくに庶民の生活に伴うとみられる小型の竈は皆無に近い。これは、風呂や製油、多人数の煮炊きをまかなう場面では大型竈がみられるものの、一般的な煮炊きの場面の多くには囲炉裏がみられる絵巻物資料のあり方と整合性をもつといえる。

16世紀にはいと、竈資料は多彩となる。竈の多くは城や城下町、環濠都市でみられる。竈はこうした一般集落とは異なる都市部を中心とした地域で主に用いられたとも考えられるが、調査の対象となる遺跡が上記の性格をもつものにおのずと限られているためとも考えられ、16世紀に竈が都市部で主に用

表4-X-2 中世～近世の竈一覧

NO.	府県名	遺跡名	遺跡の性格	遺構名	遺構の性格	年代
1	青森	根城跡本丸	城館	カマド状遺構2基	竈	15世紀前半～17世紀初頭
2	青森	根城跡東構	城館	カマド状遺構10基	竈	15世紀前半～17世紀初頭
3	岩手	栗田I・II遺跡	集落?	竈状の焼土遺構		16世紀末～17世紀前半
4	岩手	江刺家遺跡	集落	HII-2掘立柱建物跡カマド	掘立柱建物に伴う竈	18世紀
5	福島	本町遺跡	集落	竈	竈	16～19世紀
6	茨城	下新地A遺跡	集落	竈	竈	17世紀
7	茨城	沢田遺跡	製塩跡	竈・竈状遺構	製塩に関わる竈	17～18世紀
8	群馬	大胡城跡(三ノ曲輪)	曲輪	竈	石組竈	
9	群馬	大友館跡	居館	カマド	掘立柱建物に伴う竈	15～16世紀
10	神奈川	千葉地遺跡	屋敷?	炉状址II	竈?	14世紀後半以降
11	神奈川	佐助ヶ谷遺跡		建物8カマド	建物に伴う竈	鎌倉要調へ
12	神奈川	南金目堀の内館遺跡	居館	焼土混じり粘土	竈?	16世紀後半
13	神奈川	西ノ谷遺跡	名主屋敷	竈	竈	江戸時代
14	長野	小坂城	山城	(礎石間の)石組のカマド	竈	室町時代末期～戦国時代末期
15	長野	山崎遺跡	城	かまど状の石組遺構	竈	16世紀
16	新潟	高田城	城	竈	礎石建物に伴う竈	17世紀中葉
17	愛知	清洲城下町遺跡	城下町	竈状遺構(SX4006)	竈(煮炊きまたは風呂?)	19世紀
18	愛知	井田城跡	本丸	かまど跡	竈	15世紀後半～16世紀中頃
19	岐阜	岐阜城跡	城館	SX05・18	竈	16世紀
20	福井	一乗谷朝倉氏遺跡	城下町	SX32	石組竈	16世紀
21	福井	一乗谷朝倉氏遺跡	城下町	SX344	礎石建物に伴う石組竈	16世紀
22	福井	一乗谷朝倉氏遺跡	城下町	SX240	石組竈	16世紀
23	福井	一乗谷朝倉氏遺跡	城下町	SX709・710	礎石建物に伴う石組竈	16世紀
24	福井	一乗谷朝倉氏遺跡	城下町	SX3831	石組竈	16世紀
25	滋賀	大津城跡	城		礎石建物に伴う竈	1586年～1600年
26	滋賀	妙楽寺遺跡		SX467・479	石組竈	室町時代後半
27	京都	平安京左京四条三坊十三町		SX-534	竈	室町時代後葉(?)
28	京都	京都(中京)1987年度調査	町屋		竈	16世紀以降
29	京都	京都(下京A)1981年度調査	町屋		竈	16世紀以降
30	京都	六角堂境内	寺院		竈	桃山時代～江戸時代前期
31	京都	伏見城跡	城	礎石建物跡SB003竈SX169	礎石建物に伴う竈	1594年～1623年
32	大阪	大庭寺遺跡	集落	B329-OX	掘立柱建物に伴う竈	13世紀
33	大阪	陶器南遺跡	集落		掘立柱建物に伴う竈	13世紀
34	大阪	上町東遺跡	集落		竈	13世紀
35	大阪	平野環濠都市遺跡	都市	かまど701		16世紀中葉～後葉
36	大阪	堺環濠都市遺跡	都市	SC01	竈(2連)	16世紀後半
37	大阪	堺環濠都市遺跡	都市	SB09	礎石建物に伴う竈	16世紀後半
38	大阪	堺環濠都市遺跡	都市		竈	16世紀後半
39	大阪	茶臼山古墳	家康の本陣	瓦と石を組み合わせた竈	本陣の台所	17世紀初頭
40	大阪	玉造小学校	町屋	竈状遺構	酒造用の竈?	18世紀中頃
41	大阪	住友銅吹所跡	銅精錬所	かまど401～412・301～302・201～205	銅造のための湯沸かし・炊飯	17～19世紀
42	兵庫	伊丹郷町	町屋	第27次調査SX01など	酒造用の竈	19世紀
43	兵庫	御着城跡	城内の居屋敷	「くど」状遺構		16世紀
44	兵庫	豊岡藩庁跡	城下町		3連竈(石組み)	1580～1590年代
45	兵庫	明石城武家屋敷跡	城下町	SK2002	五右衛門風呂の焚口?	要調べ
46	広島	北谷山城跡	山城	第2郭第1号かまど跡	竈	16世紀要調べ
47	広島	北谷山城跡	山城	第3郭第2号かまど跡	建物に伴う竈	16世紀要調べ
48	佐賀	羽柴秀保陣跡	城	第二郭礎敷遺構	竈?	16世紀末
49	大分	守岡遺跡	城		竈	16世紀
50	鹿児島	苦辛城跡	山城	建物19竈	掘立柱建物に伴う竈	14～16世紀
51	鹿児島	上加世田遺跡	鉄器生産工房跡		竈(鉄器生産関連)	16世紀
52	鹿児島	西ノ平遺跡	屋敷		竈	18世紀

いられたものか否かはわからない。

今回集成した16世紀の資料では、大坂城でみられた長屋に伴うとみられる等間隔で並ぶ小型の竈が他所ではみられず、長屋に伴うとみられる等間隔で並ぶ小型の竈は大坂城を初源とする可能性が考えられ、大坂城では少なくとも16世紀後葉のこの時期に成立した可能性が大きい。

16世紀以降の竈をみると、石組みのものが多く、大きさは直径50cm～1mの竈が大半である。集成した資料においても、大坂城の竈でみられたように、焚口が一つのものや複数のもの、また形態では長方形と鍵穴形のものやそろってみられ、基本的に同じ形態のものが19世紀まで用いられるようである。

今回集成した18～19世紀の竈は、酒造用や醸造用の湯沸かし、風呂に用いられるものなど生産に関わるものが多く、炊飯用とみられる竈は東日本の西ノ谷遺跡(図4-X-6-13)、江刺家遺跡(図4-X

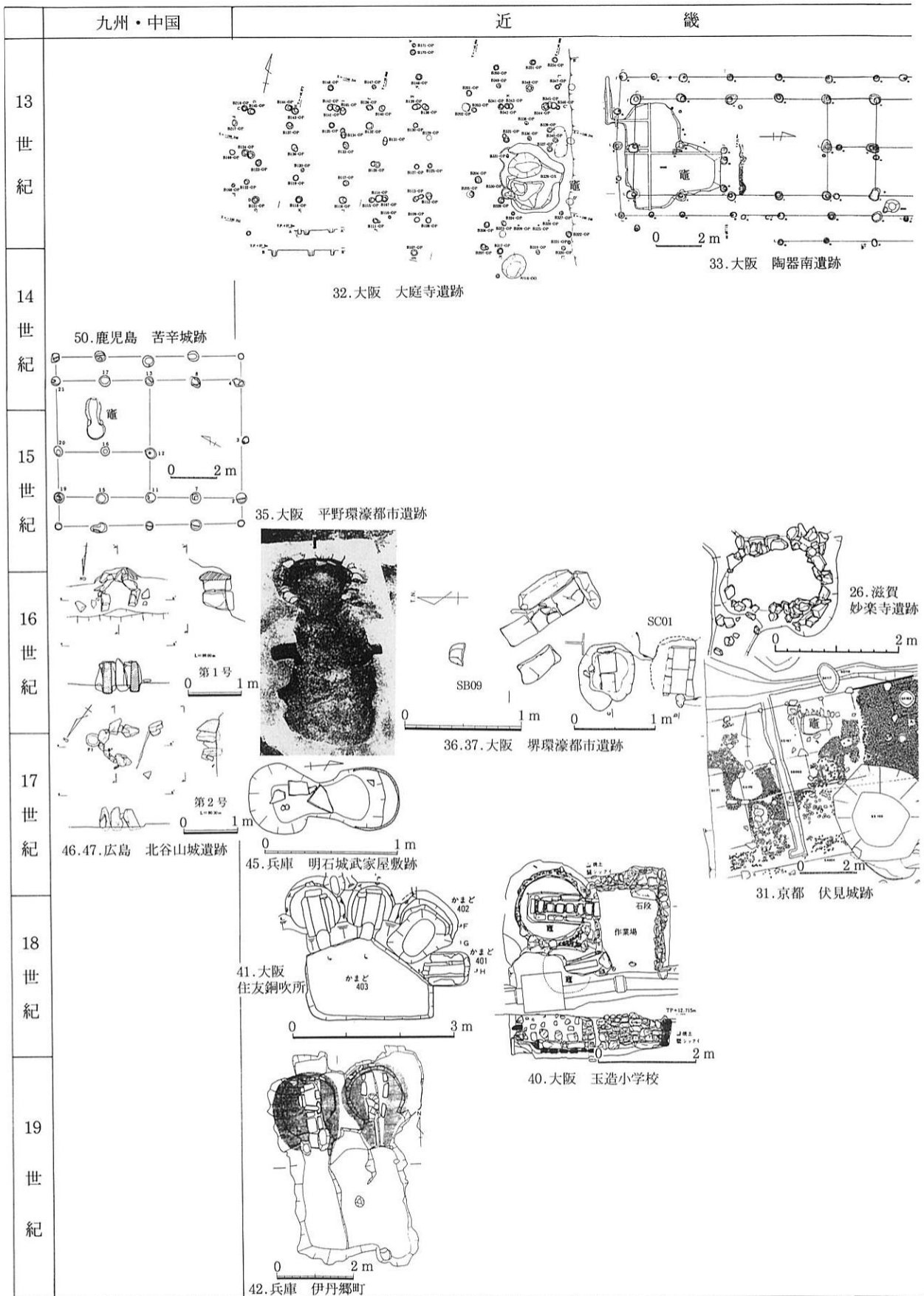
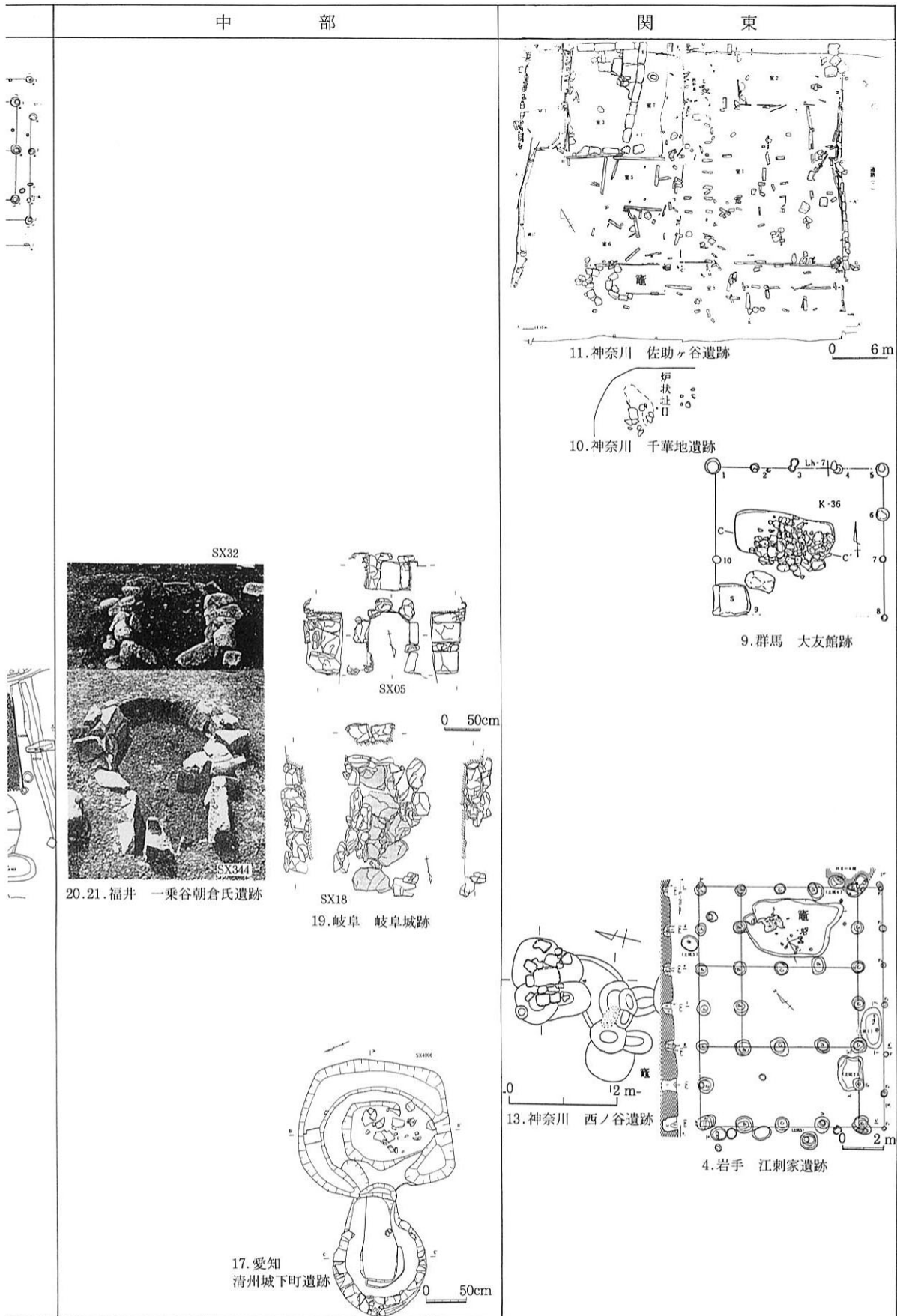


図4-X-6 中世～近世の竈（大坂城の竈は除く）



—6-4) など少数例に限られた。西日本では、炊飯用の竈は今井町の民家に据えられた例などからその存在は明らかであるが、遺構として検出される例は少なく、近世、竈は西日本に普遍的であるとする見解を考古学的に遺構から認証することは困難である。

中世～近世の竈は、以上のような変遷を示すものであり、このなかで大坂城の竈は、全国的に城や都市で石組みを中心とした多様な竈がみられるようになる16世紀後葉に時期を同じくして多様な竈がみられ、全国的にみても最も多様性に富む竈がみられる。とくに、長屋に伴うとみられる等間隔で並ぶ小型の竈は大坂城を初源とする可能性が考えられ、注目される。

おわりに

今回の調査で検出された竈を整理し、周辺の調査例とともに、大坂城の竈の中世～近世の竈のなかでの位置づけを考えてみた。中世以降、竈遺構が全国的にみられるようになる16世紀に、大坂城では最も多様な竈がみられるようであり、今回おこなった竈の整理も基本的な資料として今後活用されれば幸いである。

最後になりましたが、江浦 洋氏、小林和美氏、山上雅弘氏には有益なご教示をいただきましたことをここに記し、感謝申し上げます。

註

- 1) 遺物の探索には江浦 洋氏、小林和美氏にご協力いただき、江浦 洋氏には次の文献をご教示いただいた。
上野恵司 2000 「近代煉瓦」『季刊考古学』第72号
- 2) 本書「Ⅻ 舎密局関連遺構について」を参照されたい。
- 3) 小林和美氏にご教示いただいた。本書「ⅩⅢ 大阪陸軍幼年学校について」を参照されたい。
- 4) 財大阪府文化財調査研究センター 2000 『難波宮跡北西の調査—大阪府警察本部新庁舎建設工事に伴う大坂城(その6)発掘調査速報—』
- 5) 佐久間貴士編 1989 『よみがえる中世2—本願寺から天下一へ—大坂』平凡社
- 6) 佐久間貴士編 1989 『よみがえる中世2—本願寺から天下一へ—大坂』平凡社
鈴木秀典 1987 「発掘された豊臣期大名屋敷」『葦火』11号(財)大阪市文化財協会
- 7) 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会編 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
- 8) 伊藤 純 1989 「大坂夏の陣の証人 備前焼の大甕」『葦火』11号(財)大阪市文化財協会
第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会編 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
- 9) 鈴木秀典 1989 「竈と炉」『よみがえる中世2—本願寺から天下一へ—大坂』平凡社
- 10) 信貴山縁起、一遍聖絵、福富草紙など。澁澤敬三 神奈川大学日本常民文化研究所 1984 『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』平凡社
- 11) 林 清三郎 1984 「今井町重要文化財民家八件の修理」『月刊文化財』No.245
- 12) 註7) 文献
- 13) 山上雅弘 1991 「竈について」『第3回 関西近世考古学研究会大会 近世都市の構造 発表要旨』関西近世考古学研究会
- 14) 註10) 文献
- 15) 馬淵和雄 1989 「鎌倉の煮炊き—囲炉裏と鍋—」『よみがえる中世3—武士の都 鎌倉』平凡社
- 16) 山田隆一氏が引用文献33で指摘するように、焼土、炭化物を明瞭に伴わないため積極的に竈とする証左には欠けるが、類似する遺構には竈の可能性が考えられる遺構がある。
浅尾 悟 1990 「土坑を伴う中世掘立柱建物について」『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅵ』三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター
伊藤裕偉 1994 「伊勢市朝熊町 杉葉崎遺跡の調査」『三重県埋蔵文化財センター 研究紀要』第3号

表4-X-2 中世～近世の竈一覧引用文献

1. 2. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
3. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
4. (財)岩手県埋蔵文化財センター 1984 『岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第70集 江刺家遺跡発掘調査報告書』
5. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
6. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
7. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
8. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
9. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
10. 千葉地遺跡発掘調査団 1982 『神奈川県鎌倉市 千葉地遺跡』
11. 佐助ヶ谷遺跡発掘調査団 1993 『神奈川県鎌倉市 佐助ヶ谷遺跡発掘調査報告書』
12. 平塚市教育委員会 1989 『平塚市埋蔵文化財シリーズ第13集 諏訪前B・大縄橋遺跡他』
13. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
14. 東海埋蔵文化財研究会 1988 『清須一織豊期の城と都市一資料編』
15. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
16. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
17. (財)愛知県埋蔵文化財センター 1995 『清洲城下町遺跡V』
18. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
19. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
20. 福井県教育委員会 1976 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告I－朝倉館跡の調査－』
21. 福井県教育委員会 1988 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告II』
22. 福井県教育委員会 1973 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡V』
23. 福井県教育委員会 1977 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡VII』
24. 福井県教育委員会 1989 『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡 平成元年度発掘調査環境整備事業概要(21)』
25. ジャパン通信社 1997 『月刊文化財発掘出土情報 3月』
26. 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 1989 『妙楽寺遺跡III』
27. (財)古代学協会 1984 『平安京左京四条三坊十三町一長刀鉾町遺跡一』
28. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
29. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
30. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
31. (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991 『京都府遺跡調査概報第44冊』
32. (財)大阪府埋蔵文化財協会 1989 『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第41輯 陶邑・大庭寺遺跡』
33. 大阪府教育委員会 1997 『陶器南遺跡発掘調査概要・III』
34. 泉佐野市教育委員会 1995 『上町東遺跡-94-3区の調査-』
35. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
36. 堺市教育委員会 1990 『堺市文化財調査報告第34集』
37. 堺市教育委員会 1990 『堺市文化財調査報告第49集』
38. 堺市教育委員会 1984 『堺市文化財調査報告第20集』
39. 趙 哲済 1986 「「茶臼山古墳」の発掘調査」『葦火』4号(財)大阪市文化財協会
40. 松尾信裕 1987 「玉造小学校で発見された酒造遺構」『葦火』9号(財)大阪市文化財協会
41. (財)大阪市文化財協会 1998 『住友銅吹所跡発掘調査報告』
42. 伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所 1992 『有岡城跡・伊丹郷町II』
43. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
44. ジャパン通信社 1997 『月刊文化財発掘出土情報 6月』
45. 兵庫県教育委員会 1992 『明石城武家屋敷跡』
46. 47. 広島市教育委員会 1986 『広島市の文化財第34集 北谷山城跡発掘調査報告』
48. 佐賀県教育委員会 1983 『特別史跡名護屋城跡並びに陣跡2』
49. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』
50. 鹿児島県教育委員会 1983 『苦辛城跡』
51. 52. 第27回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1990 『中世末から近世のまち・むらと都市』

XI 大坂城三の丸地点出土の鏡と銭の金属材質調査

宮内庁正倉院事務所 成瀬正和

1. はじめに

大坂城三の丸地点より出土した海獣葡萄鏡1面、蔓草鳳麟鏡1面、隆平永宝16点についてその金属材質を明らかにするため蛍光X線分析による調査を実施した。

蛍光X線分析は試料中に含まれる諸種元素の定性あるいは定量を行うための方法であるが、非破壊という制約された条件下でも多元素の定性を迅速に行うことが可能なため、文化財の無機材質調査に特に有効である。

理学電機工業(株)製波長分散型蛍光X線分析装置(大型試料台付き)を用い、X線管球:クロム対陰極、分光結晶:フッ化リチウム、検出器:シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲(2θ): $10\sim 65^\circ$ の条件で行った。印加電圧、印加電流、フルスケール、走査速度は適宜設定したが、図および表のデータは印加電圧;35kV、印加電流15mAの条件によるものである。

2. 結果

海獣葡萄鏡からは銅(Cu)、鉛(Pb)、ヒ素(As)、スズ(Sn)、鉄(Fe)、銀(Ag)などが検出された(図4-XI-1-1)。通常、鍍化した青銅製品中では、表面のスズ(Sn)の含有量は相対的に高くなる傾向にある。このことを考慮すると本鏡のスズ(Sn)含有量は本来10%以下であったと推定できる。

蔓草鳳麟鏡からは銅(Cu)、鉛(Pb)、ヒ素(As)、鉄(Fe)、銀(Ag)、スズ(Sn)、アンチモン(Sb)などが検出された(図4-XI-1-2)。ほとんど銅と鉛の合金と言って良いもので、他に主要な成分としてはヒ素(As)が少量含まれる程度である。次に述べる隆平永宝とよく似た化学組成と言えよう。

隆平永宝16点のいずれからも多量の銅(Cu)と鉛(Pb)および少量のヒ素(As)が検出された。銅鉛銭とでもいうべき金属材質である。図4-XI-1-3にはNo.13の蛍光X線スペクトルを示している。印加電圧35kV、印加電流15mAの条件下ではスズ(Sn)は検出できないか、あるいは検出できた場合でもごく微量であった。これらの銭の化学組成は互いによく似ている。

定性分析結果を表4-XI-1に示す。

3. 考察

これまで正倉院の鏡について34面の蛍光X線分析を終えているが、化学組成より鏡を大きく三つに分類している。

A:銅(Cu)約70%、スズ(Sn)約25%、鉛(Pb)約5%からなる一群。

B:銅(Cu)約80%、スズ(Sn)約20%、ヒ素(As)1~3%からなる一群。

C:銅(Cu)70~75%、スズ(Sn)15~25%、鉛(Pb)1%以上、ヒ素(As)1~3%

A群は唐からもたらされた舶載品と推定している。その根拠は次のようなものである。従来知られている前漢から盛唐代の鏡は化学組成がほぼ一定で、その組成はA群のそれにほぼ等しい¹⁾。またA群に属

フルスケール
(cps)

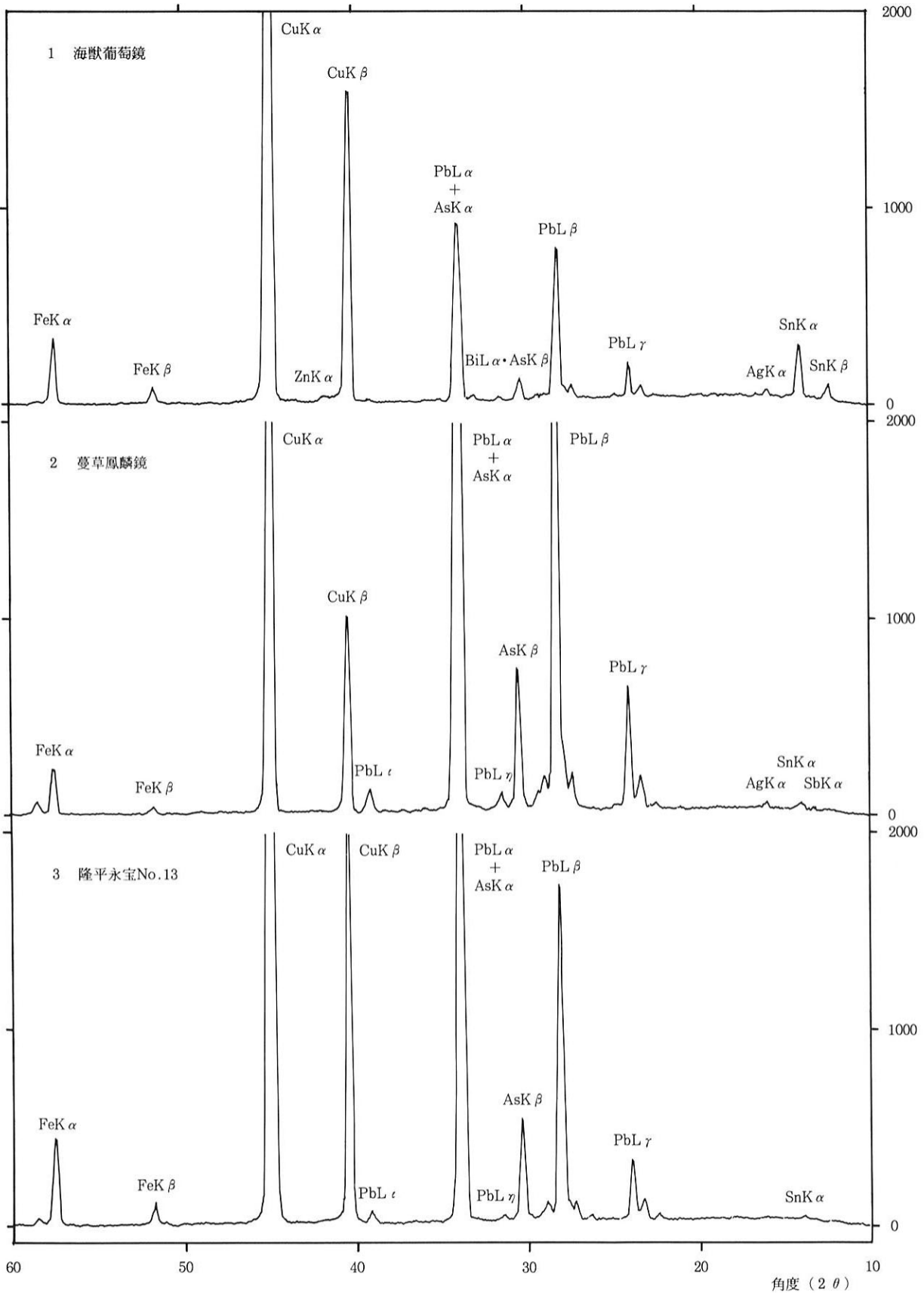


図4 - XI - 1 蛍光X線スペクトル

す鏡には平螺鈿背鏡、金銀平脱背鏡、海獣葡萄鏡などがあり、この中には、従来より装飾材料の豪華さあるいは鑄造技術の優秀性から唐鏡と考えられていたものが多い。

B群はわが国の官営工房の製品と推定している。その根拠は次のようなものである。興福寺西金堂造営に関わる天平6年(734)『造仏所作物帳』には鏡の原料と配合が示され、銅：白鐵(スズ) = 4 : 1の量比が示されている。この値はB群に属す鏡の化学組成によく一致する。ヒ素については、わが国の古代の銅製品には通常最低でも1～5%程度のヒ素(As)が不純物として含まれていることが最近明らかになりつつある²⁾。これはおそらく当時の銅の主産地と考えられる山口県長登銅山の銅鉱石にヒ素が多量に含まれていることに起因する。造寺関係の文献資料を見る限り、国産官営工房製の鏡は、唐鏡とは異なり鉛を添加しないことが特徴である。

C群はわが国の私営工房の製品と推定している。その根拠は以下のようなものである。C群の鏡には1～3%程度のヒ素が含まれるものがほとんどで、先に述べたようにこれはわが国の産銅を用いている可能性が高い。しかも鉛が含まれており、奈良時代の官営工房製の鏡とは原料の配合が異なる。このことはこれら鏡の製造者が官営工房の方式とは別の技術を持っていたためか、あるいは原料に鉛を含む銅合金のスクラップを用いざるを得なかったためではないかと考えられる。

なおC群は、一応群としてとらえたが、A、B群ほど化学組成的なまとまりがなく、今後細分すべきかも知れない。

このほか奈良時代にはアンチモン(Sb)を多く含む同型の小形の海獣葡萄鏡が知られている。径は6センチ強で、原型を数回踏み返したため文様は不鮮明である。化学的に調査が行われたのは平城京跡や、石川県羽咋市寺家遺跡、大津市東光寺裏遺跡などより出土した数面である³⁾。これらの鏡についてはこのような特徴的な化学組成を持つことや鏡式がほぼ一種に限られることから、一定の集団が製作を担当した可能性も充分考えられる。

大坂城三の丸地点出土の海獣葡萄鏡はスズ(Sn)の含有量は少ないものの、一応鉛(Pb)とヒ素(As)を含むことからC群に属すものではないかと考えている。すなわちこの鏡はわが国で私的に製作されたものと推定している。

蔓草鳳麟鏡はスズ(Sn)をほとんど含まず、銅(Cu)と鉛(Pb)を主成分とする。本鏡のような化学組成の鏡はこれまで奈良時代の鏡で調査したことはない。微量成分を除けばほぼ隆平永宝と同じ化学組成を示すことは、平安初期のこの鏡の原料の調達経路を考える上で、非常に興味深い。

皇朝十二銭については沢田正昭氏が平城宮より出土した銭11種(乾元大宝を除く)126枚について蛍光X線分析を行い、時代が降るに従いスズ(Sn)が少なくなり、かわりに鉛(Pb)が多くなる傾向があることを明らかにした⁴⁾。筆者も京都市域出土の皇朝十二銭の蛍光X線分析を行い、同様の傾向を確認したことがある⁵⁾。この調査によれば神功開宝(765年初鑄)、隆平永宝(796年初鑄)には若干スズ(Sn)が含まれ、スズ(Sn)がほとんど含まれなくなるのは富寿神宝(818年初鑄)以降であった。

文献史料には、承和八年(841)の太政官符(『類聚三代格卷14』)あるいは延喜式の主計上には鑄銭の原料が掲げられ、その頃の銭が銅と鉛を約2 : 1の比に混合したものであったことが示されている。

今回の調査では16点の隆平永宝がすべて、ほとんどスズ(Sn)を含まぬ銅鉛合金であることを確認した。

鏡については、従来の型的な研究および鑄造技術の研究にさらに化学的研究を加えることによって一層厳密な議論が可能になると考えている。金属器に関する考古学研究者の興味はほぼ古墳時代以前に偏っ

ているが、このような調査が大切であるのは歴史時代以降についても同様である。

鋤柄俊夫氏をはじめとする(財)大阪文化財センターの方々にはお世話になりました。この場をかりて御礼申し上げます。

注

- 1) 小松茂・山内淑人(1937)古鏡の化学的研究 『東方学報8』 京都大学人文科学研究所
- 2) 成瀬正和(1995)化学組成よりみた奈良時代の銅製品の特徴—正倉院宝物の分析などから— 『第5回鑄造遺跡研究会資料』
- 3) 肥塚隆保(1988)銅、青銅製品の材質調査 『寺家遺跡発掘調査報告書2』 石川県立埋蔵文化財センター
- 4) 沢田正昭(1974)銭の蛍光X線分析 『平城宮発掘調査報告VI』 奈良国立文化財研究所
- 5) 成瀬正和・岡田文男(1994)平安後期出土美術工芸品の材質的研究 『鹿島美術研究年報11別冊』 鹿島美術財団

表4-XI-1 鏡および銭の定性分析結果

遺物名	Cu	Sn	Pb	As	その他の検出元素
海獣葡萄鏡	++	++	++	+	Fe・Zn・Bi・Ag
蔓草鳳麟鏡	++	±	++	+	Fe・Ag・Sb
隆平永宝1	++	-	++	+	Fe
隆平永宝2	++	-	++	+	Fe
隆平永宝3	++	-	++	+	Fe
隆平永宝4	++	-	++	+	Fe
隆平永宝5	++	-	++	+	Fe
隆平永宝6	++	-	++	+	Fe
隆平永宝7	++	±	++	+	Fe
隆平永宝8	++	±	++	+	Fe・Ag
隆平永宝9	++	-	++	+	Fe・Ag
隆平永宝10	++	-	++	+	Fe・Ag
隆平永宝11	+	±	++	+	Fe
隆平永宝12	++	±	++	+	Fe・Ag
隆平永宝13	++	±	++	+	Fe・Ag
隆平永宝14	++	±	++	+	Fe・Ag
隆平永宝15	++	±	++	+	Fe・Ag
隆平永宝16	++	-	++	+	Fe・Ag

印加電圧—電流：35kV—15mAでの結果

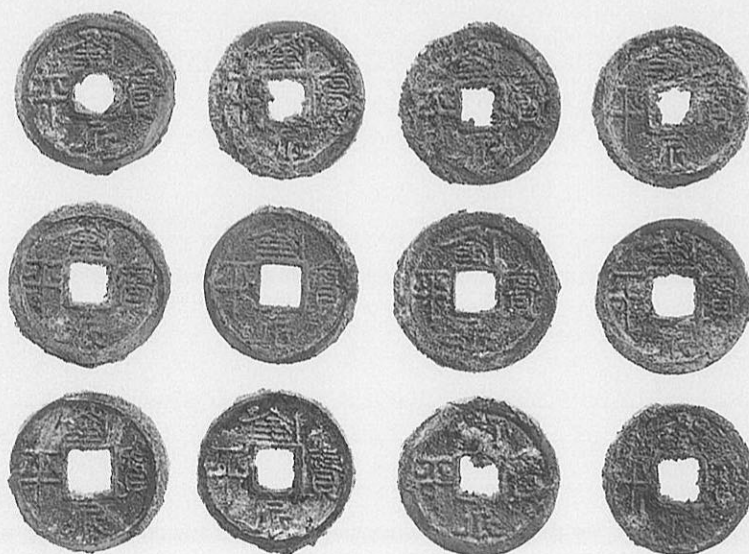
++、+、±はそれぞれ多量、少量、微量存在することを、また-は検出できなかったことを示す。



6 A 調査区墓 2 出土
海獸葡萄鏡



5 B 調査区墓 1 出土
蔓草鳳麟鏡



5 B 調査区墓 1 出土
隆平永宝

XII 舎密局関連遺構について

合田幸美

はじめに

今回の府庁舎周辺整備事業に伴う発掘調査地のなかで、2C調査区および6A調査区は、調査当初より舎密局関連遺構の存在が想定され、近代遺構の調査についてとくに注意がはらわれた。筆者は、2C調査区の調査に携わったことを端緒として、舎密局に関心をいただてきた。ここでは、今回の調査によって明らかとなった、両調査区における舎密局関連とみられる遺構についてまとめてみたい。

1. 舎密局とは

舎密局については、芝 哲夫氏、藤田英夫氏をはじめとする諸先学により、建物、内容、組織などの歴史的展開についてさまざまな方面からの研究がなされている¹⁾。これらの研究に導かれつつ、舎密局について簡単にみておきたい。

舎密とは、オランダ語で化学を意味するChemieの音読で「せいみ」と呼ばれ、舎密局とは理化学校を意味する。舎密局は、明治2年5月に大阪城の西、追手筋（大手通り）に面した京橋口御定番屋敷跡に開校された理化学専門の高等教育機関で、初代教頭としてオランダ人ハラタマKoenraad Wolter Gratamaが迎えられ、化学、物理学を主とする講義がおこなわれた。舎密局の建物設計はハラタマ自身がおこなったものであり、コ字形で中央に風見櫓をもち、ベランダ風の廊下が巡る建物である（図4-XII-1）。舎密局は明治3年5月に理学校と改められ、同年10月には洋学校から発展した大坂開成所に合併される。その後、幾多の変遷を経て明治19年に第3高等中学校に、明治22年には京都に移転し旧制第3高等学校となり、現在の京都大学へと推移する（表4-XII-1）。

2. 舎密局建物の位置

「史蹟舎密局跡」の碑は、現在本町通りに面した大樟の樹の下に建つが、実際に舎密局の建物が存在した場所については、地図資料や、京都大学総合人間学部所蔵資料をもとにした諸先学の研究成果から、碑から約200m北側の、大手通り南側の大阪府庁別館東側がその候補地として有力視されていた（図4-XII-5右）。芝 哲夫氏の研究に詳しいため³⁾、これとの重複を避け、ここでは2枚の地図をあげるにとどめる（図4-XII-2⁴⁾）。

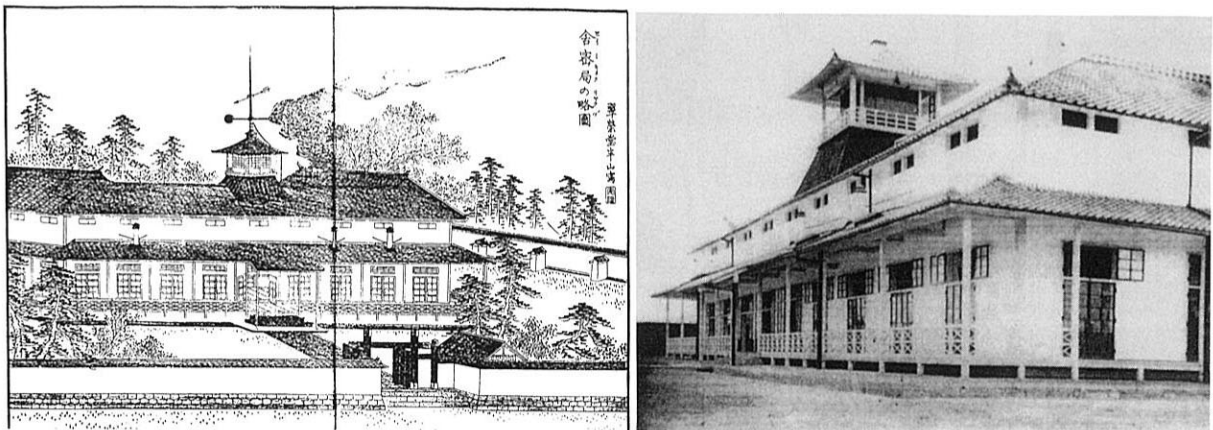


図4-XII-1 舎密局建物（左・「舎密局開講之説」 右・「京都大学総合人間学部図書館所蔵」）

表4-XII-1 舎密局関連年表

明治2 (1869) 年3月	舎密局建物工事完了。
5月	舎密局開講式。
明治3 (1870) 年5月	理学校と改名。
10月	理学校は、南接する洋学校と合併し大坂開成所となる。 (風見鶏のある建物は継続)
明治5 (1872) 年7月	大坂開成所は理学校とともに第4 大学区第1 番中学校と改称。
明治6 (1873) 年	開明学校と改称。
明治9 (1876) 年4月	「旧理学校・・・建家ヲ大阪司薬場設立掛り官員へ引渡」と三高資料にあり。
明治14 (1881) 年4月頃	旧司薬場を改築し(英語学校の) 体操場となる。 (風見鶏のある建物の取り壊し)
明治19 (1886) 年	第3 高等中学校となる。
明治22 (1889) 年8月	京都に移転し、旧制第3 高等学校となる。

図4-XII-2 左の図は「大阪市中地区町名改正絵図」と称され、「明治5年(実際は明治8年以降(1875))」と玉置氏により但し書きが付けられる。御城の西側、追手口の前の通り(現、大手通り)の南側に風見鶏のつく建物が描かれ、「理学校」および「開成所」の文字がみられる。風見鶏のつく建物は、まさしく図4-XII-1 にあげた舎密局建物と同一であり、舎密局建物は本町通り側ではなく、現在の大手通りの南側に位置していたとみられる。表4-XII-1 にまとめたように、舎密局は明治3(1870)年5月に理学校と改名し、10月に洋学校と合併し大坂開成所の一部になり、大坂開成所は明治5(1872)年7月に第4 大学区第1 番中学校と改称されるまで継続することから、この図は理学校および開成所の文字をみる限りでは、明治3(1870)年~明治5(1872)年の様子を描いたものとみられる。

図4-XII-2 右の図は「新撰大阪府管内区別図」と称され、「明治8(1875)年」とされる。これも御城の西側、追手口の前の通り(現、大手通り)の南側をみると、南北の通りを挟んだ西半分に「司薬場」、「教師館」、その下に「語学校」の文字がみられる。司薬場は表4-XII-1 の明治9(1876)年4月の「旧理学校・・・建家ヲ大阪司薬場設立掛り官員へ引渡」とある三高資料にみられるように明治9年以降舎密局建物を引き続き利用しており、これは明治14(1881)年4月頃旧司薬場を改築するまで継続したとみられる。これより、この図は「司薬場」の文字をみる限りでは、明治9(1876)年~明治14

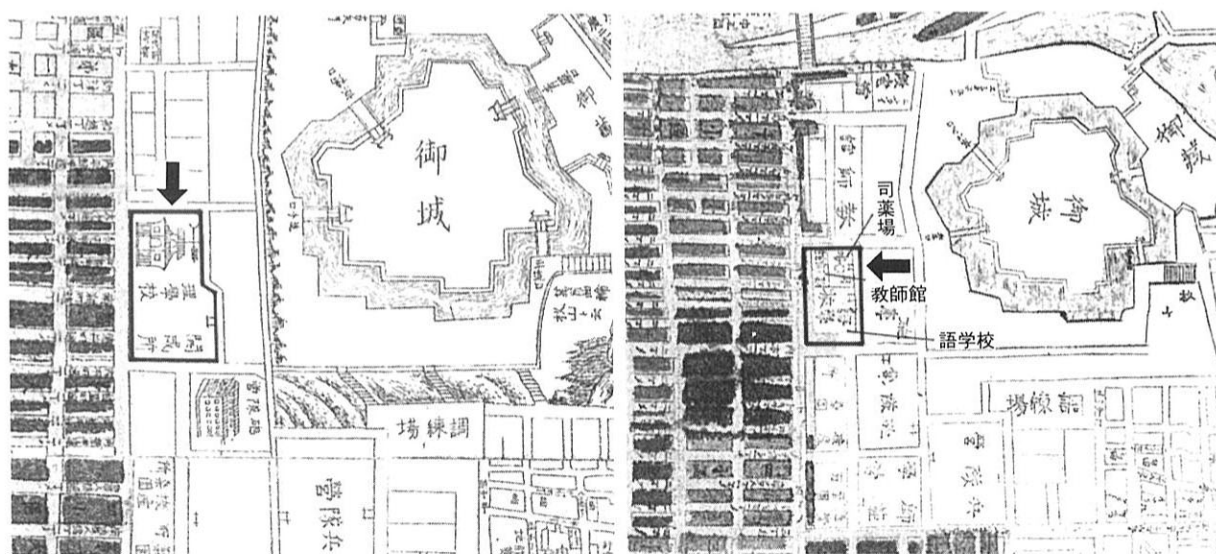


図4-XII-2 舎密局建物の位置(左・大阪市中地区町名改正絵図 右・新撰大阪府管内区別図)

(1881)年4月の様子を描いたものとみられ、図に付記される「明治8(1875)年」とはわずかに齟齬を生じる。が、いずれにしても、舎密局建物の位置は、大手通り南側の南北の通りを挟んだ西側に位置することは明らかである。この地点がちょうど今回の調査地では2C調査区および6A調査区に相当することから、両調査区における舎密局関連遺構の存在が想定された。

3. 舎密局建物に関連する平面図

実際に、両調査区で検出された近代遺構にふれる前に、舎密局建物に関連する平面図のいくつかについてふれておきたい。

舎密局建物に関連する平面図には、「大坂開成所全図」、「大坂司薬場平面図」(図4-XII-3上)のほか「明治十三年十月調」の文字が入る平面図(図4-XII-3下)があり、いずれも京都大学総合人間学部図書館に所蔵されている。

これら平面図の年代を考えると、「大坂開成所全図」は開成所という名称が用いられた明治3(1870)年～明治5(1872)年の様子を示すものとみられ、「大坂司薬場平面図」には「明治九年五月大坂英語学校ヨリ借用地」の文字がみられることから明治9(1876)年から司薬場が取り壊される明治14(1881)年4月までのいずれかの時点のものともみられることから、古いものから順に「大坂開成所全図」→「大坂司薬場平面図」→「明治十三年十月調」図になると考えられる。

これらの図面のなかで、「大坂開成所全図」および「大坂司薬場平面図」をもとに舎密局建物の仔細をみてみたい。

「大坂開成所全図」のうち、舎密局建物にあたる部分を図4-XII-4上段に掲載した。建物の平面形はコ字形であり、建物の周囲に沿って溝がめぐる。コ字形建物の裏手には屋根を突き抜けた煙突とその下に鍵形に屈曲するレンガ造りの竈が描かれる。この部分は下の平面図に竈の平面形が描かれており、図に載せた竈のスケッチは平面図に重なるように貼られた紙に描かれたものである。

「大坂司薬場平面図」のうち、舎密局建物にあたる部分を「大坂開成所全図」の建物と縮尺を合わせて図4-XII-4下段に掲載した。この図で大事な点は、方位が示されるため、建物は東面していたことがわかる点である。建物の形状はほぼ同じであるが、建物の周囲に溝がみられない点が相違点としてあげられる。また、井戸を示す「井」のマークや「水溜」の書き込みから、これらが近代遺構として検出される可能性が考えられ、詳細な位置の比定に役立つ。「大坂開成所全図」と大きく変わる点は、建物の南東側に「教師館」が増築されており、これに通じる門が新たに設けられている点である。これは厳密には舎密局建物とは異なるものの、「教師館」関連遺構がある場合、舎密局建物の比定に役立てることができる。

いまひとつ敷地境界線をみておきたい。図4-XII-1左図に明らかなように、舎密局建物は、周囲を下段に石垣をもつ塀で囲まれていたようである。図4-XII-4の両図では太線が描かれるのみで塀の仔細は描かれませんが、表門とそこから建物にのびる石敷きの様子からこの太線が塀に相当することは間違いないであろう。図4-XII-4上図と下図をみると、建物および敷地境界線はほぼ重なることから、開成所から司薬場へと変わったときに建物、敷地をともに踏襲して利用したようである。しかし、南側の敷地境界線のみ、「明治九年五月大坂英語学校ヨリ借用地 巾三間」とあり、この幅三間分、大坂司薬場の敷地は南へ拡張しており、借用以前の敷地境界線とみられる破線が「大坂開成所全図」南側の線と重なる。

以上の視点をもって、2C調査区および6A調査区の近代遺構をみてみたい。

4. 舎密局建物に関連する近代遺構

図4-XII-5は右図に2C調査区および6A調査区の位置を示し、左図は両調査区の近代遺構平面図に舎密局建物平面図（朱色）を重ねたものである。舎密局建物平面図は、藤田氏が「大坂開成所全図」をもとにトレースされた図（註（1）藤田1995文献の第25図）を使用させていただき、これに表門、敷地境界線などを加筆したものである。この舎密局建物平面図と近代遺構平面図を主に大手通りをはじめとする敷地境界線をもとに重ねてみた。残念ながら、舎密局建物の西半分については地下室設置時の攪乱のため大半が失われているものの、①～④の4点において舎密局建物に関連する可能性を示す遺構がみられ、⑤では舎密局建物位置を比定する遺構がみられた。①が2C調査区に位置するほか、②～⑤は6A調査区に位置している。遺構の仔細を示すため、6A調査区の概要報告時の平面図（概報では6A1トレンチ）に一部加筆したものを図4-XII-6に掲載した。

①は2C調査区石組1(1)、②は6A調査区石垣1(62)（本報告図15、写真図版22）である。②の石垣は6A調査区の東端で、 $N-5^{\circ}-W$ の軸をもって長さ約20mにわたり検出された。その延長上に①の石組が位置するため、本来は①と②は一体の石垣であった可能性がある。石垣は2段まで残存し、面を東にもち、西側に裏込めを設けており、東の面から裏込め掘方までの幅は1.2mである。

①と②は、舎密局建物を囲む石垣のうち、建物正面にあたる東側の南北方向の石垣の一部と考えられる。図4-XII-4下図の方位をもとに舎密局建物東側の石垣とみられる敷地境界線の軸を測ると、 $N-3^{\circ}-W$ であり、②の軸である $N-5^{\circ}-W$ とは 2° の差が生じるが、②は $N-4^{\circ}-W$ に近い部分も見受けられ、この場合その差は 1° となり誤差の範囲内と考えられる。また、石垣は面を東にもつ点も有力



図4-XII-5 近代遺構平面図と舎密局平面図（赤線）とその位置

な証左となろう。

③は本報告ではとりあげられていないが、 $W-3^{\circ}-S$ の軸をもって長さ約10mにわたり検出された石列である。石列は間に50cmの幅をもって2列あり、北側石列は面を南に、南側石列は面を北にもち、溝の側石とみられる。

溝の側石とみられる③は、舎密局建物の周囲に沿ってめぐる溝のなかで、建物南側の溝のラインと合致し、これに相当する可能性が大きいと考える。

④も本報告ではとりあげられていないが、③と同じく $W-3^{\circ}-S$ の軸をもって長さ約6.5mにわたり検出された石列である。掘方の幅は80cmであり、直径約50cmの平石が並ぶ。

④は舎密局建物を囲む施設のうち、建物南側の東西方向の施設の一部と考えられる。図4-XII-1左図より建物北側および東側に石垣を下段にもつ塀がめぐることがみとれるが、建物南側の状況は不明である。ただし、図4-XII-1右図をみると、建物の後方、すなわち南側に直立する施設がみられることから、塀が存在した可能性が高く、④はこれの一部に相当する可能性が大きい。

⑤は上層に近～現代の遺物が堆積するため、攪乱とみられた井戸である。調査担当者の新海正博氏にうかがったところ、当初は攪乱とみていたが、掘削の進捗に伴い円形の掘方が明らかとなり井戸とみてよいであろう、との見解であった。

図4-XII-4下図でみられた水溜、井戸5カ所のうち4カ所は2C調査区西半分の地下室設置時の攪乱部分にあたり、その痕跡は不明であったが、敷地南東隅部にある井戸の痕跡はみられるであろうとの予測をもとに平面図を見直したところ⑤がこれに相当することがわかった。⑤は舎密局建物が司菜場として利用されたときに増築された教師館に伴う井戸であり、舎密局に直接関連する遺構とはいえないが、

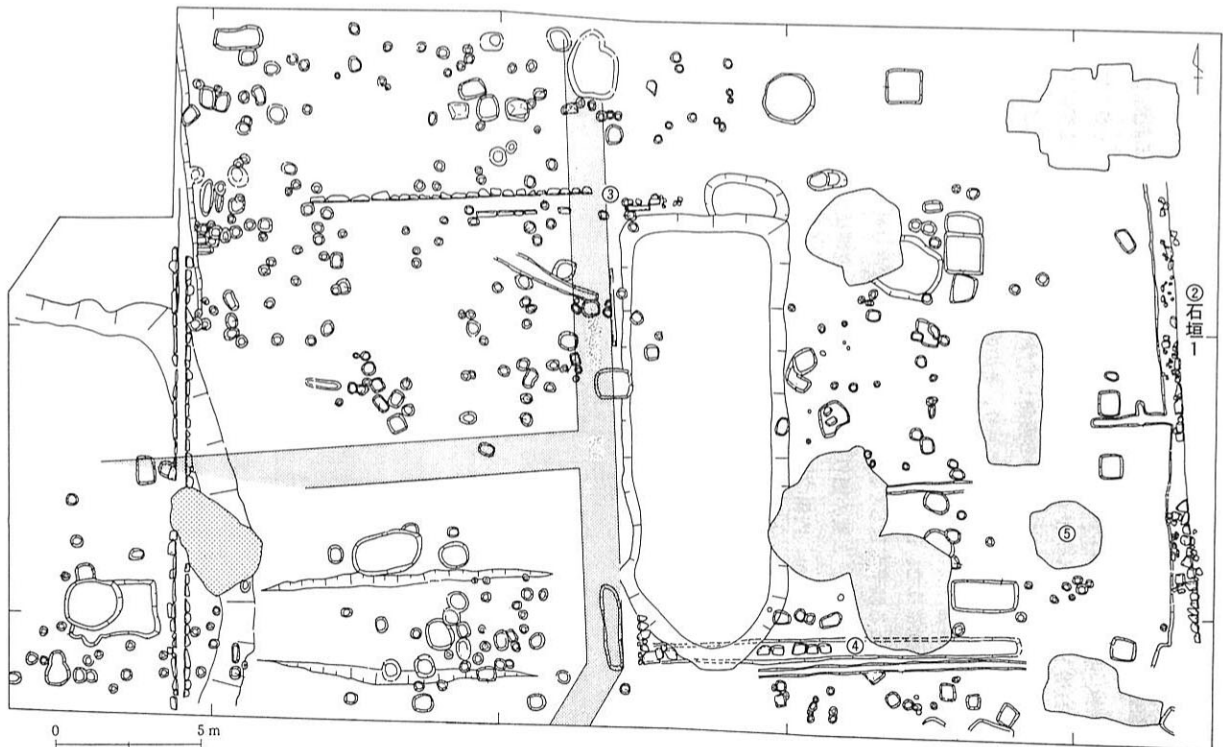


図4-XII-6 6A調査区（概報では6A1トレンチ）平面図

①～④でみた遺構を舎密局建物に関連するものとみた場合、やや年代は降るものの存在すべき井戸の痕跡であり、この⑤の存在からも①～④を舎密局建物関連遺構とすることは蓋然性をもつといえるであろう。

まとめ

以上、当初より舎密局建物の存在が想定された2C調査区および6A調査区で検出された近代遺構のなかで、①～④の4カ所において、舎密局建物に関連する可能性をもつ遺構の存在を指摘した。また、⑤からも想定される舎密局建物の位置と①～④が整合性をもつことがわかった。

短命ではあったが、日本の自然科学の近代化を推進する拠点となった舎密局に関連する可能性をもつ遺構が、発掘調査によって明らかとなり、舎密局のより具体的な様相と位置が明らかになったことは意義深いと考えられる。

最後に舎密局に関連する可能性をもつ遺物についてふれておきたい。図4-XII-7は2C調査区南西隅の土坑から出土した瓶である。内外面とも褐色釉が施され、内面にはロクロの回転によるナデの痕跡がみられる。底部に近い体部外面には縦1.6cm、横2.6cmの方形に「MANUFACTURED/ BY/ Z.P MARUYA & G/ TOKYOU.」 (/は改行を示す)の陰刻のスタンプがある。

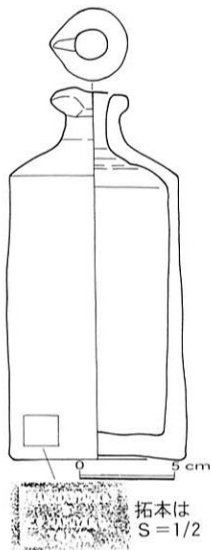


図4-XII-7
出土遺物

ハラタマが舎密局へ着任の際、オランダからとり寄せられた400箱余りの器械、薬品類が開封されている。⁶⁾ここにあげた瓶には「TOKYO」の文字があることから、これに伴うものではないが、薬品瓶の可能性が考えられるため提示した。用途、生産地など特定できないままの掲載となったが、ご教示いただければ幸いです。

最後になりましたが、小稿をなすにあたり、芝 哲夫氏からは多くの有益なご教示をいただき、江浦 洋氏および小林和美氏には遺物の探索をはじめ大変お世話になりました。また、舎密局関連資料の閲覧については京都大学総合人間学部図書館においていろいろと便宜をはかっていただきました。記して感謝申し上げます。

註

- 1) 芝 哲夫 1975 「大阪舎密局の跡をもとめて」『自然』6月号
 - 芝 哲夫 1981 「大阪舎密局史」『大阪大学史紀要』第1号
 - 芝 哲夫 1982 「ハラタマと日本の化学」『化学史研究』第1号
 - 菊池重郎 1976 「大阪舎密局の再発見」『自然』2月号
 - 藤田英夫 1995 『大阪舎密局の史的展開—京都大学の源流—』
 - 宗田 一 1975 「大阪舎密局の開講—もう一枚の写真をめぐって—」『薬事日報』第5249号
 - 神陵史資料研究会 1994 『史料神陵史—舎密局から三高まで—』
 - 緒方富雄 1973 「短命であった大阪舎密局—三つの資料の紹介—」蘭学資料研究会『研究報告』第277号
 - 緒方富雄 1974 「短命であった大阪舎密局補遺—4つの手写資料の追加—」蘭学資料研究会『研究報告』第278号
- など、枚挙にいとまがない。舎密局は日本の化学史上重要な位置を占めるため、化学史からのアプローチが多い。
- 2) 他に、「浪花百景之内セイミ局」（長谷川貞信画 神戸市立博物館所蔵）、「御城外大調練之図」（長谷川小信画 京都大学総合人間学部図書館所蔵）といった錦絵に舎密局建物が描かれており、藤田英夫 1995 『大阪舎密局の史的展開—京都大学の源流—』の口絵に掲載されている。
 - 3) 芝 哲夫 1975 「大阪舎密局の跡をもとめて」『自然』6月号
 - 4) 玉置豊次郎 1980 『大阪建設史夜話』の第16図、第17図を転載し、一部加筆。
 - 5) 財大阪府文化財調査研究センター 1996 『大坂城跡の発掘調査』6
 - 6) 芝 哲夫 1981 「大阪舎密局史」『大阪大学史紀要』第1号

XIII 大阪陸軍幼年学校について

小林和美

1. はじめに

大阪城が立地する上町台地北端は、難波宮造営・大坂城築城にみられるようにその地理的特性から古代より重視され、明治維新以降も陸軍の軍用地となり第四師団の中樞を担った。難波宮・大阪城の時代に関しては、発掘調査・研究の進展により様相が明らかになりつつあるが、明治維新以降の近代の様相については、軍事機密や敗戦の混乱といったベールに包まれ、不明な点も多く、難波宮・大坂城の時代と同程度、もしくはそれ以上に様相がわからないといっても過言ではない。しかし新世紀を目前にして戦争関連遺物を中心に近代の遺構・遺物も注目され、しだいに様相が明らかになりつつある¹⁾。今回の調査においても近代の遺物が出土しているが、小稿では大阪陸軍幼年学校²⁾（以下、3.を除き幼年学校と略す）に関する遺物の紹介を行い、当地における近代の様相解明の一助としたい。

2. 陸軍幼年学校とは

遺物紹介の前に、陸軍幼年学校とはどのような学校であったのか。また大阪陸軍幼年学校の変遷について簡単にまとめておく³⁾。

陸軍幼年学校とは陸軍の将校生徒となるために必要な素養を与える学校であり、年少時より将校教育を主目的としていた。明治3年（1870）、大阪兵学寮に横浜語学所を合して幼年学舎を設け、先進国の軍事知識吸収のための語学教育を実施したのが始まりとされる。明治5年（1872）に陸軍兵学寮幼年学

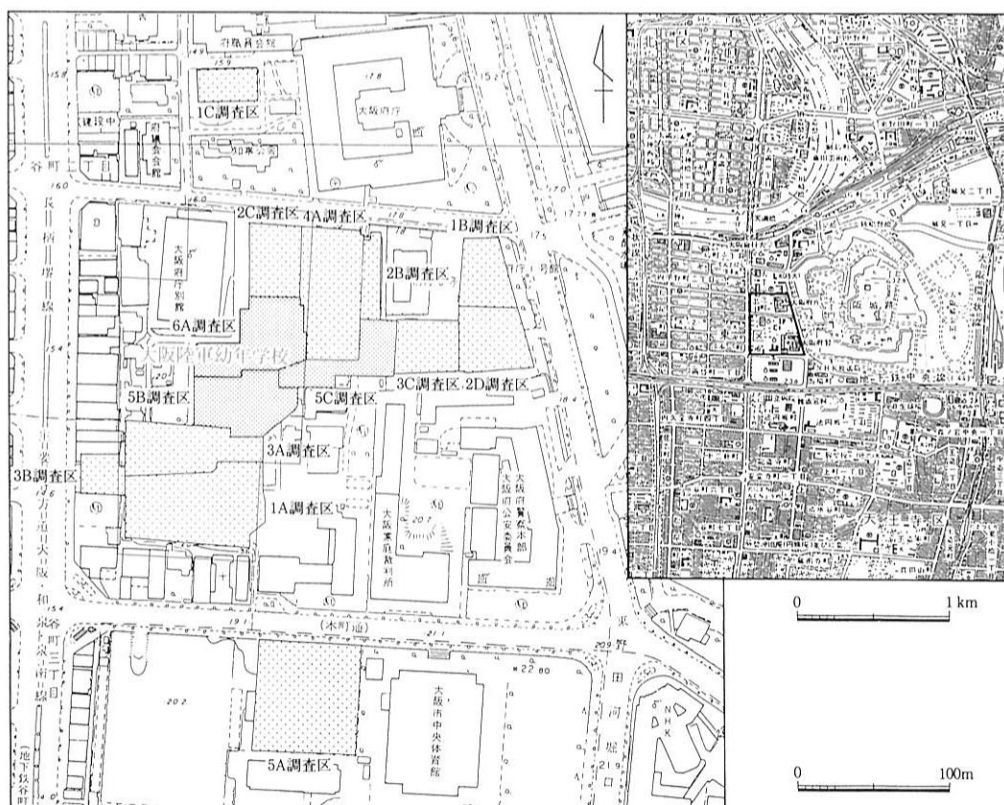


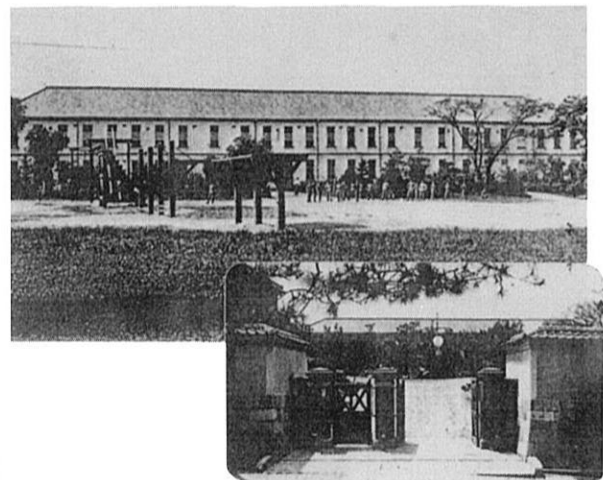
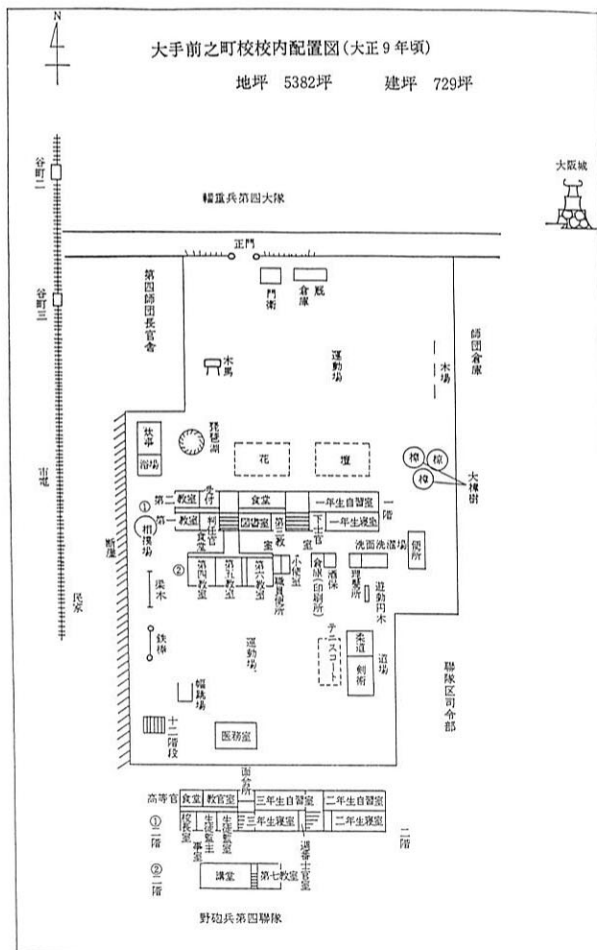
図4-XIII-1 調査地と大阪陸軍幼年学校

地方幼年学校6（東京・仙台・名古屋・大阪・広島・熊本）が設けられることとなった。各地方幼年学校は明治30年（1897）に開設し、13～15歳の生徒を各校50名採用した。修業期間は3年であり、将来、陸軍将校の基幹として大成するような英才教育を実施した。実際、卒業生の多くは、士官学校、陸軍大学へと進み、陸軍省の要職に就いており、幼年学校はまさにエリートコースの出発点であった。

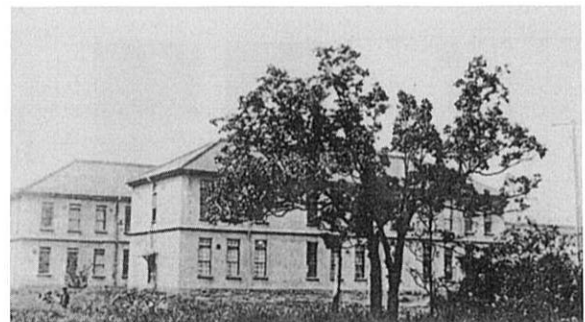
大正9年（1920）、学校組織の改正により陸軍中央幼年学校は陸軍士官学校予科となり、各地方幼年学校は陸軍幼年学校と改称したが、第1次世界大戦後の軍縮のため、東京1校を残して他の幼年学校は逐次廃校となった。しかし、満州事变後の軍備拡張によって昭和11年（1936）以降、逐次復興し、生徒の採用人数も従来の2倍以上に増加した。やがて太平洋戦争の敗戦により、昭和20年（1945）8月30日に解散した。

3. 大阪陸軍幼年学校の沿革（表4-XIII-1）

大阪陸軍地方幼年学校は明治29年（1896）5月に創設され、大阪借行社、歩兵第八聯隊営内の仮校舎を経て、明治31年（1898）2月21日に大阪市東区大手前町の新校舎へ移転した。大正4年（1915）発行の大阪市街図や校内配置図によれば大手前通りに正門を構え、第四師団長官舎や第七旅団司令部、師団倉庫に隣接する敷地に校舎等が建てられていた（図4-XIII-2・3）。当地には明治22年まで理化学専門の高等教育機関である司薬場や英語学校が設置されており、元来、教育機関が密集する地区であったようである（図4-XIII-2左下）⁴⁾。



明治時代の幼年学校
（上・校舎と運動場，下・正門）



廃校後の幼年学校（昭和3年）

図4-XIII-3 幼年学校校内配置図と建物

大正9年(1920)8月、学校組織の改正により大阪陸軍地方幼年学校は大阪陸軍幼年学校に改称されたが、大正11年(1922)3月には廃校となり、当地における幼年学校の歴史は25年足らずで幕を閉じた。しかし、校舎はすぐには撤去されなかったようで、廃校後6年を経た昭和3年5月頃とされる校舎の周囲に草が生い茂った写真が残されている(図4-XIII-3右下)。その後、校地は偕行社社宅となり、昭和6年(1931)発行の大阪市東区図にも「陸軍将校宿舎」と記され、かつての敷地内に大手前通りと旅団司令部を結ぶ道路ができるなど幼年学校の姿を見ることはできない(図4-XIII-2右下)。

昭和15年(1940)には大阪陸軍幼年学校が復興されるが、新校舎は広い敷地を求めて南河内郡千代田村(現河内長野市)に開設された。

戦後、かつての幼年学校を偲び、卒業生らによって学校跡の記念碑が建てられたが、旧校舎の一部と旧官舎とを併せた地域が府庁用地とされたときに撤去されたらしく、また校歌にも歌われ幼年学校の象徴であった「大樟樹」の樟も姿を消し、幼年学校の記憶は風化の一途をたどっている。

5. 大阪陸軍幼年学校関連遺物

大正3年の地図と調査区の位置図を重ね合わせると、幼年学校の敷地には北から2C調査区・6A調査区・5B調査区・3A調査区・1A調査区が該当する(図4-XIII-1)。遺構としては確実に幼年学校関連と断定できるものはないが、遺物には校名が記された幼年学校に関連する遺物が出土している(図4-XIII-4)。

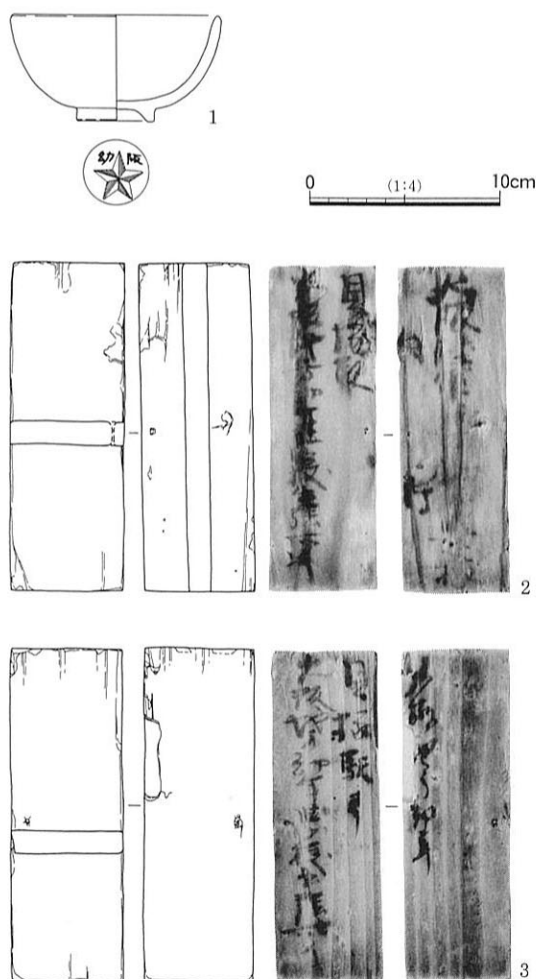


図4-XIII-4 幼年学校関連遺物

(1) 陶磁器

6A調査区の溝15と1・2層から軍徽章である星印をつけた茶碗が2点出土している。高台の内側に青色の星印と星の肩に「阪幼」とプリントされている。作りは貫入がみられ、後に大量に生産される陸軍食器にみられるような型作りではない。また星印も陸軍食器のものとは異なり、相対的に大きく突出部が細長い。さらに光の当たる部分と影の部分が交互になっており、影の部分も格子模様で塗りつぶされるのではなく、直線で塗りつぶされている。軍徽章とあわせて「阪幼」と記されていることから、幼年学校で使用されたものと考えられ、当時幼年学校は全寮制であったことから、このような茶碗が大量に使用されていたのであろう。

(2) 木簡

2C調査区の井戸10から幼年学校に関する記載がみられる木簡が2点出土した。2点とも18×6cmの方形の板に墨書で記されている。

- 2・「貝塚駅」
- 「大阪地方陸軍幼年学校出張所行」
- ・「大阪陸軍地方幼年学校」
- 「行」

- 3・「貝塚駅ヨリ」
「大阪地方幼年学校出張所行」
・「大阪地方幼年」

記載内容から貝塚駅から大阪陸軍地方幼年学校出張所に送られた荷物につけられた荷札と考えられるが、出張所の位置や荷物の内容に関しては不明である。しかし、幼年学校では毎年夏に「游泳及び漕舟一般の要領を修得させる」ため游泳演習を行っており、『大阪陸軍幼年学校史』の正史によれば明治36年8月15日の記述に「生徒一同游泳演習ノ為メ泉州貝塚へ向ケ出発ス（八月三十日生徒一同帰校ス）」とある。游泳演習は毎年実施されているが、貝塚で行われたのは明治36年のみであり、木簡との関連が想起される。

また、正史では明治39年以降の修学旅行や游泳演習など校外へ出かける記述には「生徒修学旅行ノ為メ校長以下職員生徒百七十名五泊ヲ以テ奈良県下高田、吉野、桜井、奈良地方ニ出張ス」や「生徒游泳演習施行ノ為メ校長以下職員生徒百四十名大阪府泉南郡樽井村ニ出張ス」といったように「出張」の言葉が頻繁に使用されている（傍点：筆者加筆）。

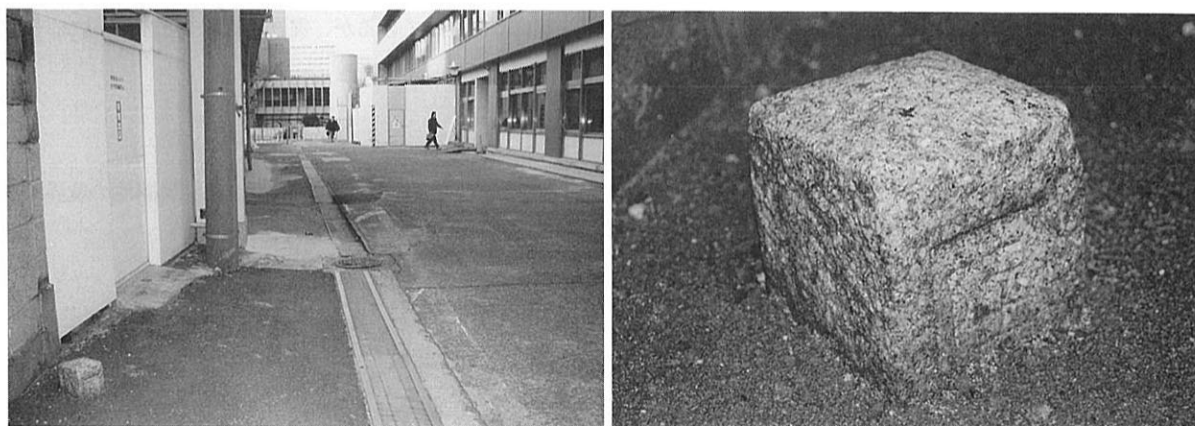
一方、「大阪地方陸軍幼年学校」と学校名に「地方」とついていることから、明治29年（1896）から大正9年（1920）8月までの間を示すと考えられる。

以上のことから、明治36年8月に貝塚で実施された游泳演習に関連した木簡である可能性が高いと考える。游泳演習には2週間ほど全校あげて校長以下100名以上の参加者がいるため、運搬すべき荷物も多かったであろう。

なお「貝塚駅」については、現南海電鉄が「貝塚駅」を設置するのが明治30年（1897）9月であり、また現ユニチカが工場に阪和線を引き込んで「阪和貝塚駅」を設置するのが昭和9年（1934）であることから、木簡に記されている「貝塚駅」は前者の現南海電鉄の貝塚駅と考えられ⁶⁾、上述の内容と齟齬をきたさない。

（3）陸軍標柱（写真図版4-XIII-1）

大阪府庁別館南西隅（厳密には当センター大坂城事務所北東隅）に、「陸」一文字を残してあとはアスファルトに埋もれた石柱がある。石柱は15×15cmの直方体で、頂部は四角錐状に成形されている。南東側の面は幅9cm程中央部を一段下げて「陸」の文字が刻まれている。おそらく「陸軍用地」などの文字が刻まれ、陸軍の敷地境界を示す石柱と思われる⁷⁾。現段階では幼年学校関連のものか判断できないが⁸⁾、



南から撮影、右の建物：府庁別館
写真図版4-XIII-1 陸軍標柱

近い将来、石柱が消滅することも考えられ、基礎データを提示しておく。

6. まとめにかえて—資料のもつ意味—

戦後半世紀以上の時が過ぎた大阪城周辺は公園と官公庁街が広がり、かつての軍用地の面影はすでに見当たらない。また歩兵第八聯隊や三十七聯隊のように隊に関係した人が多い施設は証言などが詳細に記録されているが、幼年学校はすでに述べたように少数精鋭のエリートを養成したため、関係者も少なく記録も乏しい。数少ない資料からうかがえる幼年学校の様相は、わずか13・4歳の生徒が日夜、ドイツ語・フランス語の習得や軍事教練に励み、エリート軍人としての第一歩を踏み出す場であった。小稿ではこのような情景を彷彿とさせるまでには至らなかったが、幼年学校の存在について考古学的証左を得ることができた。すなわち当地における明治から昭和にかけての土地利用変遷の一端を明らかにすることはできたと考える。

戦争体験者の高齢化と、戦争の記憶の風化が叫ばれて久しい今、人々の記憶にのみ留めておくのではなく、次の世代に伝えるため記録として残していく必要がある。その記録の手段の一つとして、発掘調査成果が語る声に耳を傾けることも意義があるように思われる。

謝辞

小稿を成すにあたり江浦 洋・尾谷雅彦・三浦 基氏よりご教示を賜りました。記して御礼申し上げます。

註

- 1) 財大阪府文化財調査研究センター 2000『難波宮跡北西の調査』
江浦 洋・本田奈都子・小林和美 2000「陸軍大阪被服支廠跡の調査—大阪府警本部地点における近・現代遺構の発掘調査—」『ヒストリア』第171号 大阪歴史学会
また大阪城周辺の戦争関連遺構・遺物については、大阪歴史学会企画委員会編 2000「戦争遺跡資料集」(大阪歴史学会 1999年度大会「戦争遺跡から見た近代大阪—大阪大空襲から55年—」当日配付資料)に未報告分も含めて集成されている。
- 2) 大手前之町に校舎があった時代は「大阪陸軍地方幼年学校」が正式名称であるが、一般的な用語として本稿では「大阪陸軍幼年学校」の名称を使用する。
- 3) 吉川弘文館 1993『国史大辞典』14
阪幼会 1975『大阪陸軍幼年学校史』
- 4) 司薬場(舎密局)の発掘調査成果に関しては、本書考察編所収の合田氏の論考に詳しい。
合田幸美 2002「舎密局関連遺構について」『大坂城跡発掘調査報告』I (財大阪府文化財センター)
- 5) 2点のうち溝15から出土している碗は、登録番号ごとの記録写真には写っているが、実物は確認できなかった。従って、1・2層(G19-b3地区)から出土した碗のみ掲載した。
- 6) 貝塚市教育部社会教育課 三浦 基氏のご教示による。
臨時貝塚市編纂部 1957『貝塚市史』第2巻
- 7) 池田一郎・鈴木哲也 1996『京都の「戦争遺跡」をめぐる』つむぎ出版
- 8) 幼年学校と第四師団長官舎の敷地境界に近いが、京都の報告例などから見て陸軍標柱は軍用地と民間地の境界を示すことが多く、断定できない。

挿図・写真出典

- 図4-XIII-1 (財大阪府文化財調査研究センター 1996『大坂城跡の発掘調査6』)に加筆
図4-XIII-2 大阪府立中之島図書館、大阪市立中央図書館所蔵地図に加筆・転載
図4-XIII-3 『大阪陸軍幼年学校史』より転載
図4-XIII-4 碗：新規作成、木筒：本書本文編図65より転載
表4-XIII-1 『大阪陸軍幼年学校史』より作成
写真図版4-XIII-1 新規撮影(2001年2月)

Ⅳ 旧大手前之町における明治～昭和時代の土地利用変遷

小林和美

1. はじめに

旧大手前之町は大阪城大手口の西に位置し、大手通、上町筋、本町通、谷町筋に囲まれた一角であり、現在の大阪市中央区大手前3丁目と谷町2・3丁目にあたる。現在は大阪府警察本部、大阪府庁別館などが建ち並び、官庁街の中核機能を有す。このような機能は今に始まったことではなく、古代より交通の要所としての地理的特質から難波宮造営や秀吉の大坂城築造など政治の中核機能がおかれることが多かった。明治維新以降は大阪城とその一帯は陸軍の軍用地となり、第四師団司令部を核とした軍都に姿を変え、軍の中核機能を担った。実際、発掘調査では軍都を立証するかのごとく、軍に関連する遺構・遺物が数多く検出されている。しかし、これらの性格を説明しうる具体的な土地利用など当時の様相に関しては、軍事機密や敗戦の混乱などから明らかでない。以下、本論では調査成果の理解に向けて、断片的な資料ではあるが『大阪市史』などの文献資料や地図・航空写真などを相互補完的に概観することによって土地利用変遷の復元を行い、最後に検出された遺構との対応を若干試みる。

2. 土地利用の変遷

(1) 明治時代の土地利用

東地区 明治時代の地図にはいずれも中央付近に大手通と本町通を結ぶ道が通じており、この道を境に施設が異なっている。東地区には「大阪市中地区町名改正絵図」（明治5年）¹⁾では空白であるが、「新撰大阪府管内区別図」（明治8年）では南寄りに「砲庫」と記され、「実測大阪市街全図」（明治18年）においても「砲廠」と記されている。これに関しては、後の地図に「兵器廠本廠」（大正4年）、「大手門兵器倉庫」（昭和7年）と一貫してこの地に兵器廠関連の施設名が記されることから、兵器廠の前身で明治8年に創設された大阪砲兵支廠関連の施設が存在した可能性を指摘しておきたい。大阪砲兵支廠は明治12年に大阪砲兵工廠と砲兵第二方面本署に分かれ、後者が大阪陸軍兵器本廠へと発展する。兵器本廠は航空兵器を除く兵器、および航空に関するものを除く兵器材料、自動車燃料その他の軍需品の保管・修理・補給・廃棄処分等に当たっていた。

西地区 「大阪市中地区町名改正絵図」（明治5年）には西半分には建物の絵とともに「理学校」、「開成所」と記されている。これらは明治2年に開校された舎密局と呼ばれる理化学専門の高等教育機関であり、現在の京都大学の前身にあたる。舎密局に関しては、合田幸美氏が建物平面図と発掘調査成果を元に復元を試みられている。²⁾合田氏の論考によれば、2C調査区・6A調査区で検出された石列のいくつかは舎密局建物を囲む石垣や溝の一部と考えられ、近代の遺構が積極的に評価された貴重な事例といえる。また「新撰大阪府管内区別図」（明治8年）には「教師館」・「司薬場」・「語学校」、「内務省大阪実測図」（明治21年）には「司薬場」・「語学校」とあり、いずれも舎密局関連の施設が記されている。

なお「内務省大阪実測図」には、「語学校」の「校」の字の左上に曲線で崖の表現が見られる。現在でもこの崖を境に谷町筋側は5m近く低くなっており、東側の高い地区が軍用地に利用され、一段低い谷町筋沿いには民家と土地利用が異なっていたことが看取できる。

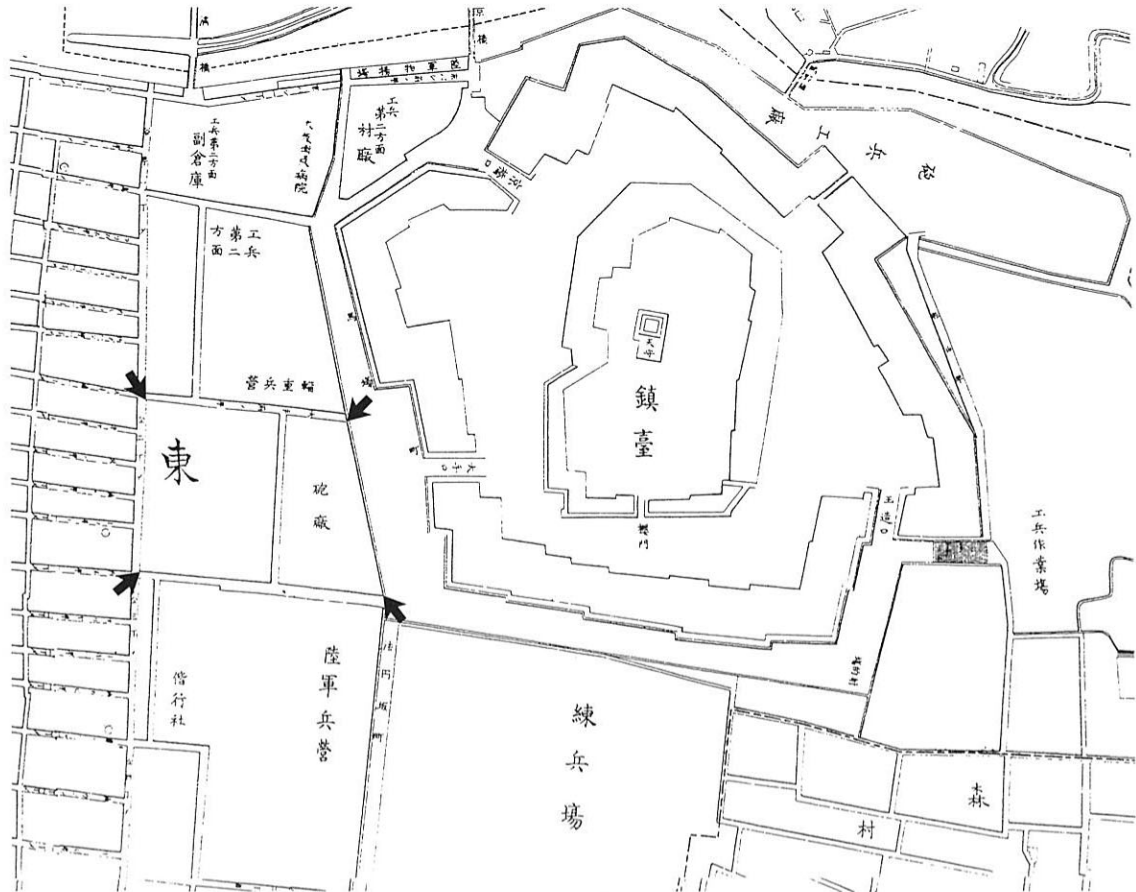


図4 - XIV - 3 「実測大阪市街全図」(明治18年)

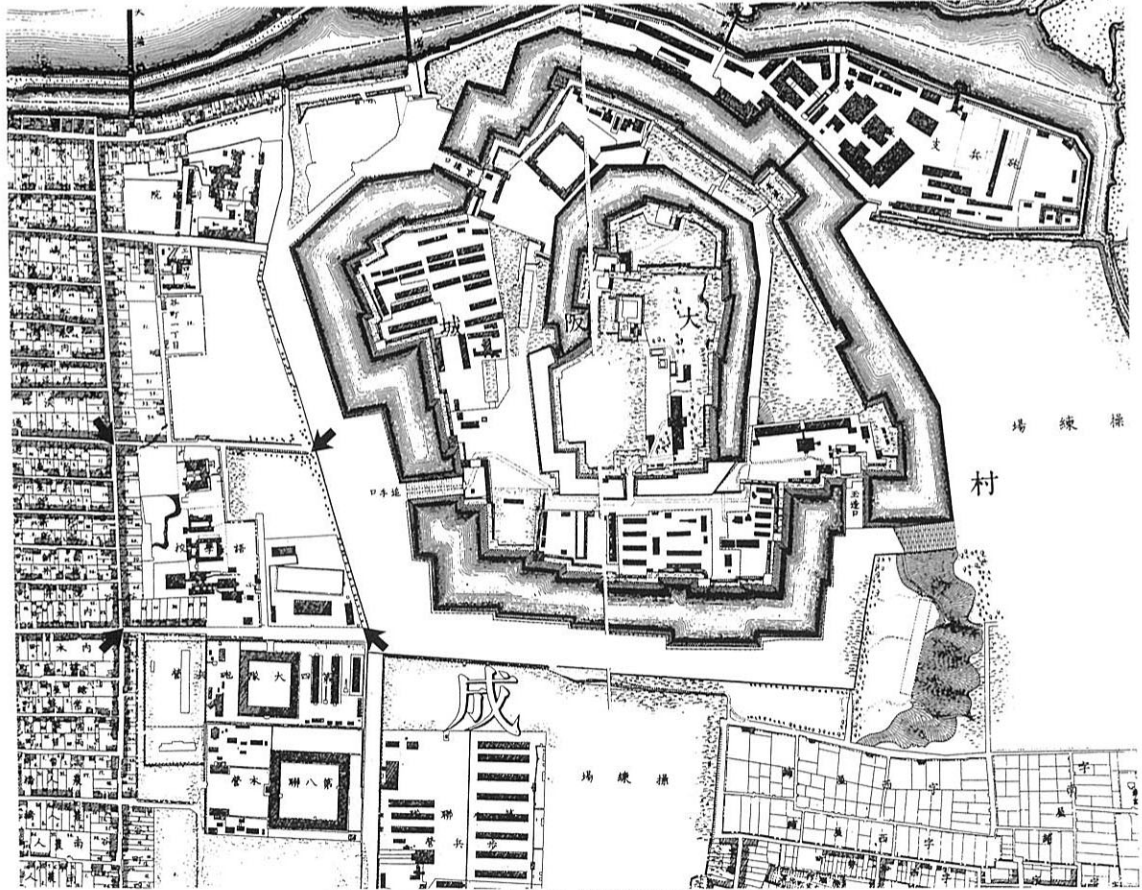


図4 - XIV - 4 「内務省大阪実測図」(明治21年)

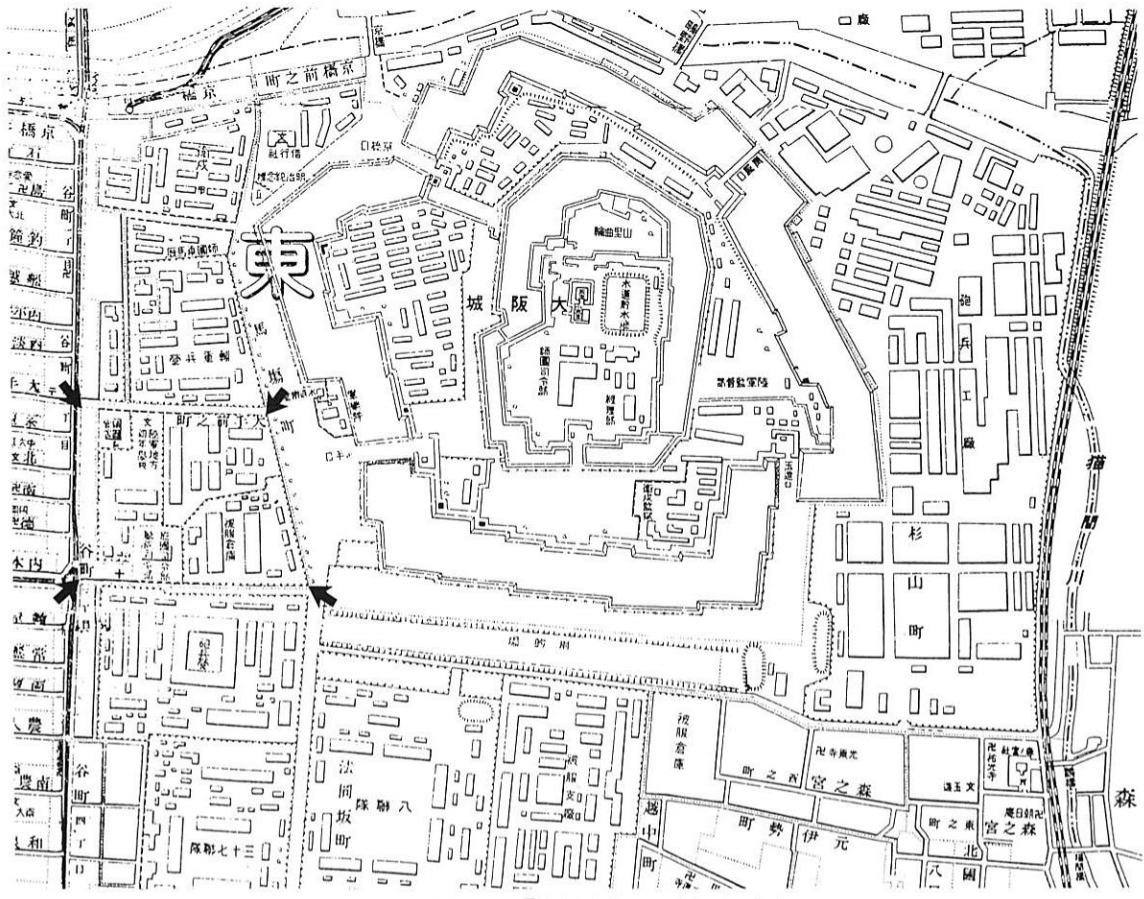


图 4 - XV - 5 「大阪市街图」(大正 3 年)

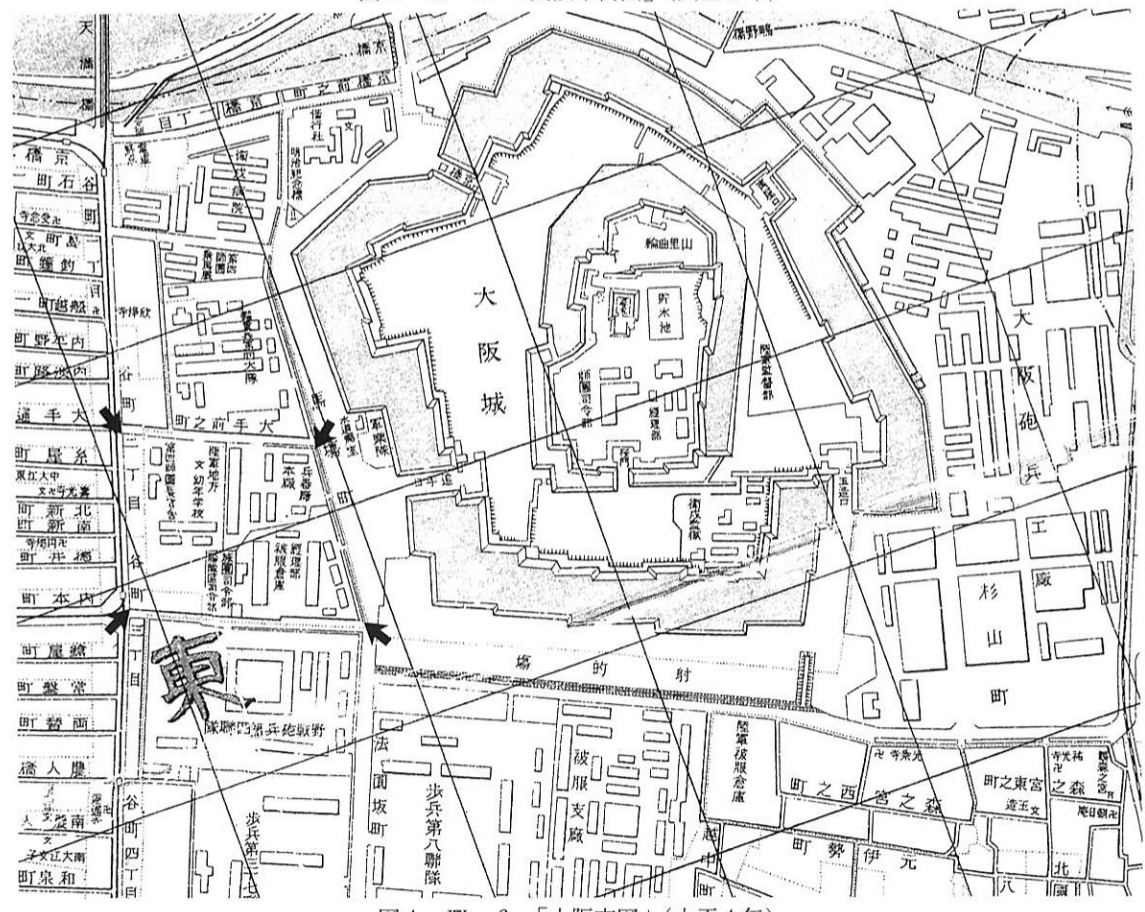


图 4 - XV - 6 「大阪市图」(大正 4 年)

（２）大正時代の土地利用

北東地区 大正時代の地図では明治時代のものとは異なり、中央部の道が見られなくなり、谷町筋沿いの民家を除けば全体を大きく４区画に分割されている。

北東地区では「大阪市図」（大正４年）に「兵器廠本廠」と記され、南北方向の建物が密集していることが認められる。兵器廠本廠は砲兵第二方面本署が明治30年に改称し、明治36年に大阪陸軍兵器支廠と改称するまで使用されていた名称であり、若干年代に矛盾が生じているが、兵器廠関連の施設があったことに間違いはないであろう。

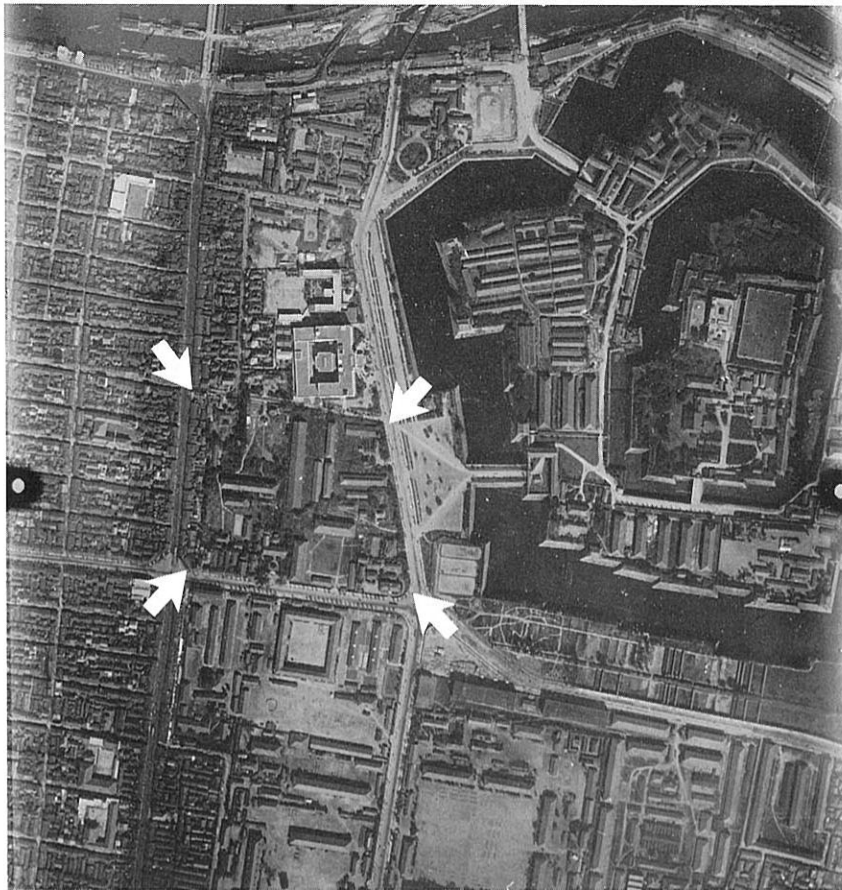
南東地区 「大阪市図」（大正４年）によれば、南東地区には新たに「経理部被服倉庫」とされるコの字型建物配置を核とした区画が出現している。経理部とは参謀部・副官部・兵器部・軍医部・獣医部・法務部などと共に第四師団司令部を構成する部の一つであり、会計経理の監督を行っていた。経理部の業務内容が「会計経理の監督」以上は不明であるため、「経理部の被服倉庫」とはにわかに断定しがたい。しかし当地は終戦後、大阪府警察本部や大阪家庭裁判所が設置されるが、戦後の旧陸軍施設の利用状況調査において「第四師団経理部大手前之町倉庫」は、その後の使用者が「警視庁・大阪府大阪高等裁判所」となっていることから、「経理部倉庫」が「裁判所」に転用されていることがうかがえる。一方、大阪家庭裁判所の記録によれば、「大手前之町所在の旧陸軍施設であった木造二階建の被服倉庫」を仮庁舎として「無償で貸与されることに成功した」とあり、「被服倉庫」が「裁判所」に転用されていたと考えられる。すなわち、裁判所が仮庁舎として利用した建物は経理部の倉庫であり、また被服倉庫でもあったと考えられ、「経理部の被服倉庫」である可能性が皆無であるとは断定できない。当然ながら「被服倉庫」に関しては、明治36年に創設された陸軍被服廠大阪支廠関連の倉庫とも考えられる。いずれにしてもこの地図からだけでは、経理部の被服倉庫であったのか、被服支廠の倉庫であったのか、または被服支廠の倉庫の一部を経理部が共用していたのかは不明である。

北西地区 北西地区には「陸軍地方幼年学校」と「第四師団長官舎」の記載が見られる。前者は明治29年に創設された大阪陸軍地方幼年学校を示す。明治22年に舎密局が発展した第三高等中学校が京都へ移転した跡地に幼年学校が設置されており、明治時代初頭より一貫してこの地区は教育ゾーンとして機能していたようである。幼年学校に関しては別稿があるのでここでは詳述しないが、幼年学校とは陸軍の幹部候補生の教育機関であり、明治31年に大手前町に新築した校舎へ移転してきた。発掘調査においても校名が記された茶碗や木簡が出土していることから、幼年学校の存在について考古学的証左を得ている³⁾。幼年学校は第一次世界大戦後の軍縮の流れの中で大正11年に廃校となり、後に満州事変後の軍備拡張で再興されるときには現在の河内長野市に新築移転した。

南西地区 陸軍幼年学校の南に新たに「旅団司令部」と「聯隊区司令部」が記されている。歩兵第七旅団司令部は明治18年に法円坂町四番地に創設され、大阪聯隊区司令部の前身である大阪大隊区司令部も3年後の明治21年に第七旅団司令部の構内に創設されている。法円坂からいつの時点で移転してきたのかはわからないが、少なくとも大正３年以降には大手前之町に司令部がおかれていたようである。

（３）昭和時代の土地利用（昭和20年以前）

北東地区 昭和６年の「大阪市東区図」では大正時代と建物配置は変わっていないが、「大手門兵器倉庫」と記されている。おそらく大正７年に各師団に兵器部が設けられ、第四師団兵器部の新設に伴い兵器支廠の倉庫の一部を兵器部に移管したと記述があり、また終戦後の旧陸軍施設の利用状況調査におい



写真図版 4 - XV - 1 航空写真 (昭和 3 年) ※掲載許可済・無断転載不可

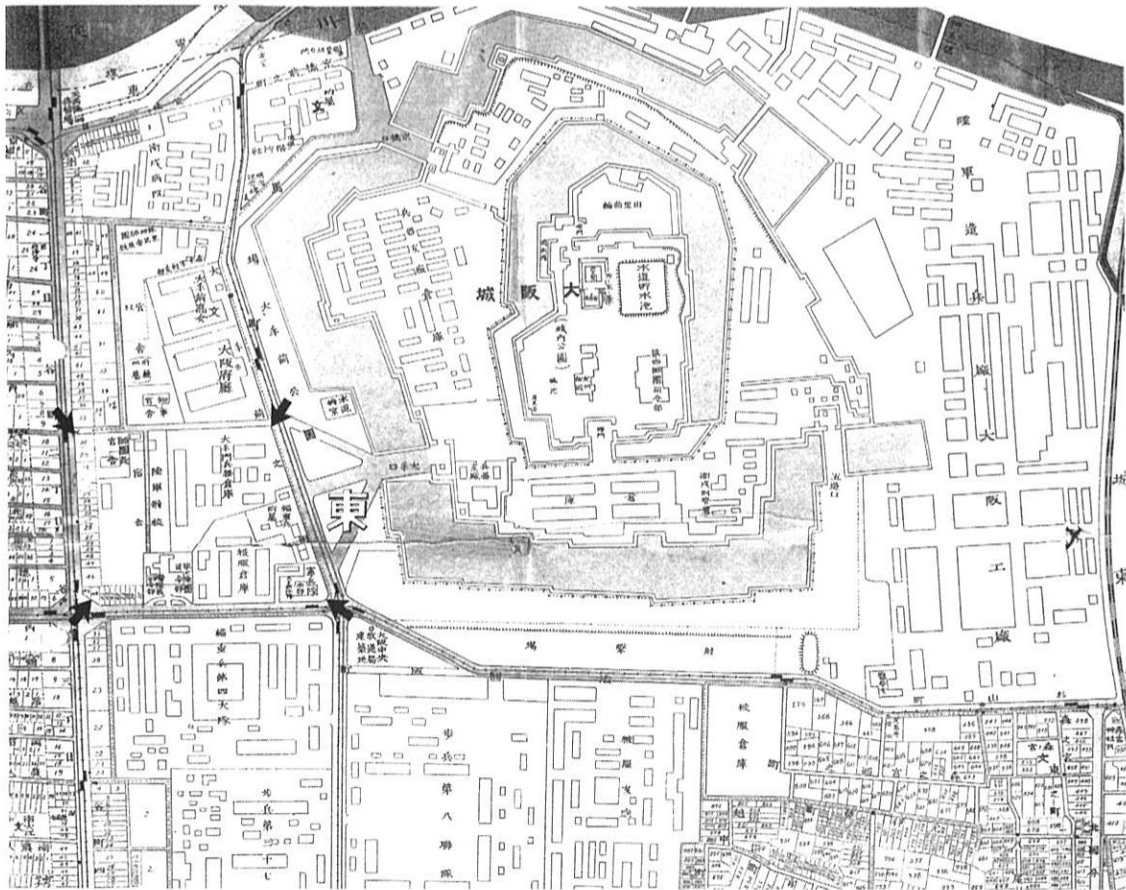


図 4 - XV - 7 「大阪市東区図」 (昭和 6 年)

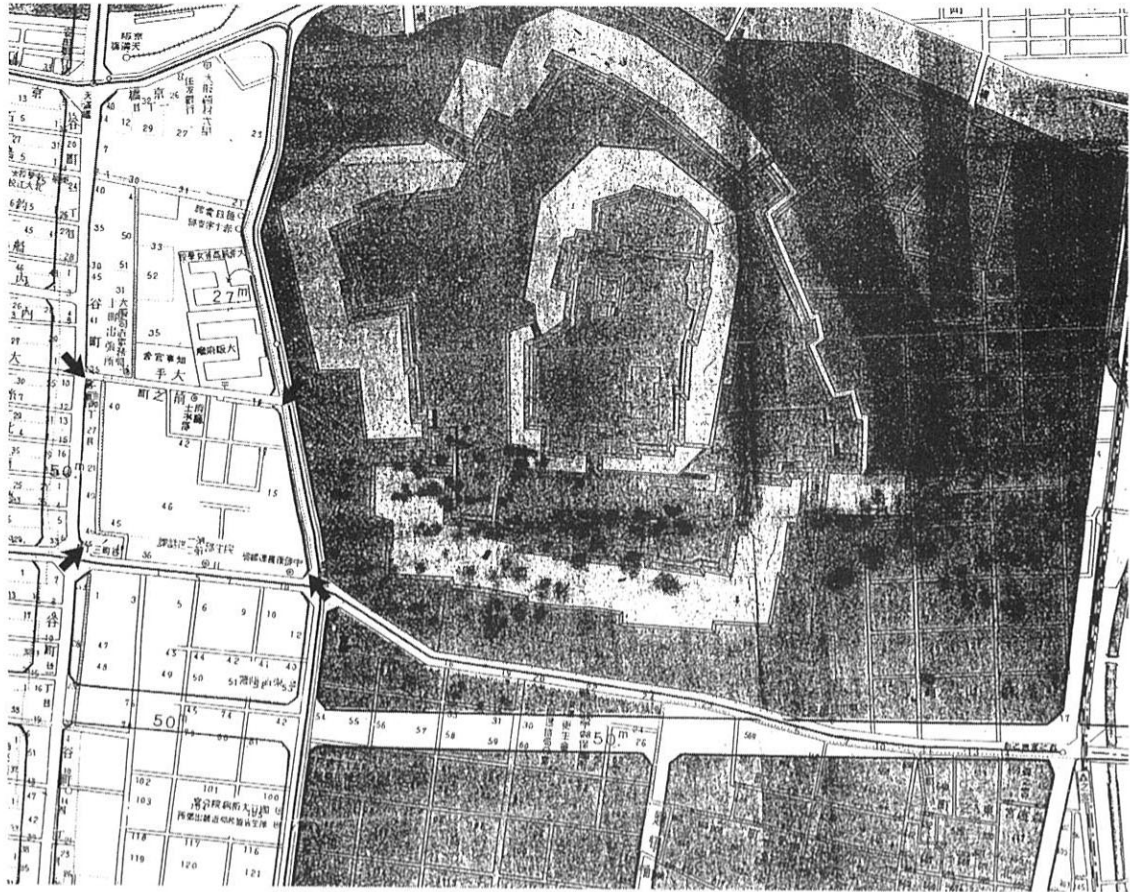
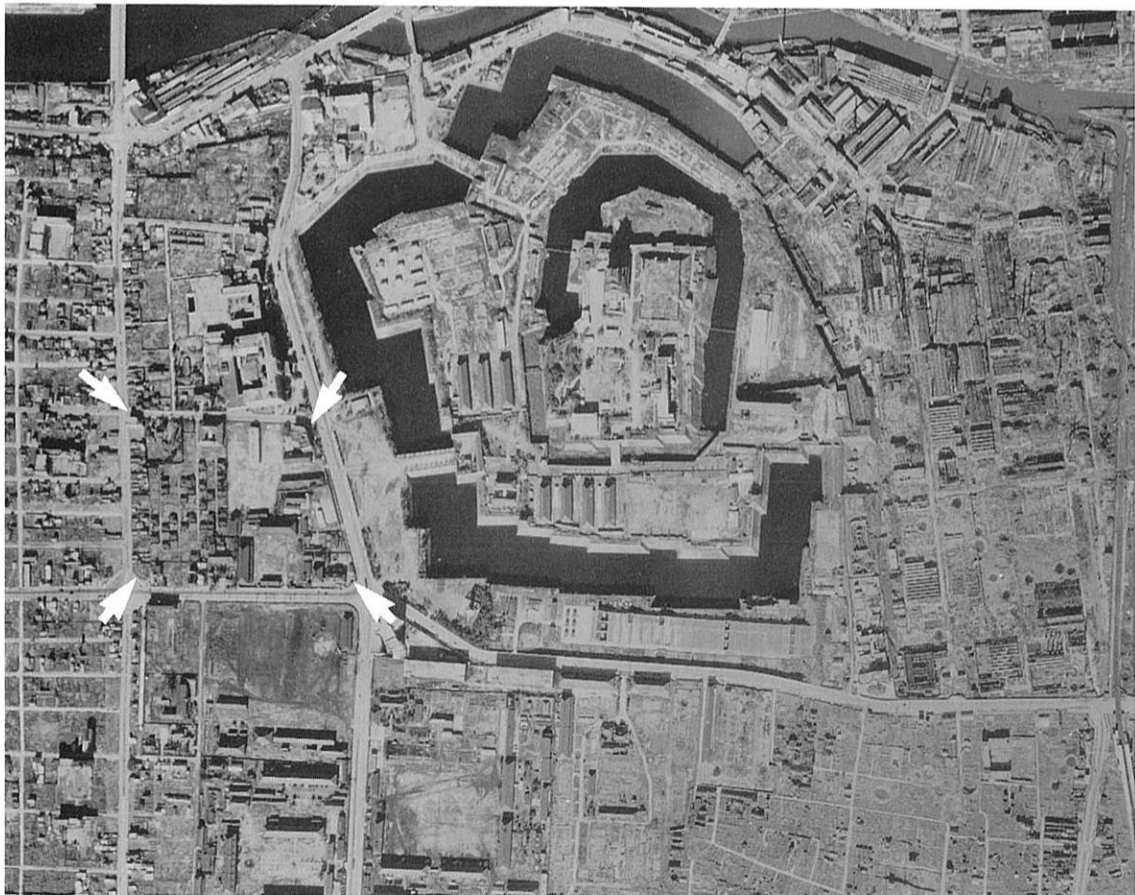


図4-XV-8 「最新東区詳細図」(昭和22年)



写真図版4-XV-2 航空写真(昭和23年)

表4 - XIV - 1 旧大手前之町関連年表

		北 西		北 東		南 西		南 東	
		関連施設	地 図	関連施設	地 図	関連施設	地 図	関連施設	地 図
		舎密局・陸軍 幼年学校		兵器廠本廠・ 堺聯隊区司令 部		歩兵第七旅団・ 聯隊区司令部・ 第四歩兵団		陸軍被服廠大 阪支廠・大阪 憲兵隊本部	
明治元年	1868								
明治2年	1869	舎密局開講式							
明治3年	1870	理学校と改称、 南接する洋学 校と合併し大 坂開成所とな る							
明治4年	1871								
明治5年	1872	第四大学区第 一番中学校と 改称	理学校				開成所		
明治6年	1873	開明学校と改 称							
明治7年	1874								
明治8年	1875		教師館・司薬 場	大阪砲兵支廠 創設	砲庫		語学校		砲庫
明治9年	1876	旧理学校の建 物を大阪司薬 場へ引き渡す							
明治10年	1877								
明治11年	1878								
明治12年	1879			砲兵第二方面 本署と改称					
明治13年	1880								
明治14年	1881								
明治15年	1882								
明治16年	1883								
明治17年	1884								
明治18年	1885				砲廠	歩兵第七旅団 司令部、創設 (法門坂町4 番地)			砲廠
明治19年	1886	第三高等中学 校となる							
明治20年	1887								
明治21年	1888		司薬場			大阪大隊区司 令部の創設 (第七旅団司 令部構内)	語学校		
明治22年	1889	京都へ移転							
明治23年	1890								
明治24年	1891								
明治25年	1892								
明治26年	1893								
明治27年	1894								
明治28年	1895								
明治29年	1896					大阪聯隊区司 令部と改称			
明治30年	1897			大阪陸軍兵器 本廠と改称					
明治31年	1898	陸軍地方幼年 学校大手前町 へ移転							
明治32年	1899								
明治33年	1900								
明治34年	1901								
明治35年	1902								
明治36年	1903			大阪陸軍兵器 支廠と改称				陸軍被服廠大 阪支廠の創設	
明治37年	1904								
明治38年	1905								
明治39年	1906								
明治40年	1907								
明治41年	1908							大阪陸軍被服 支廠に改称	
明治42年	1909								
明治43年	1910								
明治44年	1911								
明治45年	1912								
大正元年	1912								
大正2年	1913								
大正3年	1914		師団長官舎・ 陸軍地方幼年 学校				旅団司令部・ 聯隊区司令部		被服倉庫

		北 西		北 東		南 西		南 東	
		関連施設	地 図	関連施設	地 図	関連施設	地 図	関連施設	地 図
		舎密局・陸軍幼年学校		兵器廠本廠・堺聯隊区司令部		歩兵第七旅団・聯隊区司令部・第四歩兵団		陸軍被服廠大阪支廠・大阪憲兵隊本部	
大正 4 年	1915		師団長官舎・陸軍地方幼年学校		兵器廠本廠		旅団司令部・聯隊区司令部		経理部被服倉庫
大正 5 年	1916								
大正 6 年	1917							大阪憲兵隊本部が南区より大手前之町に移転	
大正 7 年	1918			第 4 師団兵器部の新設					
大正 8 年	1919								
大正 9 年	1920	大阪陸軍幼年学校と改称							
大正10年	1921								
大正11年	1922	大阪陸軍幼年学校、廃校							
大正12年	1923								
大正13年	1924								
大正14年	1925								
大正15年・昭和元年	1926								
昭和 2 年	1927								
昭和 3 年	1928								
昭和 4 年	1929								
昭和 5 年	1930								
昭和 6 年	1931		師団長官舎・陸軍将校官舎		大手門兵器倉庫		第七旅団司令部・聯隊区司令部		輜重兵付属・憲兵隊本部・被服倉庫
昭和 7 年	1932								
昭和 8 年	1933								
昭和 9 年	1934								
昭和10年	1935			堺聯隊区司令部、大手前之町へ新築移転					
昭和11年	1936								
昭和12年	1937								
昭和13年	1938								
昭和14年	1939								
昭和15年	1940			大阪陸軍兵器補給廠と改称		歩兵第七旅団の廃止、第四歩兵団の編成、第七旅団司令部跡に司令部			
昭和16年	1941								
昭和17年	1942								
昭和18年	1943								
昭和19年	1944								
昭和20年	1945								
昭和21年	1946								
昭和22年	1947		府庁土木部						中部復員連絡局・民生部第一二世話課
昭和23年	1948								
昭和24年	1949							家庭裁判所の設置	
昭和25年	1950								

でも「第四師団兵器部大手前倉庫」と記されていることから、当地は兵器部の倉庫となった可能性が高い。大正時代の南東地区に「経理部」の記載や北西地区の「第四師団長官舎」に見られるように、この辺りは師団司令部がおかれていた城内から近く、師団司令部直轄の施設が設置されることが多かったようである。

昭和17年撮影の航空写真には北東隅に新たな建物と区画が認められる。これは昭和10年に泉北郡より移転してきた堺聯隊区司令部である。

南東地区 当地区には被服倉庫の他に新たに上町筋に面して、「輜重兵付属」と「憲兵隊本部」が記されている。輜重兵第四大隊は大正 9 年に現在の大阪府庁本館の地から本町通の南に移転し、さらに昭和

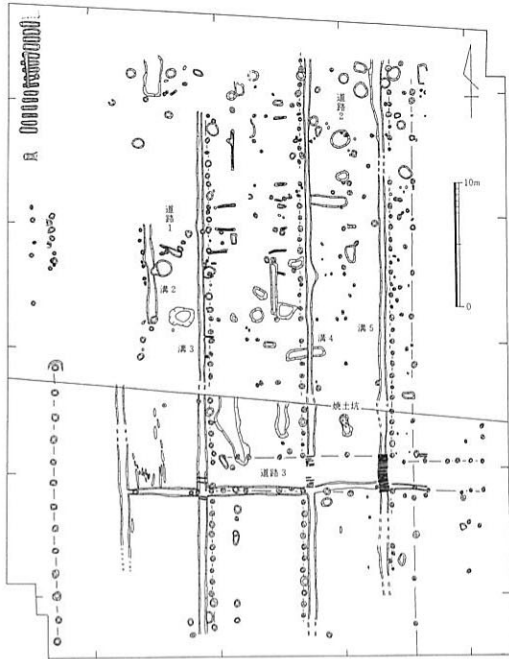


図4-XV-9 4A調査区近代遺構平面図

9年に郊外の南河内郡金岡村に移転した。大阪憲兵隊は大正6年に大手前之町に移転してきた。

北西地区 大正11年に大阪陸軍幼年学校は廃校となったが、廃校後6年を経た昭和3年にも校舎の周りに草が生い茂った写真が残されており、昭和3年ごろまでは校舎等は存続していたようである。しかし、その後将校官舎として偕行社社宅となり、昭和6年の地図にも「陸軍将校官舎」と記されている。さらに将校官舎の中には新たな道もできている。昭和17年撮影の航空写真からも方位をあわせた住宅が整然と建てられていることが認められる。

南西地区 この地区は大正時代と変わらず、第七旅団司令部と聯隊区司令部が置かれていたようである。

(4) 昭和時代の土地利用 (昭和20年以降)

大阪城一帯は砲兵工廠など陸軍の重要な施設が密集して

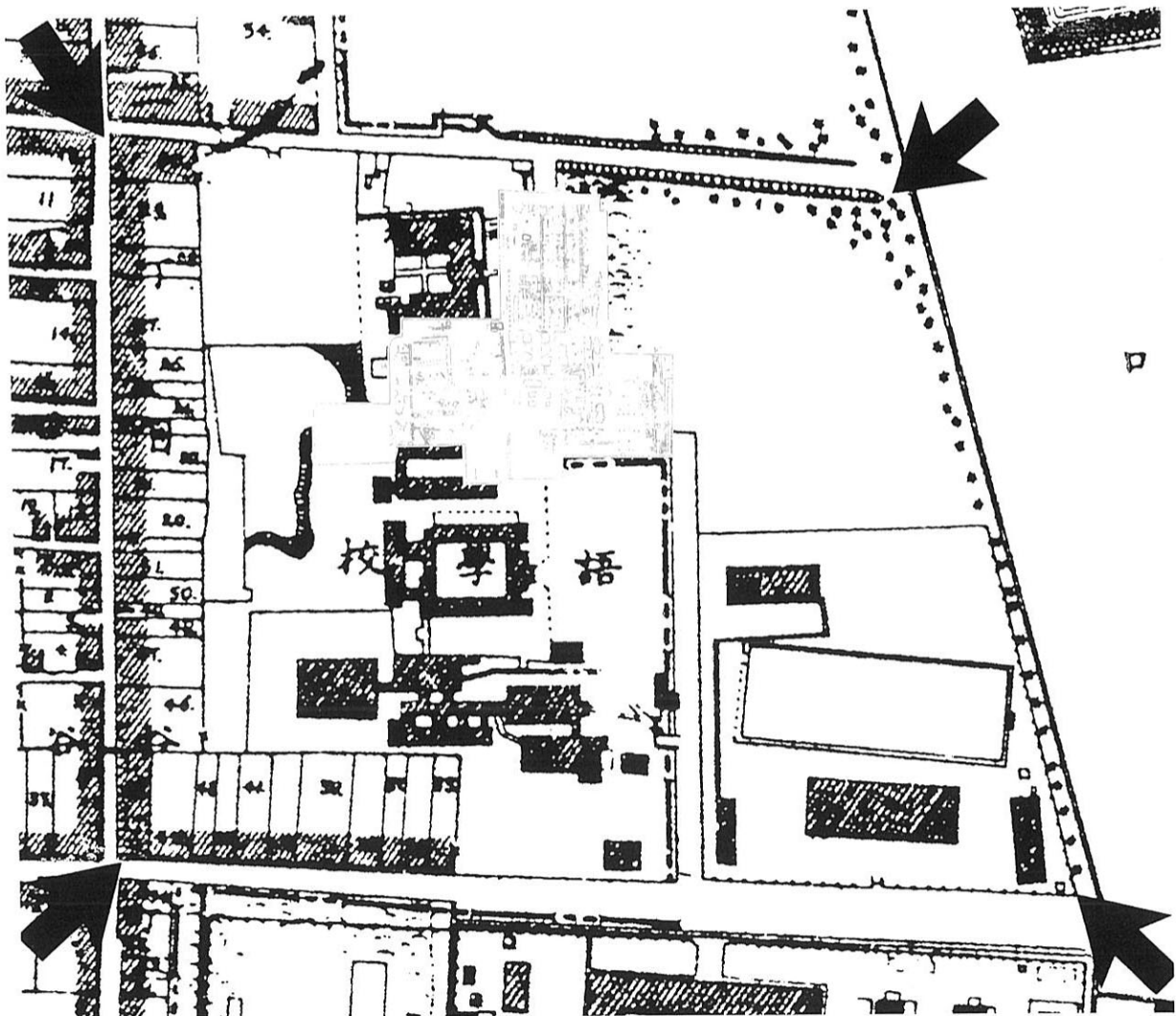


図4-XV-10 近代遺構平面図と内務省大阪実測図

いたため、激しい空襲に曝されるが大手前之町は大きく焼失することなく終戦を迎えた。昭和23年12月に米軍によって撮影された航空写真においても若干更地になっていることを除けば、大きく昭和17年の写真の状況と変わっていない。

終戦後、大阪城一带の軍用地は進駐軍が接收、あるいは進駐軍の監督下におかれた。発掘調査においても進駐軍関連の遺物が出土しており、当地の施設も進駐軍の監督下におかれていたことがうかがえる⁴⁾。昭和22年の「最新東区詳細図」によれば大手前之町にも「府庁土木部」の他に「中部復員連絡局」や「民生部第一第二世話課」など戦後処理にあたる施設が設置されていた。後者は聯隊区司令部が戦後、大阪地方世話部に改変されたが、昭和22年には府の民生部に移管され、第1世話課が旧陸軍関係、第2世話課が海軍関係を取り扱っていた。

昭和23年8月、進駐軍が大阪城から撤収し、進駐軍の監督下にあった旧軍建物も近畿財務局が管理・処分にあたり、その結果大阪府警察本部や大阪家庭裁判所など新たな施設がおかれ、しだいに官公庁街を形成していった。

3. 調査成果との対応

これまで明治～昭和時代にかけての土地利用変遷を概観してきたが、最後にこれらの仮説的作業を検証すべく調査成果との対応を若干行う。

今回の発掘調査では大半が調査の直前まで建っていた庁舎の基礎によってほとんど削平されていたが、4 A・5 C・6 A調査区において近代の遺構が検出され、6 A調査区で検出された石組など、いくつかの遺構はすでに述べたように舎密局関連の遺構として評価されている⁵⁾。

ここで改めて近代の遺構全体図を概観すると、4 A調査区において南北方向に走る溝と柱穴列が顕著であることに気付く。これらの溝の間は砂利や瓦を敷き詰めて堅く叩き締められ、道路状遺構と認識されている⁶⁾。道路1（溝2と溝3の間）は幅4m以上、長さ30m以上で、道路2（溝4と溝5の間）は幅6m、長さ70m以上である。道路1上からは轍が検出され、2回以上の造り替えが確認されている。道路の側溝と思われる溝3・4・5はそれぞれ幅約0.5m、深さ0.1mである。道路に伴う柵列の柱穴は直径0.3～0.5m、深さ約0.5mを測り、直径約0.1mの木柱痕を残すものがある（図4-XV-9）。

このような道路状遺構を理解するものの一つとして、先に見た大手前之町を東西に分割する明治時代の道が想起される。実際、明治時代の地図の中で最も精度が高いと考えられる「内務省大阪実測図」

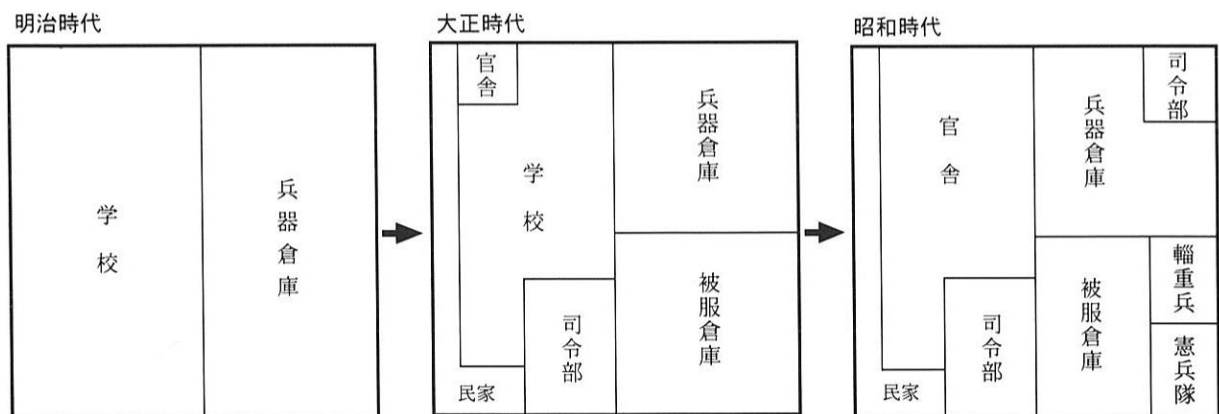


図4-XV-11 土地利用変遷概念図

(明治21年)と重ねてみると、ほぼこれらの道路状遺構と合致する(図4-XV-10)。この事象は舎密局関連の遺構と併せて、4A・6A調査区では明治初頭の遺構を検出した可能性が高いことを示唆するものと思われる。

4. まとめにかえて

大阪城一帯の近代の軍事施設配置を大きく捉えると、城より東には造兵廠が広がり、南には歩兵第八聯隊や三十七聯隊などの兵舎が広がるのに対し、城より西には兵舎だけでなく衛戍病院や大阪府庁、学校、旅団司令部などが展開し、およそ「事務的な空間」であったことが指摘できる。特に大手前之町は図4-XV-11が示すように明治時代より学校・倉庫・司令部などの施設がおかれ、師団司令部直轄の事務的な機能を果たしていた地区であったといえよう。このため空襲の被害から辛うじて免れ、戦後も進駐・復興の足がかりとして積極的に建物が利用された。そして進駐軍の撤収後はそのまま公共施設へと引き継がれ、現在見られるような官庁街が形成されたと考えられる。

しかし、造兵廠や聯隊など関係者が多かった施設に比べて、「事務的な空間」は非常に文献資料が乏しく、時間軸・空間軸ともに資料の空白地帯が存在する。このような空白地帯を埋め、当地の歴史を復元しうる手段の一つとして考古学的調査・研究はその有効性を発揮するものと考えられ、その前提作業となる今回の作業が遺構理解に向けての出発点となれば幸いである。

謝辞

本稿を成すにあたり、江浦 洋氏より示唆に富んだご教示を数多く賜りました。末筆ながら記して御礼申し上げます。

参考文献

- 大阪市役所編纂 1933『明治大正 大阪市史』第1巻
- 大阪市東区史刊行委員会 1940『東区史』第2巻
- 大阪市役所 1965『昭和大阪市史統編』第2巻 行政編
- 大阪市東区史刊行委員会 1980『続東区史』第1巻
- 新修大阪市史編纂委員会 1994『新修 大阪市史』第8巻
- 阪幼会 1975『大阪陸軍幼年学校史』
- 大阪家庭裁判所編 1969『回顧と展望 大阪家庭裁判所創設20周年記念出版』

註

- 1) 但し、「実際は明治8年以降」と注釈が付されている。
- 2) 合田幸美 2002「舎密局関連遺構について」本書考察編
- 3) 小林和美 2002「大阪陸軍幼年学校について」本書考察編
- 4) (財)大阪府文化財調査研究センター 2001『発掘速報展 大阪2001』
- 5) 前掲書2)
- 6) (財)大阪府文化財調査研究センター 1994『大坂城跡の発掘調査』4

挿図・写真出典

- 図4-XV-1～4 玉置豊次郎 1980『大阪建設史夜話・大阪古図集成』(財)大阪都市協会に加筆
- 図4-XV-5 渡辺 武 1983『図説 再見大阪城』(財)大阪都市協会に加筆
- 図4-XV-6・7 大阪市立中央図書館所蔵地図に加筆
- 図4-XV-8 大阪府立中之島図書館所蔵地図に加筆
- 図4-XV-9 (財)大阪府文化財調査研究センター 1994『大坂城跡の発掘調査』4
- 図4-XV-10 図4と本書本文編図11を合成
- 図4-XV-11 小林作成
- 表4-XV-1 参考文献より作成
- 写真図版4-XV-1・2 当センター所蔵写真に加筆

第5章 総括

第5章 総括

はじめに

大坂城とその城下は、江戸と並んで近世を代表する日本の中心都市である。しかし現在の大阪城が豊臣期の大坂城を埋めた上に築かれているように、記録に残されているものは、ほとんどが江戸時代以降の状況で、実際にこの町がつくられた豊臣期のころの様子は、実はあまりよくわかっていない。

一方大阪府では庁舎の建て替えに伴う整備計画により、平成2年度より大坂城跡の発掘調査をおこなってきた。場所は、大阪城大手門の西に面する大阪府庁の敷地を中心とした地域である。この場所は豊臣期においては三の丸内の西部地区にあたり、度重なる造成によって、その歴史の中で最も変化の激しかった場所のひとつと言える。当初約6,000㎡からはじまった調査も6年を経て、古代から近代までの上町台地と大坂城下町について様々な資料を得ることができた。

本章ではそのまとめにかえて、本報告を振り返りまた若干の補足をおこなっておきたい。

1. 古代～中世

1 A～5 B 調査区の間には東西軸の深い谷がはしり、その周辺から弥生時代後期～南北朝期までの遺物と、6～8世紀、11～13世紀の遺構が検出された。6～8世紀の遺構は、5 A 調査区でみつかった環状に復原可能な溝が数カ所と、6 A・5 B・3 A および 1 A 調査区まで続くと思われる、金属生産関連の遺構と建物、5 B 調査区を中心とする墓であり、さらに5 B 調査区の南端で検出された石組みは、3 A 調査区の最下層で検出された礫群を経て、大阪市中央体育館地点の石組み遺構につながる可能性も高く、重要である。いずれも考察編で検討が加えられている。

これらの遺構の性格については、さらに今後も考究を続ける必要があるが、難波宮の北側にあって、その造営以前は、大川から上がった丘陵頂部先端に位置するこの場所が、古代より重要な役割を果たしていたことは間違いなく、広義での難波京とその前史を考える際に不可欠なデータを提供しえたと考えられる。また数は少ないが、弥生時代後期に遡る遺物が出土したことは、この地が高地性遺跡であったことを物語るものであり、瀬戸内海東端に位置する上町台地の弥生後期的性格として、その視点での検討が今後待たれよう。

11～13世紀の遺構は、5 A 調査区で検出された掘立柱建物と3 B 調査区で検出された井戸のみである。前者は丘陵上、後者は谷部である。ただし大阪湾から天満砂堆を経てこの地にいたる部分が、果たして農耕に適していたかどうかは疑問の点もあり、その意味での開発史を前提とした安易な一般化は避けるべきである。周辺地域のデータをふまえながら再考したい。ただし遺構に伴わない遺物をみれば、10世紀代の黒色土器と緑釉陶器、11世紀代の土師器坏・甕、13・14世紀代の青磁碗、瓦器塀、土師器釜などわずかではあるが、古代からの連続が認められるため、とくに平安時代以降、歴史の表舞台から見えなくなるこの地が、しかし着実な歴史の変遷を辿っていたことは明記しておきたい。

ところで、本調査地の周辺に目をむければ、図440は上町台地北部において古代～中世の遺構または遺物を検出した地点のドットマップである。調査の有無によるドットの偏りは今後補正していく必要があるが、注目される古代・中世の遺跡は大阪城南部を中心とした丘陵上部と、大阪城の西部地域で目立っている。

古代では、言うまでもなく難波宮とその南側周辺を中心として7・8世紀の建物と遺物が検出される。奈良時代の土器・瓦類は大阪城の南側に広がる丘陵頂部で多く出土しており、それに加えて、古代の高級陶器である緑釉陶器・三彩陶器・新羅土器の出土が大阪城の西部地域で見られる。

これらの立地は、地形図で示されているように、いずれも台地の丘陵上にあたり、大阪城の西部地域も、大川に面して台地頂部から西へのびた比較的幅の広い丘陵であることがわかる。

中世においてもこの傾向は続くようで、台地の頂部とその周辺では瓦器塚に代表される南北朝期を中心とした土器類がみついている。さらに遺物だけではなく、井戸・溝などの遺構もこの地域から検出されており、この場所に中世集落があったことは明らかと言える。

また大阪城西部地区では、道修町以外にも、丘陵南端部の地点で集落が、北側斜面に近い地点から溝と白磁四耳壺がみられる。特に白磁四耳壺は一般の集落ではあまり見ないものであり、この地点に中世の拠点的な集落が存在していた可能性は高いものと考えられる。なおその位置は現在の天満橋から西へ約250m程の付近である。

一方台地を降りた部分について、あまり資料は多くないが、大阪城西部地区の南側谷からは、平安時代の黒色土器と中世の耕作地が調査され、中世的景観の主流を占める耕作地の存在がここに確認される。しかし一方で、谷を出て東横堀川に近い地点では、東海から持ち込まれた山茶碗が出土しており、これは西日本ではあまり見かけない資料ゆえ、流通路上にあった集落の存在も考える必要がある。

2. 豊臣期

(1) 本丸築造～三の丸築造

1A～5B調査区にまたがる谷はひきつづき残り、様々な屋地がこの谷の底と谷を上がった丘陵上に展開する。谷の規模は幅が60m以上であり、谷の北側が緩やかな傾斜で、南は比高差約2mの崖状となっているため、ちょうど調査区の中央が谷底にあたっている。地表面からの深さは8～9mである。

このうち谷を上がった南側の部分は、三の丸築造後とほぼ同じ面になるため、その土地利用によってこの時期の前期の様子はあまりはっきりしない。ここでは谷の下の町の変遷をまとめる。

造成の盛土により4時期以上の細分が可能だが、ここでは新・古段階の2つの時期に大別して説明する。

古段階は、調査区の中央を東西に縦断する溝とその北側にみられる段が、調査区を南北に区分する。

溝は幅2m以上で深さ1mを測り、側面は横板と杭で土留めされている。その南側で、より大型の溝が見られないため、谷の排水を全て受けるために設けられたものと考えてよいだろう。

溝の北側、南側共に、屋敷地と建物といったような、性格の同定できる遺構は少ない。このうち溝の北側は、低い段と铸造関係の遺構の集中する部分に分けられる。溝の北側にみられる低い段は、幅3m足らずの浅いくぼみ状を呈し、全体に平均して礫の堆積が認められた。おそらくその北側の面から落ち込んだもので、元来は礫による簡易な土留めなどであったものと思われる。

そしてこの溝の北側から铸造関連の遺構が集中して見つかった。主な遺構は溶解炉、灰溜り、铸造土坑などである。炉はこの時期を中心に溝の北側から3基、南側から1基見つかり、関連する遺構の規模は決して大きいものではないが、少なくとも固定的な铸造工房であったと言えるものとする。また明瞭な屋敷境は認められなかったが、周辺に礎石などは散在しており、小規模な家が建てられていたことはわかる。

新段階は調査区の中央を東西方向の道がはしり、その道に面して北側と南側に屋地が並ぶ。

新段階の内でも上層の面が特にその痕跡をきれいに残しているが、それによると道路の北側の屋地は、幅数十cmの敷地境溝を単位に17軒分以上確認することができる。屋地の規模についてみると、地口のわかるものは10軒で、このうち2間のものが最も多く9軒、残りの1軒は地口3間となっている。また屋敷境の溝が残されていない場合でも、竈がおよそ2間間隔でみつかっており、これらも同様の状況を示すものと考えられる。

奥行きは8間が最も多く5軒、7～5間が各1軒確認できる。また興味深い点として、これらの屋地は数軒間隔で路地をもっている。路地は1間幅で屋地の間を抜け、その北端からさらに奥へ続くもの、または折れ曲がるものなどがみられ、これらの屋地の奥にまた別の屋地が配置されていたことを推定させる。

道路の南側に比べて全体に地形が高く、また緩やかに傾斜しているため、屋地の内部にほとんど礎石などは残っていなかったが、道に近い部分で囲炉裏・竈などがみつかっており、道路に軒を並べ、奥に空き地をもった、近世の絵画資料にみられる町屋の景観を、ここから想像するのも可能ではないかと思われる。なお下層の面では上層より広い地口の屋地も確認されている。

道路は両側に側溝を持つもので、溝の中心間の距離で3間幅を測る。

道の南側では地口の広い屋地が並び、それぞれの敷地から礎石建物と瓦・陶磁器・木製品類など多量の遺物がみつかった。

屋敷地は、横板で土留めされ、蓋板のかかった溝により、6区画以上確認できる。規模は地口のわかるもので5・9・14・18間以上がみられ、5間と9間の区画は14間の屋敷地を分割した可能性もある。北側の屋地群と同様に、ここでも上層ではこれらの区画を細分する状況が見受けられたが、屋敷区画の間で側溝をともなった路地はみられず、基本的な奥行きは、谷南端の崖下までのおおむね14間に復原することができる。

屋敷地の内部からは、やはり道に面するかたちで礎石建物と囲炉裏などが確認され、その南側からゴミ穴や井戸、竈がみつかった。なかでも中央の14間幅の屋敷地は、大きさの異なった3連の竈と8連以上の竈を伴っており、大人数の食事を賄っていたことが推測できる。また最も広い東端の屋敷地からは東西7間以上、南北5間以上の規模をもつ礎石建物が大量の瓦に覆われてみつきり、遺物には桐紋をはじめとした金箔瓦もみられる。

なお、この時期の各面を構成した8 a～8 cの各層に含まれていた遺物についても、破片毎に種別を記録し、その点数も計量している。その中で肥前系陶器または瀬戸・美濃窯志野製品がどのように位置づけられるのか、興味深いところではあるが、出土状況に厳密さを欠くことから、今回は詳しい数値を出すことは控えた。今後それらの問題を克服する方法が編出されたならば、参考資料として使われることも可能かもしれない。

(2) 三の丸築造～夏の陣

前代までみられた谷は埋められ、調査区全体の景観は4 A～6 Aを中心とする面と3 A～1 Aを中心とする1段下がった面の2つの平坦面から構成されるようになる。

このうち1 A～3 Aを中心とした面は、その中央を南北に柵列または低い土手状の境界標識がはしり、その西は盛土と整地土によって2時期、一部は3時期に分けられ、東は薄い土壌化された層により、やはり2時期から3時期に分けられる。

最初に西の区画をみると、その中央が東西方向の溝によりさらに二分され、南北の屋敷地が復原される。このうち北の屋敷地では礎石などがほとんど失われ、建物跡の復原は困難であるが、鍛冶炉、大型の井戸、石組の井戸、大型の竈、小児棺などから、南東部に厨房をもち、西部に工房をもったその生活の一部をうかがうことはできる。

南の屋敷地は造成盛土によりさらに2時期に分けられる。

下層は、北の屋敷地境に面して凹形に組んだ石組が2箇所設けられ、これを単位に東西の2つの屋敷地に分離できる。いずれも石組の北側は浅いくぼみ地形となっており、その一部はゴミ捨て場とされていた可能性がある。なお西側の屋敷地からは土蔵が2棟以上と9個からなる備前焼の埋甕群がみつかった。埋甕群はこれまで三の丸地域でみられなかったもので、この屋敷地の性格など注目される。

上層の屋敷地からは多数の礎石および礎石の抜取り穴がみつき、蔵をはじめとする数棟の建物を復原することができた。なかでもその中心建物と思われる部分では、礎石にも焼けた痕跡が残り、土間を覆っていた土の中から頭部に打撃痕をもった頭蓋骨もみついている。

一方東の区画は、南北方向に平行する複数の溝がはしる時期と、掘立柱建物が並ぶ時期に大別され、現時点では、検出時の状況と部分的な切り合い関係から、前者を古段階に考えている。ただし、見かけの検出状況に対して実態が異なる条件も残されており、またこれらの面がほぼ均一なレベルでおさえられるため、この点については将来再検討も必要である。

ともあれこの地区の特徴は、南北に連続する掘立柱建物と井戸などから出土した家紋瓦にあり、それは現在においても変わらない。

東半部は柱列と溝を西の屋敷地境として、その東側には柱列と直交する形で建物群が並ぶ。建物は調査区の南から7棟以上復原された。いずれも東西に長い掘立柱建物である。屋敷地の中央側にあたる調査区の北東部が1段下がる地割に合わせて、建物の構造は南から5棟が南北2間の約4m、東西4～5間の約13mで、北の2棟が南北2間の約4m、東西6間の約11mとなっている。なおその北側ではこれらに続く掘立柱建物群を明確に復原することができなかったが、調査区北東隅でみられる東西方向の溝が、これらの建物群の東辺に一致して屈曲、南下するなど、敷地利用の思想には共通したものがみられる。

つまりこの屋敷は、おそらく板塀と思われる柱列によって西を限り、調査区半分の面積である約3,000㎡を越える大規模なもので、さらに屋敷地の内側には10m余りの幅で建物が連続する区画を巡らせていたものと考えられるのである。

さて、このような敷地境の内側を巡る建物群は、近世の大名屋敷にみられる外周の倉庫群または足軽などの長屋群に比較されるものと仮定できる。そしてここでは、建物群の東に位置する井戸などから「扇に月丸紋」軒丸瓦が出土した。この家紋は東国の雄である佐竹氏を示すものであるが、これらの状況と遺構の変遷などをあわせて、現在は、この大規模区画の屋敷地を佐竹氏の大名屋敷と推定している。

(3) 夏の陣～徳川大坂城再築

夏の陣が終結した後、徳川家は大坂城の再築にとりかかるが、その際、場所によっては厚さ4mを越える膨大な盛土工事をこの地におこなった。発掘によって現れる最初の豊臣期の面は、この徳川家による盛土を取り除いた時のものである。地表面からの深さは5～6mである。

調査区の中央を南北方向に幅4.5mの道がはしり、そのまわりに夏の陣の焼土を耕作土とした畑と小さな屋敷地がひろがっている。

畑は長さ約5 m、幅20~30 cm程の鋤溝または畝が南北方向に平行して並んでいる。特に調査区の北部では、そのような畑が2列みられた南側に、やはり南北5 m幅で、東西7 m程を単位とした小さな屋地が2列並び、その南に再び2列の畑が並んでいる。屋地の中には、小さな2連の竈と土間があり、柱穴がみつからないので、簡易な礎石建物が建っていたと思われる。なお、この屋地の並びを東に行ったところでは道の側溝を越える橋が架かっていた。

これらの成果をまとめると、最初にこの地点が元来東西方向の谷筋であったことが指摘される。中世末を引き継いだ豊臣前期の段階では、町はまだその地形を克服することなく、それをそのまま活かした町づくりがおこなわれたようである。谷を利用するために排水の溝をつくり、最初は町づくりに必要な職人・工人などが住んでいたものと考えられる。ノミ・キリ・未使用の釘などの大工道具も出土している。

しかし城下の整備が進む中で、この大手に近接した場所は重要なポイントとして武家屋敷などがおかれるようになる。そのなかには金箔瓦を屋根に葺いていた建物のあった可能性もある。谷筋と同じ方向で道がつくれ、14間を単位とした屋敷割がおこなわれたことも考えられる。しかもそれは住人の増加によってさらに細分され、戸数が増加していった様子もうかがえる。築造の記録に対照させるならば、城下がひとまず完成する惣構の時期がこの段階にあたるのかもしれない。

これに対して三の丸の工事はそれまでの町づくりを一変させるものであった。文字通り谷を埋め、地形の制約を越えた段階で、平坦な面にまったく新しい町割をつくっていったのである。ここでは、南北方向を意識した大名屋敷の存在などにそれをみることができるものと思う。

このように当地区の調査成果は、これまで不明な部分の多かった上町台地北端の史的役割について、古代から近代まで連続した視野の中で明らかにし、なかでも豊臣期については、一部ではあるが中世から近世へ変貌を遂げるこの時期の都市のあり方として、町屋（職人）－武家屋敷－大名屋敷といったひとつの構図を作り上げることができたものとする。

おわりに

以上、古代から豊臣期における本調査区の成果について駆け足で見してきた。最後に江戸時代の状況について触れて、おわりにしたい。

徳川氏による大坂城再築後、この場所は多少の変化はあっても基本的には「京橋口御城番屋敷」として定着していることが各種の絵図よりわかっている。ただしこの「京橋口御城番屋敷」のもつ歴史的な意味を、今回の発掘でどのように評価するかが問題である。その点で、残念ながら現在この問題に明確な視座を示すことのできる段階にない。

遺構についてみれば、その多くが失われている中、せめて廃棄土坑の分布とその遺物内容の構成から、本来あったはずの場の役割を復原し、それによって近世城郭の一端にあったこの屋敷の実態を明らかにする方法が、最初に採られるべき課題であろうが、それらを作成する基本データの整理はともかく、それを有機的に組み立てる段階にはいたらなかった。

また近代以降とされる面の中で6 A調査区よりみつかった平瓦縦敷きの遺構についても、やはり同時期と考えられる石列とあわせて、明治の都市計画の一部に接近できる可能性があるが、今回その余裕を持ち得なかった。

遺物に関しては、できるだけ一括性の高い資料群にしぼった基礎データの作成に努めた結果、一部であるが、種別と産地を含めた定量的なデータをつくりあげることができた。参考にされたい。

残された課題は多いが、考察編で検討されている様々なテーマと合わせて、本書がこれからの大坂城下町研究に多少なりとも資することができれば幸いである。

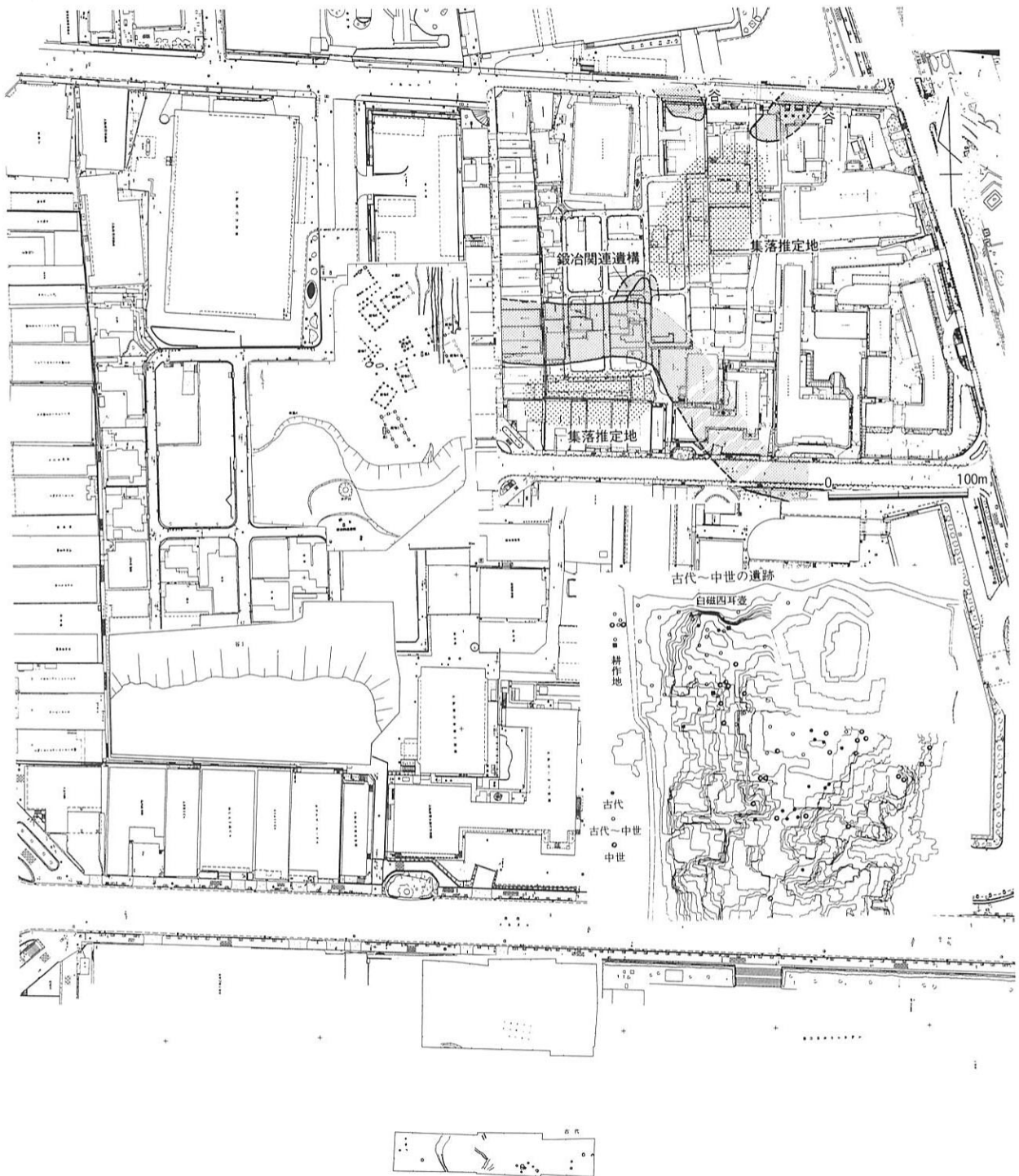


図440 古代～中世の遺構配置

大坂城跡発掘調査報告 I

大阪府庁舎・周辺整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

自然科学・考察編

発行年月日	2002年 6 月28日
編集発行	(財)大阪府文化財センター 堺市竹城台3丁21-4 大阪府教育委員会文化財調査事務所3階
印刷	(株)中島弘文堂印刷所 大阪市東成区深江南2丁目6-8

